北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

横手湯田Ⅲ遺跡
徳丸仲田Ⅱ遺跡
西善尺司Ⅱ遺跡
下増田越渡Ⅲ遺跡

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

横手湯田Ⅲ遺跡
徳丸仲田Ⅱ遺跡
西善尺司Ⅱ遺跡
下増田越渡Ⅲ遺跡

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、その赤城山と榛名山の裾野の間を南北に利根川が流れる、水と緑のあふれた地に前橋市はあります。

前橋は古代よりの文化に富んだ地で、東国の奈良と称されています。今から二万八千年前の旧石器から９基を数える国指定の古墳、関東の華とうたわれた前橋城、明治からの発展を物語る群馬県庁などの近代化遺産を始めとして多くの文化財があります。

自然環境に恵まれたこの地では、人々が古代から生活を営んできた跡が市内いたるところに見られます。古代東国の中心地としての生産力のある土地とも言え、埋蔵文化財の宝庫ともいえます。古代の遺跡の発掘調査による歴史を変える発見が毎年のようにあり、本年の発掘調査でも貴重な資料を得ることができました。

前橋市南部地区は市内でも従来遺跡のあまりない地区と言われてきましたが、古代から近世の遺跡が近年の調査で次々と発見されています。縄文時代草創期の土器が徳丸仲田遺跡より発見されるなど、地域の歴史を変える貴重な遺跡も見つかっています。

この前橋南部地区より東部に横断して建設される北関東自動車道はそのほとんどが遺跡地であり、前橋市ではその市事業地である側道部分の発掘調査を実施しました。平成９年度は古墳時代から平安時代の水田跡や住居の跡が発見されました。

前橋南部・東部地区にとっての始めての発見も多く、前橋市の歴史を解明する貴重な資料を得ることができました。発掘調査は今後も続きますが、また新たな発見が期待されます。

発掘調査にあたりまして、ご協力をいただきました北関東自動車道対策室、県文化財保護課、県埋蔵文化財調査事業団、地元関係者、酷暑のなか調査に従事されました皆様方に感謝とお礼を申し上げます。

平成10年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　中西誠一

例　言

1．本書は北関東自動車道側道道路改良事業に伴い、記録保存のために事前調査された横手湯田Ⅲ遺跡、徳丸仲田Ⅱ遺跡、西善尺司Ⅱ遺跡、下増田越渡Ⅲ遺跡の埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　中西誠一）が受諾したもので、発掘調査は山武考古学研究所が前橋市埋蔵文化財発掘調査団の指導のもとに実施した。

3．発掘調査は平成９年４月23日より平成10年３月20日の間に実施した。

4．遺跡の区割りは前橋市埋蔵文化財発掘調査団の指導により、本文掲載の表（表２）の通りに行われている。

5．遺跡の所在地および調査面積・担当者は、以下のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	調査面積	調査担当者（山武考古学研究所）
横手湯田Ⅲ遺跡	前橋市亀里町952-2他	1,517m^2	梅山　淳　　常深　尚
徳丸仲田Ⅱ遺跡	前橋市徳丸町171-1番地他	2,900m^2	常深　尚　　高野浩之
西善尺司Ⅱ遺跡	前橋市西善町1,174-1番地他	1,704m^2	常深　尚　　高野浩之
下増田越渡Ⅲ遺跡	前橋市二之宮町2,673-2番地他	3,398m^2	長谷川秀久　山崎　悟

6．本書の編集は今井弘子・小野沢昌子・萩原真理子・半澤利江の協力を得て常深尚・折原洋一が行った。また、文責は以下のとおりである。

Ⅰ	序章　第１章	調査に至る経緯	宮内　毅
		その他	長谷川一郎
Ⅱ	横手湯田Ⅲ遺跡	遺構・遺物	高階敏昭
Ⅲ	徳丸仲田Ⅱ遺跡	遺構・遺物	常深　尚
Ⅳ	西善尺司Ⅱ遺跡	遺構・遺物	常深　尚
Ⅴ	下増田越渡Ⅲ遺跡	遺構	長谷川秀久・土生朗治
		遺物	土生朗治

7．本調査において得られた図面・写真等の記録類、及び遺物は、前橋市教育委員会で保管している。

8．調査に際しては下記の諸機関にご指導・ご協力をいただいた。

群馬県教育委員会、前橋市北関東自動車道対策室、前橋市教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団、新成田総合社、㈱東日本重機、前橋文化財研究所、開成測量㈱、Ｊ・Ｔ空撮

9．発掘調査及び整理調査参加者

青木貞子　石川弘　石関博　石関道子　石田利子　板垣てる子　糸井栄子　糸井重信　糸井政子　糸井ふみ　今井弘子　今泉郁美　宇津木明子　大沢義雄　大竹輝男　大竹ユキ子　大野京子　岡田うめ　岡田誉富　岡本一孝　小川悦子　落合高男　落合忠雄　小野里岩雄　小野里みと　小野沢昌子　織間芳江　樺沢美枝　鹿沼国蔵　鎌塚重治　神山祐吉　川島勝治　木村春代　小林ちか子　斉藤守男　斉藤なずす　桜井弘　桜井れい　佐々木房子　佐野勝次郎　清水とも　下田勝美　新保隆　新保富恵　新保昌子　須藤か津ゑ　須藤周栄　関口みよ子　高橋孜　高橋由治　都丸主女作　角田貞明　角田玉雄　内藤孝　中島房雄　中村新太郎　奈良あい子　奈良岩雄　奈良トミヰ　西村浩子　萩原真理子　萩原洋子　羽鳥繁夫　羽鳥なを　原嶋サイ子　蛭川富太郎　福島逸司　古沢実　堀越律子　牧野友次　松倉あき　丸山保治　室橋美智子　矢島アイ子　柳井直子　横田義雄

凡　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。

2．挿図に建設省国土地理院発行１／2.5万地形図（前橋・伊勢崎）と前橋市都市計画課発行の１／2,500原形図『75･76』、明治21年陸地測量部発行１／20,000地方迅速図（伊勢崎町・倉賀野驛）を使用した。

3．遺跡の略称（コード）は以下のとおりである。

横手湯田Ⅲ遺跡　　９Ｇ－20

徳丸仲田Ⅱ遺跡　　９Ｇ－21

西善尺司Ⅱ遺跡　　９Ｇ－22

下増田越渡Ⅲ遺跡　　９Ｆ－４

4．各遺構の略称は次のとおりである。

Ｈ－住居跡　　Ｄ－土坑　　Ｉ－井戸　　Ｂ－掘立柱建物跡　　Ｗ－溝

道－道状遺構、　　Ｐ－柱穴　　Ａ－畦畔　　堀－堀　　Ｍ－墓　　方周－方形周溝墓

5．掲載した遺構・遺物の縮尺は以下のとおりである。

遺跡位置図　1/20,000・1/25,000・1/50,000　調査区設定図　1/2,000・1/3,000

遺跡全体図　1/300・1/400・1/500　調査区区割り対比図　1/3,000

土層堆積模式図　1/20

遺構実測図　1/10、1/20、1/30、1/40、1/60、1/80、1/100、1/120

遺構セクション図・エレベーション図　1/10、1/20、1/30、1/40、1/50、1/60、1/80

遺物実測図　土器・土製品　1/3、1/4　　木製品　1/4

石器・石製品　1/2、1/3　　鉄製品　1/2　　古銭　1/1

6．掲載したスクリントーンは以下を示す。

炭化物　　焼土　　灰白色粘土

5　YC　広瀬川低地帯の旧中州（浅間Ｃテフラ降灰後）

3　CB　河成段丘（中州・完新世）

7　LP　前橋・伊勢崎台地上の微高地

4　BP　前橋・伊勢崎台地上の後背湿地

1　VP　谷底平野

6　YB　広瀬川低地帯の後背湿地（浅間Ｂテフラ降灰後）

2　FM　扇状地（後期更新世前半）

8　BM　河成段丘（後背湿地、完新世）

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　序　章……1
第１章　調査に至る経緯……1
第２章　遺跡の地理・歴史的環境……1
第３章　調査の方法……9
第１節　遺跡及び調査地区の呼称……9
第２節　調査の方法……9
Ⅱ　横手湯田Ⅲ遺跡……11
第１章　遺跡の位置と環境……13
第１節　遺跡の位置……13
第２節　歴史的環境……13
第２章　調査の方法……15
第３章　調査の経過……15
第４章　基本層序……16
第５章　遺構と遺物……19
第１節　平安時代後期……19
第２節　中・近世……19
第６章　まとめ……20
Ⅲ　徳丸仲田Ⅱ遺跡……23
第１章　遺跡の位置と環境……25
第１節　遺跡の立地……25
第２節　歴史的環境……25
第２章　調査の方法……29
第３章　調査の経過……29
第４章　基本層序……30
第５章　遺構と遺物……37
第１節　概要……37
第２節　古墳時代……37
第３節　奈良・平安時代……41
第４節　中・近世……47
第５節　時期不明遺構……51
第６節　遺構外出土遺物……57
第６章　まとめ……58
Ⅳ　西善尺司Ⅱ遺跡……61
第１章　遺跡の位置と環境……63
第１節　遺跡の立地……63
第２節　歴史的環境……63
第２章　調査の方法……67
第３章　調査の経過……67
第４章　基本層序……68
第５章　遺構と遺物……73
第１節　概要……73
第２節　古墳時代前期・中期……73
第３節　古墳時代後期……75
第４節　奈良・平安時代……76
第５節　中・近世……82
第６節　時期不明遺構……86
第６章　まとめ……92
Ⅴ　下増田越渡Ⅲ遺跡……95
第１章　遺跡の位置と環境……97
第１節　遺跡の立地……97
第２節　歴史的環境……97
第２章　調査の方法……101
第３章　調査の経過……101
第４章　基本層序……102
第５章　遺構と遺物……110
第１節　古墳時代前期・中期……110
第２節　古墳時代後期……115
第３節　平安時代……117
第４節　中世以降……145
第６章　まとめ……148

挿図目次

第１図　遺跡の位置と路線内の遺跡……２
第２図　調査区区割り対比図(1)横手湯田Ⅲ遺跡……３～４
第３図　調査区区割り対比図(2)徳丸仲田Ⅱ・西善尺司Ⅱ遺跡……５～６
第４図　調査区区割り対比図(3)下増田越渡Ⅲ遺跡…７～８
第５図　遺跡の位置と環境……14
第６図　遺跡の位置と周辺の遺跡……14
第７図　基本土層図……16
第８図　Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ区遺構全体図……17～18
第９図　As-Ｂ軽石下水田エレベーション……21
第10図　溝・土坑土層断面図……21
第11図　出土遺物……22
第12図　遺跡の位置と周辺の遺跡……27
第13図　遺跡の位置……28
第14図　遺跡の位置と地形……28
第15図　調査区設定図……29
第16図　基本土層図……30
第17図　Ｆ区遺構全体図……31～32
第18図　Ｇ・Ｊ区遺構全体図……33～34
第19図　Ｈ・Ｉ区遺構全体図……35～36
第20図　１号掘立柱建物跡及び出土遺物……39
第21図　８号土坑及び出土遺物……39
第22図　19号溝……39
第23図　11号溝及び出土遺物……40
第24図　１号住居跡及び出土遺物……41
第25図　２号住居跡……42
第26図　２号住居跡出土遺物……43
第27図　３号住居跡……43
第28図　２・６・11・12号土坑及び出土遺物……44
第29図　13・15・16号土坑及び出土遺物……45
第30図　１・12号溝及び出土遺物……46
第31図　13号溝及び出土遺物……47
第32図　１号堀……48
第33図　１号堀出土遺物……49
第34図　５号溝及び出土遺物（１）……49
第35図　５号溝出土遺物（２）……50
第36図　Ｉ区柱穴群……50
第37図　Ｉ区柱穴群出土遺物……51
第38図　４号住居跡及び出土遺物……51
第39図　１・３・４・５号土坑……52
第40図　７・９・10・14・17号土坑……53
第41図　２・３・４・６・７～10号溝及び出土遺物…55
第42図　17号溝……56
第43図　14・15・16・18号溝……57
第44図　遺構外出土遺物（１）……57
第45図　遺構外出土遺物（２）……58
第46図　遺跡の位置と周辺の遺跡……65
第47図　遺跡の位置……66
第48図　遺跡の位置と地形……66
第49図　調査区設定図……67
第50図　基本土層図……68
第51図　Ａ区遺構全体図……69～70
第52図　Ｂ・Ｃ・Ｄ区遺構全体図……71～72
第53図　木道遺構及び出土杭、１号方形周溝墓…74
第54図　ＦＡ層下畦畔、５号溝、小谷地形出土遺物……75
第55図　１号住居跡及び出土遺物……76
第56図　２号住居跡及び出土遺物……77
第57図　土坑及び出土遺物……78
第58図　１・４号溝及び出土遺物……79
第59図　Ａ区浅間Ｂ軽石下水田跡及び出土遺物…81
第60図　Ｂ区浅間Ｂ軽石下水田跡……82
第61図　１号墓……82
第62図　１号墓出土遺物……83
第63図　２号墓及び出土遺物（１）……83
第64図　２号墓出土遺物（２）……84
第65図　３号墓及び出土遺物……84
第66図　４号墓及び出土遺物……85
第67図　１号掘立柱建物跡、２号土坑……86
第68図　時期不明土坑（１）……87
第69図　時期不明土坑（２）……88
第70図　時期不明溝（１）……90
第71図　時期不明溝（２）……91
第72図　遺構外出土遺物……91
第73図　遺跡の位置と周辺の遺跡……99
第74図　遺跡の位置と地形……100

第75図　遺跡の位置……100
第76図　調査区設定図……101
第77図　基本土層図……102
第78図　C区遺構全体図（1）……103
第79図　C区遺構全体図（2）……104
第80図　D区遺構全体図（1）……105
第81図　D区遺構全体図（2）……106
第82図　E・F区遺構全体図……107
第83図　G区遺構全体図……108
第84図　H区遺構全体図……109
第85図　D・E区As-C軽石混土層下面遺構図、
1号溝土層断面図……111
第86図　F・G区As-C軽石混土層下面遺構図、
1号溜井土層断面図……112
第87図　C・D区As-C軽石混土層上面遺構図、
噴砂脈……113
第88図　G・H区As-C軽石混土層上面遺構図、
6・7号溝土層断面図……114
第89図　C・G区Hr-FA層下面遺構図、畠跡 ……115
第90図　H区Hr-FA層下面遺構図、畦畔、
8号溝土層断面図及び出土遺物……116
第91図　C・D区洪水層下面遺構図及び出土遺物 ……118
第92図　D区洪水層下面遺構図……119
第93図　C・D区9世紀後半～10世紀代遺構図
及び出土遺物……120
第94図　1号住居跡及び出土遺物……121
第95図　2号住居跡及び出土遺物……122
第96図　3号住居跡及び出土遺物……123
第97図　4号住居跡及び出土遺物……124
第98図　4・5号住居跡及び出土遺物……125
第99図　6・7号住居跡及び出土遺物……126
第100図　8・9号住居跡及び出土遺物 ……128
第101図　10号住居跡及び出土遺物（1） ……129
第102図　10号住居跡出土遺物（2） ……130
第103図　11・12号住居跡及び出土遺物 ……131
第104図　13号住居跡及び出土遺物 ……132
第105図　14号住居跡及び出土遺物 ……133
第106図　17・19号住居跡及び出土遺物 ……134
第107図　18・20号住居跡及び出土遺物 ……135
第108図　1号掘立柱建物跡 ……136
第109図　2号掘立柱建物跡 ……137
第110図　3・4号掘立柱建物跡 ……138
第111図　1～8号土坑（1） ……141
第112図　9～16号土坑（2） ……142
第113図　17～23号土坑（3） ……143
第114図　C区As-B軽石層下面遺構図、24号土坑 …145
第115図　D・E区As-B軽石層下面遺構図、
中世以降の遺構図 ……146
第116図　F・H区As-B軽石層下面遺構図、
中世以降の遺構図及び出土遺物 ……147

表　目　次

表1　前橋管内北関東自動車道関連遺跡一覧……2
表2　地区別遺跡呼称一覧……9
表3　周辺の遺跡地名表……26
表4　1号掘立柱建物跡柱穴計測表……37
表5　I区柱穴計測表……51
表6　徳丸仲田II遺跡遺物観察表（1） ……59
表7　徳丸仲田II遺跡遺物観察表（2） ……60
表8　周辺の遺跡地名表……64
表9　平安時代土坑一覧表……77
表10　B区浅間B軽石下水田跡畦畔計測表……82
表11　時期不明土坑一覧表……86

表12　西善尺司Ⅱ遺跡遺物観察表（1）……93
表13　西善尺司Ⅱ遺跡遺物観察表（2）……94
表14　周辺の遺跡地名表……98
表15　土坑一覧表……149
表16　下増田越渡Ⅲ遺跡遺物観察表（1）……150
表17　下増田越渡Ⅲ遺跡遺物観察表（2）……151
表18　下増田越渡Ⅲ遺跡遺物観察表（3）……152
表19　下増田越渡Ⅲ遺跡遺物観察表（4）……153
表20　下増田越渡Ⅲ遺跡遺物観察表（5）……154

写真図版

横手湯田Ⅲ遺跡

図版1－1　H区全景
2　Ⅰ区全景
3　J区全景
4　K区全景
図版2－1　2号土坑
2　1・2号溝
3　2号溝土層断面
4　1号溝土層断面
5　3～5号溝
6　3～5号溝土層断面
7　5号溝土層断面
8　3号溝土層断面
図版3－1　出土遺物（1）
2　出土遺物（2）
3　出土遺物（3）

徳丸仲田Ⅱ遺跡

図版4－1　G区1号掘立柱建物跡
2　G区1号掘立柱建物跡
3　G区19号溝
4　G区19号溝土層断面
5　J区8号土坑遺物出土状況
6　Ⅰ区11号溝遺物出土状況
7　Ⅰ区11号溝遺物出土状況近景
8　Ⅰ区11号溝
図版5－1　J区1号住居跡遺物出土状況
2　J区1号住居跡カマド
3　J区1号住居跡カマド土層断面
4　J区1号住居跡掘り方
5　J区2号住居跡遺物出土状況
6　J区2号住居跡カマド周辺
7　J区3号住居跡
8　J区2号土坑土層断面
図版6－1　J区2号土坑遺物出土状況
2　J区6号土坑
3　Ⅰ区12号土坑
4　Ⅰ区13号土坑、鎌出土状況
5　G区15号土坑
6　G区12号溝
7　G区13号溝遺物出土状況
8　G区12・13号溝
図版7－1　Ⅰ区1号堀
2　Ⅰ区1号堀土層断面
3　Ⅰ区5号溝遺物出土状況
4　Ⅰ区5号溝土層断面
5　Ⅰ区1号堀及び柱穴群
6　J区4号住居跡遺物出土状況
7　J区4号住居跡・P2・P3
8　J区2・3号溝
図版8　出土遺物（1）
図版9　出土遺物（2）
図版10　出土遺物（3）

西善尺司Ⅱ遺跡

図版11－1　A区西谷地形内、木道遺構全景
2　A区西谷地形内、木道遺構近景
3　A区1号方形周溝墓

4　A区１号方形周溝墓土層断面
5　A区Hr-ＦA下谷地形
6　A区Hr-ＦA下畦畔
7　A区５号溝
8　A区１号住居跡遺物出土状況
図版12－１　A区２号住居跡遺物出土状況
2　A区８・10・13号土坑
3　A区13号土坑遺物出土状況
4　A区浅間B軽石下水田小畦畔１・２
5　A区浅間B軽石下水田小畦畔３
6　A区浅間B軽石下水田小畦畔４・５
7　A区浅間B軽石下水田小畦畔６・７・８
8　A区浅間B軽石下水田小畦畔４・５
図版13－１　A区浅間B軽石下水田小畦畔１土層断面
2　B区浅間B軽石下水田小畦畔９・10
3　D区土坑墓群
4　D区１号墓
5　D区２号墓
6　D区２号墓側板出土状況
7　D区３号墓蓋板出土状況
8　D区３号墓
図版14－１　D区３号墓木棺南東隅
2　D区３号墓掘り方
3　D区４号墓
4　D区４号墓掘り方
5　A区１号掘立柱建物跡
6　A区１号掘立柱建物跡柱穴１
7　A区１号掘立柱建物跡柱穴２
8　A区１号掘立柱建物跡柱穴３
図版15　出土遺物（１）
図版16　出土遺物（２）
図版17　出土遺物（３）
下増田越波Ⅲ遺跡
図版18－１　C・D区９世紀～10世紀代遺構
2　D区９世紀～10世紀代遺構
図版19－１　C・D区As-B軽石層下面水田
2　C・D区遠景
図版20－１　F区As-C混土層下面水田跡
2　F区As-C混土層下面水田跡大畦畔
3　G区As-C混土層下面水田跡
4　G区As-C混土層上面水田跡
5　G区As-C混土層下面
6　C区Hr-ＦA層下面畠跡
7　D区洪水層下面擬似畦畔
8　D区洪水層下面擬似畦畔
図版21－１　H区Hr-ＦA層下面８号溝土層断面
2　D区洪水層下面畠跡
3　D区洪水層下面水田跡
4　E区洪水層下面水田跡
5　E区洪水層下面水田跡大畦畔土層断面
6　D区液状化現象（噴砂脈）
7　C区１号住居跡完掘
8　C区２号住居跡完掘
図版22－１　C区３号住居跡完掘
2　C区４号住居跡完掘
3　C区６号住居跡完掘
4　C区８号住居跡カマド
5　C区10号住居跡完掘
6　D区11号住居跡完掘
7　D区12号住居跡完掘
8　D区12号住居跡カマド土層断面
図版23－１　D区13号住居跡完掘
2　D区14号住居跡完掘
3　C区住居跡実測作業風景
4　F区As-B軽石層下面水田跡
5　E区As-B軽石層下面水田跡
6　D区As-B軽石層下面11～14号溝
7　H区Hr-ＦA層下面水田跡畦畔土層断面
8　D区基本土層B
図版24　出土遺物（１）
図版25　出土遺物（２）
図版26　出土遺物（３）

抄　　録

フリガナ	ヨコテユデンサンイセキ・トクマルナカダニイセキ・ニシゼンシャクジニイセキ・シモマスダコエトサンイセキ
書　　名	横手湯田Ⅲ遺跡・徳丸仲田Ⅱ遺跡・西善尺司Ⅱ遺跡 下増田越渡Ⅲ遺跡
編集者名	宮内　毅　　常深　尚　　折原洋一
編集機関	山武考古学研究所　　／〒286-0045　千葉県成田市並木町221　／0476-24-0536
発行機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団／〒371-0007　群馬県前橋市上泉町664-4 ／027-231-9531
発行年月日	西暦1998年３月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	東経 北緯	調査期間	調査原因
ヨコテユデンサンイセキ 横手湯田Ⅲ遺跡	グンマケンマエバシシ 群馬県前橋市 カメサトマチ　ホカ 亀里町952-2 他	９Ｇ－20	139° 6′ 40″ 36° 19′ 50″	19970423～19980320 (1,517㎡)	北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
トクマルナカダニイセキ 徳丸仲田Ⅱ遺跡	グンマケンマエバシシ 群馬県前橋市 トクマルマチ　ホカ 徳丸町171-1 他	９Ｇ－21	139° 6′ 55″ 36° 19′ 54″	19970423～19980320 (2,900㎡)	
ニシゼンシャクジニイセキ 西善尺司Ⅱ遺跡	グンマケンマエバシシ 群馬県前橋市 ニシゼンマチ　ホカ 西善町1,174-1 他	９Ｇ－22	139° 7′ 23″ 36° 19′ 58″	19970423～19980320 (1,704㎡)	
シモマスダコエトサンイセキ 下増田越渡Ⅲ遺跡	グンマケンマエバシシ 群馬県前橋市 ニノミヤマチ　ホカ 二之宮町2,673-2 他	９Ｆ－４	139° 9′ 60″ 36° 20′ 50″	19970423～19980320 (3,398㎡)	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横手湯田Ⅲ遺跡	水田跡	平安～近世以降	近世以降　溝11条、土坑２基 浅間Ｂ軽石下面　水田跡	内耳鍋、羽口、擂り鉢、磁器碗、古瀬戸段皿、櫛	
徳丸仲田Ⅱ遺跡	環濠遺構 集落跡 水田跡	古墳～近世以降	時期不明　竪穴住居跡１軒、土坑９基、溝13条 中・近世　堀１条、溝１条 柱穴群 奈・平　竪穴住居跡３軒、土坑７基、溝３条、水田跡 古墳　掘立柱建物跡１棟、土坑１基、溝２条	土師器坏・高坏・台付甕 須恵器坏 須恵器甕・瓶・蓋 陶器碗・鉢 土師器坏・高坏・甕・台付甕、須恵器碗、灰釉陶器碗・皿、鉄製品 土師器高坏・小型甕・台付甕・壺、砥石、木片	
西善尺司Ⅱ遺跡	集落跡 水田跡	古墳～近世以降	時期不明　竪穴住居跡１軒、土坑18基、溝７条 中・近世　土坑墓６基 奈・平　竪穴住居跡２軒、土坑８基、溝２条、畦畔10条 古墳後期　溝１条、畦畔１条、 古墳前期　木道遺構、方形周溝墓１基	須恵器甕、青磁瓶、木棺、骨片、銅・鉄銭 土師器坏・甕、須恵器坏・高坏・碗・皿・甕、灰釉陶器坏 土師器台付甕 木製品（杭）	
下増田越渡Ⅲ遺跡	集落跡 水田跡 畠跡	古墳～近世以降	浅間Ｂ軽石上面　溝８条 浅間Ｂ軽石下面　土坑１基、溝２条 水田跡 ９世紀後半～10世紀代　竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡４棟、土坑23基 ９世紀後半～洪水層下　水田跡（擬似畦畔を含む）、溝２条 ＦＡ層上面　溝１条 ＦＡ層下面　水田跡、畠跡 浅間Ｃ混土層上　溝４条、水田跡 浅間Ｃ混土層下　溝３条、水田跡、溜井１基	土師器坏・甕、須恵器碗、陶器鉢・急須蓋、磁器碗 土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・碗・甕・羽釜 灰釉陶器碗 土師器坏、須恵器碗 須恵器坏・甕	

Ⅰ 序　章

第１章　調査に至る経緯

北関東自動車道に係わる埋蔵文化財発掘調査は、群馬県埋蔵文化財調査事業団により平成７年度から行われている。本市においても、本線北側及び南側に側道の建設を予定しており、本線同様、埋蔵文化財包蔵地における工事に際しては事前の発掘調査が必要になった。

このため、平成９年10月27日付で前橋市長萩原弥惣治より前橋市教育委員会あてに北関東自動車道側道道路改良事業に伴う本発掘調査の依頼がなされた。前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団はこれを受託し、11月18日に両者の間で本発掘調査の委託契約が締結された。

その後、前橋市埋蔵文化財発掘調査団は本発掘調査の委託契約を４月23日付で山武考古学研究所と締結し、発掘調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団の指導のもと、平成10年３月20日までの調査期間で実施された。

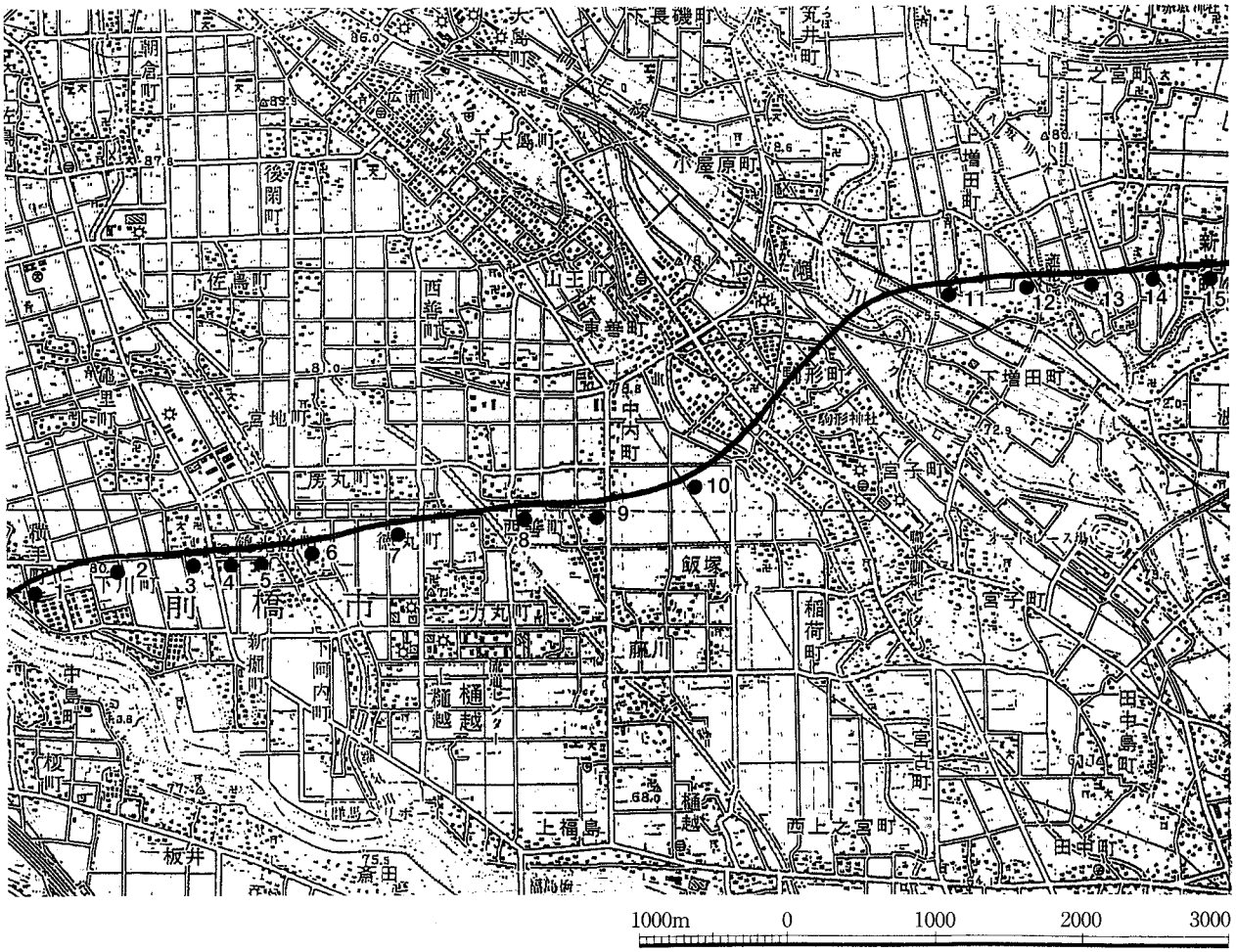
第２章　遺跡の地理・歴史的環境

前橋市は背後に赤城山、榛名山がそびえ、前方には関東平野が広がり、ちょうど山間部と平野部の境めに位置している。市域を地形的に区分すると、赤城山麓一帯に広がる大間々扇状地（赤城火山斜面）、赤城山麓端部から前橋市街地の北部に広がる（河成段丘）、旧利根川流路の広瀬川低地帯（沖積低地）、南部を中心に広がる前橋・伊勢崎台地の４つにおおむね区分される。現利根川は前橋・伊勢崎台地の中央を縫うように北西より南東方向に流下している。

大間々扇状地は赤城山の噴火に伴う火山砕屑岩層堆積からなり、広域にわたり緩傾斜を形成している。また、この傾斜面には多くの小河川が南流する。そして、この傾斜面の端部と、旧利根川が作り出した完新世の河成段丘上には旧石器時代より中・近世にわたる多くの遺跡が点在している。広瀬川低地帯は、前橋台地と大間々扇状地とを分断するように、北西～南東方向へ帯状に広がっており、関東ローム層の堆積がほとんど見られず、かつて利根川が運搬してきた沖積砂礫物が厚く堆積している。そのため、遺跡が希薄であるという見解が一般的であったが、近年の発掘調査の結果、低地帯にも各時代にわたり遺跡が点在していることが明らかとなった。さらに、前橋・伊勢崎台地上には広瀬川低地帯を挟む河成段丘上と同様に、多くの遺跡が展開することが知られているが、これまで縄文時代以前の遺跡についての検出例は極端に少なかった。しかしながら、前橋市総社町の高井桃ノ木遺跡の調査では、縄文時代前期末より中期初頭の一括資料が確認され、今回の北関東自動車道関連の調査でも縄文時代草創期の資料も検出されるに至りその数は徐々に増えている。

今回の北関東自動車道側道及び同道路改良事業に伴う発掘調査は、第１図に示す通り前橋管内では15遺跡に及ぶ。この４区分される市域を東西に横断し、市の西端より東端までの広範な範囲で線状に実施されている。

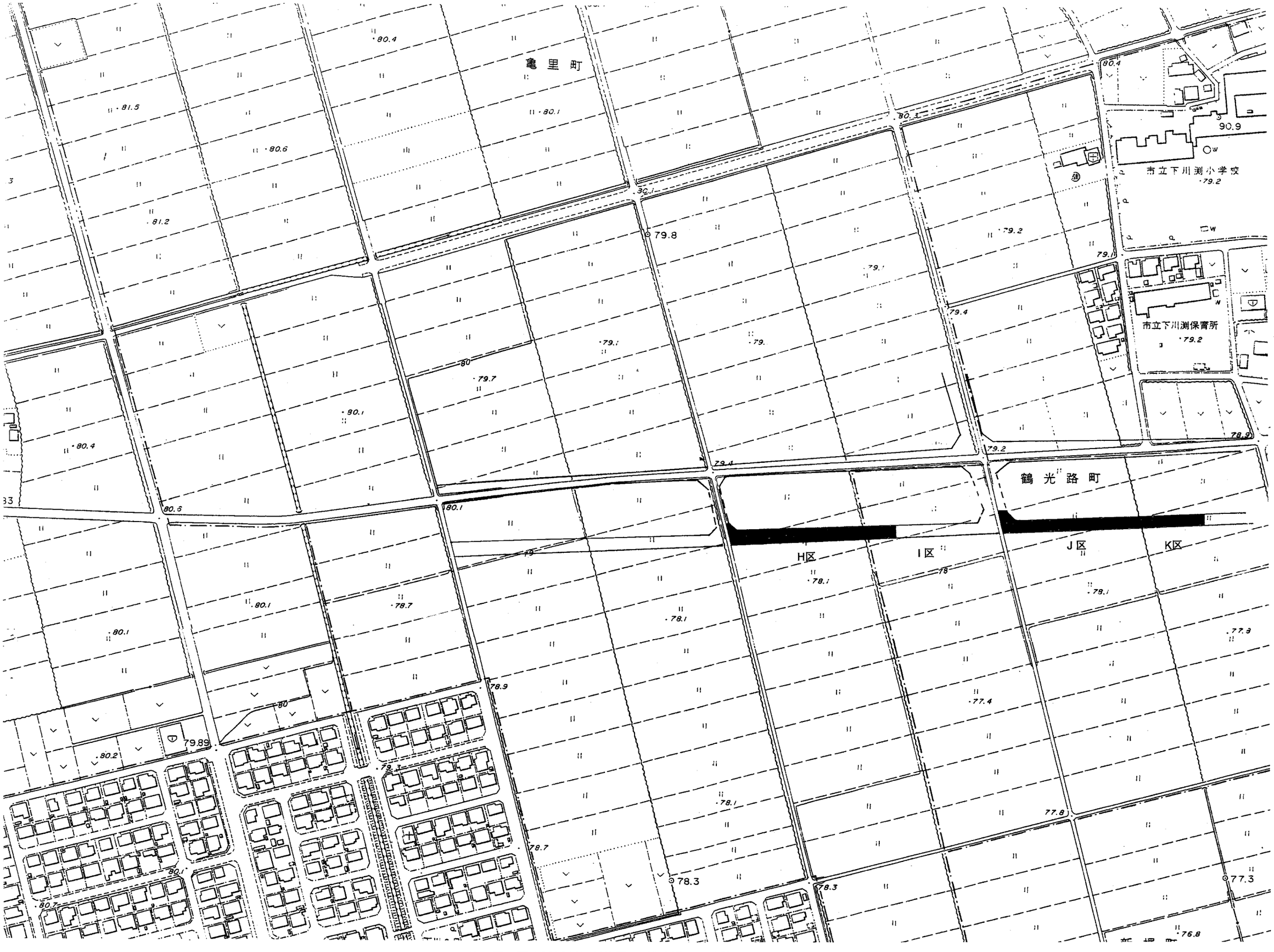
徳丸仲田(7)・西善尺司(8)の２遺跡は、旧利根川流路である広瀬川低地帯とその西側に広がる現利根川氾濫原との境目に、下増田越渡遺跡(13)はこの広瀬川低地帯と大間々扇状地とが接する河成段丘上の後背湿地部分に当たる。



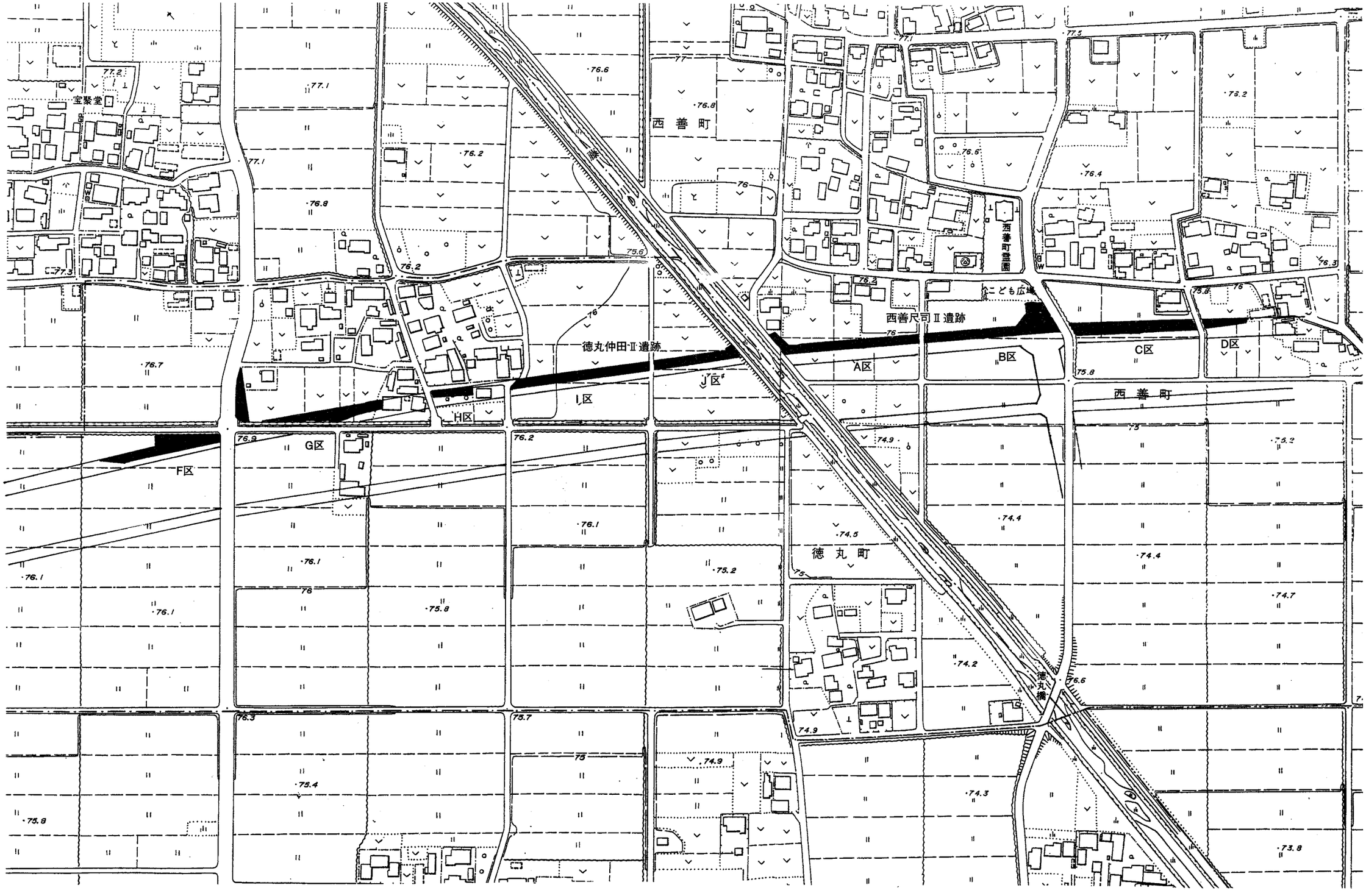
第１図　遺跡の位置と路線内の遺跡

表１　前橋管内北関東自動車道関連遺跡一覧

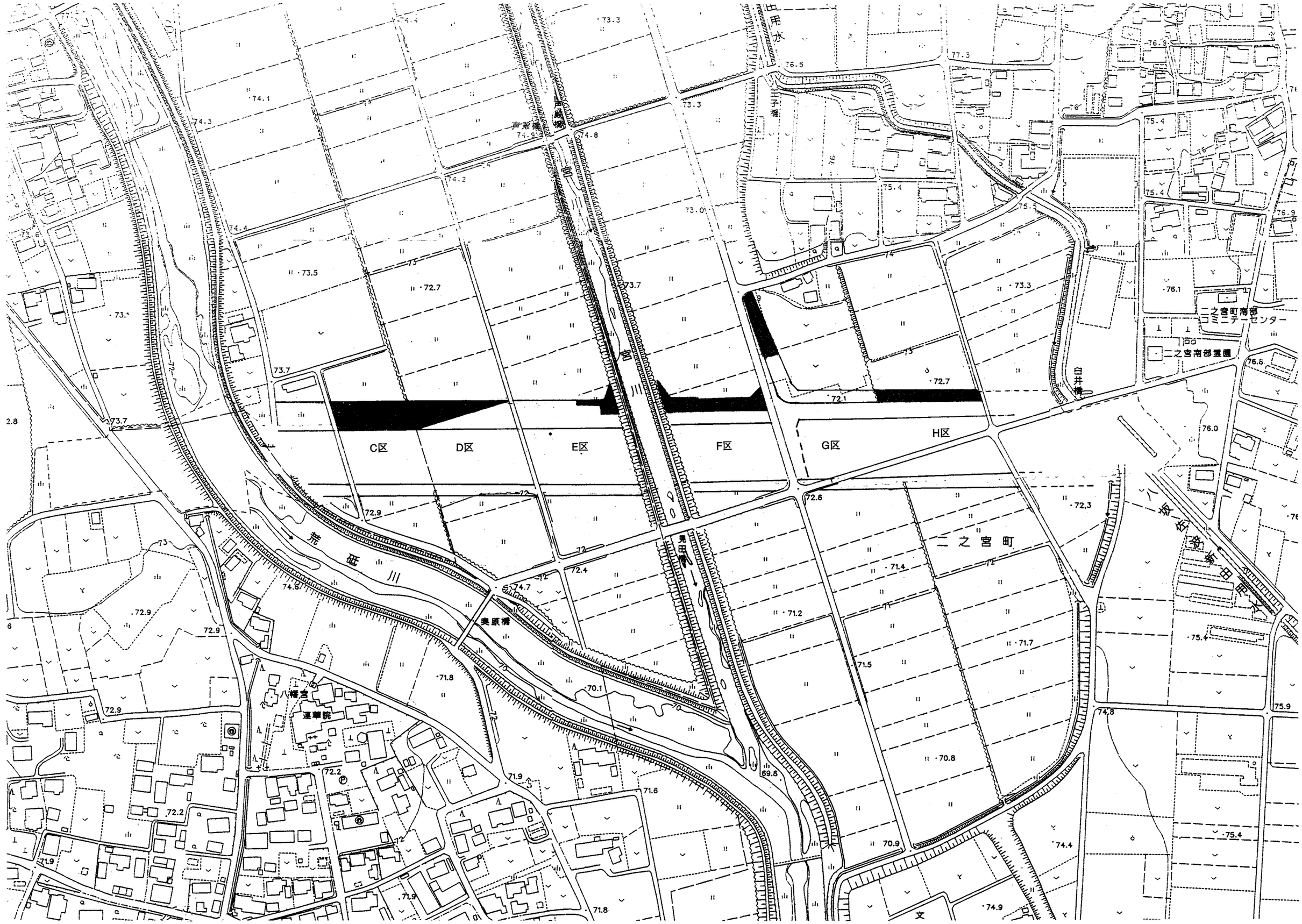
	遺跡名	調査年度	遺跡の概要	備考
1	横手井戸南遺跡	未調査		
2	横手湯田遺跡	平成8･9年度調査	古墳時代～中・近世の水田と畠及び集落・墓	平成９年度側道調査
3	村中遺跡	未調査		
4	西田遺跡	平成９年度調査	古墳時代～平安時代の水田と集落・墓	
5	鶴光路榎橋遺跡	平成９年度調査	古墳時代～中・近世の水田と館	
6	徳丸高堰遺跡	未調査		
7	徳丸仲田遺跡	平成９年度調査	縄文時代～中・近世の水田と集落及び畠	側道部分調査を本報告
8	西善尺司遺跡	平成９年度調査	古墳時代～中・近世の水田と館	側道部分調査を本報告
9	中内村前遺跡	平成９年度調査	古墳時代～中・近世の集落・館と水田	
10	前田遺跡	平成９年度着手		
11	上増田島遺跡	未調査		
12	下増田常木遺跡	平成８年度調査	平安時代～中・近世の溝	
13	下増田越渡遺跡	平成8･9年度調査	古墳時代～中・近世の集落と水田及び畠	側道部分調査を本報告
14	萩原遺跡	平成8･9年度調査	古墳時代～中・近世の集落	
15	荒井大田関遺跡	平成８年度調査	古墳時代～中・近世の水田と集落	



第２図　調査区区割り対比図(1)横手湯田Ⅲ遺跡（１：3,000）



第３図　調査区区割り対比図(2)徳丸仲田Ⅱ・西善尺司Ⅱ遺跡（１：3,000）



第４図　調査区区割り対比図(3)下増田越渡Ⅲ遺跡（１：3,000）

第3章　調査の方法

第1節　遺跡及び調査地区の呼称

①　遺跡の呼称

横手湯田遺跡、徳丸仲田遺跡、西善尺司遺跡、下増田越渡遺跡の4遺跡は、いずれも、各々同一遺跡であり、Ⅰ、Ⅱ・・等と本来は区分されるものではない。しかしながら、前橋市教育委員会の指導により、調査の便宜を図る為、群馬県埋蔵文化財調査事業団が行った本線部分をⅠ区（下増田越渡遺跡はⅠ・Ⅱ区）、当前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施した側道部分を調査年度毎にⅡ区～Ⅲ区と以下の様に区分・呼称している。

表2　地区別遺跡呼称一覧

遺跡名	調査年度	調査主体	備考
横手湯田遺跡	平成8･9年度	群馬県埋蔵文化財調査事業団	本線
横手湯田Ⅲ遺跡	平成9年度	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	側道H～K区
徳丸仲田遺跡	平成9年度	群馬県埋蔵文化財調査事業団	本線全線
徳丸仲田Ⅱ遺跡	平成9年度	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	側道F～J区（18工区～21工区）
西善尺司遺跡	平成9年度	群馬県埋蔵文化財調査事業団	本線全線
西善尺司Ⅱ遺跡	平成9年度	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	側道A～D区
下増田越渡遺跡	平成9年度	群馬県埋蔵文化財調査事業団	Ⅰ（本線A～D区）、Ⅱ（本線E～G区）
下増田越渡Ⅲ遺跡	平成9年度	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	側道C～H区

②　調査区域の呼称

今回、前橋市埋蔵文化財発掘調査団で実施した各遺跡（側道部分）は、調査年度毎に現道及び現水路を基準として細かに区分される。その為、調査の便宜を図る目的で側道部分を西側よりA・B・・D、又本線部分を境に北側を北側道、南側を南側道とそれぞれ呼称した。

また、検出された遺構名も各調査区域毎に付して調査を進めた。したがって、連続する調査区域で同一遺構でありながら遺構番号が異なる場合も生じている。これらの遺構については各説明の中で同一遺構であることの説明を行っている。

尚、群馬県埋蔵文化財調査事業団並びに市教育委員会実施遺跡からは文化層及び遺構の確認面について御指導を賜り、統一を図るよう努めた。しかし、未報告であり検出遺構に関する呼称の統一は行われていない。

第2節　調査の方法

①　遺構検出作業

遺構の検出作業は、各地区別の各文化層の埋没状況を確認した上で、表土層及び遺構確認面上部までの土層を重機により除去した。また、第1面の調査終了後、第2面以下（最大5面調査）の掘り下げも同様に重機によった。

各文化層において遺構の有無が確認できない場所や、平面的に遺構を把握することができない場合等は、状況に応じてサブトレンチを設定し、確認を行ないつつ表土（各文化層までの土層）除去作業を実施した。尚、標準堆積土層は調査区と区域外を隔する壁で実施している。

② 測量

調査グリッドの基準点測量は、北関東自動車道本線建設事業の基準点測量で用いられたトラバースを使用して行い、調査区域全体に国家座標第Ⅸ系に合わせて５ｍ方眼のグリッドを設定した。

水準点は公共水準を用い、調査区の各所にB.Mを設定し、測量の便宜を図った。

各遺構の測量に当たっては、埋没状態の観察等、遺構の全貌が把握できるよう記録した。

遺構の平面実測図は各文化層毎に航空測量を基本とし、状況に併せて平板による地上測量も実施した。航空測量、平板測量共に1/40縮尺で地区別の個別測量を行い、その後、同図を縮小編纂して1/200の全体測量図を作成した。

尚、各遺構のセクション図、エレベーション図は１／20の縮尺で、遺物出土状況の個別実測についても同様に１／20の縮尺で作成した。

③ 写真撮影

遺跡の全景写真は一部を除き、各文化層毎に航空写真撮影を実施した。航空写真撮影は６×６cm白黒、及びカラースライドフィルムにより実施した。

各遺構の写真撮影は各調査の段階毎に遺構の状況が把握できるように実施した。使用したカメラは小形カメラ３台で、使用フィルムは白黒35mm、カラースライド35mm、カラー35mmの３種類である。

尚、重要遺構については、遺構の詳細が明確に把握できるよう撮影した。

④ 安全対策

調査区には、調査を実施していることを明示し、関係者以外の立ち入りを禁止する為に、調査区の周囲に単管パイプを２ｍ間隔で打ち込み、三重のロープで囲い、要所には立入禁止の看板を設置した。

その他、夜間の侵入を禁止する為に赤色灯を点灯させ、安全の確保につとめた。

Ⅱ　横手湯田Ⅲ遺跡

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置（１・２・５・６図）

横手湯田Ⅲ遺跡の所在する亀里町・鶴光路町は前橋市の南部にあって、JR 前橋駅の南東約７km に位置する。遺跡の東方１km には端気川が流れている。また遺跡の北約１km には県道27号高崎・駒形線が東西に走り、これと交差する県道前橋・玉村線が遺跡地の近隣を南北に縦断する。両町の周辺は田園地帯が広がる中、住宅地が点在し、周辺には横手、宮地、徳丸、新堀等の町並みが形成されている。近年都市のドーナツ化現象により周辺は住宅化や大型店舗、工業団地の建設が相次ぐ。

遺跡が立地する前橋台地は、前橋市街地を北端に南方向一帯に広がる沖積平野で、前橋泥流堆積物層が形成された洪積世後期の約24,000年前から、利根川に侵食されずに沖積化が進んだ地域である。この泥流層は凝灰角礫岩を含み、浅間山の噴火によるものと推定される。それは岩神の飛石やお艶が岩の巨石が物語っているように、想像を絶する大規模な噴火があったことを示している。

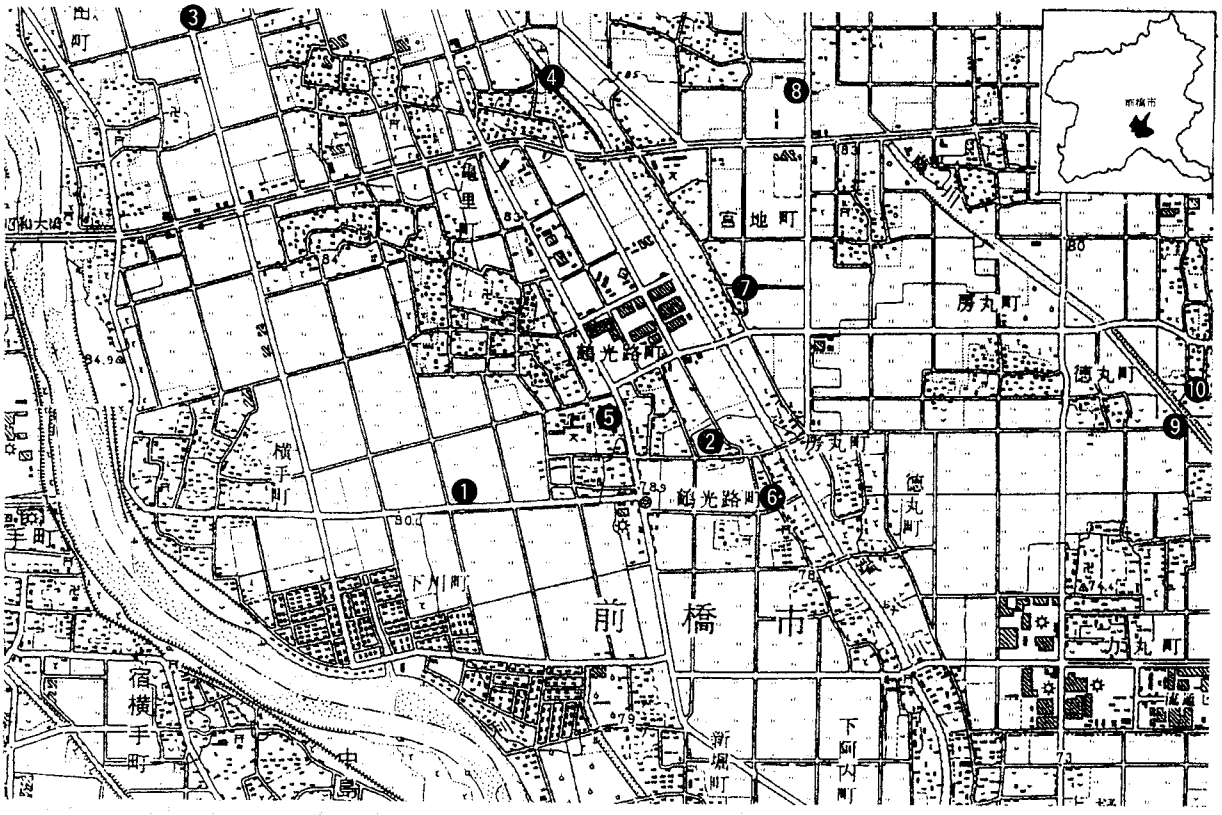
前橋台地上には利根川を始め幾つかの中小河川が南北に流れ、小規模ながら氾濫原を各所に形成している。台地の西側を流れる利根川は榛名山東南裾野の末端を侵食する形で南流し、前橋市大手町付近～玉村町五料付近の14km は、この台地を貫流してる。この利根川は過去に３回流路を変えている。前橋泥流堆積物層が堆積した後の約24,000年前の利根川は総社町辺りから新前橋～染谷川、滝川付近を流れ井野川に注いでいた。その後、約17,000年前に榛名山で発生した泥流により埋め立てられ、赤城南西麓縁の広瀬川低地帯にその流路を変更している。前橋市街地の東北部を南北に流れる桃ノ木川や市街地を流れる馬場川と広瀬川を結ぶラインは、約３m の河崖を形成している。本遺跡は、現利根川と旧利根川（広瀬川低地帯）に挟まれた前橋台地上を流れる端気川右岸の後背湿地に立地している。

端気川は古代、前橋台地北部の湿地帯を源に持つ自然流路の河川で台地中央部を南北に流れていた。この水源を活用し台地上では古墳時代から徐々に水田開発が行われてきたが、奈良時代以降の条里制地割りの時期には耕地の大規模な再開発計画が行われた。豊富な水資源を手に入れるため、端気川と旧利根川（広瀬川低地帯）を潅漑用水で結び台地上に豊富な水を提供した。このことは、前橋台地における農地開拓と端気川とが古代より密接に関わっていたことを示している。前橋台地上にはこの他にも藤川等幾つかの水路が認められる。

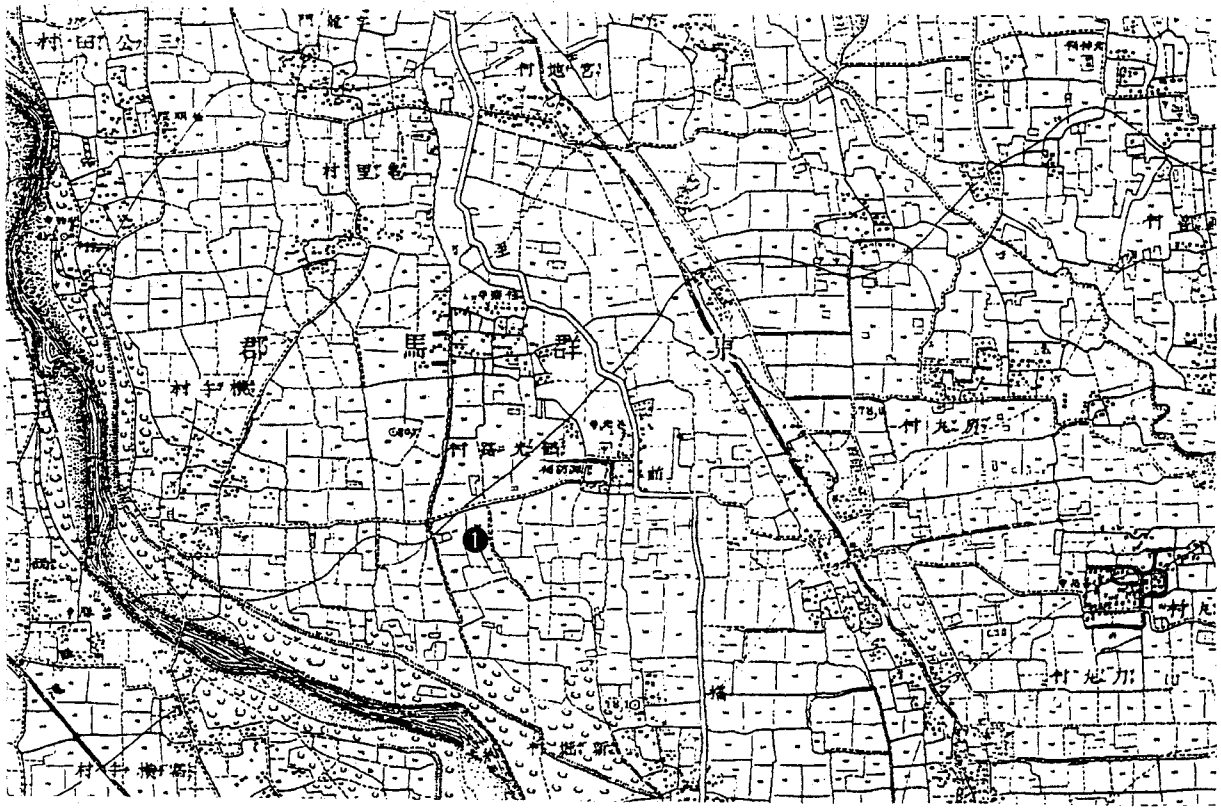
前橋台地における条里制地割りは現在の道路区画からも読み取れ、端気川の台地への流入地点を起点にしてほぼ碁盤目状に配置されており、現在の道路と当時の条里制地割りはほぼ一致する。前橋台地での条里制地割りによる耕作がなされていたと言える。このように本遺跡は、前橋台地のほぼ中央に位置し、条里制地割り施行以来、端気川が運んでくる豊富な水資源により、安定した人間生活を営むことができる一大穀倉地帯を作り上げた河川周辺に位置する。

第２節　歴史的環境

旧利根川流路にあたる広瀬川低地帯と現利根川に挟まれる地域に限定した前橋台地では、周辺の丘陵地と異なり水成ローム層が厚く堆積し一面湿地帯を形成していた。縄文時代以前の足跡は縄文時代草創期の僅かな資料を除き、台地上ではほとんど発見されておらず、人々の生活に適した環境ではなかったものと想定されている。また、縄文時代まで水性ロームの堆積が続くが台地北端部に縄文中期と思われる住居跡と、台地南端部に晩期の遺物が発見されている程度で、この地域には殆ど生活痕が見られない。



第５図　遺跡の位置と環境（国土地理院発行２万５千分の１「前橋」）



第６図　遺跡の位置と周辺の遺跡（明治21年陸地測量部発行、地方迅速図２万分の１を80％縮小）

周辺遺跡　①横手湯田Ⅲ遺跡　②西田Ⅱ遺跡　③公田池尻遺跡　④川曲遺跡　⑤下川淵小学校北遺跡　⑥西田遺跡　⑦宮地中田遺跡　⑧東田遺跡
⑨徳丸仲田Ⅱ遺跡　⑩西善尺司Ⅱ遺跡

弥生時代に入っても環境の変化は訪れず、人々を寄せつけぬ環境の厳しさは依然続いていたようで、台地の北端部に樽式土器を持つ遺跡が発見されたのみで、それ以外、当時の様子をうかがい知ることはできない。このように、弥生時代においても、縄文時代同様、人々はこの広大な沖積地に安住の地を求めることはなかったようである。

古墳時代に入ると、浅間Ｃ軽石（As-C 軽石）が降下した４世紀前後から本地域にも遺跡が発見されるようになる。旧利根川（広瀬川低地帯）が作り上げた自然堤防縁辺部と台地北端部に集中して集落跡が見られ、その後背湿地に農業生産の場所を求めていたものと想定される。本遺跡が立地する台地中央部にも微高地上に下川淵小学校北遺跡(5)や、石田川式土器を多量に廃棄した溝や掘立柱建物跡が検出された徳丸仲田Ⅱ遺跡(9)が発見されている。

石田川式期の集落跡が集中する旧利根川（広瀬川低地帯）の微高地にはそれと同時期である４世紀後半頃の築造と言われている前橋天神山古墳（前方後円墳）、八幡山古墳（前方後方墳）等が存在し、県内で出現した古墳の中では最も古い部類に属し、その規模も当該期では最大級である。以後この微高地上には、一大集落が展開されていたようで、古墳の終焉を迎える７世紀末までに前橋二子山古墳、両家二子山古墳、山王金冠塚古墳等140以上の古墳が継続して造営されていく。

本遺跡の立地する台地中央部において６世紀初頭に降下した榛名渋川テフラ（Hr-FA）と６世紀中葉に降下した榛名伊香保テフラ（Hr-FP）に伴う泥流に埋もれた水田跡が端気川の後背湿地で発見されているものの、当該期の集落は現在のところ調査事例がない。その後、８世紀以降律令制が導入されると前橋市元総社町付近に国府が造営されることとなる。それと時を同じくして前橋台地上には条里制地割りが施行され、台地の大規模開発により豊饒の地域へと変貌した。周辺では平安時代後期の1108年に降下した浅間Ｂ軽石（As-B 軽石）下から条里制地割りを想起させる宮地中田遺跡(7)、西田遺跡(6)等が本遺跡地に近接して発見されている。

第２章　調査の方法

遺跡は、隣接する㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団の調査結果から、中世水田跡、As-B 軽石下水田跡、Hr-FA 下水田跡の存在が予想された。調査は中世水田跡遺構の上面まで機械力で掘り下げた後、人力で同層の掘り下げを行い遺構の検出作業に取りかかった。その後各遺構の上面まで機械力で掘り下げて、人力による遺構の検出作業に取りかかった。

各調査区ごとにトレンチを設定して遺構が存在するかを確認すると共に、土層の堆積状態を観察した。

遺構の全測図は航空測量を行い、水準点は公共水準を用いた。個別の遺構は埋没状態の観察、記録を行い、畦畔、溝状遺構のセクション図、エレベーション図を1/20縮尺で作成した。

写真撮影は随時行い、白黒35mm、カラースライド35mm、カラー35mm の３種類を使用した。

第３章　調査の経過

調査は、平成９年12月15日から平成10年２月15日まで行った。調査の経過は以下の通りである。

12月期

中旬　15日からＨ・Ｉ区の表土排土を開始する。16日に浅間Ｂ軽石下面の水田跡調査に着手する。

下旬　23日にＨ・Ｉ区の表土排土を終了する。今月の遺構調査はＨ・Ｉ区の浅間Ｂ軽石下面の調査を行ったのみである。

1月期

上旬　正月あけの6日から調査を再開した。浅間B軽石下の水田跡精査と実測を中心に調査を進めた。

中旬　16・17日に浅間B軽石下水田跡の空撮及び全体測量を実施した。19日からFA下水田跡までの間層除去作業を開始した。

下旬　23日にH・I区のFA下水田跡精査を開始し、29日に全体測量を終了させ、31日までにH・I区の埋め戻しを終了した。

2月期

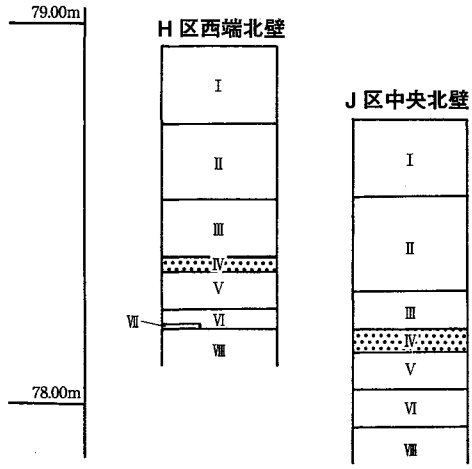
上旬　全体測量を行い、すべての調査を終了する。

第4章　基本層序

遺跡は現利根川と広瀬川低地帯に挟まれた後背湿地に立地している。調査区は東西に長く西端と東端では365mの距離があるが、土層の堆積は比較的安定しており、各調査地区での変化は少ない。

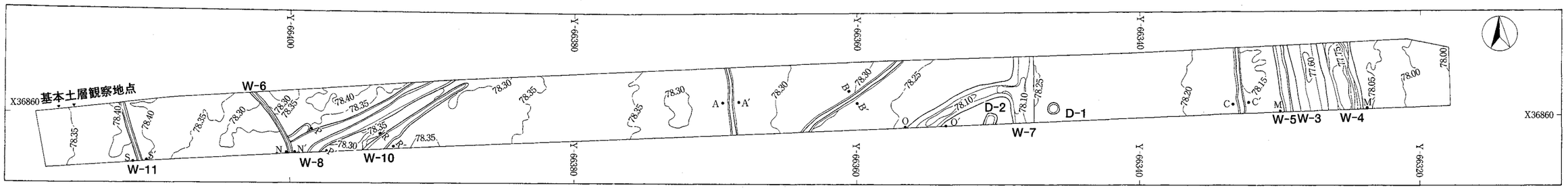
Ⅱ層は浅間B軽石を混入する灰褐色土で中・近世の遺構はこの層を切って構築されている。

浅間B軽石純層（Ⅳ層）は、現地表面下60cmの位置で検出され、層厚は1～6cmである。Ⅴ層は水田土壌である。Ⅶ層はFA純層であるが遺存状況は悪い。H区北側でのみ確認されている。

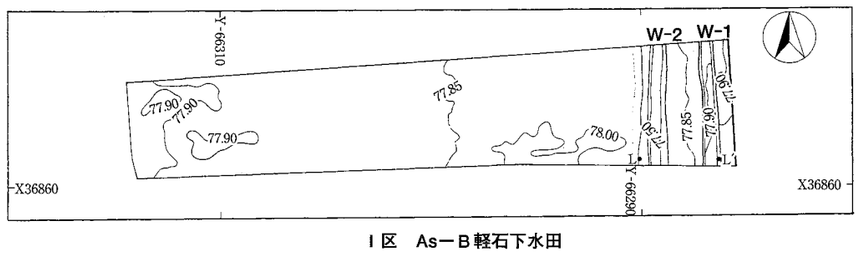


層序説明
Ⅰ層〔暗灰色土〕耕作土。As-Aを少量含む。
Ⅱ層〔灰褐色土〕As-Bを少量含む。
Ⅲ層〔暗灰色土〕As-Bを多量に混入。
Ⅳ層〔淡黄褐色軽石〕As-Bの純層。
Ⅴ層〔黒褐色土〕粘性強く、上面はAs-B埋没水田面となる。
Ⅵ層〔灰黄褐色土〕Hr-FAをブロック状に少量含む。
Ⅶ層〔淡褐色軽石〕Hr-FAの純層。
Ⅷ層〔黒色土〕粘性強く、上面はHr-FA埋没水田面となる。

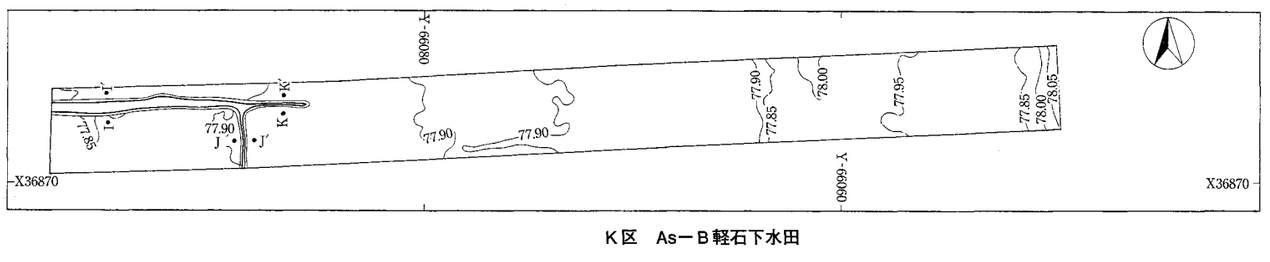
第7図　基本土層図　　As－Bの純層



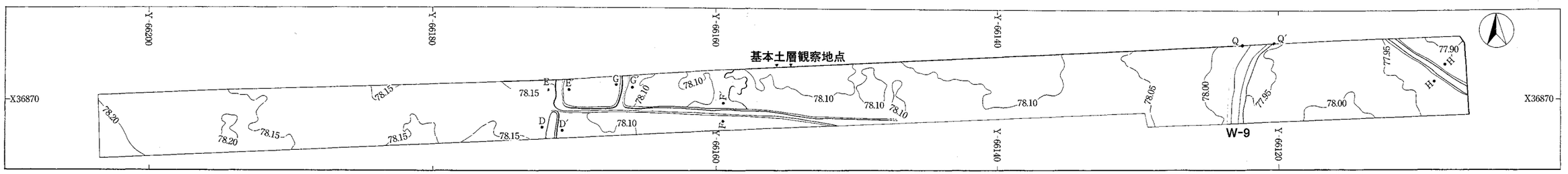
H区　As－B軽石下水田



I区　As－B軽石下水田



K区　As－B軽石下水田



J区　As－B軽石下水田

0　（1：300）　10m

第8図　H・I・J・K区遺構全体図

第５章　遺構と遺物

第１節　平安時代後期

第１項　As-B 軽石下遺構（第８・９図　図版１）

１．水田跡

H 区では、調査区中央部に２条、東部に１条の畦畔が検出されている。幅が50cm 前後で、高さが５cm と遺存状態はかなり悪い。走向方向は中央部の１条と東部の１条がほぼ同じで、N５°W となり、残りの中央部の１条が N55°E となる。J 区では、調査区中央部に４条、東部に１条の畦畔が検出されている。幅が50～70cm で、高さが５～10cm と遺存状態はやや悪い。走向方向は中央部の４条に方向性の一致が見られ、N５°W 及びそれとほぼ直交する N95°E となり、東部の１条はN55°W となる。水田の規模は不明であるが、東西の幅は確認できる部分で約４m を測る。また、中央部の畦畔の西端で幅約20cm の水口が検出されている。K 区では、調査区西部より２条の畦畔が検出されている。幅が西端で70cm 前後、東端で30cm 前後となり、東へ向かうに従い遺存状態が悪くなり消滅する。高さは西端の良好なところで８cm 程となる。走向方向は N１°W 及びそれとほぼ直交する N90°E となる。

第２節　中・近世

第１項　溝（第８・10図、図版２－２～８・３）

１号溝

I 区東端に位置し、西側に平行して２号溝が存在する。幅80cm、深さ55cm を有し、ほぼ南北方向に走向する。構築時期は耕地整理前の新しい溝である。

２号溝

I 区東端に位置し、東側に平行して１号溝が存在する。幅180cm、深さ53cm を有し、ほぼ南北方向に走向する。構築時期は近世以降である。

３号溝

H 区東端に位置し、東側に平行して４号溝が、西側に平行して５号溝がそれぞれ存在し、本溝は両溝を切って構築されている。幅205cm、深さ53cm を有し、ほぼ南北方向に走向する。構築時期は近世以降である。

４号溝

H 区東端に位置し、西側に平行して３号溝が存在し、本溝は３号溝に切られている。幅155cm、深さ24cm を有し、ほぼ南北方向に走向する。構築時期は中世以降である。

５号溝

H 区東端に位置し、東側に平行して３号溝が存在し、本溝は３号溝に切られている。幅70cm、深さ30cm を有し、ほぼ南北方向に走向する。構築時期は近世以降である。

６号溝

H 区の西部に位置し、８号溝を切って構築されている。幅35cm、深さ10cm を有し、N30°W に走向する。構築時期は近世以降である。

７号溝

H 区の中央やや東寄りに位置している。幅150cm、深さ25cm を有し、中央部でほぼ南北方向に伸びる溝

とN115°Wに伸びる溝に分岐する。構築時期は近世以降である。

8号溝

H区の西部に位置し、6号溝に切られている。幅135cm、深さ12cmを有し、N65°Eに走向する。構築時期は近世以降である。

9号溝

J区の東部に位置している。幅143cm、深さ20cmを有し、N5°Eに走向した後北端で東方曲がる。構築時期は近世以降である。

10号溝

H区の西部に位置し、8号溝とほぼ平行する。幅100cm、深さ20cmを有し、N65°Eに走向する。構築時期は近世以降である。

11号溝

H区の調査区西端部に位置する。幅20～38cm、深8cmのU字状断面を呈し、走向方向はN15°Wとなる。構築時期は中世以降である。

第2項　土坑（第8・10図、図版2－1・3）

1号土坑

H区の中央部に位置している。平面形は径70cmの円形を呈し、断面形は深さ15cmの鍋底状を呈する。構築時期は近世以降である。

2号土坑

H区の中央部に位置しており、南側は未調査区に延びる。平面形は長軸長55cm以上、短軸長43cmの長方形を呈すると思われる。断面形は深さ25cmの鍋底状を呈する。構築時期は近世以降である。

第3項　出土遺物（第11図、図版3）

いずれもⅠ・Ⅱ層中から出土したもので、遺構に伴うものは無い。1は内耳鍋の口縁部片である。口縁部から内面にかけて横なでを施している。酸化炎焼成で、胎土には長石・石英を少量含む。2は羽口先端部片である。外面に融着滓が見られる。3は擂り鉢の体部片である。鉄釉が内外面に施釉されており、胎土には長石を少量含む。内面の擂り目はたいへん粗い。4は擂り鉢の底部片である。鉄釉が内外面に施釉されている。内面の擂り目は粗い。5は染付碗の底部片である。二重網目文が見られる。6は染付碗の底部片である。7は古瀬戸段皿の1/4ほどの破片である。内面に緑色の灰釉が施釉されている。8は近現代の櫛である。

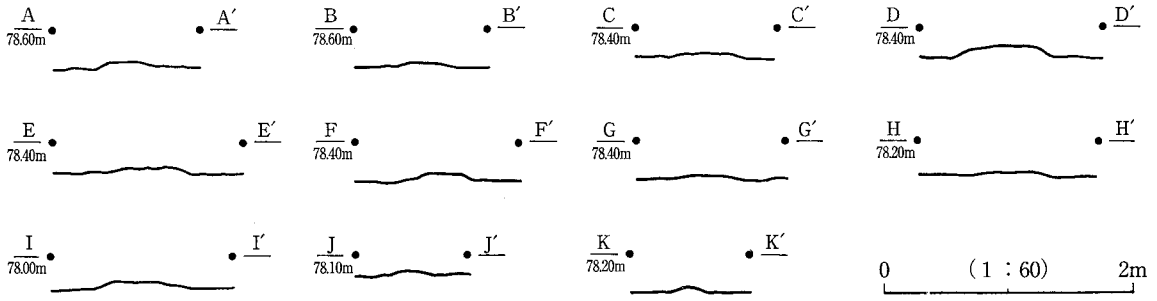
第6章　まとめ

本遺跡で検出された遺構は浅間B軽石下水田跡、中・近世の溝11条、土坑2基である。群馬県埋蔵文化財調査事業団による北関東自動車道本線部分の調査では、中世の水田跡（利根川氾濫による洪水層下）と6世紀初頭（榛名渋川テフラHr-FA層下）の水田跡が検出されているが、今回の調査では中世の洪水層の堆積はなく、FA純層は調査区の西側で僅かに認められただけで両時代の水田跡は検出されなかった。

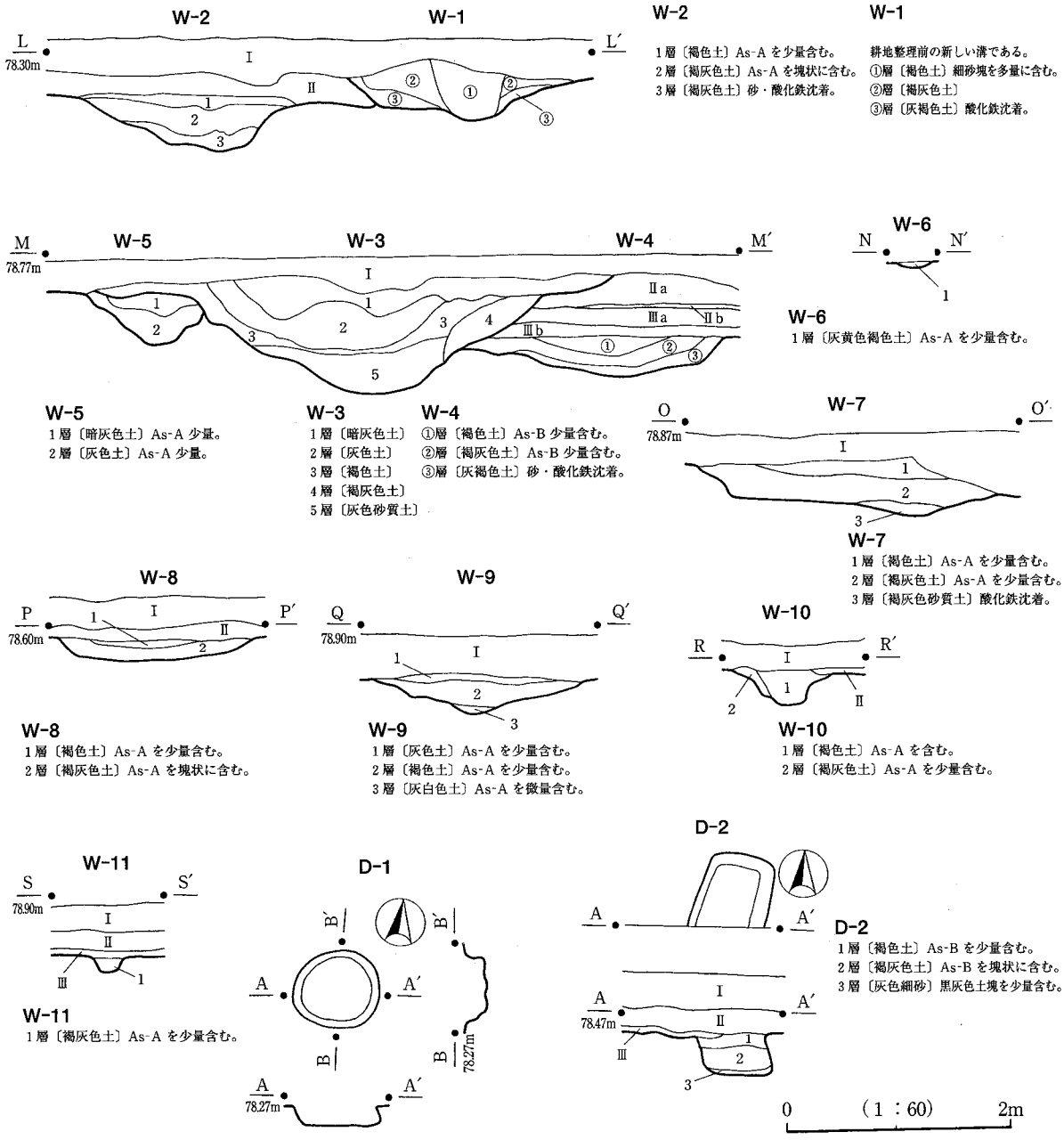
浅間B軽石下の水田跡はI区を除いて小畦畔が検出されているが、いずれの地区も遺存状況はよくない。

溝は埋没土中に浅間A軽石（As-A）が含まれているもので、同軽石降下以降まで使用されていたことが窺えるが、出土遺物から判断して、構築時期は中世まで遡るとみられるものも存在する。

土坑はH区で2基検出されている。何れも埋没土中には浅間A軽石（As-A）が含まれ、同軽石降下以降のものと判断される。



第９図　As-B 軽石下水田エレベーション



W-2
1層〔褐色土〕As-A を少量含む。
2層〔褐灰色土〕As-A を塊状に含む。
3層〔褐灰色土〕砂・酸化鉄沈着。

W-1
耕地整理前の新しい溝である。
①層〔褐色土〕細砂塊を多量に含む。
②層〔褐灰色土〕
③層〔灰褐色土〕酸化鉄沈着。

W-6
1層〔灰黄色褐色土〕As-A を少量含む。

W-5
1層〔暗灰色土〕As-A 少量。
2層〔灰色土〕As-A 少量。

W-3
1層〔暗灰色土〕
2層〔灰色土〕
3層〔褐色土〕
4層〔褐灰色土〕
5層〔灰色砂質土〕

W-4
①層〔褐色土〕As-B 少量含む。
②層〔褐灰色土〕As-B 少量含む。
③層〔灰褐色土〕砂・酸化鉄沈着。

W-7
1層〔褐色土〕As-A を少量含む。
2層〔褐灰色土〕As-A を少量含む。
3層〔褐灰色砂質土〕酸化鉄沈着。

W-8
1層〔褐色土〕As-A を少量含む。
2層〔褐灰色土〕As-A を塊状に含む。

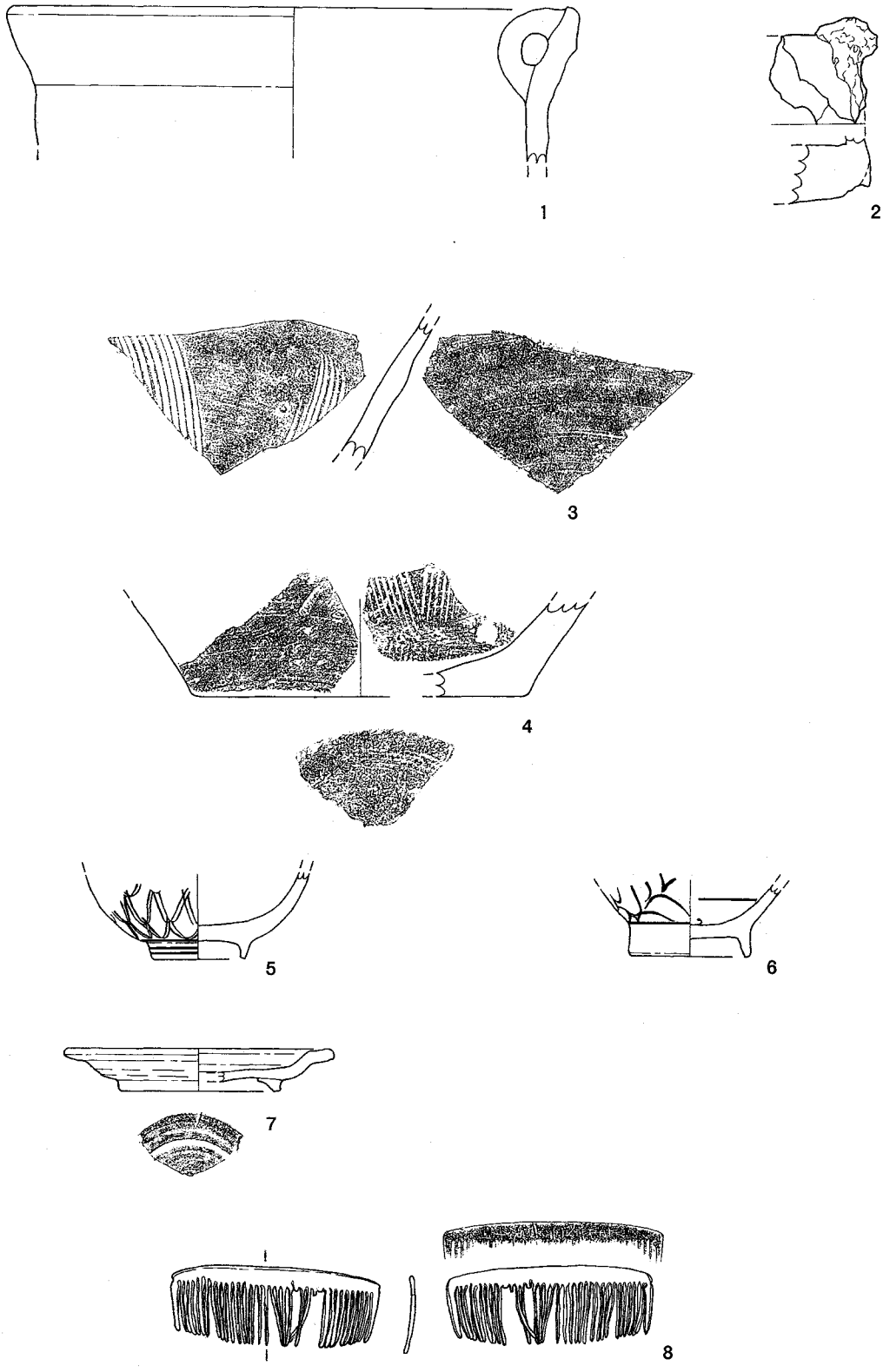
W-9
1層〔灰色土〕As-A を少量含む。
2層〔褐色土〕As-A を少量含む。
3層〔灰白色土〕As-A を微量含む。

W-10
1層〔褐色土〕As-A を含む。
2層〔褐灰色土〕As-A を少量含む。

W-11
1層〔褐灰色土〕As-A を少量含む。

D-2
1層〔褐色土〕As-B を少量含む。
2層〔褐灰色土〕As-B を塊状に含む。
3層〔灰色細砂〕黒灰色土塊を少量含む。

第10図　溝・土坑土層断面図



第11図　出土遺物

Ⅲ　徳丸仲田Ⅱ遺跡

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の立地

徳丸仲田Ⅱ遺跡の所在する徳丸町は前橋市の南部にあり、JR 前橋駅の南東約6.5km、駒形駅の南西約2.9km に位置する。遺跡地の地番は前橋市徳丸町171-1番地ほかである。調査区の東端は藤川に接し、西善町との境をなす。遺跡地の北１km には県道27号高崎駒形線が東西に走り、これと交差する県道西善力丸線が調査区西部を南北に縦断する。徳丸町の周囲には、水田や畑の広がる中に西善・中内・力丸・房丸の町々が点在している。旧来の集落に加え、幹線沿いに市街地化が進行しつつあり、西善工業団地・力丸工業団地を代表に企業の進出も目立っている。

本遺跡は、前橋市の南西部に広がる前橋台地上の東端付近、標高約75m の平坦な場所に位置している。前橋台地は、約20,000年前の浅間山の山体崩落に起因する火山泥流堆積物により形成された、緩傾斜の洪積台地である。台地上は、微高地と後背湿地が北西・南東方向を基調として網目状に入り組んでいる。前橋台地の東側は利根川の旧流路に相当し、幅３km 前後、長さ約30km の帯状の沖積低地が北西から南東へ広がっている。この低地帯は広瀬川低地帯と呼ばれ、前橋台地との間は数メートルの比高差を持つ明瞭な崖に区画される。遺跡地は低地帯の南西約２km 付近に位置する。旧利根川は天文年間の洪水により河道を西へ移しており、現在の利根川は遺跡地の西3.3km 及び南2.4km 地点を南東方向へと流れている。現利根川と広瀬川低地帯に挟まれる部分の前橋台地上には、端気川・藤川などの小河川が南東流し、利根川に合流する。この小河川沿いには浅い侵食谷が筋状に形成されており、本遺跡は微高地縁辺の谷頭付近、南方に後背湿地をひかえる場所に立地する。

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺の前橋台地上は、旧石器時代から縄文・弥生時代にかけての遺構・遺物が少ない。それは前橋泥流と陣場岩屑なだれの堆積に伴う激しい地形変化とその後の湿地化が、人々に生活可能な環境を与えなかったためであろう。

古墳時代前期（４世紀）になると、利根川流域の平坦地は、弥生文化の担い手とは異なる外来の集団により開発が進み始める。石田川式土器を使用するこの集団は、農業生産に立脚した生活基盤を本遺跡周辺の前橋台地上にも求めた。住居跡が確認された後閑団地遺跡11・東田遺跡４はいずれも台地上の微高地縁辺部に占地し、前面に開ける後背湿地を開発の対象としている。西横手遺跡８・公田池尻遺跡７では浅間Ｃ軽石に埋没した水田跡が確認されている。Hr-FA や Hr-FP の降下する古墳時代後期（６世紀）には、農耕技術の進歩と鉄器の普及が可耕地を拡大させ、人工増加に伴う集落の拡大も著しくなってくる。この時期の水田はテフラ堆積による漏水に対処するため、公田東遺跡６・横手湯田遺跡９で見られるような小区画のものが盛行する。該期の集落は後閑Ⅱ遺跡12・川曲遺跡５等、前期と同様に微高地縁辺部に立地する。

前橋台地の東端付近には、広瀬川低地帯に沿うように古墳が群をなす。４世紀後半築造の八幡山古墳13（前方後方墳）、三角縁神獣鏡を出土した前橋天神山古墳14（前方後円墳）は県内でも古い一群に属する。他に、６世紀前半の帆立貝型古墳である亀塚山古墳15、７世紀前半の前方後円墳で宝珠型金銅製冠を出土した金冠塚古墳16が著名である。

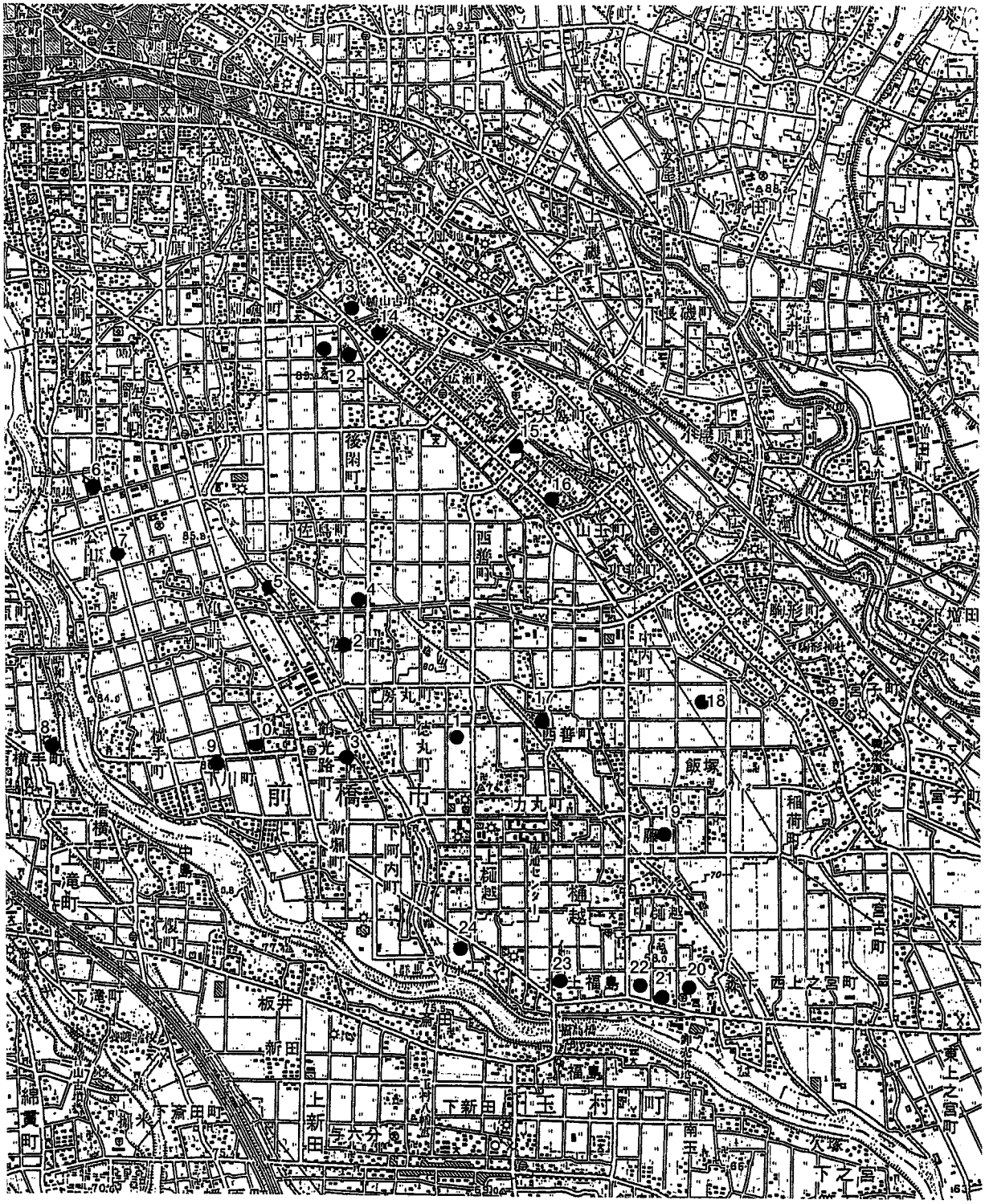
律令期に入ると、前橋市内の元総社町に国府が造営され、その南東に位置する遺跡地周辺は穀倉地帯とし

て組み込まれていく。1108年降下の浅間Ｂ軽石に埋没した水田のなかには、律令制が確立した当初の条里制地割を想起させる例がある（公田東遺跡・公田池尻遺跡等）。特に宮地中田遺跡２では、東西走行の坪境畦畔３本とそれに直交する南北走行の坪境畦畔１本が検出され、８区画の坪並が想定された。西田遺跡3では、東西に走る幅1.1m 程の大畦畔や幅80～100cm の道路状遺構が検出されており、いずれも坪境の可能性がある。埋没谷では、西善尺司Ⅱ遺跡17のように残存する起伏に合わせて小畦畔を配する例も見られる。奈良・平安時代の集落跡は、後閑団地遺跡11・後閑Ⅱ遺跡・神人村Ⅱ遺跡20・柄田添遺跡24で確認されている。その他、一万田遺跡21では郡衙等の公的施設を想起させる柵列・溝・井戸・掘立柱建物跡が検出され、井戸からは「舎」と書かれた墨書土器が出土している。

表３　周辺の遺跡地名表

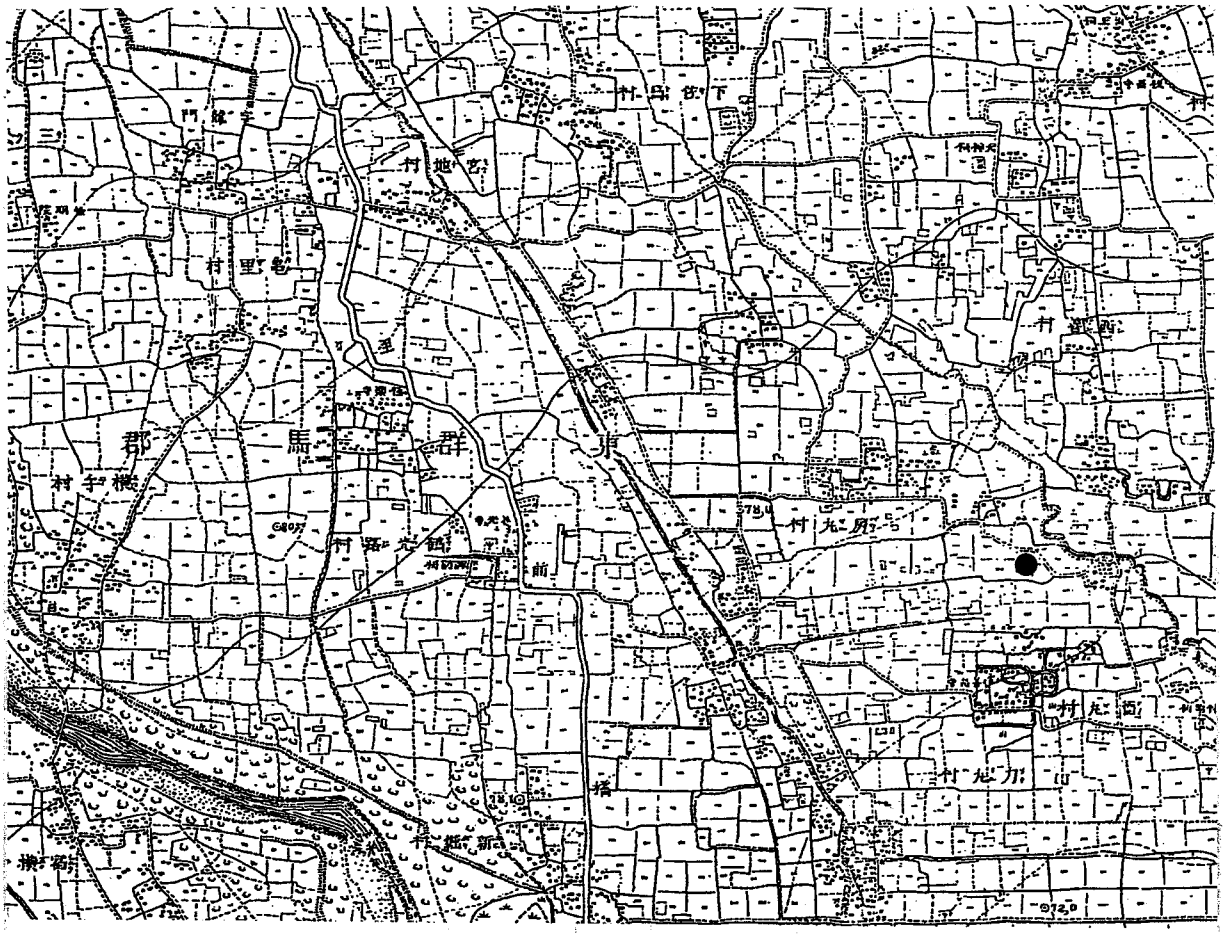
No	遺跡名・所在地	時代	遺　構
1	徳丸仲田Ⅱ遺跡 前橋市徳丸町171-1他	古墳 平安 中近世	溝・掘立柱建物跡 集落跡 館跡
2	宮地中田遺跡 前橋市宮地町667-3他	平安	水田跡
3	西田遺跡 前橋市鶴光路町305他	平安	水田跡
4	東田遺跡 前橋市	古墳	住居跡
5	川曲遺跡 前橋市	古墳	住居跡
6	公田東遺跡 前橋市公田町	古墳 平安	水田跡 水田跡
7	公田池尻遺跡 前橋市上佐鳥町	古墳 平安	水田跡 水田跡
8	西横手遺跡 高崎市西横手町	古墳 平安	水田跡 水田跡
9	横手湯田遺跡 前橋市亀里町921他	古墳 平安	水田跡 水田跡
10	鶴光路練引遺跡 前橋市鶴光路町59-3他	平安	水田跡
11	後閑団地遺跡 前橋市	古墳 奈・平	集落跡 住居跡・掘立柱建物跡
12	後閑Ⅱ遺跡 前橋市後閑町	古墳 奈・平	集落跡 住居跡・掘立柱建物跡 水田跡

No	遺跡名・所在地	時代	遺　構
13	八幡山古墳 前橋市朝倉町419-3	古墳	前方後円墳　全長180m 幅125m　４世紀後半
14	前橋天神山古墳 前橋市広瀬町1-27-7	古墳	前方後円墳　全長129m ４世紀後半
15	亀塚山古墳 前橋市山王町1-28-3	古墳	帆立貝式古墳　全長60m ６世紀前半
16	金冠塚古墳 前橋市山王	古墳	前方後円墳　７世紀前半
17	西善尺司Ⅱ遺跡 前橋市西善町1174-1他	古墳 平安 近世	木道･周溝墓･溝･水田跡 集落跡・水田跡 土坑墓跡
18	前田遺跡 前橋市東善町	平安	水田跡
19	藤川前遺跡 玉村町藤川191他	平安	水田跡
20	神人村Ⅱ遺跡 玉村町樋越305-7他	奈・平	集落跡
21	一万田遺跡 玉村町上福島45-1他	奈・平	柵列・溝・井戸・掘立建物跡
22	尾柄町遺跡 玉村町上福島	平安	水田跡
23	金免遺跡 玉村町上福島298	平安	水田跡
24	柄田添遺跡 玉村町上福島707	奈・平 江戸	水田跡・集落跡 水田跡・畠跡

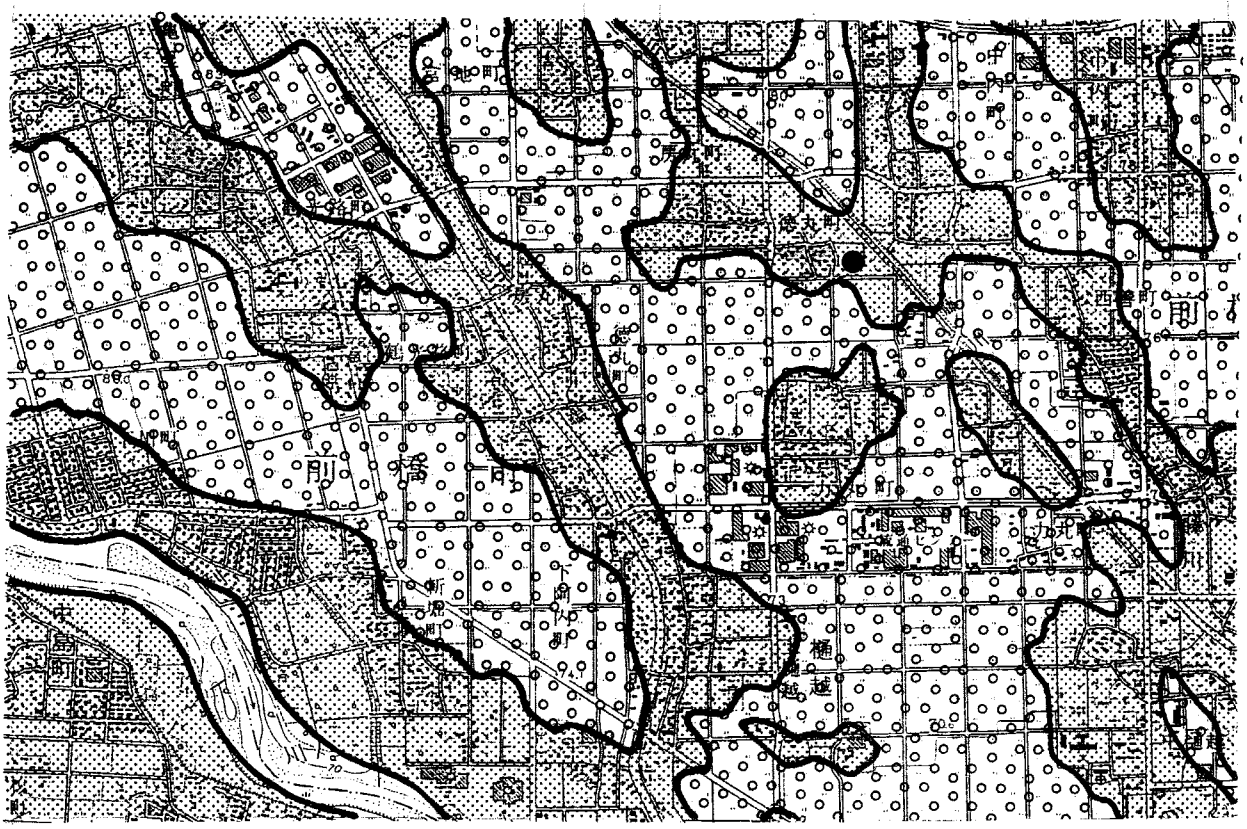


1．徳丸仲田Ⅱ遺跡　2．宮地中田遺跡　3．西田遺跡　4．東田遺跡
5．川曲遺跡　6．公田東遺跡　7．公田池尻遺跡　8．西横手遺跡
9．横手湯田遺跡　10．鶴光路練引遺跡　11．後閑団地遺跡　12．後閑Ⅱ遺跡
13．八幡山遺跡　14．前橋天神山古墳　15．亀塚山古墳　16．金冠塚古墳
17．西善尺司Ⅱ遺跡　18．前田遺跡　19．藤川前遺跡　20．神人村Ⅱ遺跡
21．一万田遺跡　22．尾柄町遺跡　23．金免遺跡　24．柄田添遺跡

第12図　遺跡の位置と周辺の遺跡（１：50,000）



第13図　遺跡の位置（明治21年陸地測量部発行、地方迅速図２万の１を80％縮小）



第14図　遺跡の位置と地形（国土地理院２万５千分の１「前橋」）

第２章　調査の方法

調査地域は南北幅平均７ｍ・東西幅約480ｍに及び、４本の南北道路により５地区に分割される。５地区をそのまま調査区として設定し、呼称は西側からＦ、Ｇ、Ｈ、Ｉ、Ｊ区とした。区ごとの調査面積はＦ区488m^2、Ｇ区453m^2、Ｈ区98m^2、Ｉ区393m^2、Ｊ区280m^{2}である。南北幅４ｍ未満の狭い箇所は、幅1.2ｍのトレンチを入れ遺構が確認された場合拡張する方法を採用した。トレンチ調査になったのはＧ区西側道路沿いの部分である。

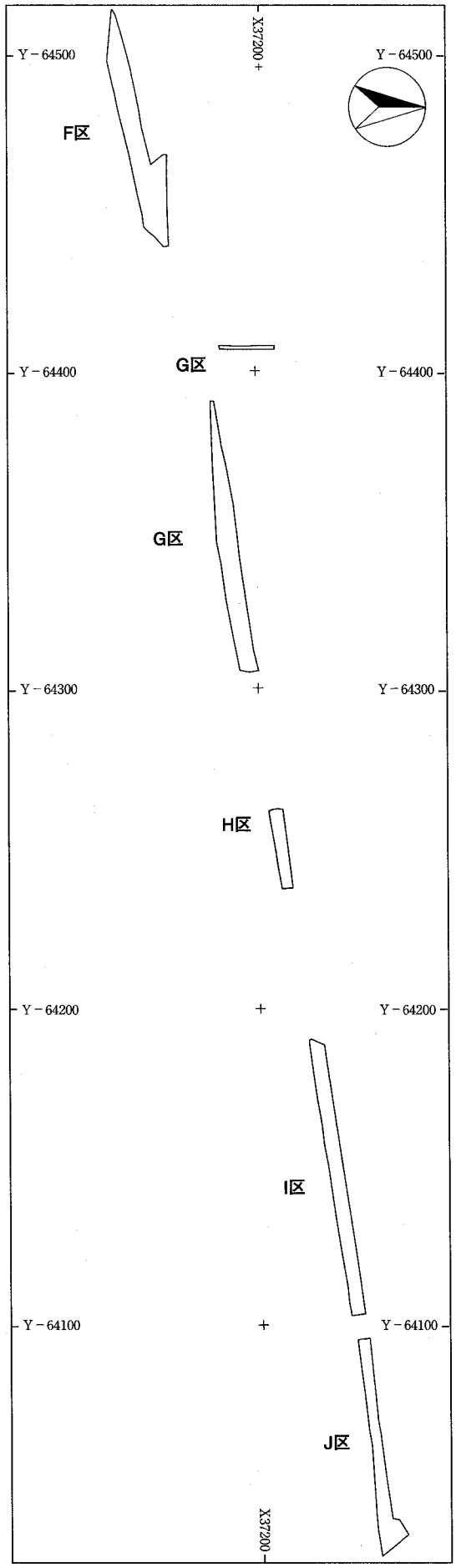
グリッドは、国家座標第Ⅳ系（Ｘ＝37250、Ｙ＝－64020）と平行に設定した。

平面図は平板を使用し、地区ごとの全体図を１/100で作図した。個別遺構・遺物出土状況・セクション・エレベーションは1/20作図を原則とし、状況に応じて1/10、1/40で記録した。1/100全体図には５cmコンタを入れた。

遺構の写真撮影には中型カメラによる35mmサイズのモノクロ・カラー・リバーサル写真を使用した。

第３章　調査の経過

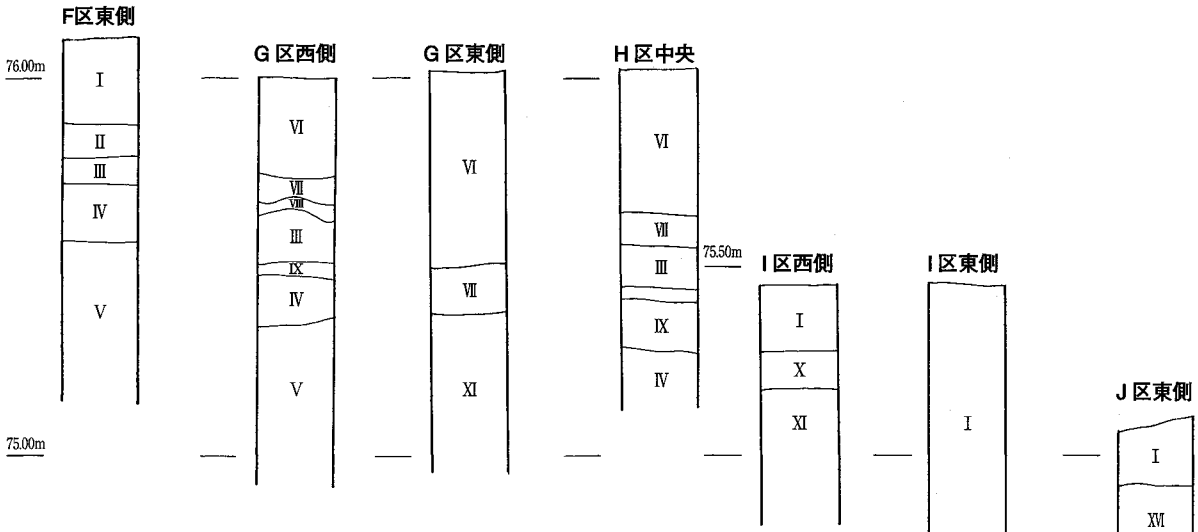
12月　上旬　Ｊ区の表土除去後、遺構調査を開始する。
１月　中旬　Ｊ区で平安時代の集落跡を検出する。
　　下旬　Ｊ区の遺構調査を終了する。
２月　上旬　Ｉ区の表土除去を実施する。
　　中旬　Ｉ区の遺構調査を開始する。
　　下旬　Ｉ区西側で中世環濠遺構群を検出する。
３月　上旬　Ｇ区の表土除去後、遺構調査を開始し、東側で４世紀の掘立柱建物を検出。Ｆ区の表土除去を行なう。
　　中旬　Ｆ区の遺構調査を開始する。Ｉ区の遺構調査を終了する。Ｆ区の遺構調査を終了する。Ｈ区の表土除去後、遺構調査を行なう。
　　下旬　Ｇ区の遺構調査を終了する。全調査区で埋め戻し作業を行なう。



第15図　調査区設定図（1：2,000）

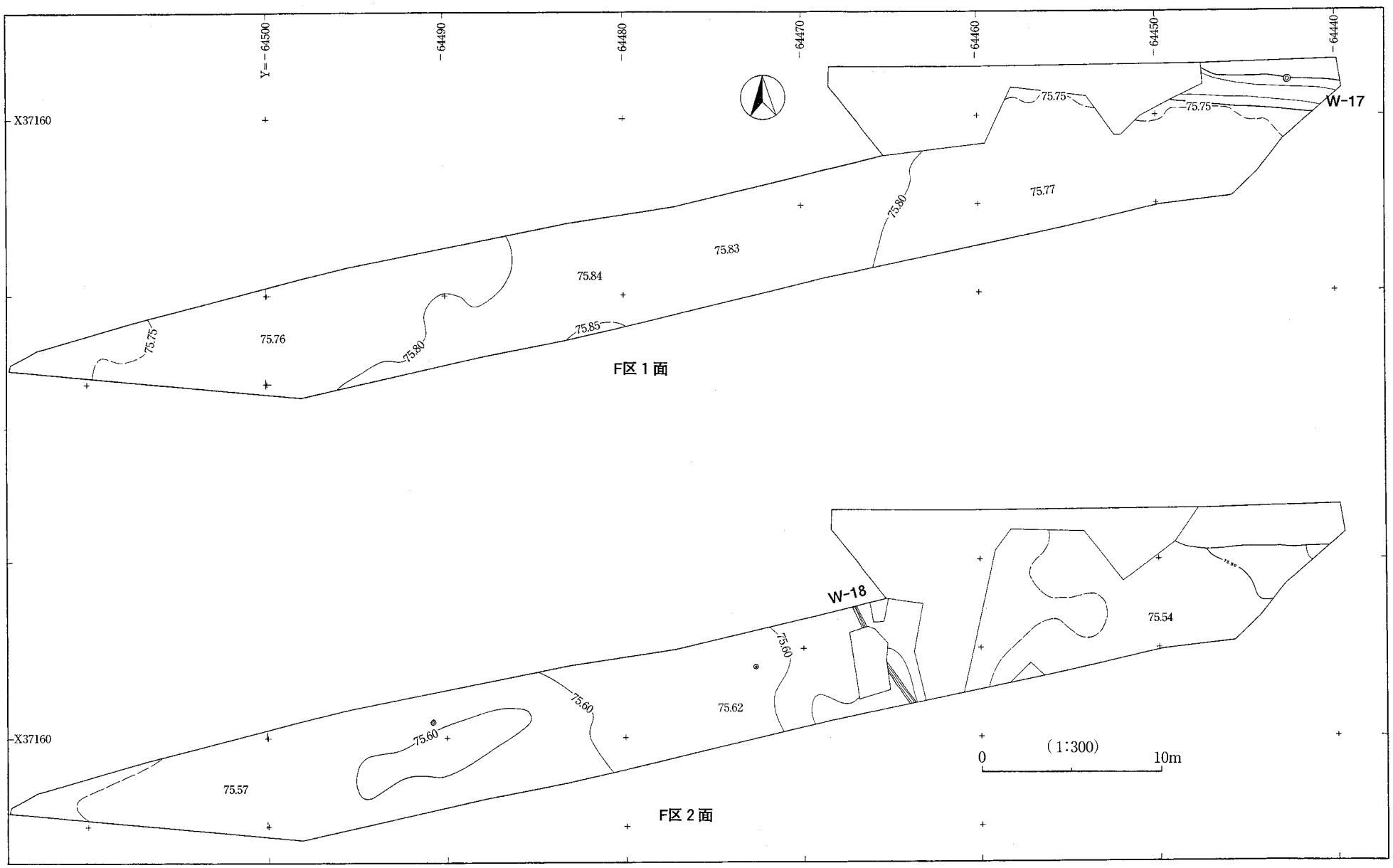
第４章　基本層序

本調査区は西善町から連なる前橋台地上の微高地縁辺部を主体に立地し、部分的に浸食谷や後背湿地が含まれる。各地点の基本層序は以下のとおりである。

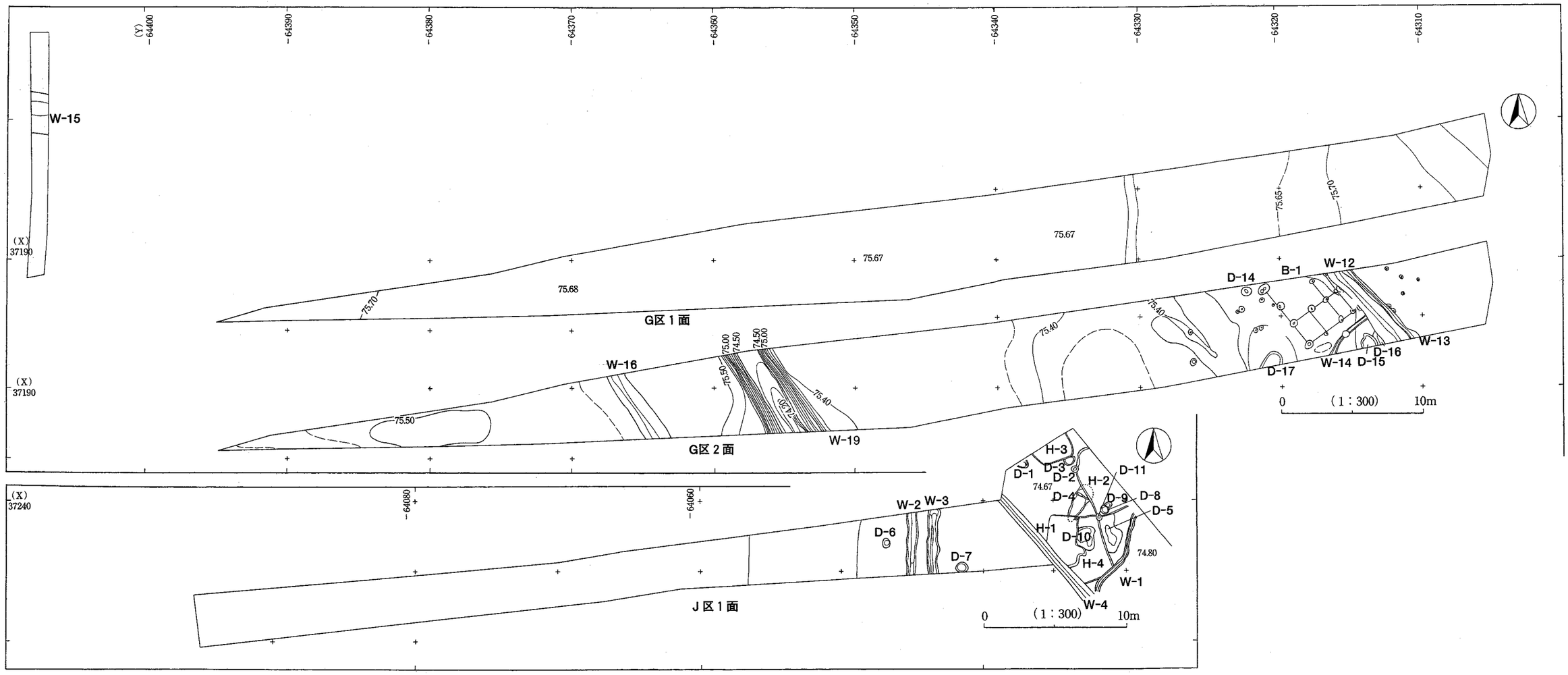


Ⅰ層　灰色土　　現耕作土　柔らかく、酸化鉄・As-A軽石多く含む
Ⅱ層　灰色土　　旧耕作土　多く、炭化物・酸化鉄少量含む
Ⅲ層　黒灰色土　As-B軽石下水田耕作土　強い粘性　Hr-FA少量混入
Ⅳ層　黒灰色土　Hr-FA層下水田耕作土　As-C軽石少量混入する
　　Ⅲ層より黒色味強く、粘性強い
Ⅴ層　灰白色土　シルト質で強い粘性
Ⅵ層　灰色土　　現耕作土　砂質で柔らかい　As-B軽石少量混入する
Ⅶ層　灰色土　　旧耕作土　砂質で硬く締る　As-B軽石・酸化鉄多く含む
Ⅷ層　As-B軽石　径１～３mmの粗粒軽石　下面に径１mm以下の灰色火山灰
Ⅸ層　灰色土　　シルト質でやや粘性を有する　Hr-FA少量混入する
Ⅹ層　黒色土　　砂質で締りに欠ける　As-C軽石少量混入する
Ⅺ層　黄褐色土　細砂質　硬く締りやや粘性を有する
Ⅻ層　Hr-FA層　レンズ状に堆積するが、上下面に凹凸が見られる
ⅩⅢ層　黒灰色土　泥炭上で、ヨシ等の植物遺体が良好に遺存する
ⅩⅣ層　As-C軽石　レンズ状に堆積する
ⅩⅤ層　黒色土　　極めて泥炭質で、植物遺体はⅩⅢ層より多く含む
ⅩⅥ層　灰褐色土　As-B軽石を多く含む　底面に鉄分が沈着する
ⅩⅦ層　灰褐色土　ローム塊・泥流堆積物を多く含む

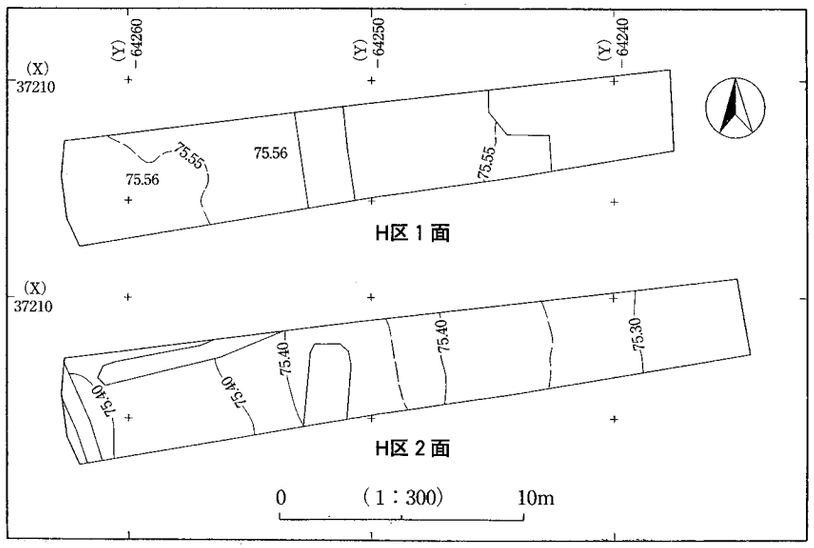
第16図　基本土層図

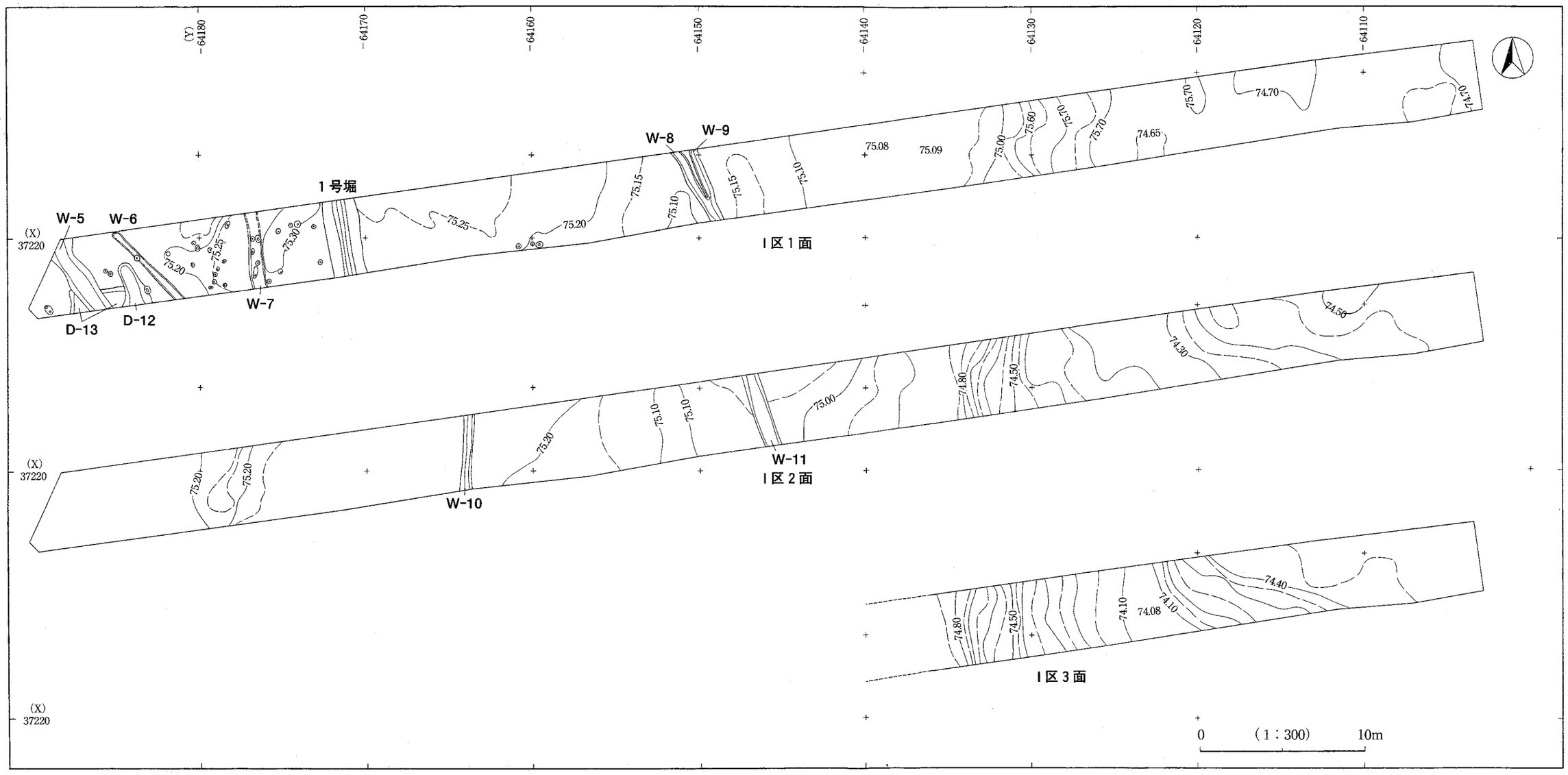


第17図　F区遺構全体図



第18図　G・J区遺構全体図





第19図　H・I遺構全体図

第５章　遺構と遺物

第１節　概要

今回の調査では、古墳時代前期から中・近世にかけての遺構・遺物が検出されている。微高地上の集落・環濠遺構が主で、低湿地の水田跡は極めて遺存状態が悪い。時代別に分類すると、古墳時代前期の掘立柱建物跡１棟・土坑１基・溝２条、平安時代の住居跡３軒・土坑７基・溝３条・水田跡、中・近世の環濠遺構を構成する堀１条・溝１条・柱穴群である。他に、住居跡１軒・土坑９基・溝13条・を時期不明として扱った。

第２節　古墳時代

第１項　掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（G 区）

ａ．遺構（第20図、表４、図版４－１・２）

G 区東部は北西から南東へ連なる微高地の南西縁辺部に立地し、浅間Ｂ軽石降下時には全面が水田化されている。微高地南西末端部には侵食谷が南北方向に形成されるが、幅2.5m と狭小で砂層の噴出が顕著であることから、谷頭に極めて近いことが想定される（第22図　図版４－３・４）。掘立柱建物跡は侵食谷の東40m 付近に位置するが、建物北側は調査区外に存在する。柱穴内出土遺物及び柱穴埋没土に浅間Ｃ軽石が混入することから、古墳時代前期に属すると推定される。

確認された20基の柱穴中、規則的な配置で検出されたのは12基である。桁行３間以上・梁行３間、あるいは桁行３間以上・梁行２間・北東廂、いずれも北西・南東方向に長い建物が想定されるが、建物北側の延長は不明である。建物の長軸方位は N35°W を示す。総柱建物とするには柱穴が１基欠ける。検出部分の桁行３間5.2m、梁行３間3.9m、床面積は20m^2 を測る。桁行の柱間寸法は1.6～1.8m の範囲内で南東側ほど広い。梁行の柱間寸法は0.9～1.65m と格差が大きく北東側ほど狭くなる。柱穴の計測値は表４のとおりであるが、建物を構成しない８基の柱穴も柱筋が近く、有意な関連を認めることも可能である。柱穴はいずれも基本層序第XI層まで掘り込まれ、平均値は長径48cm・短径39cm・深さ28cm である。

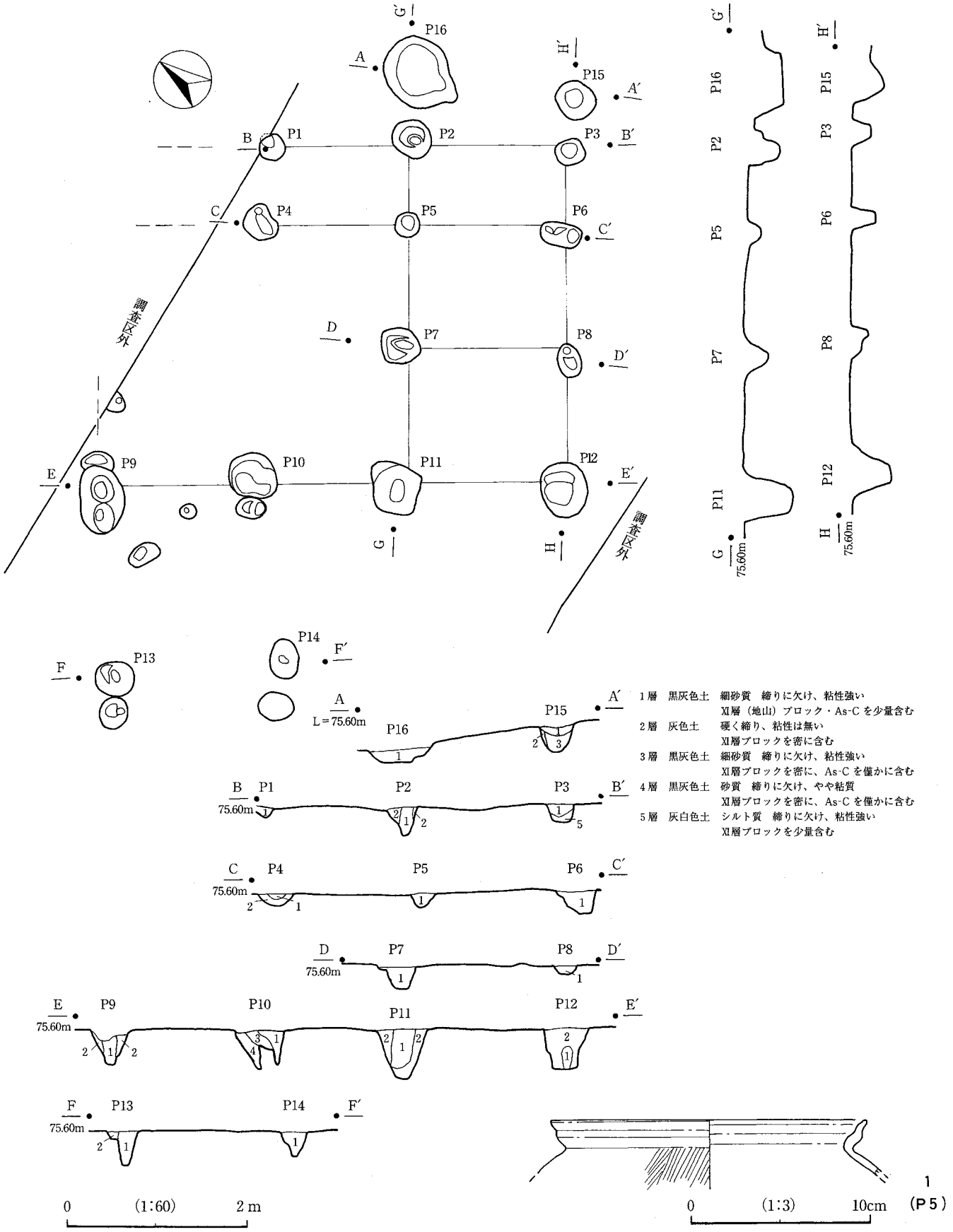
ｂ．遺物（第20図、表７、図版８）

柱穴覆土内から土師器壷の底部・頸部破片１点、土師器甕破片６点が出土した。１はＳ字口縁の石田川式土器甕、他に脚部裾に折り返しの見られる台付甕破片がある。

表４　１号掘立柱建物跡柱穴計測表

番号	平面形	断面形	長径	短径	深さ
1	円形	弧状	30	28	12
2	円形	Ｖ字状	45	40	32
3	隅丸方形	Ｕ字状	32	28	20
4	不整円形	弧状	40	30	14
5	円形	Ｖ字状	30	26	16
6	長楕円形	Ｕ字状	46	28	26
7	隅丸方形	Ｕ字状	44	47	24
8	楕円形	弧状	38	26	10
9	楕円形	Ｖ字状	74	48	40
10	円形	Ｗ字状	52	50	44
11	隅丸方形	Ｖ字状	52	50	56
12	不整円形	Ｕ字状	58	52	46
13	円形	Ｖ字状	44	38	38
14	楕円形	Ｖ字状	44	32	28
15	円形	Ｕ字状	46	40	26
16	不整円形	弧状	90	70	22

長径・短径・深さの単位：cm



第20図　1号掘立柱建物跡及び出土遺物

第2項　土坑

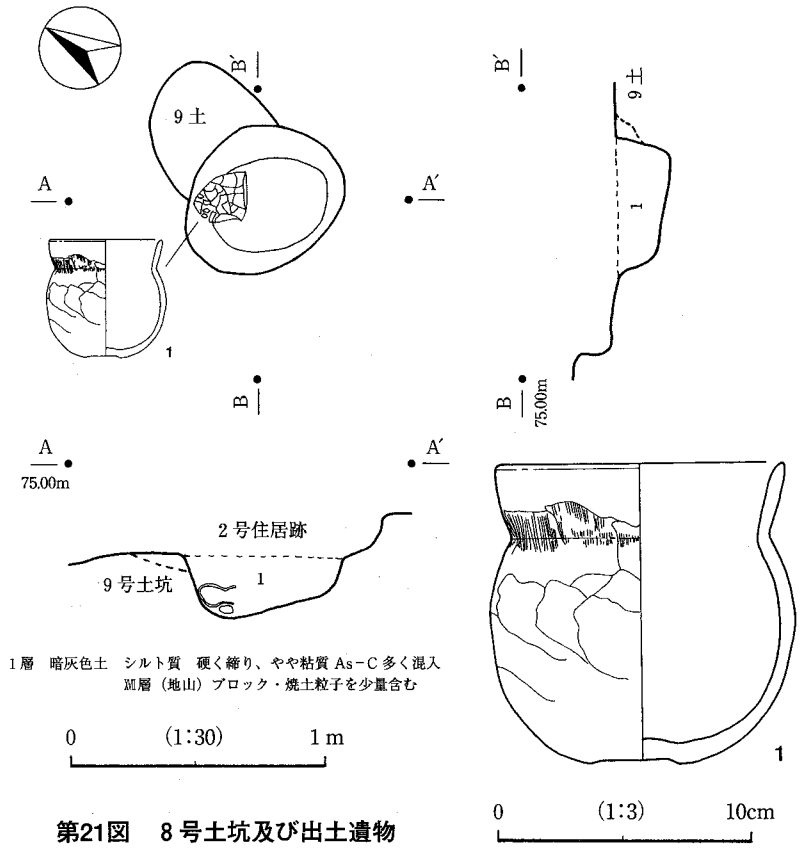
8号土坑（J区）

a．遺構（第21図、図版4－5）

旧藤川左岸の微高地上で平安時代の2号住居跡の下面から検出された。出土遺物から11号溝・1号掘立柱建物跡と同じ古墳時代前期に属すると考えられる。平面は67×54cmの不整円形を呈し、最深部の深さ25cmを測る。底面は北側が落ち込み南に向け緩やかに上がる。

b．遺物（第21図、表6、図版8）

底面上に5cm大の赤褐色礫が置かれ、その上で小型甕(1)が口縁部を遺構中央に向け倒れていた。器形は4世紀後半に見られるもの。



第21図　8号土坑及び出土遺物

第3項　溝

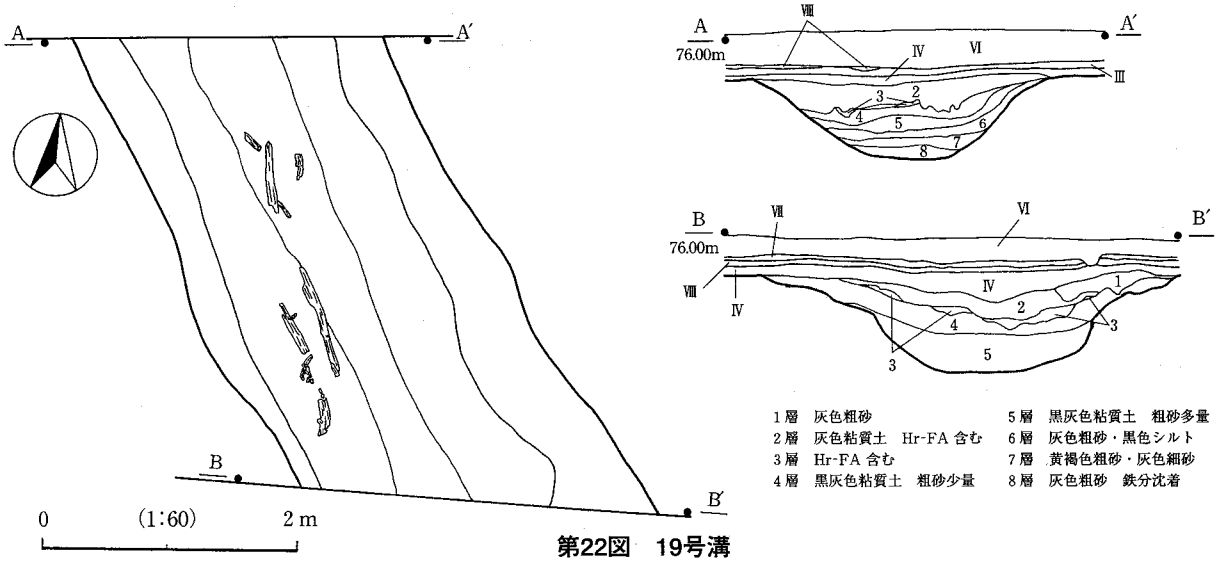
11号溝（I区）

a．遺構（第23図、図版4－6～8）

I区中央部は西の微高地から東の小谷地形への傾斜変換点に位置し、古墳時代前期における両者の比高差は少なくとも1.2mは存在したであろう。11号溝はこの微高地縁辺部を、等高線に沿うように南北に走行する。上幅110cm、下幅70cmを測り、断面は深さ16cmの弧状に近い逆台形を呈する。流水の痕跡はなく、暗灰色の砂質土で短期埋没したようである。出土遺物から古墳時代前期所産と考えられるが、性格は不明である。

b．遺物（第23図、表7、図版8）

S字口縁を持つ石田川式土器の台付甕が破片で多数出土した。1・4・6～8はいずれも肩部に横方向の刷毛目を有し、4世紀後半に属するものであろう。破片総数は甕が100点近いのに対し、坏が3点のみと特徴的である。

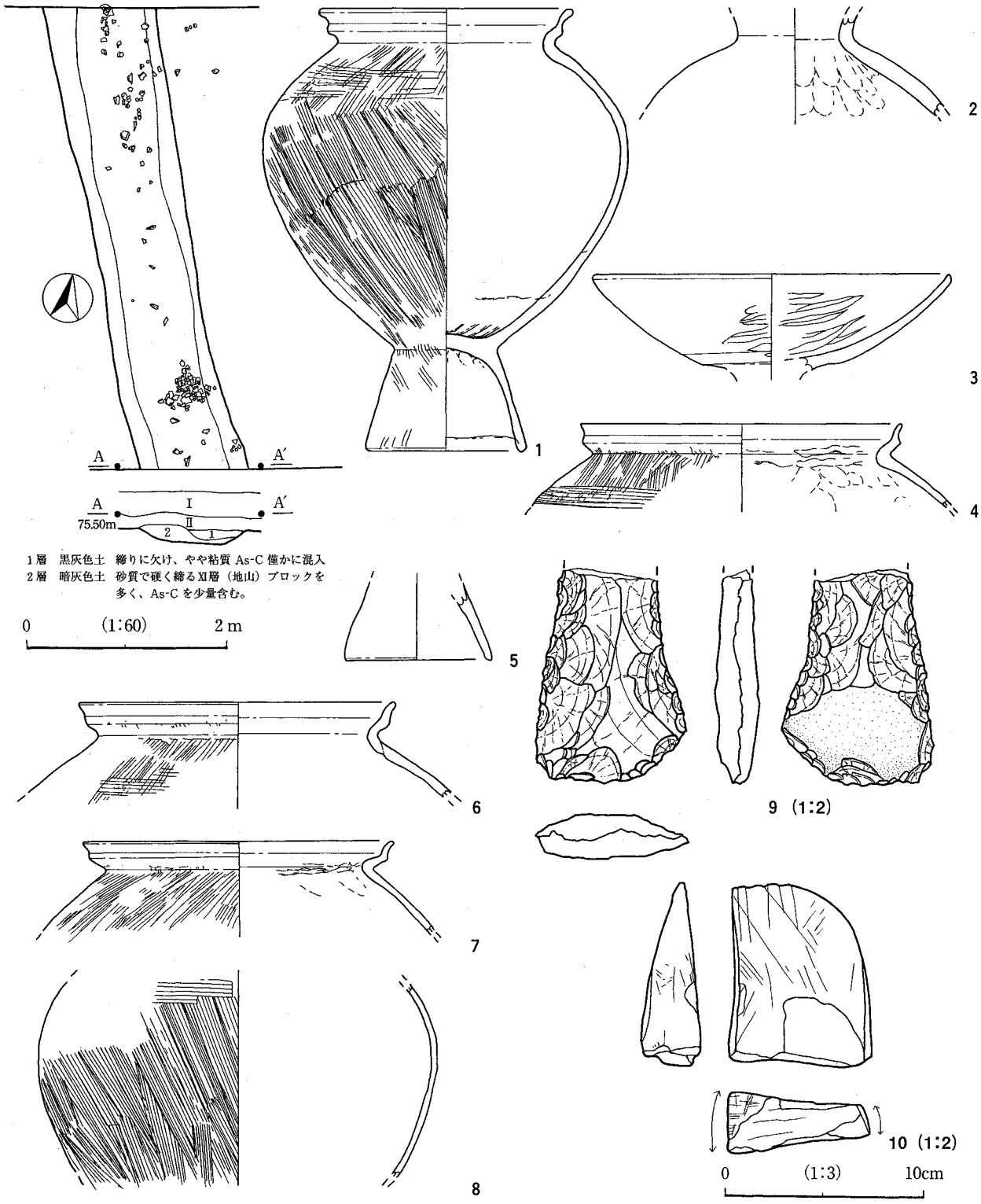


第22図　19号溝

19号溝（G区）

a．遺構（第22図、図版4－3～4）

FAの混入する粘質土（Ⅳ層）を除去したところ、上幅2.4mの溝を確認した。深さは75cmあり、シルト質の粘質土が堆積する。中位にFAの堆積が認められることから、古墳時代前期から中期にかけて存在したと思われる。遺物を伴わない。大規模な灌漑用水路の機能を持つと考えられる。



第23図　11号溝及び出土遺物

第３節　奈良・平安時代

第１項　竪穴住居跡

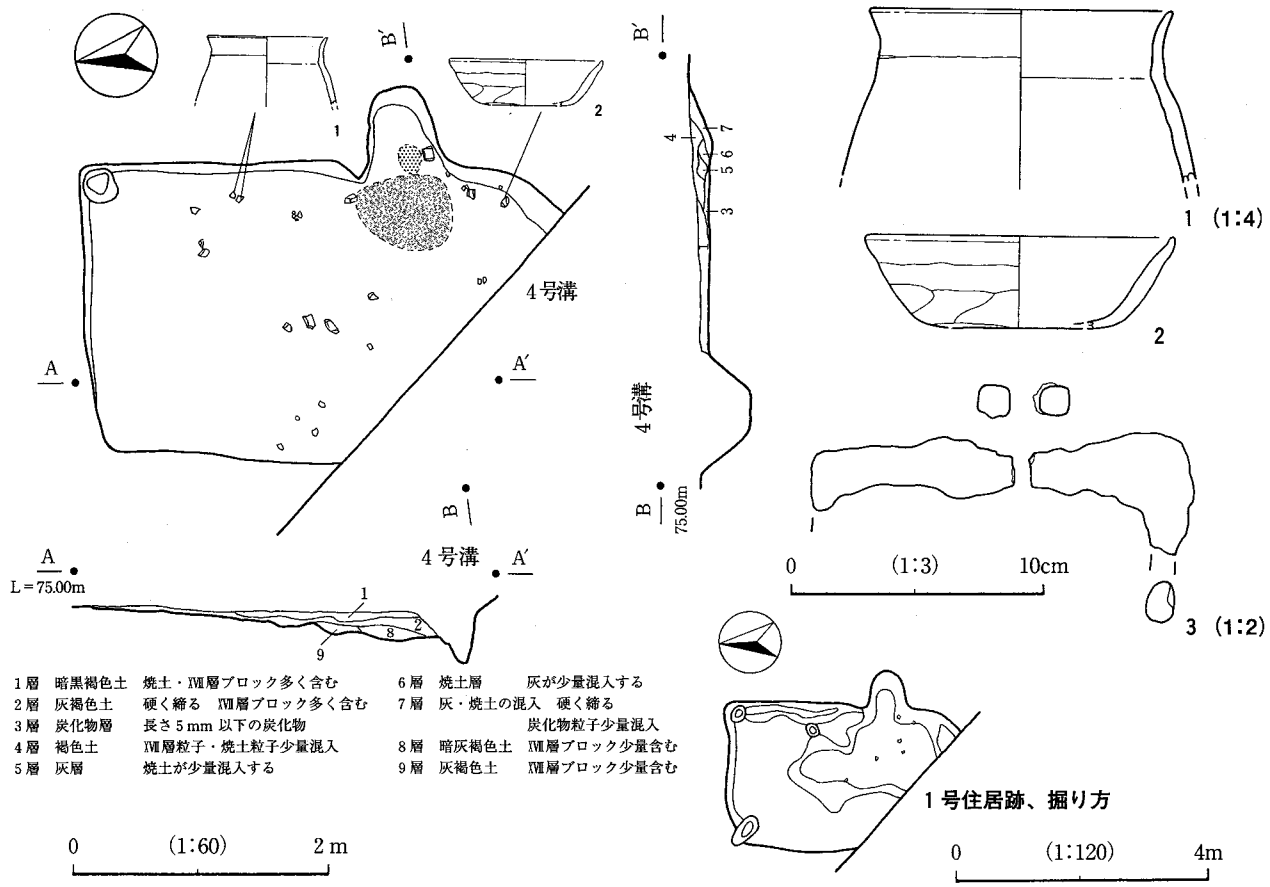
１号住居跡（J区）

ａ．遺構（第24図、図版５－１～４）

J区東側、旧藤川左岸の微高地上に位置する。南西部を４号溝に切られる一方、４号住居跡・４号土坑を切る。平面は横長長方形と推定されるが、南東隅はかなり丸みを帯びる。北東・北西隅はほぼ直角に曲がる。規模は東辺3.5m×北辺2.3m、推定面積8.0m^{2}を測る。主軸方向はN85°Eを示す。北東から南東にかけての壁はおよそ25度で立ち上がり確認壁高は３～10cmである。第２層上面はやや硬化し凹凸のある床面であるが、西半では消失している。カマドは東壁南寄りに構築されるが、遺存状態は悪い。燃焼部は壁外にあり、壁外長は60cmを測る。南側袖部には凝灰岩の切石が遺存するが、粘質土による袖部の構築状況は不明である。火床面は床面と同じ標高にあり、灰層の堆積が見られた。カマド手前には細かい炭化物が惰円形に広がっていた。柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出されていない。北東隅で検出されたピットは、径24cmの円形、深さ15cmを測る。遺物は北壁周辺以外の全面で出土したが、小片が散在する程度である。本住居跡は出土遺物から９世紀前半～中葉にかけて存続したものと考えられる。

ｂ．遺物（第24図、表６、図版８）

破片総数は土師器甕61点・坏21点、須恵器坏７点・瓶１点を数える。１の土師器甕を始め９世紀前半が主体である。



第24図　１号住居跡及び出土遺物

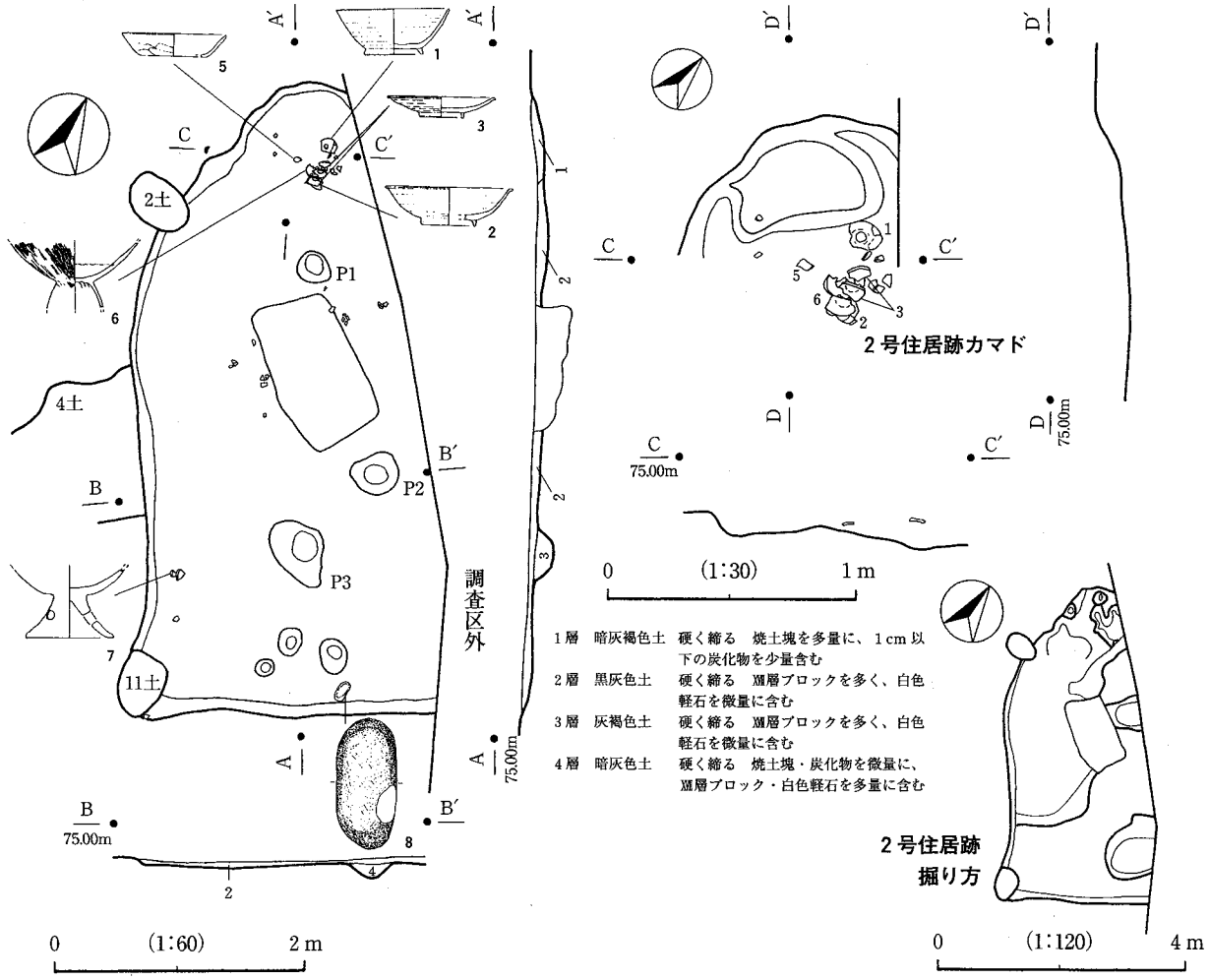
2号住居跡（J区）

a．遺構（第25図、図版5－5～6）

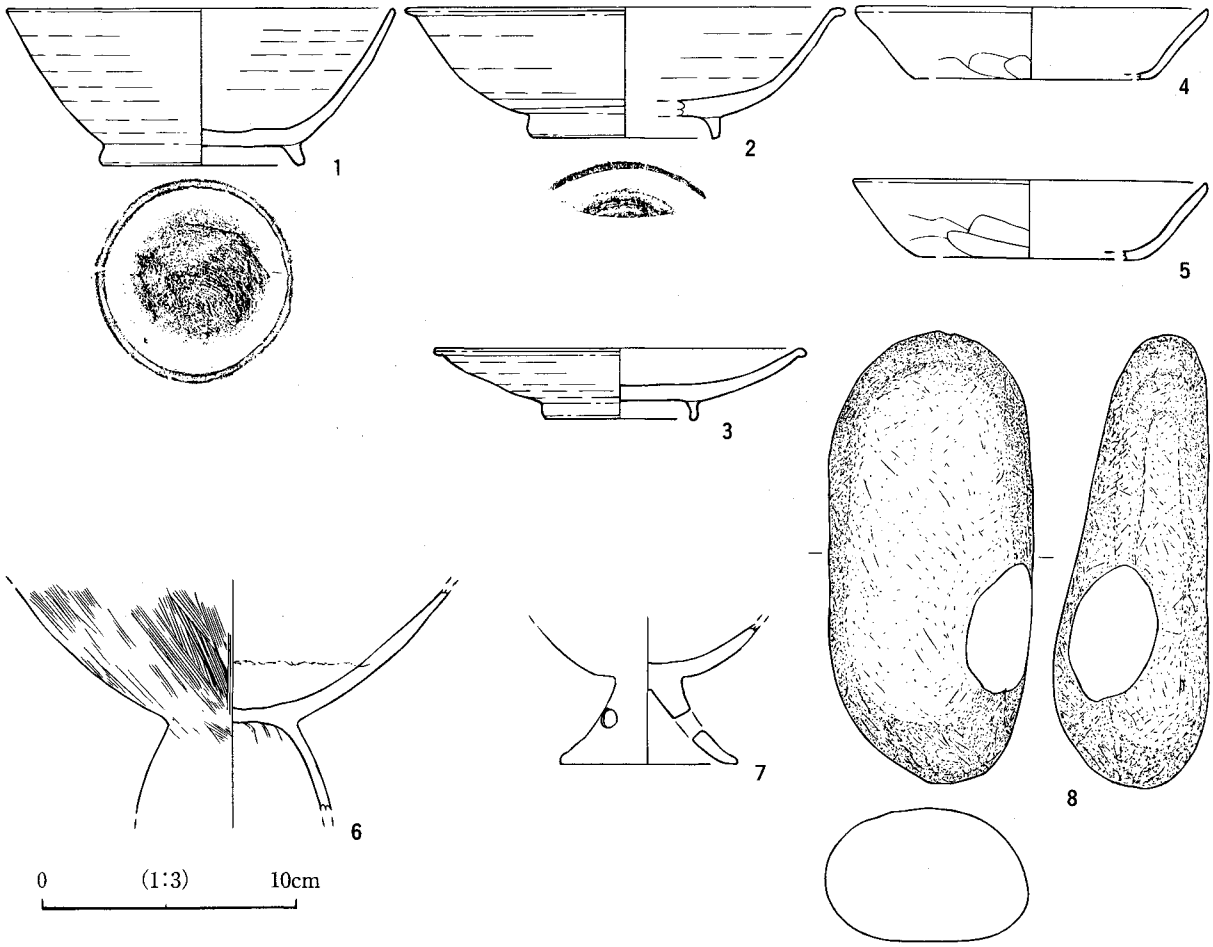
J区東端にかかり住居跡の西半部のみの調査である。2号土坑に切られ、4・5・8・9・11号土坑・4号住居跡を切る。西壁4.0m・南壁2.5mを検出したが、平面形・床面積は不明である。北西隅は丸みを帯び、緩やかにカマドへ続く。主軸方向はN30°Wを示す。南から北西にかけての壁はおよそ20度で外傾し、確認壁高は4～10cmである。第1・2層下面が床面となるが、北側ほど凹凸が顕著になる。カマドは北壁西寄りに構築されるが、袖部は検出されず燃焼部のみが確認された。火床面は床面と同レベルにあるが、焼土以外に灰・炭化物の堆積は見られない。ピット3基・小ピット3基以外、貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。ピットの規模はP1径24cm深さ18cm、P2径32cm深さ12cm、P3径40cm深さ24cmを測り、いずれも不整円形の平面である。遺物はカマド前面の東寄りに集中するほかはほとんど見られない。本住居跡は出土遺物から9世紀末から10世紀初頭にかけて存続したものと考えられる。

b．遺物（第26図、表6、図版8・9）

破片総数は土師器甕22点・坏5点を数える。他に須恵器坏（1）、灰釉陶器皿（2）・皿（3）、磨石（8）が1点ずつ良好に遺存する。9世紀末頃を主体とするが、古墳時代前期の台付甕（6）・高坏（7）も含まれている。



第25図　2号住居跡



第26図　2号住居跡出土遺物

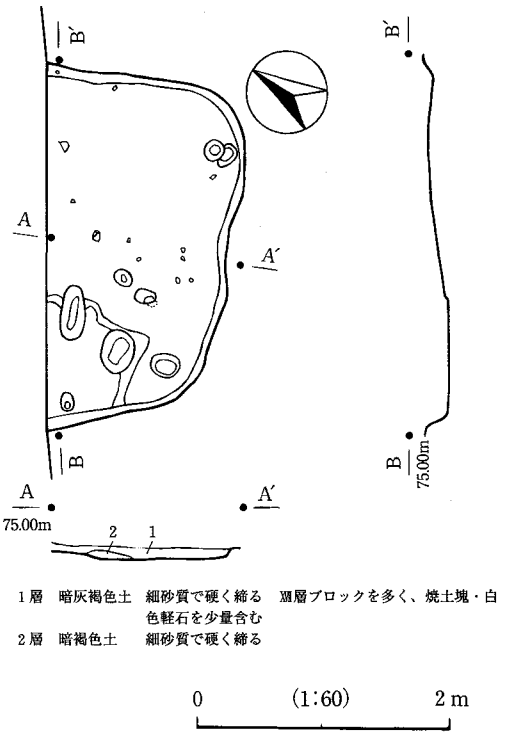
3号住居跡（J区）

a．遺構（第27図　図版5－7）

J区北端にかかり全容は詳らかではない。南壁2.2m・東壁1.5m・西壁1.1mを検出しており、規模は1号住居跡に近似すると思われる。南東・南西隅は丸みを帯びる。南壁の方向はN25°Eを示す。床面は不明瞭、凹凸が顕著である。壁はおよそ60度で立ち上がり、確認壁高は10～18cmを測る。小ピット8基の他、カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。遺物は中央付近から東部にかけて散在する。周辺遺構の分布状況から1・2住居跡との時期差は大きくないと考えられるが、出土遺物からの判断は困難である。

b．遺物

土師器甕4点・土師器坏4点・須恵器坏2点が出土している。いずれも細片で、図示はできなかった。土師器甕の1点は底外面に木葉痕を有する。



第27図　3号住居跡

第２項　土坑

２号土坑（J 区）

ａ．遺構（第28図、図版５－８・６－１）

２号住居跡の西壁を切る円形の小土坑である。平面は54×38cm の楕円形、深さ23cm を測り、断面は逆三角形に近い。埋土は焼土・炭化物・灰の混合土である。住居のカマドに伴うものとも考えられるが、判然としない。出土遺物からは２号住居跡との時期は小さい。

ｂ．遺物（第28図、表６、図版９）

１は９世紀中葉～後葉に特徴的なコの字口縁を有する甕、２の坏も９世紀中葉に属するものであろう。他に、土師器甕12点・坏８点、須恵器甕１点・蓋２点が小片で出土している。

６号土坑（J 区）

ａ．遺構（第28図、図版６－２）

２号溝の西1.8m に位置する。平面は66×53cm の楕円形、深さ30cm、底面は平坦である。壁は急に立ち上がり南側に傾く。出土遺物から平安時代末期のものと推定される。

ｂ．遺物

土師器甕片４点・土師器坏片１点が出土している。

11号土坑（J 区）

ａ．遺構（第28図）

２号住居跡の下面から検出された土坑。平面は47×37cm の不整長方形、深さ27cm を測り断面はU 字状である。

ｂ．遺物

出土した土師器坏片３点は９世紀代のもの。

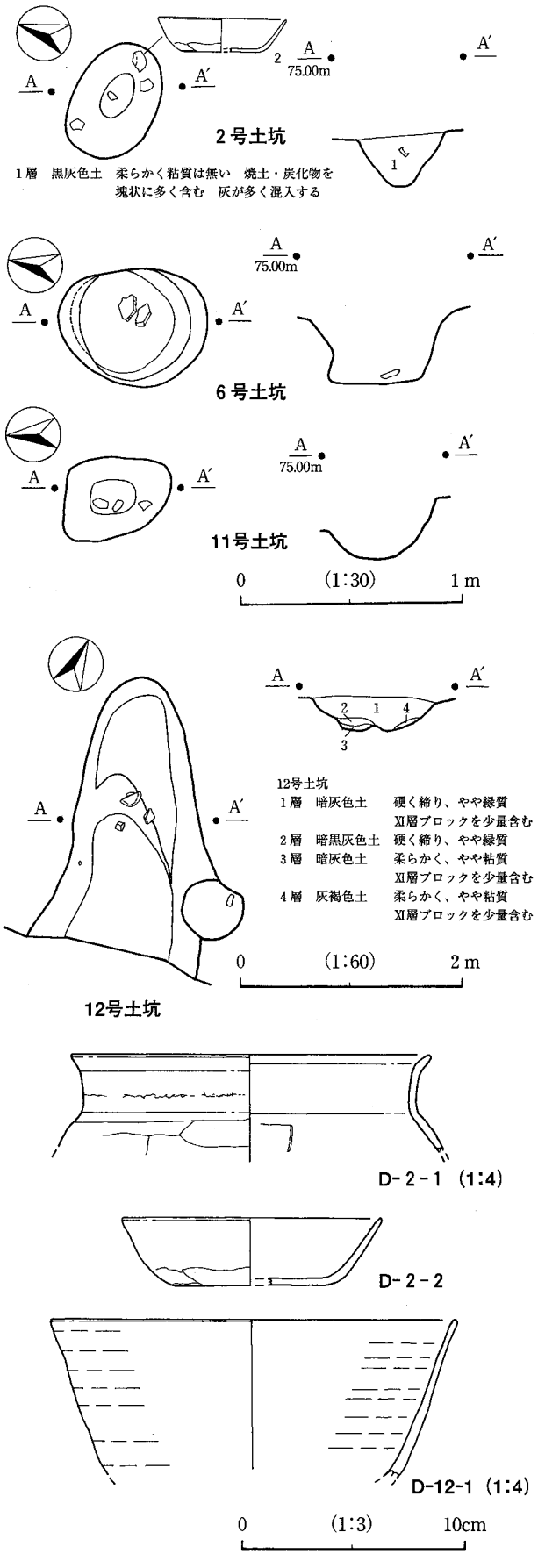
12号土坑（I 区）

ａ．遺構（第28図、図版６－３）

I 区西部で13号土坑を切り南側は調査区外に出る。溝状の平面形を呈し、北端は細く丸みを帯びてくる。南側ほど幅・深さを増し、それぞれ最大で1.6m、32cm を測る。時期は遺物から９～10世紀頃と推定される。

ｂ．遺物（第28図、表６、図版９）

１は内面黒色処理を施した土師器鉢で、胎土に結晶片岩が混入するのが特徴である。他に、土師器甕片８点、土師器坏片４点が出土している。



第28図　２・６・11・12号土坑及び出土遺物

13号土坑（I区）

a．遺構（第29図、図版６－４）

５号溝・12号土坑に切られ、南半部は調査区外にあるため全容は不明であるが、いわゆる竪穴状遺構に属するであろうか。住居跡の可能性もある。北・西側の壁を検出したが、確認壁高は８～23cm、およそ30度で立ち上がる。北壁はN60°Eの方向を示す。底面はおおむね平坦であるが硬化していない。小ピット３基を伴い、規模はＰ１径21cm 深さ14cm、Ｐ２径14cm 深さ14cm、Ｐ３径10cm 深さ11cm を測る。遺物は底面上・埋土中に散在する。出土遺物から９世紀のものであろう。

b．遺物（第29図、表６、図版９）

土師器甕片６点・坏片６点、須恵器甕片２点・坏片３点が出土し、９世紀代に属する。他に、鎌（４）や流れ込みの樽式土器片（３）がある。

15号土坑（G区）

a．遺構（第29図、図版６－５）

16号土坑を切り南半部は調査区外にある。東西幅は1.2m で不整惰円形を呈したと思われる。底面は凹凸が顕著で深さは12～26cm を測る。埋土最下層に焼土が混じるが遺構の性格は不明である。出土遺物から８世紀頃のものと考えられる。

b．遺物（第29図、表６、図版９）

１の須恵器坏は底径と口径の差が小さく、糸切り後の丁寧な篦削りは８世紀に遡る。他に、土師器甕片２点・坏片２点が出土している。

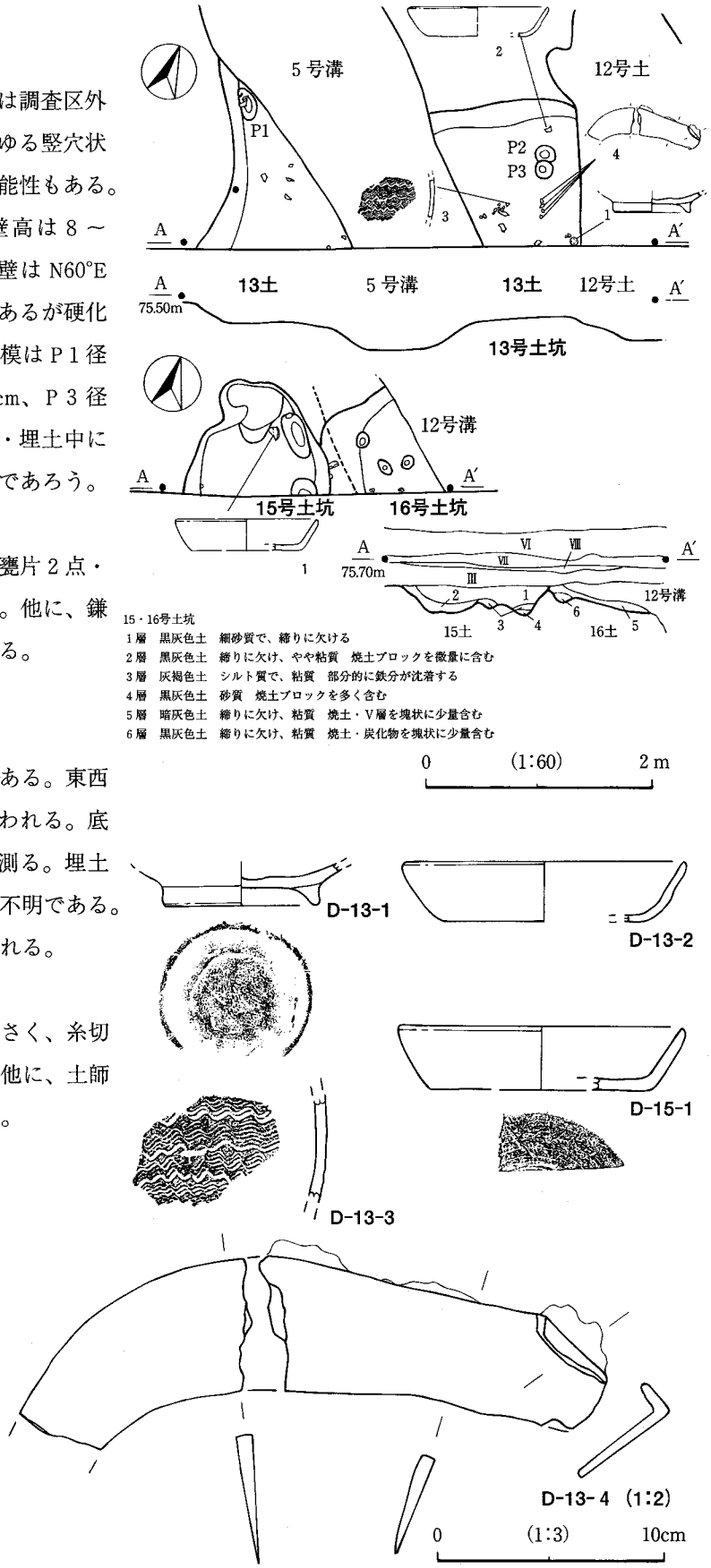
16号土坑（G区）

a．遺構（第29図）

12号溝に切られ、南半部は調査区外にある。重複する15号土坑より古いが、規模・形態は近似する。深さは14～26cm を測る。埋土最下層に焼土が混入する。

b．遺物

土師器甕・坏・壺の破片が１点ずつ出土し、８世紀代に属する。



第29図　13・15・16号土坑及び出土遺物

第3項　溝

1号溝（J区）

a．遺構（第30図）

4号住居跡を切って北東から南西へ走向する溝である。河川状に蛇行し、西側は南へ弧を描き調査区外へ伸びる。上幅28～42cm、深さ35cm前後を測る。断面形はU字状を呈する。底面に微細な凹凸が見られるものの、底面の標高差はなく流水の痕跡も認められない。埋土に焼土・ロームを塊状に含み、人為埋没した形跡がある。遺物は底面上及び埋土中に散在する。

b．遺物

土師器甕片6点・坏片12点、須恵器甕片2点・蓋片1点が出土し、8世紀に属する。

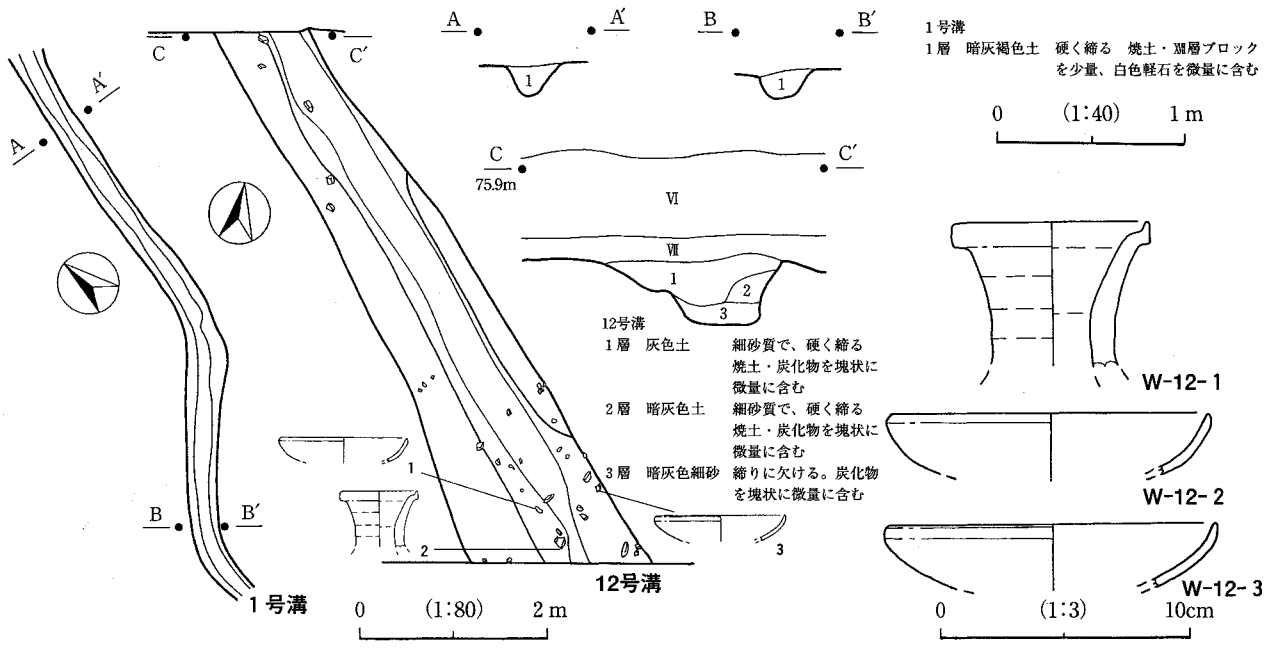
12号溝（G区）

a．遺構（第30図、図版6－6・8）

1号掘立柱建物跡、13・14号溝、16号土坑を切り、北西から南東へ走向する溝である。13号溝にほぼ重なり、主軸方向はN40°Wを示す。上幅は94～106cm、深さ35cm前後を測る。断面形は弧状であるが底部はやや垂直に掘り込まれる。中段幅52～62cm、下幅12～44cmである。最下層に細砂の水性堆積が見られ、南東方向への流水が想起される。埋土上部は焼土・炭化物を塊状に含む灰色土であり人為的な埋没と思われる。それはB水田開田に起因するものであろう。G区は浅間B軽石降下時には全面が水田化されており、耕作土である黒灰色粘質土が検出されている。出土遺物から8世紀に遡ると考えられるが、B水田に先行する本溝の機能は不明である。

b．遺物（第30図、表7、図版9）

土師器坏（2・3）は口縁が内湾し、7世紀末から8世紀初頭に見られる器形である。長頸壷（1）も同時期に属する。他に、土師器甕片7点・坏片7点、須恵器坏片1点が出土した。



第30図　1・12号溝及び出土遺物

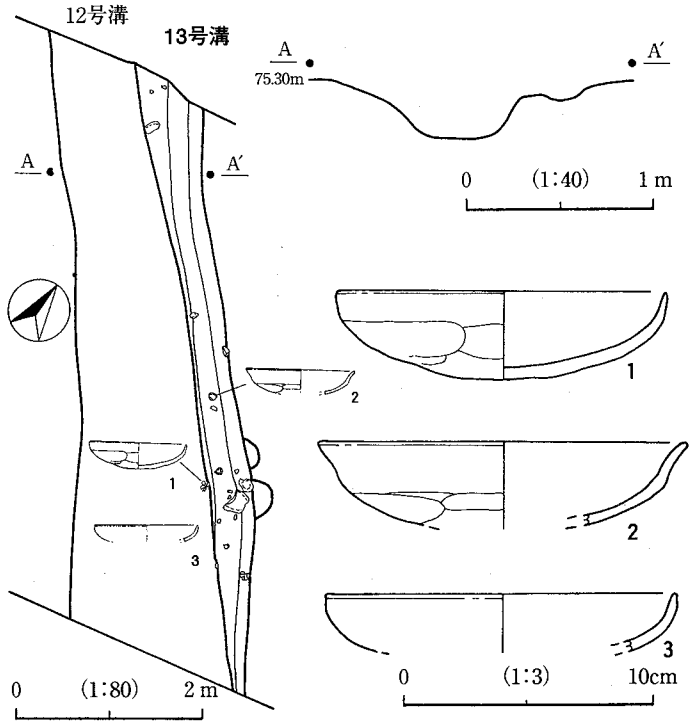
13号溝（G区）

a．遺構（第31図、図版6－7～8）

1号掘立柱建物跡の桁行方向に平行し北西から南東へ走行する溝で、N40°Wの方位を示す。12号溝に切られるため全容は不明であるが、推定幅80cm、残存部の深さ13cmを測り断面形は弧状を呈していたと推定される。埋土は暗褐色粘質土が主で、流水があった明瞭な痕跡は認められなかった。底面は南東への緩傾斜で、部分的に凹凸が見られる。

b．遺物（第31図、表7、図版9）

土師器坏（2）は胴部にわずかに稜を残し、7世紀代に遡る。他に、土師器甕片2点・坏片（1・3）2点が出土している。



第31図　13号溝及び出土遺物

第4項　水田跡

Ⅰ区西側・J区東側の微高地、J区西側の旧藤川流路を除く低地は、浅間B軽石降下時には既に水田化されており、その耕作土である黒灰色粘質土の堆積が認められる。その大部分は現・旧耕作土直下で検出され、B軽石の純堆積が確認されるのは稀である。そのためいずれの地区においても畦畔は不検出であった。B水田開田の時期は、8世紀の溝を埋めた例や9世紀になって住居跡が出現することから9世紀が妥当であろうが、先行する8世紀代の遺構がB水田の系譜として関連性を有するか否かの問題が残る。

第4節　中・近世

第1項　徳丸東環濠遺構群

徳丸町字縫田、字後には屋敷地の周囲を方形の濠で囲う環濠遺構が存在することが既に指摘されている。（『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988）環濠遺構は徳丸町の立地する前橋市南部を始め、周辺の伊勢崎市西・南部、玉村町でもかなり顕著に見られる。多くは前橋台地上の微高地に占地し、12～15世紀にかけて築造される。本調査のⅠ区西部で検出された堀、柱穴群は字縫田に所在する環濠遺構に密接に関わり、あるいは外堀と付属施設の機能を付与しても大過はないものと考えられる。

環濠遺構は、武士の居住施設である城館と類似した構造を有しつつも、仮想敵に対する防御的側面はかなり希薄である。四周する堀には基幹用水から導水し、潅漑用水を掌握する。そこには水系の支配を通した村落の支配が読み取られ、水懸りの良い地点に屋敷を構える事例が多いことと軌を一にする。居住者である中世の在地領主は、浅間B軽石降下後の地域復興の拠点として各地に環濠遺構を成立させたのであろう。その面影は古い地割や寺院化した例に今も見ることができる。

第2項　堀

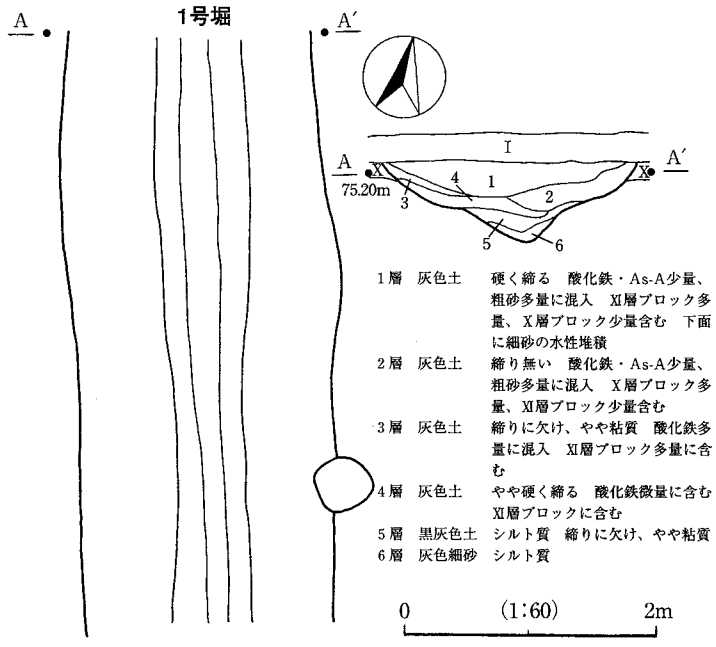
1号堀（I区）

a．遺構（第32図、図版7－1～2・5）

I区西側はやや微高しており、古来より水田化された痕跡は認められない。基盤シルト層上の黒色土（基本層序第X層）の堆積範囲は微高地形と重なっている。環濠遺構はこの黒色土を掘り込み、旧耕作土に削平される。前掲書の徳丸東環濠遺構群によると、環濠遺構は二重の堀を備え、近年埋められたとされている。そのうち外堀の東・南側は舗装道路となったものの、走行方向や微妙な矩形の曲がりは現況と確実に一致する。1号堀はこの二重堀の外側に位置し、環濠遺構が三重の堀を有していた可能性を示唆するものである。1号堀は南北に走行し、N20°Eを主軸とする。確認面で全長4.7m、幅1.9m～2.2mを測る。断面はやや緩傾斜の薬研堀の形状を呈する。立ち上がりの角度は30～35度である。二段掘りされたためか、底面上25cm付近に中段部が存在する。中段幅は54～64cmである。底面は幅16～28cmの平坦面で、やや丸底気味である。確認面からの深さは66.5cmを測る。

堀の内部に堆積した土層は6層に分層された。最底部の水性堆積した第6層は堀に流水があり、かなりの水量であったことを示している。第5層に植物遺体が含まれることから、堀はその後水量を減じ植物の生息を可能とする環境へ変化した。第3・4層は堀の西側からの崩落土と推測される短期埋没土である。環濠遺構は堀の内側に土塁を築くことが多かったと考えられるが、削平されることが多く遺構として残存する事例はまれである。本遺跡においても土塁自体の検出はできなかったが、断面で観察された第3・4層は地山層を塊状に含んでおり、いわゆる掻き上げ土塁の存在を想起させる。地山層は基本層序X・XI層に相当するが、堀の断面形からおそらく二段掘りされており、土塁構築土は基本層序X・XI層が逆転した層位で堆積していたのであろう。土塁上部の崩落と仮定すれば、崩落土に基本層序XI層が多く含まれることは層位の逆転を裏付ける。土塁の崩落は再度発生するが、初回の崩落後に流水があった痕跡は無く、二度の崩落の時期差は短かったであろう。二度目の崩落土である第2層は、層位の逆転に伴い基本層序X層を塊状に多く含んでいる。さらに浅間A軽石が混入することは、二度の崩落が天明3年の浅間山噴火を前後して発生したことを示している。その後堀は掘り直され、水の流れが戻る。断面観察によると、掘り直された堀は幅1.9m、深さ28cmを測り、浅い弧状を呈する。1号堀が完全に埋没するのは、基本層序I層に見られる周辺の耕地化に起因し、残存した土塁の削平と一体のものであろう。それは二重堀の埋没に先行する。

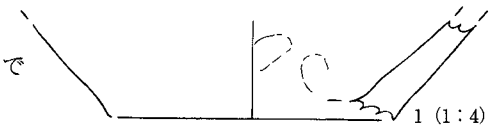
堀の取水源はJ区で検出された旧藤川が想定される。字後に所在する環濠遺構は本環濠遺構の南東約400mに位置するが、同じく旧藤川から導水している。両者の社会的関係は詳らかではないが、本環濠遺構の影響力は字後以南の流域では弱まらざるを得なかったであろう。

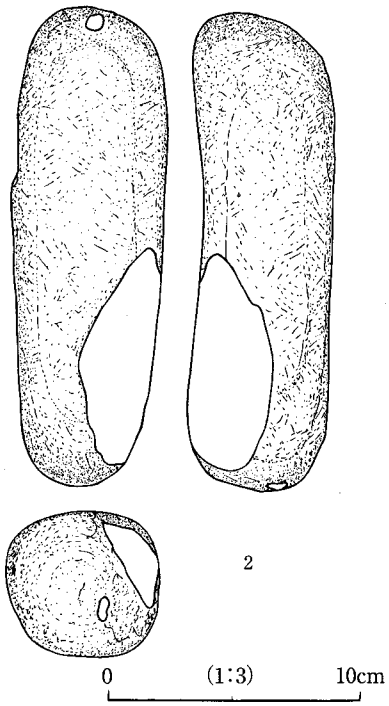


第32図　1号堀

b．遺物（第33図、表７、図版９）

板状の緑泥片岩２点は板碑の可能性を残す。他に、流れ込みで須恵器甕（１）や石田川式土器が混入する。





第33図　１号掘出土遺物

第３項　溝

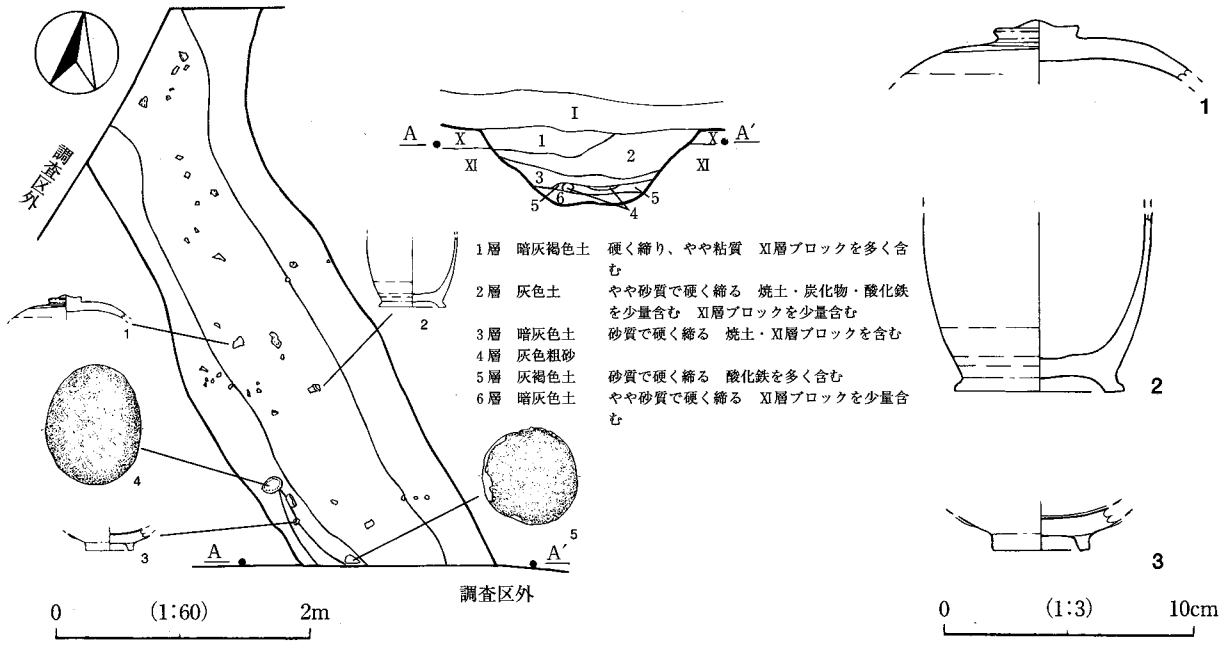
５号溝（Ⅰ区）

a．遺構（第34図、図版７－３～４）

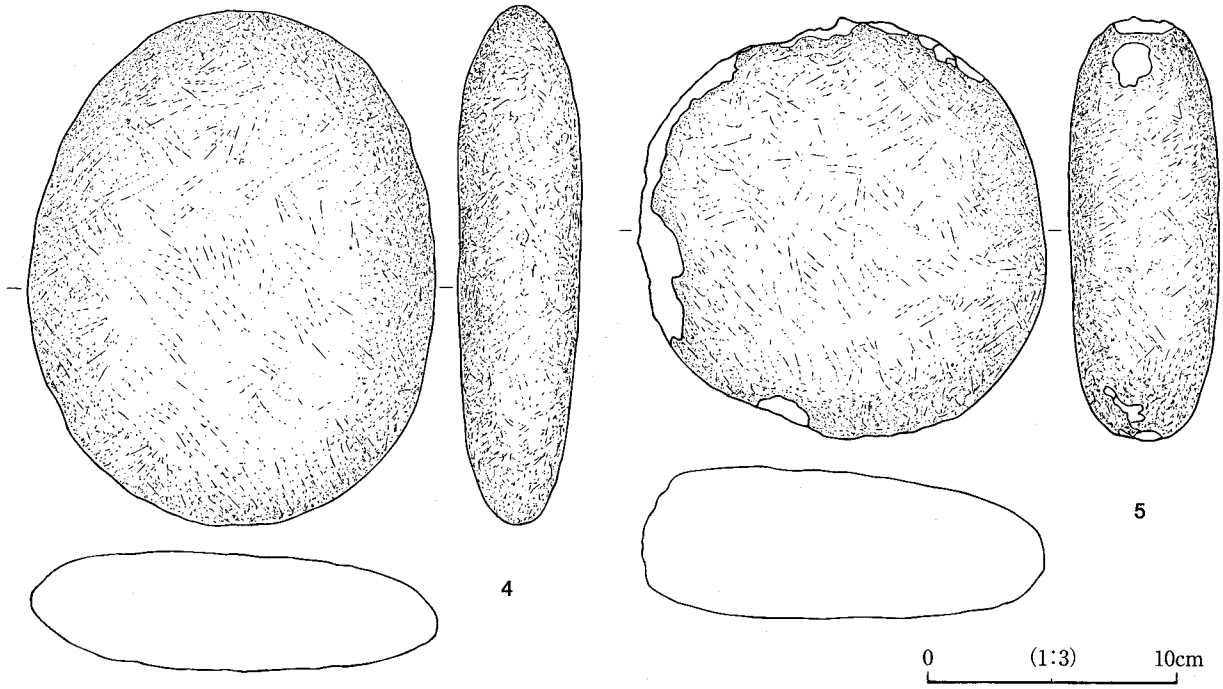
13号土坑を切り込み、北西・南東方向を示す溝である。N40°Wを主軸とし、１号堀に比して西へ60度それる。確認面で全長4.9m、幅1.2m～1.5m を測る。断面は凹凸のある逆台形を呈する。立ち上がりの角度は40～50度である。下幅は54～80cm、確認面からの深さは48.5cm を測る。溝底部には互層をなした砂質土の堆積があり、流水のあった痕跡を示す。埋土上部は基本層序 XI 層を塊状に含む弱粘質土で、浅間Ａ軽石が微量に混入する。５号溝の北西端は、二重堀南東隅の屈曲点に位置する。二重堀と１号堀を結ぶ機能を有するとすれば、底面の標高差により１号堀からの流水が考えられる。

b．遺物（第34・35図、表６、図版９）

須恵器蓋（１）・瓶（２）は重複する13号土坑のものと思われ、８世紀末から９世紀に属するであろう。他にも平安期の遺物は多く、土師器甕片18点・坏片８点、須恵器甕片３点・坏片４点を数える。近世陶器（３）は灰釉を施し、削り出し高台を有する。



第34図　５号溝及び出土遺物(1)



第35図　5号溝出土遺物(2)

第4項　柱穴群

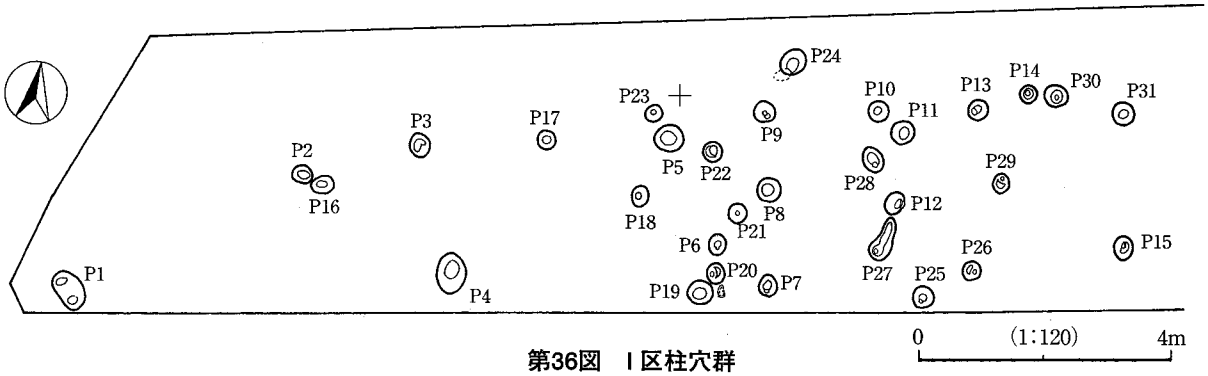
I区柱穴群

a．遺構(第36図、表5、図版7－5)

I区西半において31基の柱穴を検出したが、建物跡としての規則的な配列を看取することはできなかった。柱穴群は5号溝と1号堀に挟まれる東西幅17mの微高地上に位置している。ややまとまって分布しているが、西側ほど散在的となる。帰属時期を明確にする遺物を伴っていないが、5号溝と1号堀に区画され、埋土に浅間B軽石が混入することから同遺構との共存性が生じる。ただし柱穴群が何らかの施設を構成していた場合でも、柱穴が集中し改築に伴う重複も認められないことから、比較的短い期間の存続が想定される。それは生活空間を確保できない位置にあるため、耐用年数の短い雑屋的建物であろう。柱穴の計測値は下表のとおりであるが、平均すれば径35cm、深さ34cmの小規模なもので、柱痕が明瞭に確認されたものはない。掘り込みはいずれも基本層序XI層に達している。柱穴内に柱支え用と思われる扁平な円礫を詰めたものが一例ある（P12)。

b．遺物(第37図、表7、図版10)

P5出土の鉢は内面に返り状の隆起を有し、内外面に錆釉を施す。瀬戸・美濃の系譜であろう。

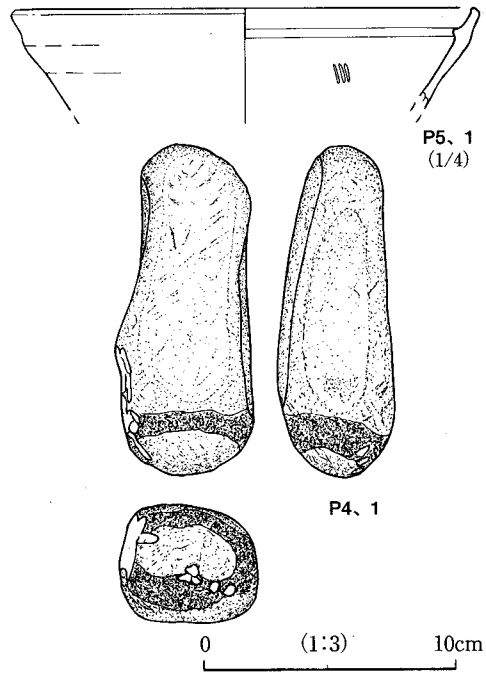


第36図　I区柱穴群

表５　Ⅰ区柱穴計測表

番号	平面形	長径	短径	深さ
1	不整楕円	60	36	57
2	楕円形	34	28	28
3	楕円形	42	28	19
4	楕円形	62	42	33
5	方形	42	38	26
6	楕円形	32	24	37
7	楕円形	34	28	30
8	円形	36	36	25
9	円形	33	31	45
10	円形	32	31	10
11	円形	36	36	44
12	円形	32	29	28
13	円形	30	30	41
14	円形	28	26	33
15	楕円形	37	29	46
16	不整楕円	38	24	14
17	円形	28	28	27
18	楕円形	31	24	24
19	楕円形	38	32	43
20	円形	30	28	20
21	円形	26	22	25
22	円形	32	30	38
23	円形	26	24	34
24	楕円形	43	36	40
25	円形	32	32	44
26	楕円形	32	28	52
27	不整形	72	34	39
28	楕円形	40	28	34
39	楕円形	30	24	35
30	円形	35	32	39
31	楕円形	38	34	41

単位：cm



第37図　Ⅰ区柱穴群出土遺物

第５節　時期不明遺構

第１項　竪穴住居跡

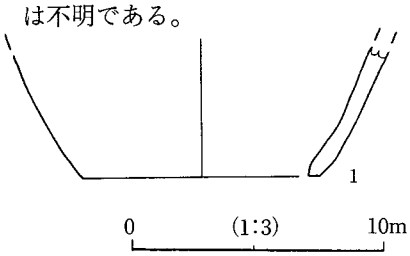
４号住居跡（J区）

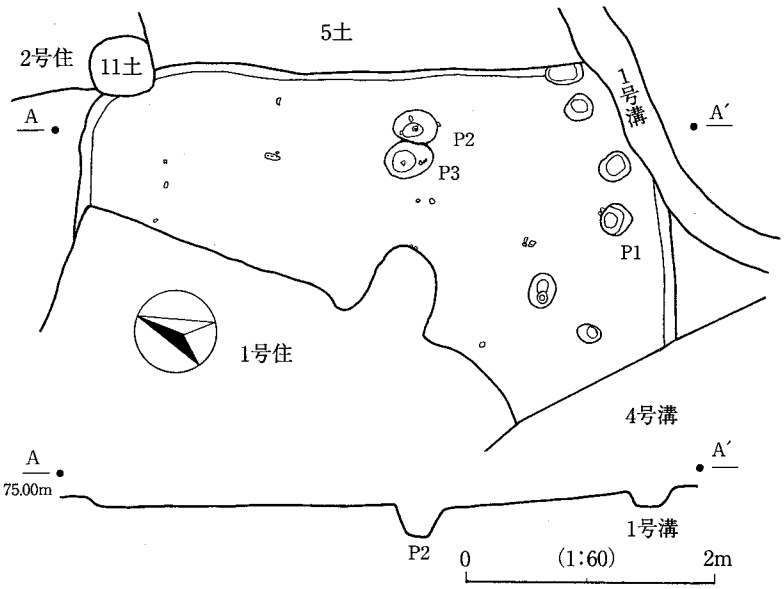
a．遺構（第38図、図版７－６～７）

１・２号住居跡、１・４号溝に切られ、５号土坑を切る住居跡である。他遺構との重複が多く西半部が不明であるが、１号住居跡・４号溝以西には広がらないものと考えられる。残存する壁は北・東・南の三方向で、東壁は4.7m であったと推定される。壁はおよそ30度で立ち上がり、確認壁高は４～12.5cm を測る。床面は顕著でなく凹凸が著しい。ピット３基・小ピット５基の他、カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。ピットの規模はＰ１径25cm 深さ37cm、Ｐ２径34cm 深さ24cm、Ｐ３径36cm 深さ24cm を測り、いずれも楕円形を呈する。遺物は床上・ピット内に散在する。

b．遺物（第38図、表６、図版10）

甑片（１）の他、土師器甕片21点・坏片３点が出土するが、具体的な時期は不明である。





第38図　４号住居跡及び出土遺物

第2項　土坑

1号土坑（J区）

a．遺構（第39図）

J区東部、藤川左岸の微高地上に位置し調査区北壁に切られる。検出部分は径85cmの半円形を呈し、断面は西寄りが20cmと最も深く東側へ徐々に立ち上がる。遺物はないが、埋土の質感は3号土坑に近い。

3号土坑（J区）

a．遺構（第39図）

1号土坑の東3.2mに位置する。3号住居跡に切られるが、重複は明瞭ではなく時期差を感じさせない。東西幅82cmの不整形を呈し、底面は深さ2～14cmと凹凸が顕著である。埋土は灰褐色土の単層で出土遺物はない。

4号土坑（J区）

a．遺構（第39図）

1・2号住居跡との重複部分はほぼ底面が立ち上がっており、平面は2.2m×1.0mの長楕円形を呈していたと推定される。断面は緩やかなV字状で底部は丸みを帯びる。北東側は33cmと最も深く、東西に細長い更なる掘り込みを有する。埋土は締りのない黒色土の単層である。

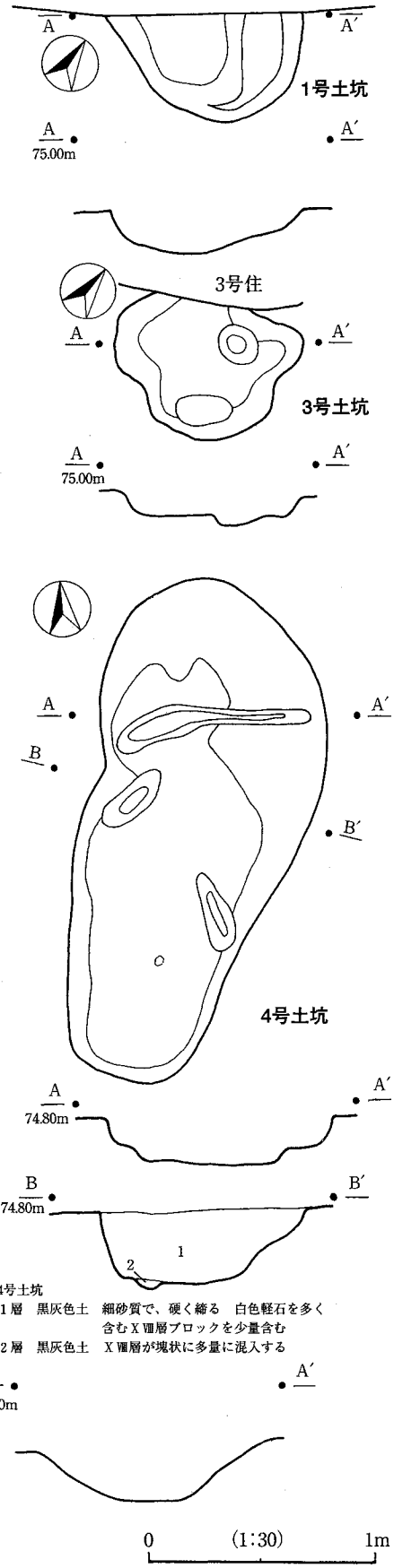
b．遺物

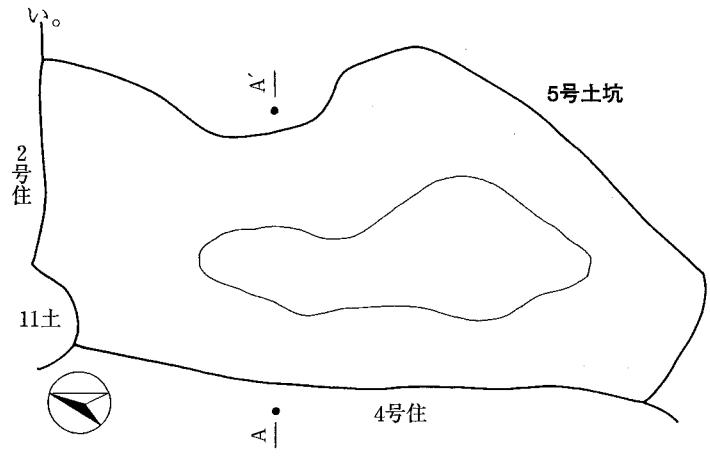
南西寄りの埋土中からスクレーパー1点が出土した。

5号土坑（J区）

a．遺構（第39図）

2・4号住居跡、11号土坑に切られる。平面形・底面形とも南北に長い不整形を呈する。深さ28cmを測り、断面形はU字状、底面は凹凸する。埋土は4号土坑と同じ質感の黒色土である。遺物はない。





第39図　1・3・4・5号土坑

7号土坑（J区）

a．遺構（第40図）

3号溝の東2mに位置する。平面は径85cmの円形、深さ16cm、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物はない。

9号土坑（J区）

a．遺構（第40図）

8号土坑に切られるので、古墳時代前期以前のものである。平面形は8号土坑に近似した径45cmの不整円形と推定される。深さ10cm、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物はない。

10号土坑（J区）

a．遺構（第40図）

4号住居跡の底面で検出された土坑である。確認平面形・底面形ともに不整形を呈し、底面はおおむね平坦である。埋土の黒色土の質感は4・5号土坑に同じである。出土遺物はない。

14号土坑（G区）

a．遺構（第40図）

1号掘立柱建物跡の北西に位置する。平面は74×63cmの楕円形を呈し西寄りに深さ15cmの底面を持つ。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は灰色粘質土の単層である。

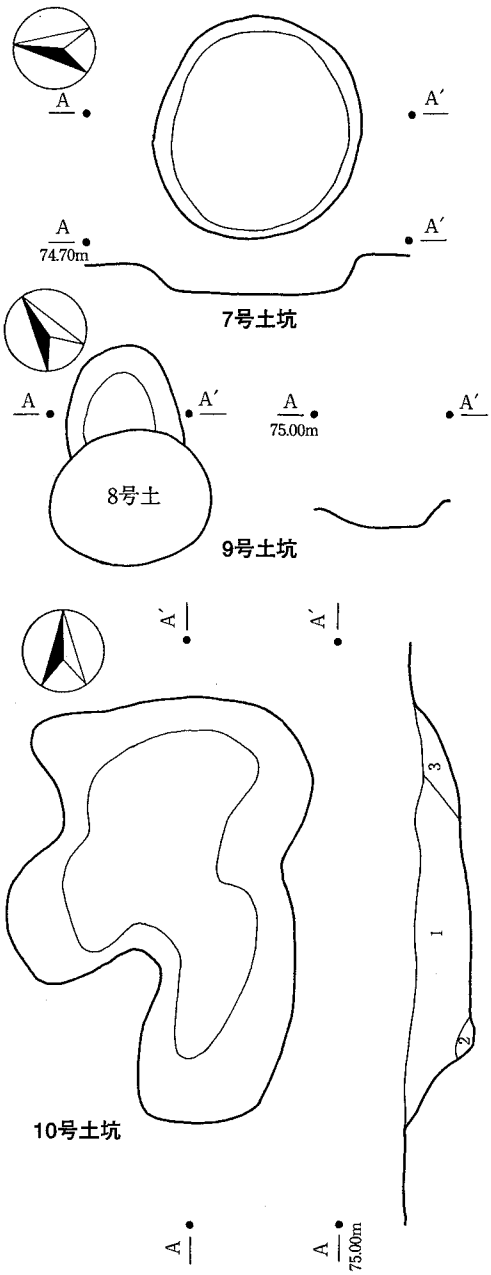
b．遺物

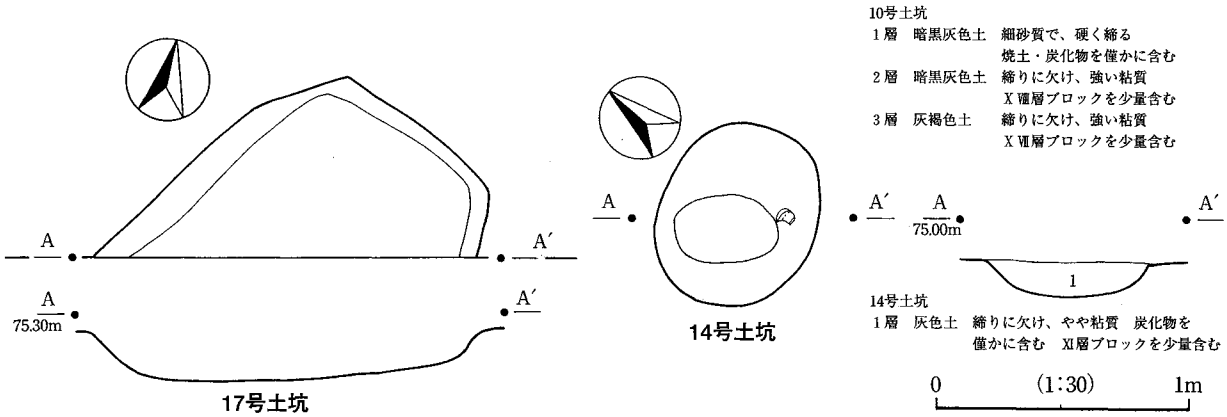
底面上で土師器坏片1点が出土した。

17号土坑（G区）

a．遺構（第40図）

14号土坑の南5mに位置し南半は調査区外にある。平面は南北に長い長方形と推測されるが、北東辺74cmのみ判明している。深さは21cm、底面は平坦である。埋土は14号土坑と同じ質感の灰色土である。出土遺物はない。





第40図　7・9・10・14・17号土坑

第3項　溝

2・3号溝（J区）

a．遺構（第41図、図版7－8）

6・7号土坑に挟まれる空間を南北に直線走向する。両溝は約80cmの間隔を置き平行している。上幅はともに55～80cmを測る。両溝とも中央に高まりを有し、断面形はW字状である。深さ10～14cm、高まりは6cmを測る。底面は南への緩傾斜を示すが、底面の標高は3号溝が5cmほど高い。埋土に流水の痕跡は認められない。出土遺物はない。

4号溝（J区）

a．遺構（第41図）

J区東部の微高地西側縁辺に位置し、1・4号住居跡を切る。北西から南東へ直線走向し、主軸方位はN45°Wを示す。底面は平坦で壁は急に立ち上がる。浅間A軽石の混入した灰色土で短期埋没しており、住居跡の遺物を少量含む。

b．遺物（第41図、表6、図版10）

流れ込みの須恵器坏（1）の器形は8世紀と思われ、重複する1号住居跡より古い。他に、土師器甕片6点、須恵器甕片3点がある。

6号溝（I区）

a．遺構（第41図）

5号溝の東3.5mを平行に走向し、中世の柱穴群P3に切られる。上幅35～50cm、下幅14～32cm、深さ15cmを測り、断面形は弧状である。北西端部が土坑状に20cm落ち込んでいる。底面に傾斜はなく、埋土に流水の痕跡は認められない。出土遺物はない。

7号溝（I区）

a．遺構（第41図）

1号堀の西5.5mを南北に直線走向し、中世の柱穴群に切られる。上幅66～100cm、下幅30～72cmを測り、深さは5cmと浅い。底面に傾斜はなく、埋土に流水の痕跡は認められない。1号堀との距離・平行性から土塁内側の排水路を想定したが、柱穴群に切られることと相容れない。

b．遺物（第41図、表6・7、図版10）

土師器高坏（1）・坏（2）はいずれも鬼高期に属するもの。他に、土師器甕片8点・坏片5点、磨石（3）が出土した。

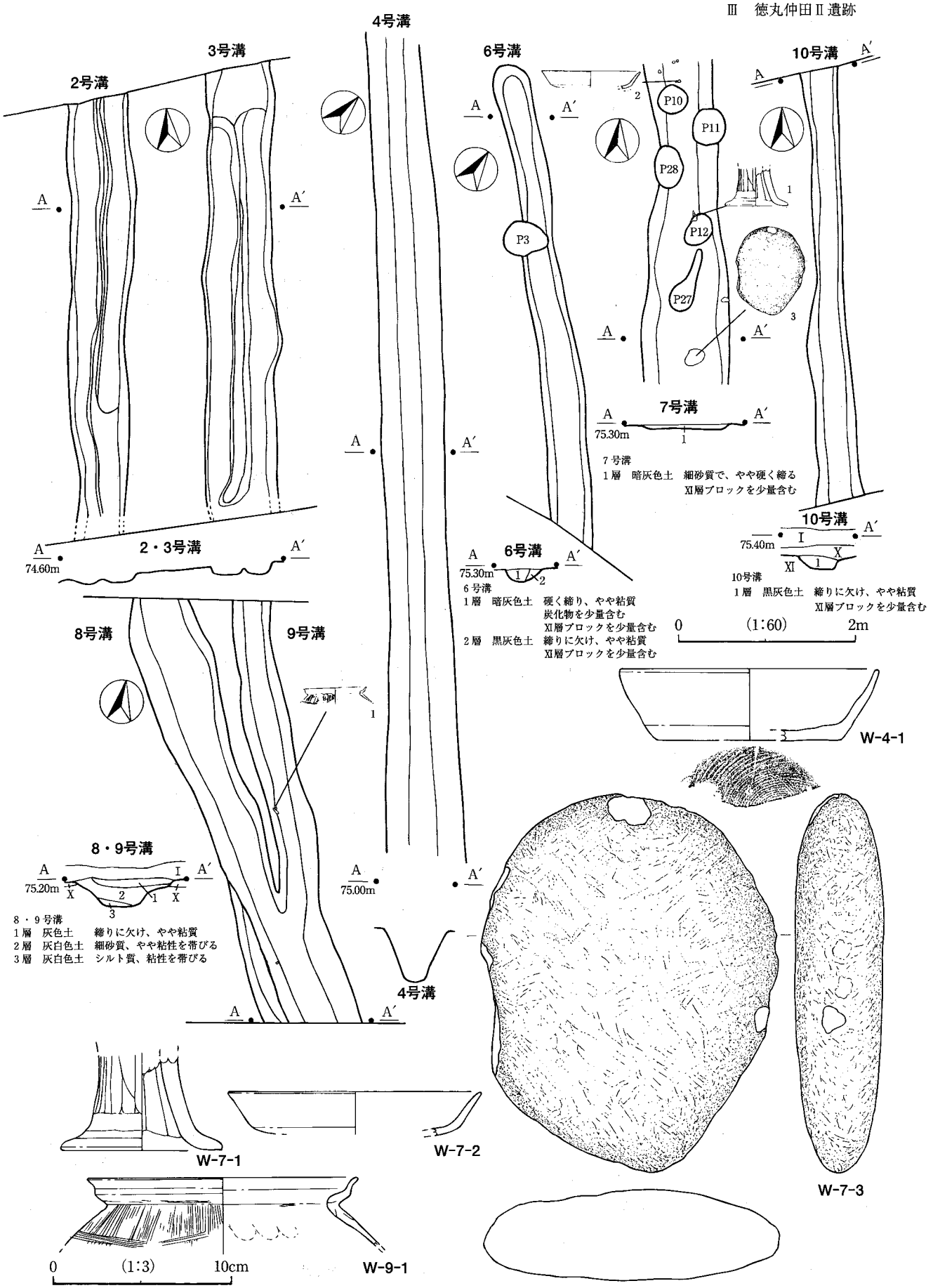
8・9号溝（I区）

a．遺構（第41図）

1号堀の東18m付近を北西から南東へ流下する。調査区南壁から1.5m北側で合流し流路幅を広げる。西側の8号溝は上幅52～84cm、下幅22～52cm、深さ30cmを測り、断面は平坦な底部から両側に緩やかに立ち上がる逆台形を呈する。東側の9号溝は上幅40～52cm、下幅16～24cm、深さ34cmを測り、断面形は8号溝と同様である。底面は8号溝より4cmほど低い。両溝とも細砂の水性堆積が見られ自然埋没している。埋土の類似性から同一時期に機能したと思われる。

b．遺物（第41図、表7、図版10）

9号溝で出土した石田川式土器の甕（1）は4世紀中葉のものだが、流れ込みの可能性が高い。



第41図　2・3・4・6・7～10号溝及び出土遺物

10号溝（I区）

a．遺構（第41図）

南北に直線走向するが、上幅は28～56cmで一定しない。深さ15cm、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。南への緩傾斜を示すが、流水の痕跡は認められない。出土遺物はない。

14号溝（G区）

a．遺構（第43図）

1号掘立柱建物跡の梁行にほぼ平行し、12号溝に切られる。主軸方位はN45°Eを示すが、調査区南端付近で南側へやや屈曲する。上幅22～34cm、下幅12～19cmを測り、断面は深さ12cmの逆台形を示す。12号溝以東へは伸びないことから12号溝に合流していたと推測される。出土遺物は皆無であったが、規模や区画性から1号掘立柱建物跡に伴う雨落ち用の溝を想定した。

15号溝（G区）

a．遺構（第43図）

G区西端のトレンチで検出された上幅約2m、深さ92cmを測る溝である。断面形は弧状を呈する。浅間B軽石下水田耕作土を掘り込み基本層序Ⅴ層まで達している。埋土には地山を塊状に含むほか現代ごみが混入する。F区17号溝と同様に農業用水路が想定される。遺物は出土していない。

16号溝（G区）

a．遺構（第43図）

G区中央谷頭地形の西8mを南北に走向する。上幅1.2m～1.6m、深さ46cmを測り、断面は浅い弧状を呈する。底部には細砂・シルトが水性堆積している。谷埋没後の自然流路とも考えられたが、具体的な時期は特定できない。遺物はない。

17号溝（F区）

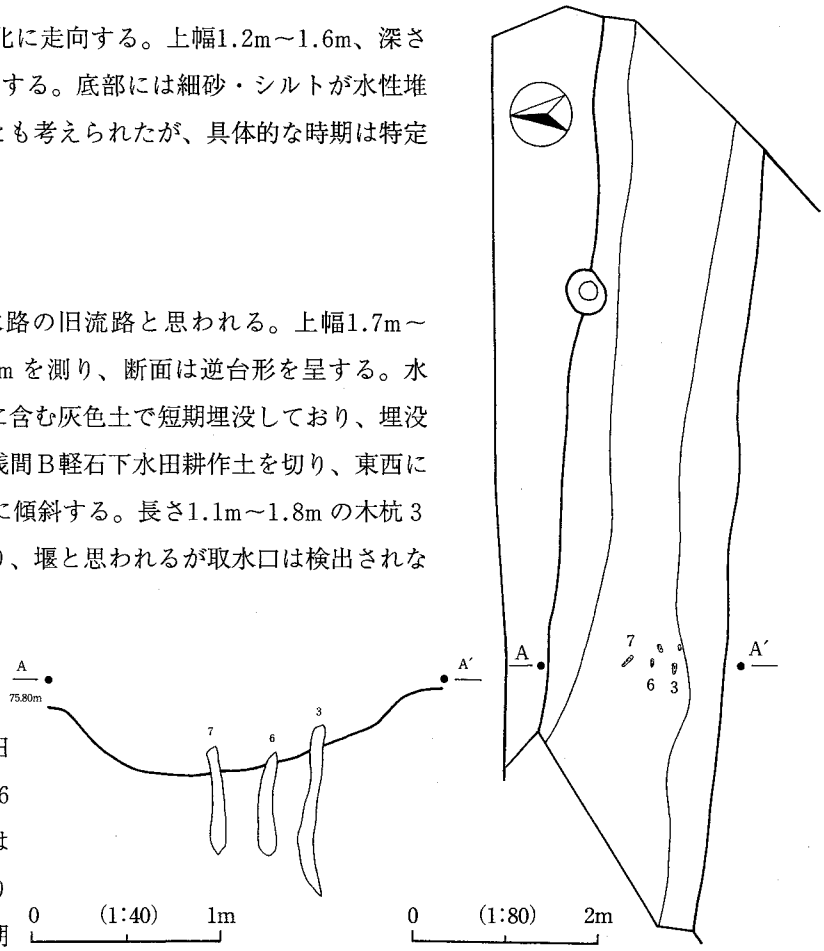
a．遺構（第42図）

F区北壁に接して流れる現代水路の旧流路と思われる。上幅1.7m～1.9m、下幅0.7m～1.3m、深さ90cmを測り、断面は逆台形を呈する。水路の付け替え時に現代ごみを多量に含む灰色土で短期埋没しており、埋没直前まで機能していた溝である。浅間B軽石下水田耕作土を切り、東西に直線走向する。底面は東へ緩やかに傾斜する。長さ1.1m～1.8mの木杭3本を溝に直交して並べた箇所があり、堰と思われるが取水口は検出されなかった。農業用水路の性格が強い。

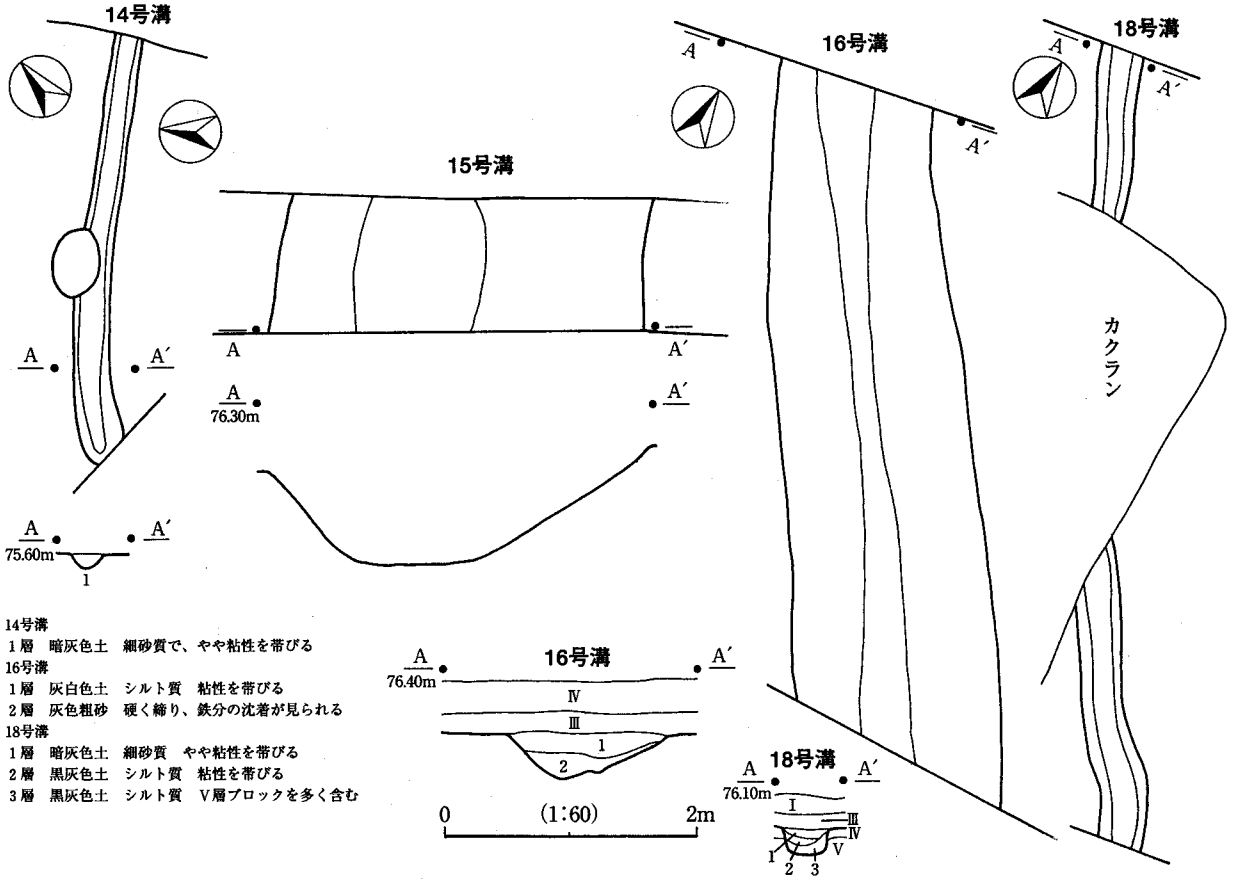
18号溝（F区）

a．遺構（第43図）

F区中央で、浅間B軽石下水田耕作土の下から検出された。上幅26～38cm、深さ20cmを測り、断面は弧状である。基本層序Ⅴ層まで掘り込んでいるが、出土遺物もなく時期は不明である。



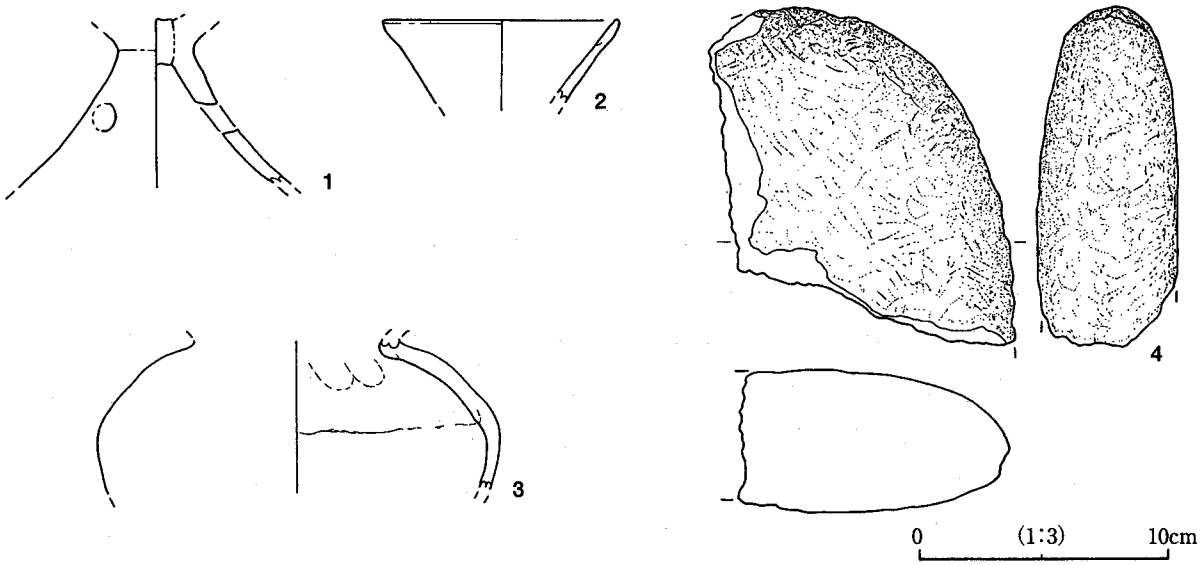
第42図　17号溝



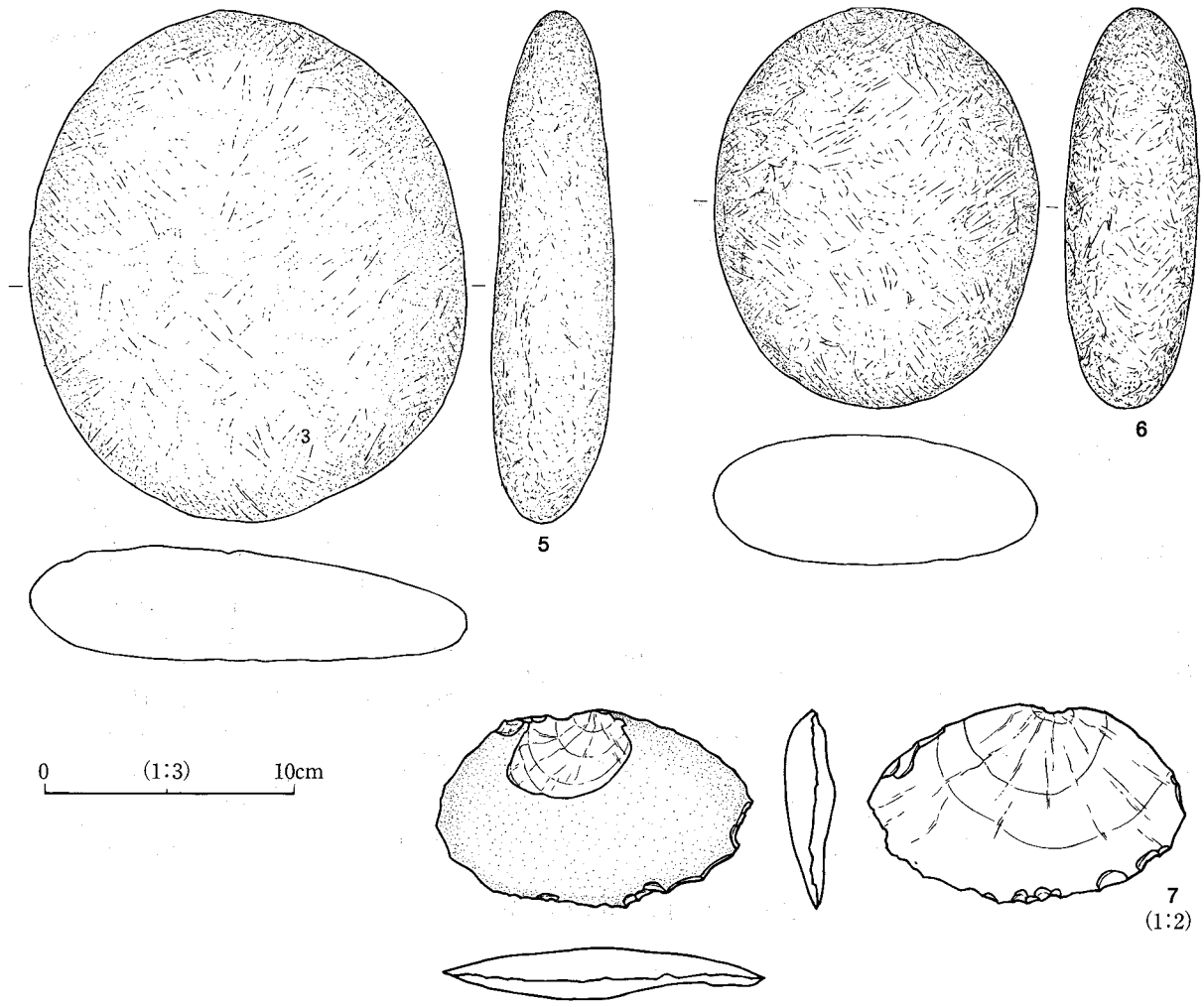
第43図　14・15・16・18号溝

第６節　遺構外出土遺物（第44・45図、表７、図版10）

高坏脚部（１）・坩（２）は、いずれもＧ区中央の風倒木痕から出土した古墳時代前期のものである。（３）～（５）はＩ区西部の黒色土（基本層序Ｘ層）中から出土し、（６）はＩ区西部の表採である。



第44図　遺物外出土遺物(1)



第45図　遺構外出土遺物(2)

第6章　まとめ

今回の調査では、古墳時代前期・奈良平安時代・中近世の遺構群が検出されている。そこで、これら遺構群の各時期ごとの概要を述べまとめとしたい。

古墳時代前期では掘立柱建物跡1棟・土坑1基・溝2条が検出されており、当期において本遺跡は生活の場であったことがわかる。奈良平安時代では8～10世紀代の竪穴住居跡3軒・土坑7基・溝3条が検出されており、当時において村落が形成されていた生活の場であったことが明らかである。なお、本調査区においてはAs-B軽石層がすでに消失しており、周辺の遺跡に認められるような畦畔が検出されていないため12世紀代の水田については不明である。中近世では堀1条・溝1条・柱穴群が検出されており、堀は屋敷に伴うものと考えられ、当時において生活の場であったこと示している。

表6　徳丸仲田Ⅱ遺跡遺物観察表（1）

遺構遺物番号 地　区　名		図No 図版No	土器種 器　形	口径／底径／器高 残存状態（cm）	①　胎　土 ②　色　調　　③　焼　成	成形・整形の特徴 ①　外　面　　②　内　面	備　考
H－1 J区	1	第24図 図版8	土師器 甕	16.0／　／ 口縁～肩部1/4	①長石・石英を多く、赤色粒を僅かに含む　②橙③酸化	①口縁横撫で　体部篦削り ②口縁横撫で　体部篦撫で	
	2	第24図 図版8	土師器 坏	(12.2)/(6.2)/(3.6) 口縁～体部1/6	①長石・石英・角閃石を少量含む ②明赤褐③酸化	型作り成形 ①口縁横撫で　体部下半篦削り	内面に煤付着
	3	第24図 図版8	鉄 かすがい	「コ」の字状の形状を呈す。			
H－2 J区	1	第26図 図版8	須恵器 埦	(15.2)／7.9／6.2 口縁～体部1/3欠	①長石・石英を多く、角閃石を僅かに含む　②灰白③還元	右回転轆轤成形 底部回転糸切り後無調整　付高台	
	2	第26図 図版8	灰釉陶器 埦	(17.4)/(7.4)/5.1 口縁～底1/3	①長石を少量含む ②灰白③還元	轆轤成形　付高台　内面刷毛塗 ①体部下半回転篦削り	
	3	第26図 図版8	灰釉陶器 皿	14.7／6.1／2.8 口縁～底1/2	①2mm以下の赤色粒、長石を僅かに含む　②灰白③還元	左回転轆轤成形　付高台 内面刷毛塗	
	4	第26図 図版8	土師器 坏	13.9／(9.4)／2.8 口縁～体部1/6	①石英・角閃石を多く、長石を少量含む　②橙③酸化	型作り成形①口縁横撫で　体部下半篦削り　②口縁・体部横撫で	
	5	第26図 図版8	土師器 坏	14.1／(8.7)／3.1 口縁～体部1/4	①長石・石英・角閃石を多く含む ②橙③酸化	型作り成形①口縁横撫で　体部篦削 ②色調③焼成	
	6	第26図 図版8	土師器 台付甕	／　／(9.5) 体部～脚部1/2	①長石・石英・1mm以下の赤色粒を多く、角閃石を僅かに含む ②浅黄橙③酸化	①体部縦刷毛目②体部下半に接合痕 脚天井部に粘土貼付	
	7	第26図 図版8	土師器 高坏	／7.0／(5.5) 坏下半～脚部	①長石･石英･2mm以下の赤色粒･1～6mm大の砂粒を多く含む ②橙③酸化	中位3箇所に径10mm程の透かし	
	8	第26図 図版9	磨石				
H－4 J区	1	第38図 図版10	土師器 甑	／(9.4)／ 底部破片	①長石・石英・3mm以下の赤色粒を多く含む②灰黄褐③酸化	深鉢形	
D－2 J区	1	第28図 図版9	土師器 甕	(21.6)／　／ 口縁～肩部破片	①長石・石英・角閃石・雲母やや多く、2mm以下の赤色粒僅かに含む②明赤褐③酸化	①口縁横撫で　体部篦削り　口縁部中位に接合痕②口縁横撫で　体部篦削り	
	2	第28図 図版9	土師器 坏	(11.6)/(7.0)/3.0 口縁～底1/2	①長石・石英・角閃石を多く含む ②橙③酸化	型作り成形①口縁横撫で　体部下半篦削り②口縁横撫で	
D－8 J区	1	第21図 図版8	土師器 小型甕	11.4／3.1／11.8 体部下半1/2欠	①長石、石英、角閃石、4mm以下の赤色粒・黒色粒やや多く含む ②橙③酸化	①口縁横撫で　頚部縦刷毛目　体部中位斜篦削り　②口縁横撫で	
D－12 I区	1	第28図 図版9	土師器 鉢	(24.4)／　／ 口縁～体部破片	①長石・石英・角閃石・雲母・結晶片岩・3mm以下の赤色粒を多く含む②橙③酸化	右回転轆轤成形②篦磨き	内黒処理
D－13 I区	1	第29図 図版9	須恵器 坏	／6.9／ 底部	①長石・石英を多く、角閃石・2mm以下の赤色粒を少量含む②黄灰③還元	①回転糸切り後付高台	
	2	第29図 図版9	土師器 坏	12.6/8.6/2.6 口縁～底1/4破片	①長石・石英・角閃石・雲母を多く、1mm以下の赤色粒を少量含む②橙③酸化	型作り成形①口縁横撫で	
	3	第29図 図版9	樽式土器 甕	／　／ 胴部破片	①長石・石英・角閃石をやや多く含む　②浅黄橙③酸化	①櫛描き波状文	流れ込み
	4	第29図 図版9	鉄 鎌	幅4～6cm 厚さ3mmの鉄板を折り返す			
D－15 G区	1	第29図 図版9	須恵器 坏	(12.8)/(10.0)/2.8 口縁～底1/4	①長石・石英を多く、2mm以下の黒色粒を僅かに含む②灰③還元	①底部回転糸切り後、底部周縁回転篦削り	
W－4 J区	1	第41図 図版10	須恵器 坏	14.6/10.4/4.0 口縁～底1/3	①長石・石英・3mm以下の黒色粒を僅かに含む②灰白③酸化	右回転轆轤成形底部回転糸切り後無調整	流れ込み
W－5 I区	1	第34図 図版9	須恵器 蓋	つまみ最大径3.3mm 高さ(2.5)mm 天井部2/3	①長石・石英・3mm以下の黒色粒を多く、角閃石を僅かに含む②灰③還元	左回転轆轤成形 ①回転篦削り	
	2	第34図 図版9	須恵器 瓶	/(6.7)/ 体部下半1/4～底	①2mm以下の黒色粒を多く含む ②灰白③還元	①底回転糸切り後付高台	
	3	第34図 図版9	陶器 碗	/(3.8)/ 底部	①1mm以下の黒色粒を少量含む ②灰白	① ②	
	4	第35図 図版9	磨石				
	5	第35図 図版9	磨石				
W－7 I区	1	第41図 図版10	土師器 高坏	/(9.0)/ 脚天井部～裾2/3	①長石・石英・角閃石・4mm以下の赤色粒を多く含む②赤灰③酸化	①中位縦指撫で　裾横撫で②坏の接合痕　中位横篦削り　裾横撫で	
	2	第41図 図版10	土師器 坏	(14.2)/　/2.5 口縁～底1/5破片	①長石を僅かに、3mm以下の赤色粒を多く含む②橙③酸化	①口縁横撫で ②口縁横撫で	

表７　徳丸仲田Ⅱ遺跡遺物観察表（２）

W－７ Ⅰ区	3	第41図 図版10	磨石	長さ21.4cm　幅16.7cm　厚さ5.1cm　重さ2,452g　安山岩			
W－９ Ⅰ区	1	第41図 図版10	土師器 台付甕	(15.3)/　/ 口縁～肩1/4	①長石・石英・角閃石を多く含む ②黄橙③酸化	①口縁横撫で　体部上位縦刷毛目・中位横刷毛目②口縁横撫で　体部指押さえ痕	頸部に接合痕
W－11 Ⅰ区	1	第23図 図版８	土師器 台付甕	(12.4)/8.0/22.3 口縁～体部1/2欠	①長石・石英・角閃石・２mm以下の赤色粒をやや多く含む②灰白③酸化	②体部下位に接合痕　脚天井部に粘土貼付け痕　脚端部折り返し	脚部に二次的加熱痕
	2	第23図 図版８	土師器 壷	頚部径　cm 頚部～肩2/3	①長石・石英・角閃石・３mm以下の赤色粒をやや多く含む②橙③酸化	②指押さえ痕	
	3	第23図 図版８	土師器 高坏	(18.0)/　/ 坏部口縁～底1/2	①長石・石英・角閃石・３mm以下の赤色粒をやや多く含む②にぶい黄橙③酸化	①体部下位篦削り ②部分的に篦磨き	
	4	第23図 図版８	土師器 台付甕	(16.1)/　/ 口縁～肩1/4破片	①長石・石英・角閃石を少量含む ②灰黄褐③酸化	①口縁横撫で　体部上位縦刷毛後、中位横刷毛目　②口縁横撫で	
	5	第23図 図版８	土師器 台付甕	/　/ 脚部中位～裾2/3	①長石・石英・角閃石を多く含む ②橙③酸化		
	6	第23図 図版８	土師器 台付甕	(15.9)/　/ 口縁～肩1/6破片	①長石・石英・角閃石を少量含む ②灰黄褐③酸化	①口縁横撫で　頚部に接合痕　体部上位縦刷毛後、中位横刷毛目　②口縁横撫で	
	7	第23図 図版８	土師器 台付甕	(15.6)/　/ 口縁～肩1/2	①長石・石英・角閃石・４mm以下の赤色粒をやや多く含む②にぶい黄橙③酸化	①口縁横撫で　体部上位縦刷毛後、中位横刷毛目　②口縁横撫で　頚部横刷毛目	
	8	第23図 図版８	土師器 台付甕	/　/ 胴部肩～下半1/2	①長石・石英・角閃石・雲母をやや多く含む②明褐灰③酸化	①肩部横刷毛目　体部全体に縦刷毛目	
	9	第23図 図版８	打製石 斧	黒色頁岩 長さ7.2cm　幅5.1cm　厚さ1.5cm　重さ56.34g			
	10	第23図 図版８	砥石	流紋岩（砥沢） 長さ6.1cm　幅4.8cm　厚さ2.0cm　重さ64.49g			
W－12 G区	1	第30図 図版９	須恵器 長頸壷	(7.8)/　/ 口頚部	①長石・石英を多く、１mm以下の赤色粒を僅かに含む②褐灰③還元	②粘土積み上げ痕	
	2	第30図 図版９	土師器 坏	(12.8)/　/ 口縁～体部下位破片	①長石・石英・角閃石を少量含む ②橙③酸化	①口縁横撫で　体部篦削り ②口縁横撫で	
	3	第30図 図版９	土師器 坏	(13.2)/　/ 口縁～体部下位破片	①長石・石英・角閃石を少量含む ②橙③酸化	①口縁横撫で　体部篦削り ②口縁横撫で	
W－13 G区	1	第31図 図版９	土師器 坏	13.0/3.0/3.5 口縁部1/2欠	①長石・石英・角閃石を多く含む ②にぶい橙③酸化	①口縁横撫で　体部篦削り ②口縁横撫で	
	2	第31図 図版９	土師器 坏	(14.6)/　/ 口縁～底1/4	①長石・石英を少量、１mm以下の赤色粒を多く含む②橙③酸化	①口縁横撫で　体部篦削り ②口縁横撫で	
	3	第31図 図版９	土師器 坏	(13.8)/　/ 口縁～体部下位破片	①長石・石英・角閃石を少量、３mm以下の赤色粒を僅かに含む②灰③酸化	①口縁横撫で　体部篦削り ②口縁横撫で	
１号堀 Ⅰ区	1	第33図 図版９	須恵器 甕	/(15.0)/ 体部下位～底破片	①長石・石英・角閃石を少量、２mm以下の赤色粒を僅かに含む②オリーブ灰③還元	右回転轆轤成形 ②部分的に横撫で	流れ込み
	2	第33図 図版９	叩き石	長さ18.9cm　幅6.1cm　厚さ5.6cm　重さ1,040g			
B－１ G区	1	第20図 図版８	土師器 甕	(17.8)/　/ 口縁～肩破片	①長石・石英・角閃石を多く、１mm以下の赤色粒を僅かに含む②黒③酸化	①肩縦刷毛目	
P４ Ⅰ区	1	第37図 図版10	敲き石	長さ13.1cm　幅5.4cm　厚さ4.7cm　重さ501,2g　安山岩			
P５ Ⅰ区	1	第37図 図版10	陶器 鉢	(25.0)/　/ 口縁～体部破片	①石英を僅かに含む ②灰白③	轆轤成形 内外面錆釉	
遺構外 G区	1	第44図 図版10	土師器 高坏	/　/ 脚天井部～裾1/2	①長石・石英・２mm以下の赤色粒を多く含む②にぶい橙③酸化	中位３箇所に径15mm程の透かし ①脚上位横撫で②坏部との接合痕	
遺構外 G区	2	第44図 図版10	土師器 坩	(9.2)/　/ 口縁1/3破片	①長石・石英を僅かに、２mm以下の赤色粒をやや多く含む②橙③酸化	①口縁横撫で ②口縁横撫で	
遺構外 Ⅰ区	3	第44図 図版10	土師器 壷	/　/ 肩部1/2	①長石・石英・角閃石をやや多く、２mm以下の赤色粒を少量含む②にぶい黄橙③酸化	②内面指押さえ　輪積み痕	
遺構外 Ⅰ区	4	第44図 図版10	磨石	長さ13.4cm　幅12.1cm　厚さ5.5cm　重さ1,141g　安山岩			
遺構外 Ⅰ区	5	第45図 図版10	磨石	長さ20.4cm　幅17.3cm　厚さ4.9cm　重さ2,146g　安山岩			
遺構外 Ⅰ区	6	第45図 図版10	磨石	長さ16.0cm　幅13.0cm　厚さ5.3cm　重さ1,456g　安山岩			
遺構外 Ⅰ区	7	第45図 図版10	スクレーパー	頁岩　使用痕のある剥片 長さ5.2cm　幅8.4cm　厚さ1.3cm　重さ52.4g			

Ⅳ　西善尺司Ⅱ遺跡

第１章　　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の立地

西善尺司Ⅱ遺跡の所在する西善町は前橋市の南部にあり、JR 前橋駅の南東約6.3km、駒形駅の南西約2.6km に位置する。遺跡地の地番は前橋市西善町1174-1番地ほかである。調査区の西端は藤川に接し、徳丸町との境をなす。遺跡地の北750m には県道27号高崎駒形線が東西に走り、これと交差する県道西善玉村線が調査区中央を南北に縦断する。西善町の周囲には、水田や畑の広がる中に中内・徳丸・力丸・房丸の町々が点在している。旧来の集落に加え、幹線沿いに市街地化が進行しつつあり、西善工業団地・力丸工業団地を代表に企業の進出も目立っている。

本遺跡は、前橋市の南西部に広がる前橋台地上の東端付近、標高約75m の平坦な場所に位置している。前橋台地は、約20,000年前の浅間山の山体崩落に起因する火山泥流堆積物により形成された、緩傾斜の洪積台地である。台地上は、微高地と後背湿地が北西・南東方向を基調として網目状に入り組んでいる。前橋台地の東側は利根川の旧流路に相当し、幅３km 前後、長さ約30km の帯状の沖積低地が北西から南東へ広がっている。この低地帯は広瀬川低地帯と呼ばれ、前橋台地との間は数メートルの比高差を持つ明瞭な崖に区画される。遺跡地は低地帯の南西約２km 付近に位置する。旧利根川は天文年間の洪水により河道を西へ移しており、現在の利根川は遺跡地の西3.8km 及び南2.5km 地点を南東方向へと流れている。現利根川と広瀬川低地帯に挟まれる部分の前橋台地上には、端気川・藤川などの小河川が南東流し、利根川に合流する。この小河川沿いには浅い侵食谷が筋状に形成されており、本遺跡は微高地縁辺の谷頭付近、南方に後背湿地をひかえる場所に立地する。

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺の前橋台地上は、旧石器時代から縄文・弥生時代にかけての遺構・遺物が少ない。それは前橋泥流と陣場岩屑なだれの堆積に伴う激しい地形変化とその後の湿地化が、人々に生活可能な環境を与えなかったためであろう。

古墳時代前期（４世紀）になると、利根川流域の平坦地は、弥生文化の担い手とは異なる外来の集団により開発が進み始める。石田川式土器を使用するこの集団は、農業生産に立脚した生活基盤を本遺跡周辺の前橋台地上にも求めた。住居跡が確認された後閑団地遺跡11・東田遺跡4はいずれも台地上の微高地縁辺部に占地し、前面に開ける後背湿地を開発の対象としている。徳丸仲田Ⅱ遺跡17では石田川式土器を多量に廃棄した溝や掘立柱建物が、西横手遺跡８・公田池尻遺跡７では浅間Ｃ軽石に埋没した水田跡が確認されている。榛名 FA や FP の降下する古墳時代後期（６世紀）には、農耕技術の進歩と鉄器の普及が可耕地を拡大させ、人工増加に伴う集落の拡大も著しくなってくる。この時期の水田はテフラ堆積による漏水に対処するため、公田東遺跡６・横手湯田遺跡９で見られるような小区画のものが盛行する。該期の集落は後閑Ⅱ遺跡12・川曲遺跡５等、前期と同様に微高地縁辺部に立地する。

前橋台地の東端付近には、広瀬川低地帯に沿うように古墳が群をなす。４世紀後半築造の八幡山古墳13（前方後方墳）、三角縁神獣鏡を出土した前橋天神山古墳14（前方後円墳）は県内でも古い一群に属する。他に、６世紀前半の帆立貝型古墳である亀塚山古墳15、７世紀前半の前方後円墳で宝珠型金銅製冠を出土した金冠塚古墳16が著名である。

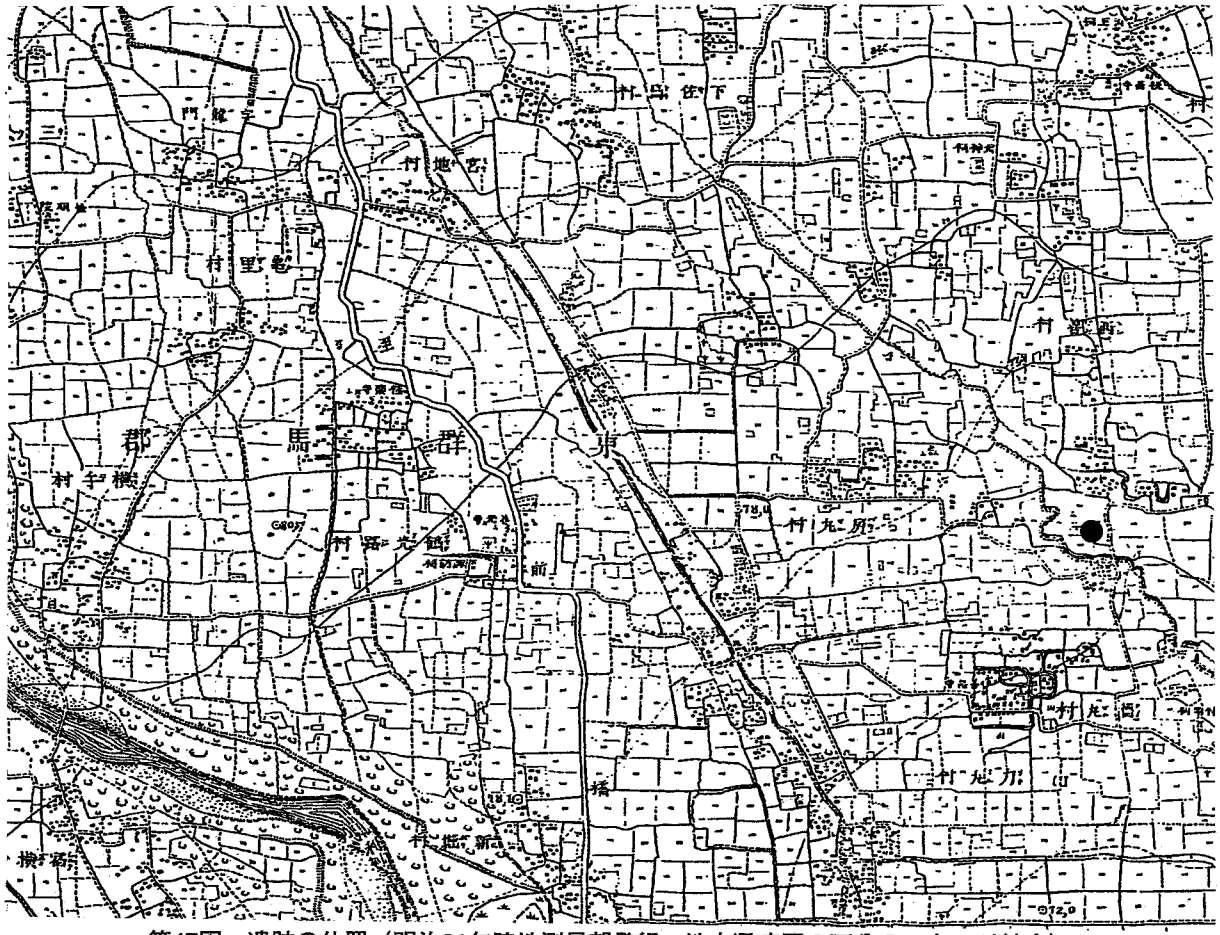
律令期に入ると、前橋市内の元総社町に国府が造営され、その南東に位置する遺跡地周辺は穀倉地帯として組み込まれていく。1108年降下の浅間Ｂ軽石に埋没した水田のなかには、律令制が確立した当初の条里制地割を想起させる例がある（公田東遺跡６・公田池尻遺跡等）。特に宮地中田遺跡２では、東西走行の坪境畦畔３本とそれに直交する南北走行の坪境畦畔１本が検出され、８区画の坪並が想定された。西田遺跡３では、東西に走る幅1.1m 程の大畦畔や幅80～100cm の道路状遺構が検出されており、いずれも坪境の可能性がある。奈良・平安時代の集落跡は、後閑団地遺跡・後閑Ⅱ遺跡・神人村Ⅱ遺跡20・柄田添遺跡24で確認されている。その他、一万田遺跡21では郡衙等の公的施設を想起させる柵列・溝・井戸・掘立柱建物跡が検出され、井戸からは「舎」と書かれた墨書土器が出土している。

表８　周辺の遺跡地名表

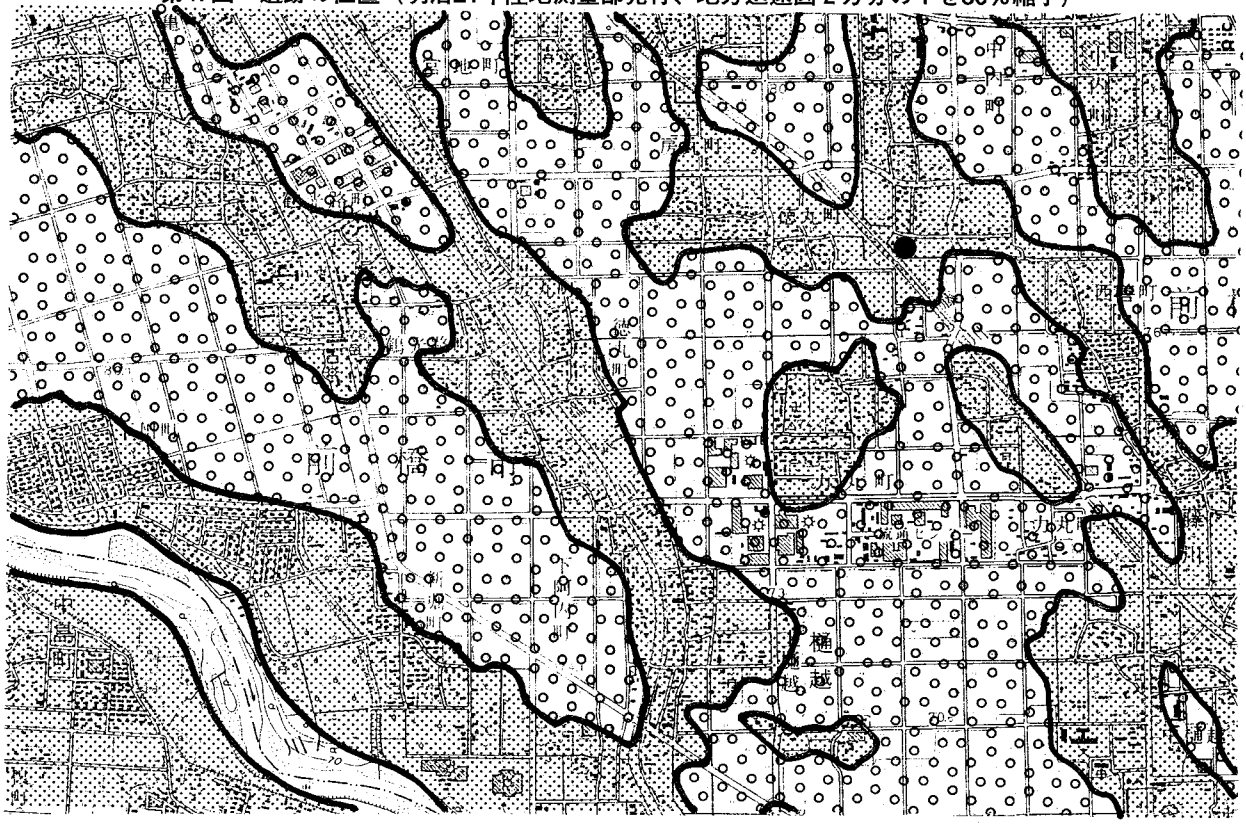
No	遺跡名・所在地	時代	遺構
1	西善尺司Ⅱ遺跡 前橋市西善町1174-1他	古墳 平安 近世	木道･周溝墓･溝･水田跡 集落跡・水田跡 土坑墓跡
2	宮地中田遺跡 前橋市宮地町667-3他	平安	水田跡
3	西田遺跡 前橋市鶴光路町305他	平安	水田跡
4	東田遺跡 前橋市	古墳	住居跡
5	川曲遺跡 前橋市	古墳	住居跡
6	公田東遺跡 前橋市公田町	古墳 平安	水田跡 水田跡
7	公田池尻遺跡 前橋市上佐鳥町	古墳 平安	水田跡 水田跡
8	西横手遺跡 高崎市西横手町	古墳 平安	水田跡 水田跡
9	横手湯田遺跡 前橋市亀里町921他	古墳 平安	水田跡 水田跡
10	鶴光路練引遺跡 前橋市鶴光路町59-3他	平安	水田跡
11	後閑団地遺跡 前橋市	古墳 奈・平	集落跡 住居跡・掘立柱建物跡
12	後閑Ⅱ遺跡 前橋市後閑町	古墳 奈・平	集落跡 住居跡・掘立柱建物跡 水田跡
13	八幡山古墳 前橋市朝倉町419-3	古墳	前方後方墳全長180m 幅125m４世紀後半
14	前橋天神山古墳 前橋市広瀬町1-27-7	古墳	前方後円墳全長129m ４世紀後半
15	亀塚山古墳 前橋市山王町1-28-3	古墳	帆立貝式古墳全長60m ６世紀前半
16	金冠塚古墳 前橋市	古墳	前方後円墳７世紀前半
17	徳丸仲田Ⅱ遺跡 前橋市徳丸町171-1他	古墳 平安 中近世	溝・掘立柱建物跡 集落跡 館跡
18	前田遺跡 前橋市東善町	平安	水田跡
19	藤川前遺跡 玉村町藤川191他	平安	水田跡
20	神人村・遺跡 玉村町樋越305-7他	奈・平	集落跡
21	一万田遺跡 玉村町上福島45-1他	奈・平	柵列・溝・井戸・掘立柱建物跡
22	尾柄町遺跡 玉村町上福島	平安	水田跡
23	金免遺跡 玉村町上福島298	平安	水田跡
24	柄田添遺跡 玉村町上福島707	奈・平 江戸	水田跡・集落跡 水田跡・畠跡

1．西善尺司Ⅱ遺跡　2．宮地中田遺跡　3．西田遺跡　4．東田遺跡
5．川曲遺跡　6．公田東遺跡　7．公田池尻遺跡　8．西横手遺跡
9．横手湯田遺跡　10．鶴光路練引遺跡　11．後閑団地遺跡　12．後閑Ⅱ遺跡
13．八幡山遺跡　14．後閑天神山古墳　15．亀塚山古墳　16．金冠塚古墳
17．徳丸仲田Ⅱ遺跡　18．前田遺跡　19．藤川前遺跡　20．神人村Ⅱ遺跡
21．一万田遺跡　22．尾柄町遺跡　23．金免遺跡　24．柄田添遺跡

第46図　遺跡の位置と周辺の遺跡（１：50,000）



第47図　遺跡の位置（明治21年陸地測量部発行、地方迅速図２万分の１を80％縮小）



第48図　遺跡の位置と地形（国土地理院２万５千分の１前橋）

第２章　調査の方法

調査地域は南北幅平均4.8m・東西幅約350m に及び、３本の南北道路により４地区に分割される。４地区をそのまま調査区として設定し、呼称は西側から A、B、C、D 区とした。区ごとの調査面積は A 区750m^2、B 区710m^2、C 区320m^2、D 区40m^{2}である。南北幅４m 未満の狭い箇所は、幅1.2m のトレンチを入れ遺構が確認された場合拡張する方法を採用した。トレンチ調査になったのは C 区東側50m 及び D 区である。

グリッドは、国家座標第Ⅵ系（X＝37270、Y＝－63650）と平行に設定した。

平面図は平板を使用し、地区ごとの全体図を１/100で作図した。個別遺構・遺物出土状況・セクション・エレベーションは1/20作図を原則とし、状況に応じて1/10、1/40で記録した。1/100全体図には５cm コンタを入れた。

遺構の写真撮影には中型カメラによる35mm サイズのモノクロ・カラー・リバーサル写真を使用した。

第３章　調査の経過

12月　上旬　A 区・C 区の表土除去を行ない、遺構調査を開始する。B 区の表土除去を行なう。

　　中旬　A 区西側で平安集落を検出。B 区の遺構調査を開始する。

１月　中旬　B 区・C 区の遺構調査を終了する。D 区の表土除去を行なう。

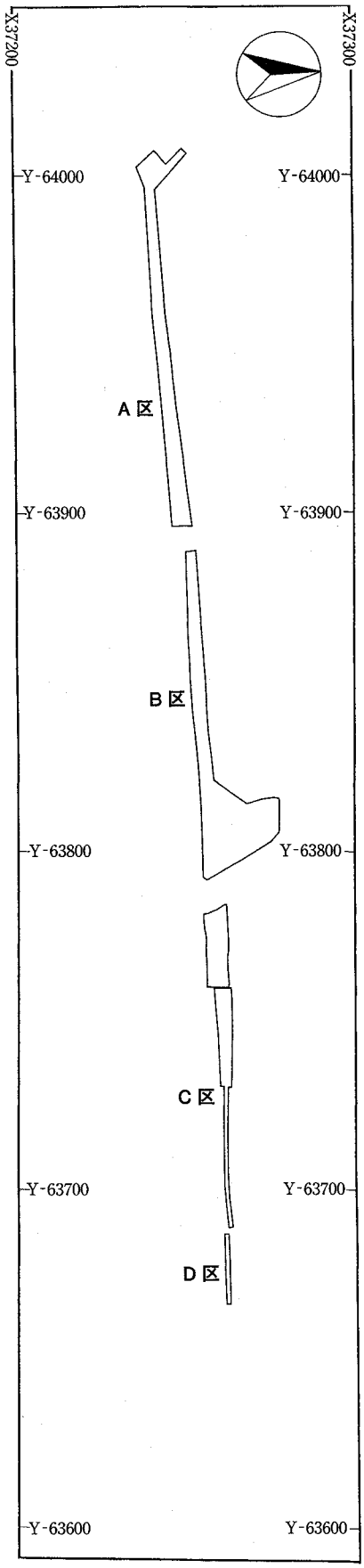
　　下旬　A 区東側で浅間 B 軽石下水田を検出する。

２月　上旬　D 区のトレンチ調査を開始し、近世の土坑墓群を検出する。A 区谷地形の榛名 FA 下調査を行なう。

　　中旬　D 区の遺構調査を終了する。A 区谷地形の浅間 C 軽石下調査を行ない、橋状遺構を検出。

　　下旬　A 区の遺構調査を終了する。

３月　下旬　全調査区の埋め戻し作業を終了する。

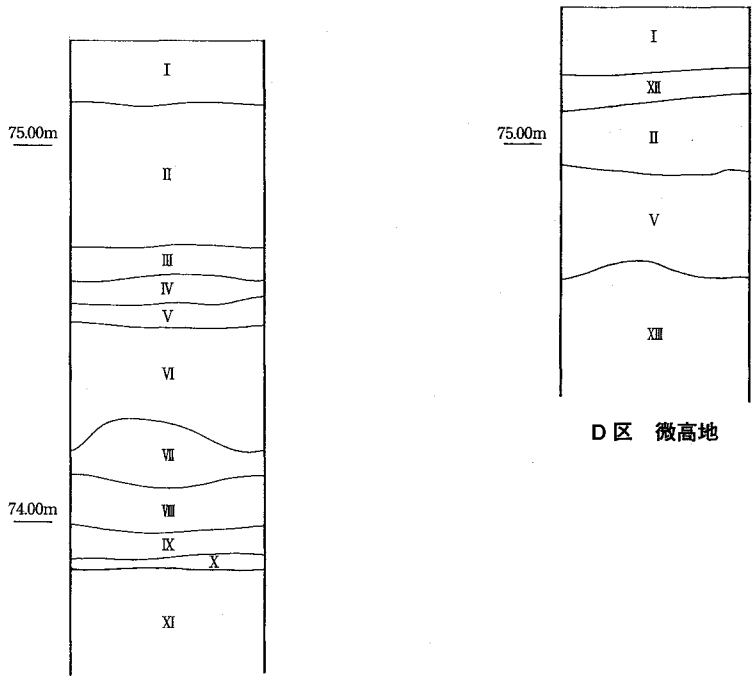


第49図　調査区設定図（1：2,000）

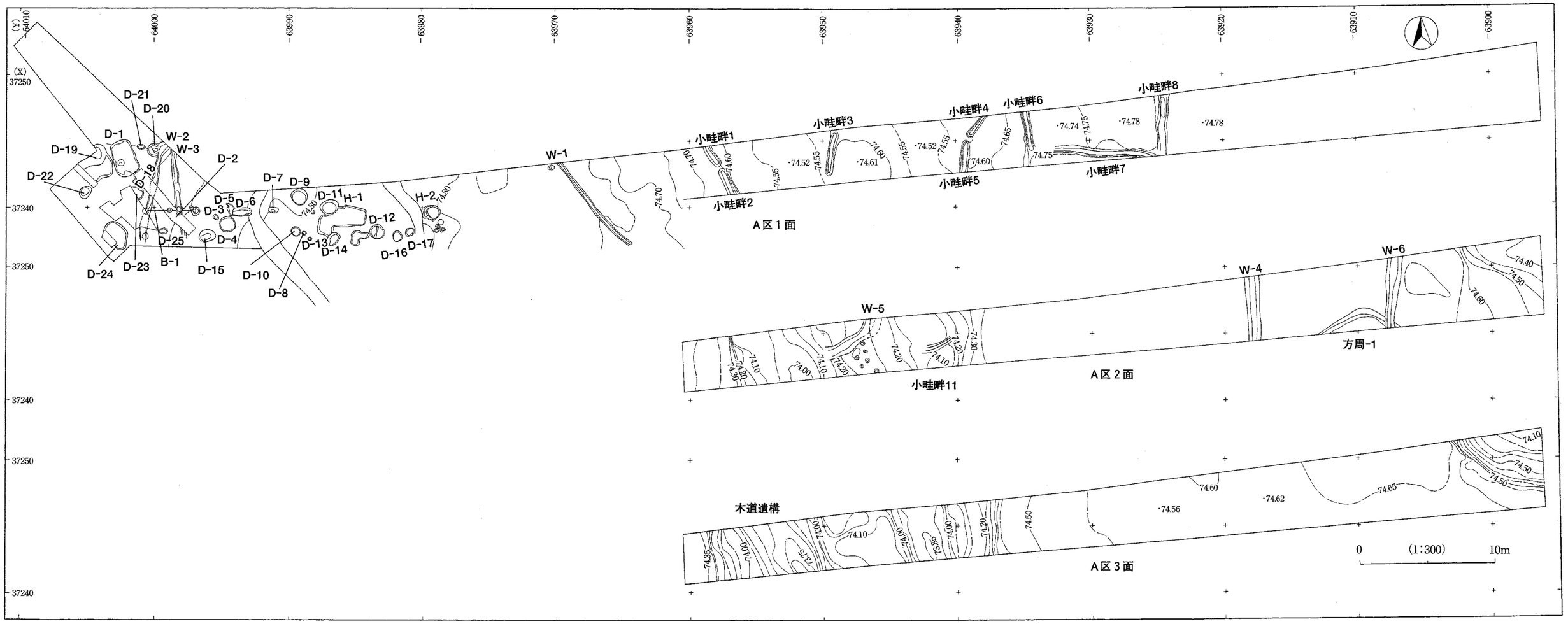
第4章　基本層序

調査区の谷地形はA区中央部からB区西端にかけての小谷地形とそれ以外の微高地とに大別され、土層の堆積状態は微高地と小谷地形とで様相を異にする。

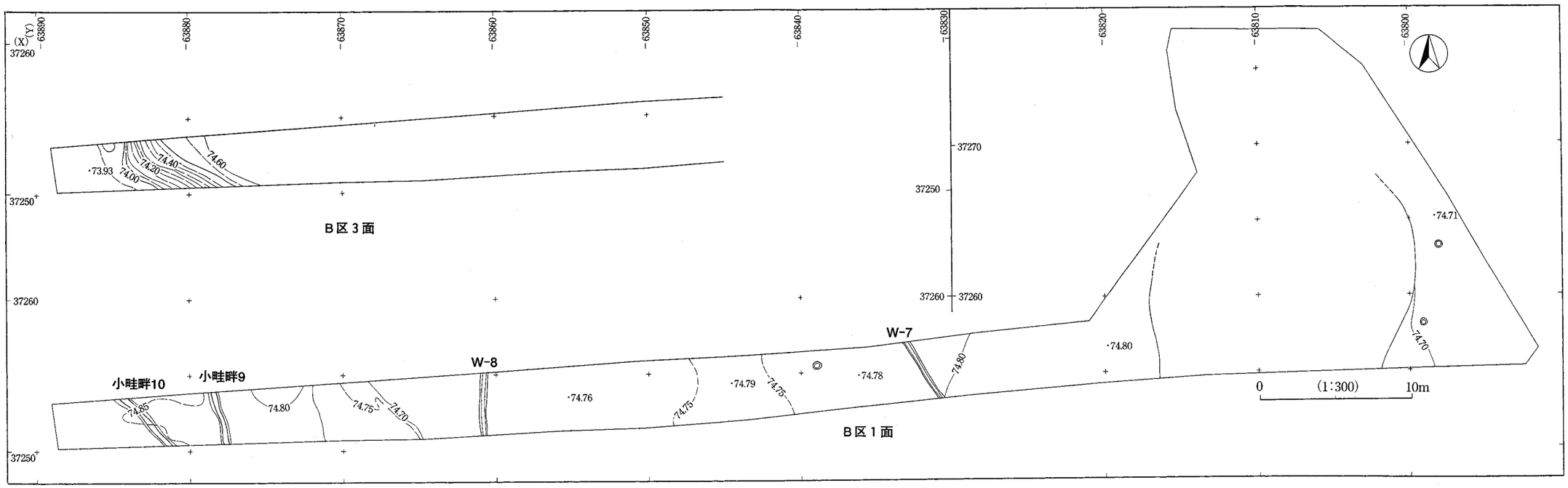
Ⅰ層　現耕作土　　As-A軽石が少量混入。
Ⅱ層　暗灰色土　　酸化鉄が多く見られる。
Ⅲ層　灰色土　　As-B軽石多く含む。酸化鉄が見られる。
Ⅳ層　茶褐色土　　砂質で、As-B軽石を塊状に含む。
Ⅴ層　As-B軽石純層
Ⅵ層　黒灰色粘性土　　平安時代の耕作土及び畦畔の構成土。粗粒の軽石を微量含む。
Ⅶ層　暗灰色粘性土　　Hr-FAの二次堆積層と思われる。粗粒の軽石を少量含む。
Ⅷ層　Hr-FA純層。
Ⅸ層　黒色粘性土　　As-C軽石が散在する。泥炭質で、植物遺存体が含まれる。
Ⅹ層　灰色粘性土　　シルト質土で、As-C軽石・植物遺存体が少量含まれる。
XI層　As-C軽石純層
XII層　黒色粘性土　　泥炭質で、植物遺存体が多量に含まれる。
XIII層　灰白シルト質土　　前橋泥流層。

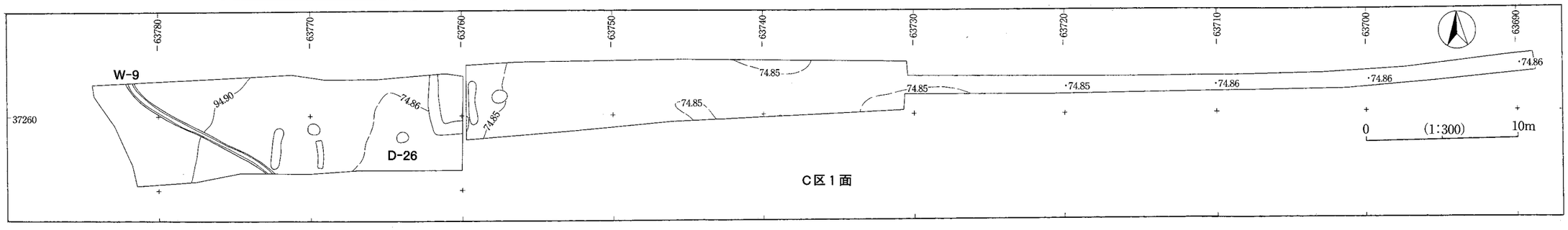


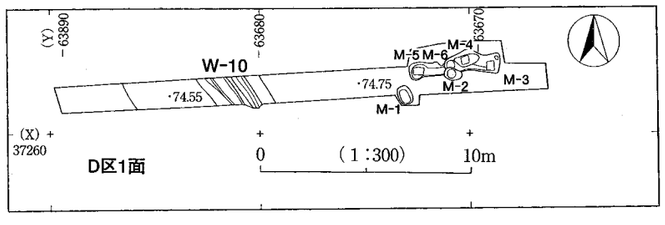
第50図　基本土層図



第51図　A区遺構全体図







第52図　B・C・D区遺構全体図

第５章　遺構と遺物

第１節　概要

本遺跡は、微高地上では基盤層上面の１面、小谷地形においては浅間Ｂ軽石・榛名FA・浅間Ｃ軽石下の３面調査を行なった。検出した遺構は、竪穴住居跡３軒、掘立柱建物跡１棟、土坑26基、溝10条、ピット数基、水田の畦畔11条、方形周溝墓１基、土坑墓６基、木道遺構である。

第２節　古墳時代前期・中期

第１項　小谷地形・木道遺構（Ａ区）

ａ．遺構（第53図、図版11－１～２、15）

Ａ区中央部には、幅８ｍ前後の小規模な侵食谷が東西に連続して形成されている（東谷・西谷とする）。この谷は調査区の南10m付近で合流し、河川状に蛇行しながら南下していく。谷の基底部は現地表面から1.7m以上の深さで、谷の西側に占地する微高地のローム層上面とは1.1mの比高差を有する。基底部の30cm上位には浅間Ｃ軽石、50cm上位には榛名FAが弧状に純堆積している。谷はFAあるいはFP降下後の二次的な泥流によってほぼ完全に埋没し、浅間Ｂ軽石降下時にはわずかな凹地だけが旧状を留めていたようである。FA下・Ｃ下ともに黒色の泥炭土が15～30cmほど堆積している。黒泥土中には流水による粗粒物質の堆積も見られず、葦などの水性植物が未分解のまま多量に遺存しており、周辺にはかなり安定した湿地が形成されていたと推定される。

木道遺構は、西谷のやや上流側で浅間Ｃ軽石下から検出された。谷に横断して横木を渡し、その両端下に別の材を直交させ中央部は木杭で固定している。木道部分には直径20cm・長さ２ｍの丸太を用いているが、表皮を残し加工の痕跡が見られないことから、倒木を転用したものと推定される。丸太は谷の右岸側（西側）にやや傾斜しており、25cmの高低差を有する。この丸太と直交させ、右岸側にはほぼ同径で長さ1.2mの丸太を埋置する。左岸側には、長さ90cm・直径５cmの枝と思われる細木を使用している。上部の丸太の中央付近下流側には、長さ43cm・直径4.5cmの丸木杭(1)が検出された。丸木杭は表皮を剥ぎ先端を削り出しているほか、中央にも加工の痕跡が見受けられ、北東から南西方向へ深さ35cmほど打ち込まれている。

東谷においても若干の木が出土したが、加工痕や人為的な並び方も無く、流木・倒木の域を出るようなものではない。As-C降下時の谷底面は、東谷が西谷より15cmほど高い。そのため調査時点においては、西谷で湧水が激しいのに対し東谷はやや乾燥化していた。当時もそれに近似した状況であったとすれば、西谷のみに木道を渡したと想定される。

第２項　方形周溝墓

１号方形周溝墓　（Ａ区）

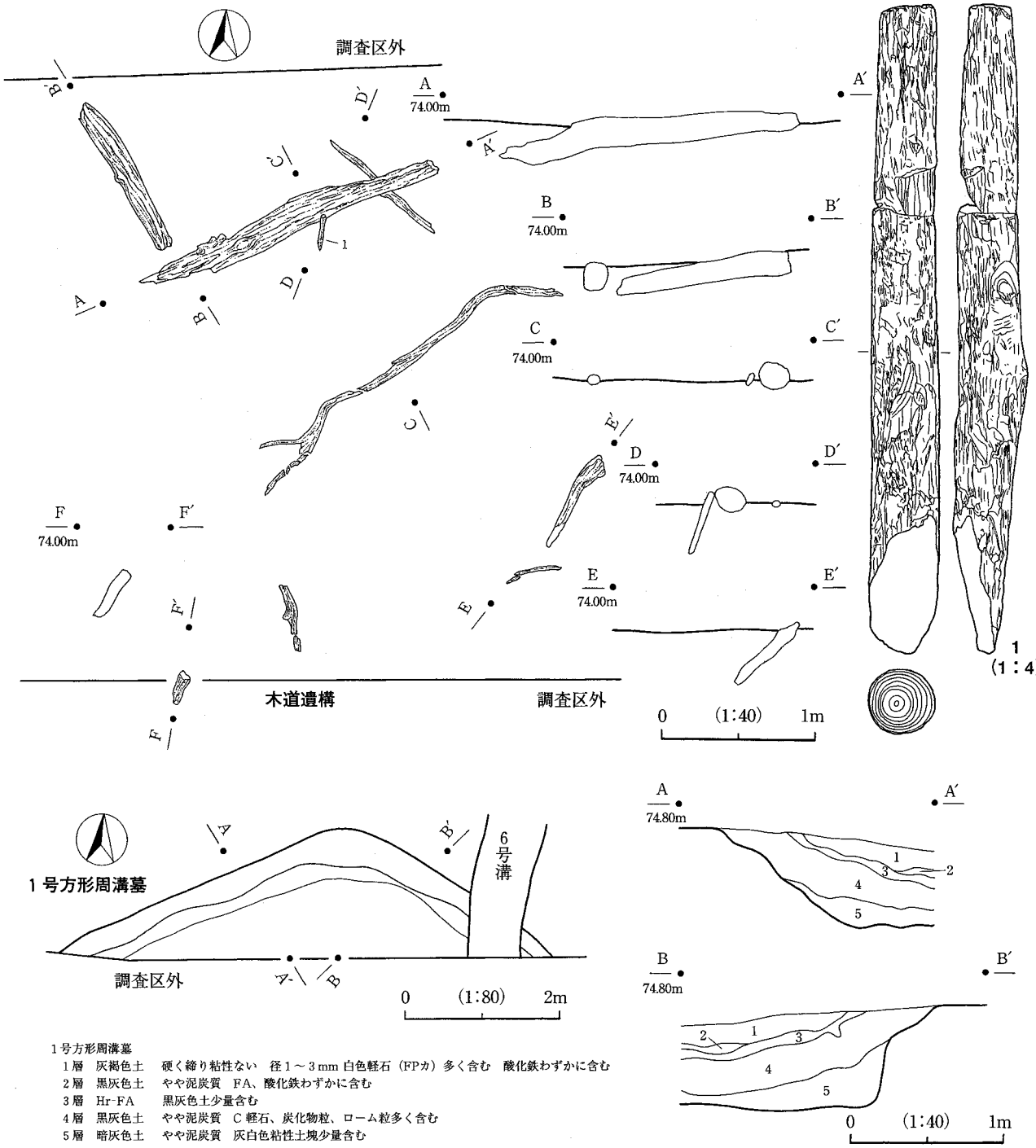
ａ．遺構（第53図、図版11－３～４）

Ａ区中央及び東端の浅い谷地形に挟まれ、南方へ広がる微高地の縁辺部付近に占地する。周溝が全周する形態と推定されるが、規模や主体部は明らかでない。調査区内に入るのは北西溝と北東溝がつながる北側隅だけで、一部は近代溝に切られている。周溝の方向性は北西溝長軸がN60°E、北東溝長軸がN65°Wである。周溝内辺が調査区外にあるが、断面形から推測すると、周溝は上幅2.5m・下幅２ｍ前後になるであろう。深さは65cmを測り、横断面形は逆台形に近い舟底形を呈する。埋土最下層には厚さ20cmほどの暗灰色粘性

土があり、その上に浅間Ｃ軽石の混入する黒灰色土が堆積する。さらにその上面を厚さ５cmほどの榛名FA純層が弧状に被覆する。最下層の暗灰色粘性土には、基盤層の灰白色シルト質粘性土が塊状に含まれており、方台部の盛り土からの流入が考えられる。

ｂ．遺物

FA層より上位で土師器片２点が見られたのみで、第４・５層からの出土はなかった。



１号方形周溝墓

１層　灰褐色土　硬く締り粘性ない　径１～３mm白色軽石（FPカ）多く含む　酸化鉄わずかに含む
２層　黒灰色土　やや泥炭質　FA、酸化鉄わずかに含む
３層　Hr-FA　黒灰色土少量含む
４層　黒灰色土　やや泥炭質　Ｃ軽石、炭化物粒、ローム粒多く含む
５層　暗灰色土　やや泥炭質　灰白色粘性土塊少量含む

第53図　木道遺構及び出土杭、１号方形周溝墓

第3節　古墳時代後期

第1項　小谷地形

1．谷地水田・5号溝（A区）

a．遺構（第54図、図版11－5～7）

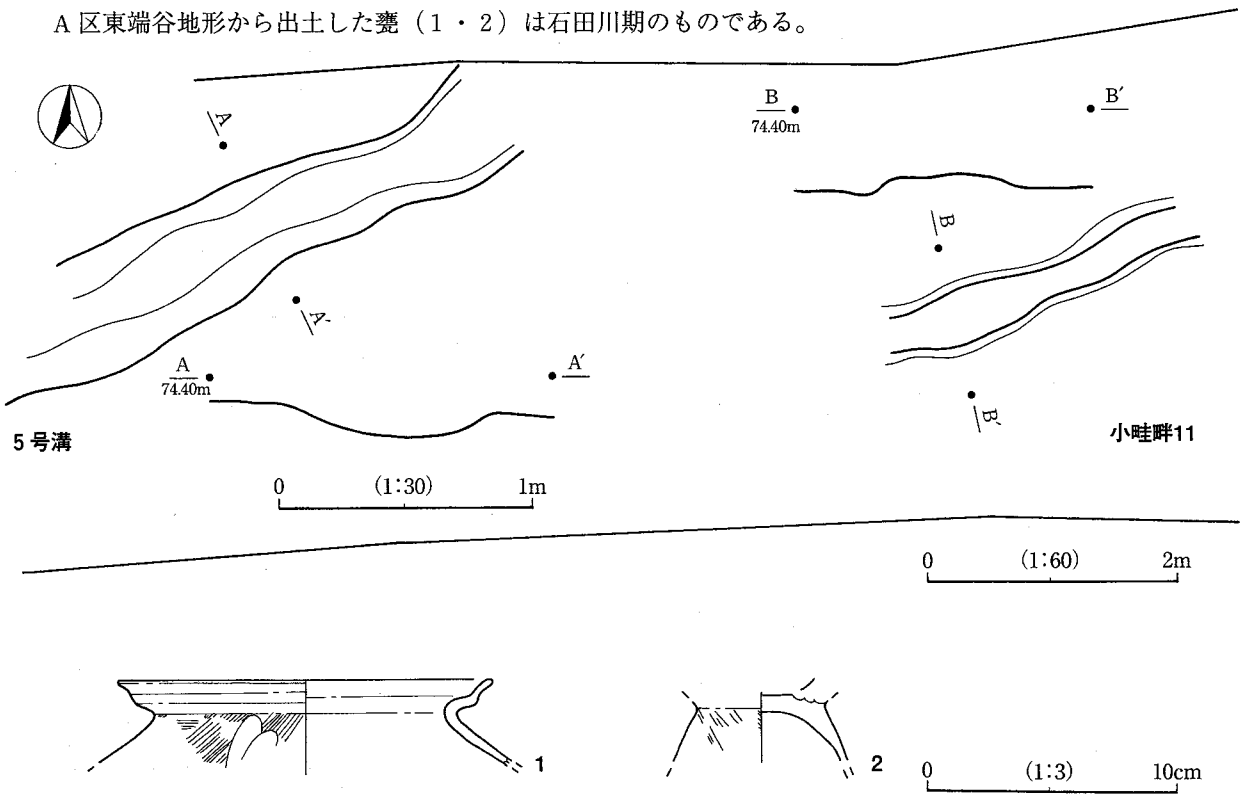
A区中央の小谷地形は、浅間C軽石降下後も再び湿地化している。榛名FA下はC軽石下と同様の黒色泥炭土が堆積し、土中には葦等の植物遺体を未分解のまま含んでいる。FA降下時の谷底面はC降下時よりも25cmほど上位にあり、谷はおよそ3分の2まで埋没した状態であった。東谷・西谷の間は中島状にやや微高しており、谷底面との比高差は30cmを測る。

東谷では谷地形に直交する小畦畔11を検出した。長さは約2.7mで下流の南側へやや湾曲し、西側の立ち上がりは不明瞭である。上幅42cm・下幅56cm・高さ10cmを測り、黒色泥炭土を盛り土したのみの構造である。谷底面は北から南へ平均勾配2度の緩傾斜となっており、小畦畔の南北では約10cmの高低差が生じている。東谷ではおそらく緩やかに傾斜する谷地形に対して、直交する畦畔を設けることにより段々水田を営んでいたものと推定される。それは谷に接する微高地縁辺を削平した形跡もなく、自然地形に最小限の労力を加えただけの構造である。

東谷・西谷に挟まれる中島状微高地には、東谷から西谷へと流れる5号溝が検出された。上幅90cm・下幅40cmを測り、深さ5cmの極めて浅い溝である。底面の標高は、東西の端部で10cmほどの高低差を有する。東谷の谷地水田はかなり湿潤であったために排水を必要としたと考えられるが、本溝がその機能を果たしたと推定される。なお、FA下の谷底面は東谷より西谷が15cmほど低い。

b．遺物（第54図、表13、図版15）

A区東端谷地形から出土した甕（1・2）は石田川期のものである。



第54図　FA層下畦畔、5号溝、小谷地形出土遺物

第４節　奈良・平安時代

第１項　竪穴住居跡

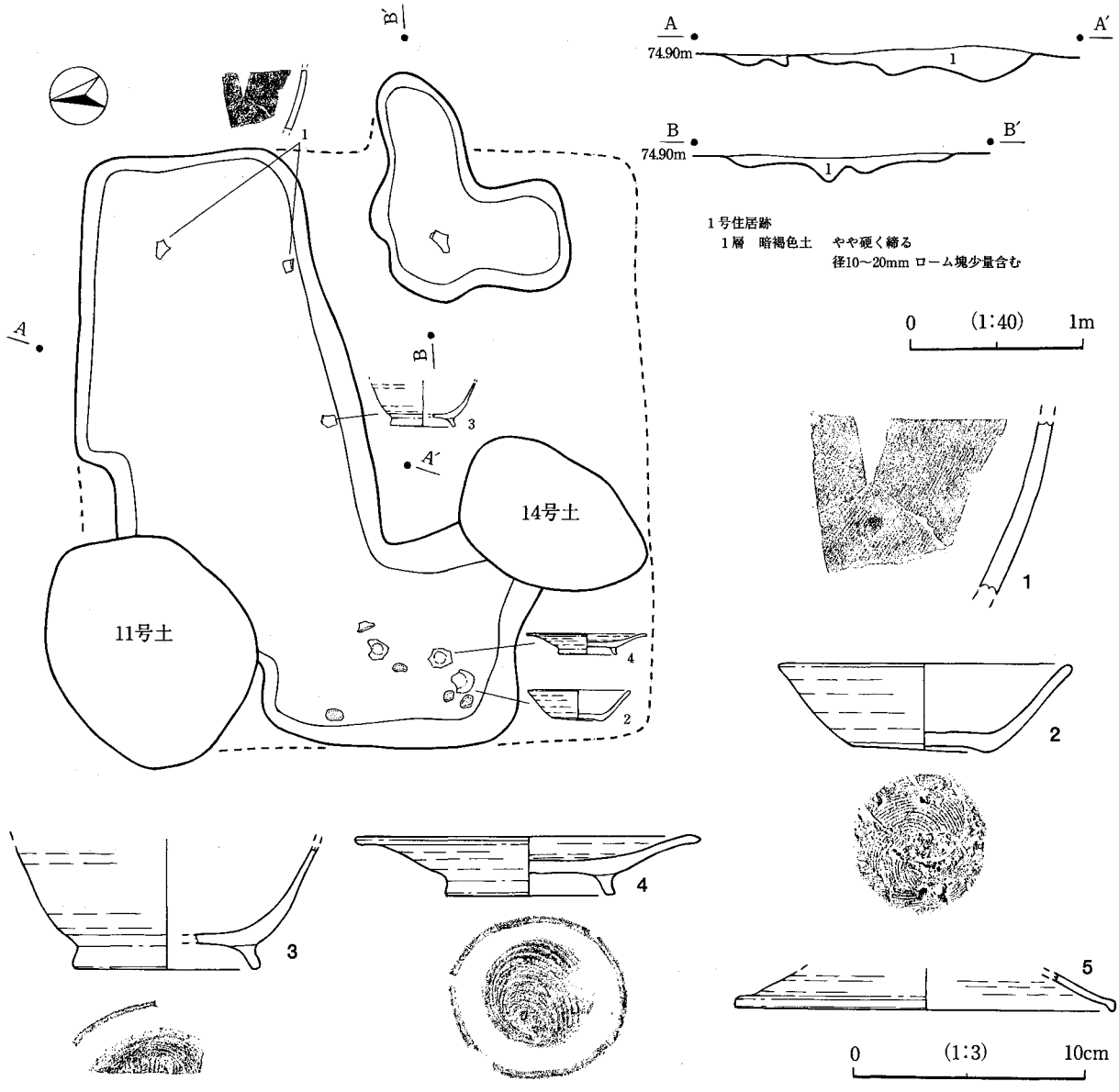
１号住居跡（A 区）

ａ．遺構（第55図、図版11－８）

A 区西半、旧藤川左岸の微高地に位置し、11・14号土坑に切られる。床面・壁は既に消失し掘り方のみ遺存するが、わずかに確認された平面形、灰層の分布から住居跡と判断された。3.2m×3.4m のほぼ方形の平面形を有し、東壁の中央南寄りにカマドを伴う。推定面積は11m^2、主軸方向は N80°W を示す。カマドの壁外長は45cm を測る。掘り方は確認深さ３～20cm と凹凸が著しいが、カマドの燃焼部付近が最も深い。

ｂ．遺物（第55図、表12、図版15）

西壁寄りにやや集中する。須恵器皿(4)・蓋(5)は９世紀後半に帰属する。



第55図　１号住居跡及び出土遺物

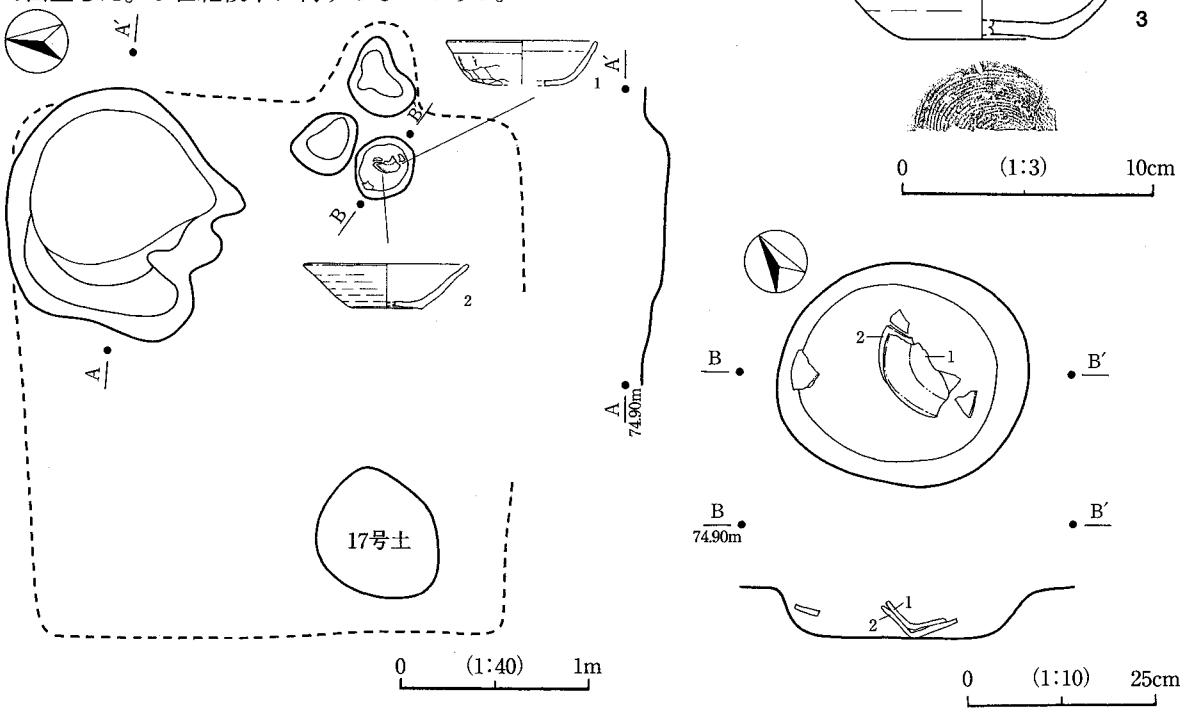
2号住居跡（A区）

a．遺構（第56図、図版12－1）

1号住居跡の東6mに位置するが、床面・壁は消失し掘り方のみ遺存する。平面形は不明であるが、わずかに残存した暗褐色土の分布から北壁・東壁の一部と東壁に付設されたカマドが推定された。掘り方は深さ12cm前後で一定している。

b．遺物（第56図、表12、図版15）

燃焼部に相当すると思われる落ち込みから坏（1・2）が重なって出土した。9世紀後半に属するものである。



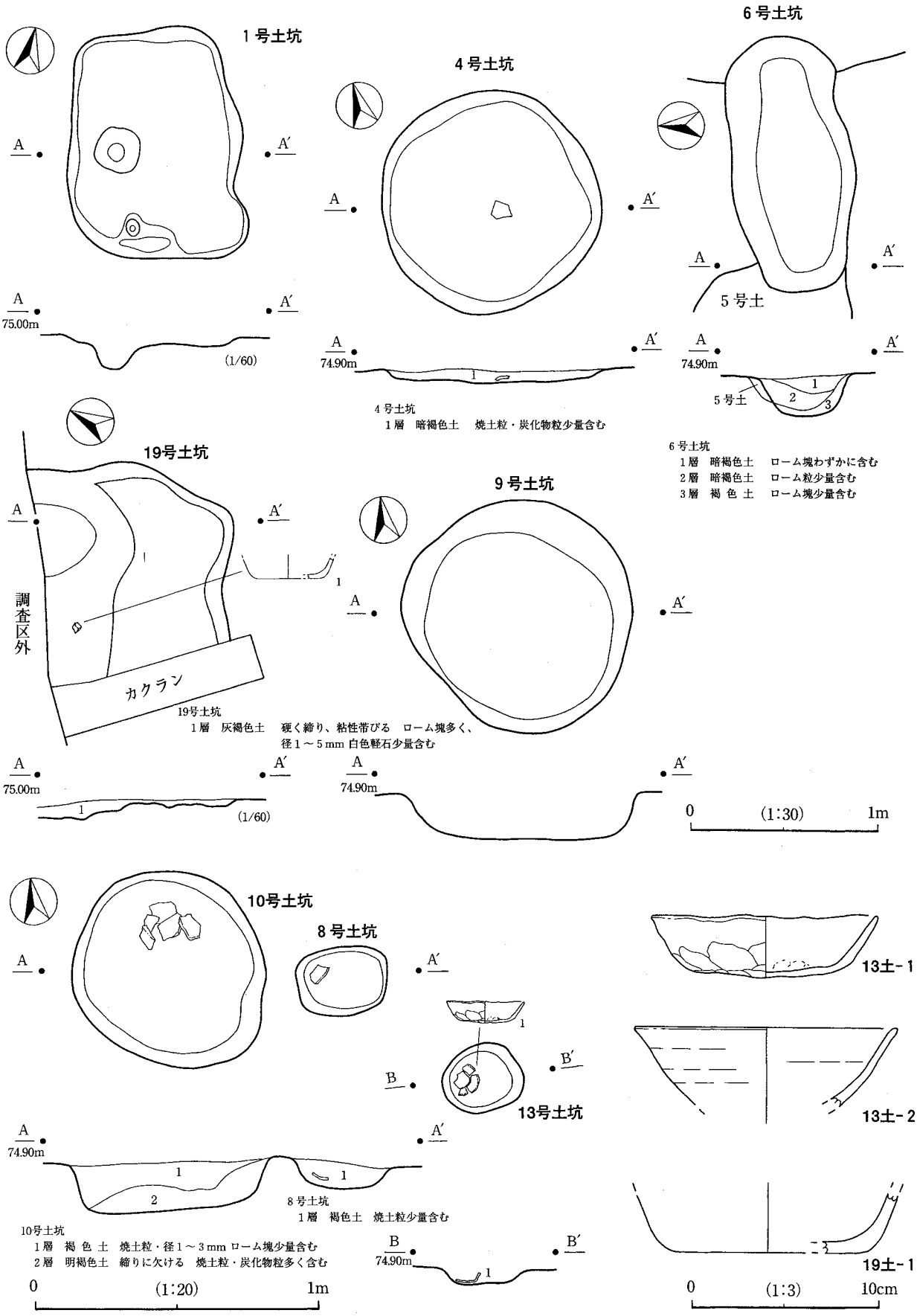
第56図　2号住居跡及び出土遺物

第2項　土坑（第57図、表9・12、図版12－2～3、15）

8基の土坑がいずれもA区西半で検出された。出土遺物は9世紀後半のものが主体で、中頃のものがわずかに含まれる。このうち8・10・13号土坑は埋土の様子から住居跡のカマド掘り方とも考えられ、1号住居跡に西接する住居跡を想定することも可能である。

表9　平安時代土坑一覧表

遺構名	平面形	長軸・短軸・深さ(cm)	断面形	備　考
D－1	隅丸長方形	246・182・12	皿状	ピットを伴う
D－4	円形	118・118・ 7	皿状	
D－6	不整楕円形	136・ 66・21	U字状	5号土坑を切る
D－8	隅丸長方形	32・ 25・ 9	擂鉢状	
D－9	円形	124・123・25	U字状	
D－10	不整円形	70・ 68・17	U字状	
D－13	不整円形	29・ 24・ 6	皿状	土師坏出土
D－19	不整形	・　・18	凹凸顕著	須恵器甕底部片出土



第57図　土坑及び出土遺物

第3項　溝

1号溝

a．遺構（第58図）

A区西半の微高地縁辺部を等高線に沿い北西から南東へ走向する。本溝の東側には浅間B軽石に埋没した水田跡が存在し、その耕作土である黒灰色粘性土の堆積は溝の西側では認められない。水田の経営に直接関わる機能は見いだせないが、居住空間と生産空間とを区画する性格は強い。規模は上幅40cm、下幅15cm、深さ6cmで小さい。

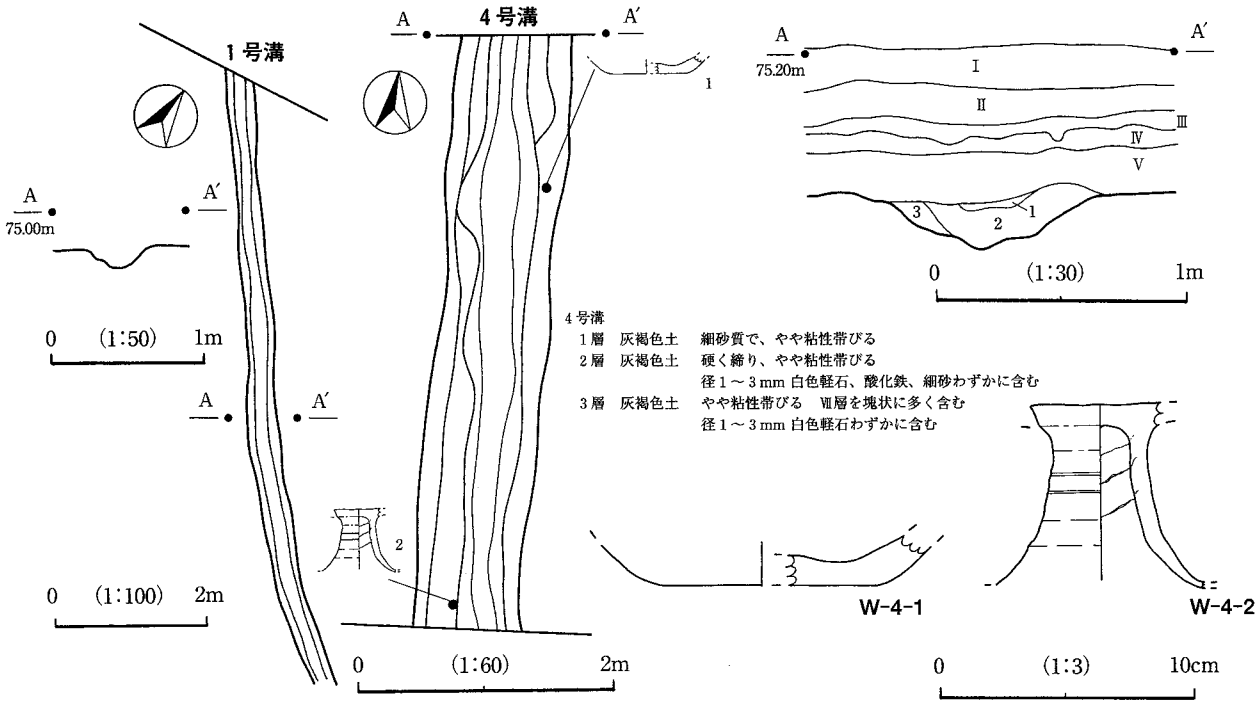
4号溝

a．遺構（第58図）

A区東側の旧谷地は浅間B軽石降下時には全面水田化されているが、そのB水田の耕作土である黒灰色粘性土を除去したところ、標準土層Ⅶ層を切り込んだ溝が検出された。溝は直線的に南北走向しており、南へ緩やかに傾斜する。規模は上幅1.2m、中段幅60cm、下幅20cm、深さ45cmを測り、断面は浅い舟底形を呈する。埋土はⅦ層を塊状に含む灰褐色土が主体で、人為的に短期埋没した痕跡が認められる。本溝の機能は、谷に挟まれる微高地上を南北に縦断する企画性から、何らかの土地利用に伴う引水を目的としたものであろう。ただし本溝と同時期の遺構は他に無い。早急に埋没したのはB水田開田に起因すると推測される。

b．遺物（第58図、表12、図版15）

遺物は須恵器片2点のみで、埋土上部から甕の底部（1）が、下部からは高坏の脚部（2）が出土している。（2）の胎土には、藤岡産の製品に特徴的な結晶片岩が混入しており、脚部の透かしが無く上部への鋭い立ち上がりの形状から8世紀に遡るものであろう。



第58図　1・4号溝及び出土遺物

第４項　水田跡

浅間Ｂ軽石下水田跡（Ａ・Ｂ区）

ａ．遺構（第59・60図、表10・13、図版12－４～８、13－１～２、15）

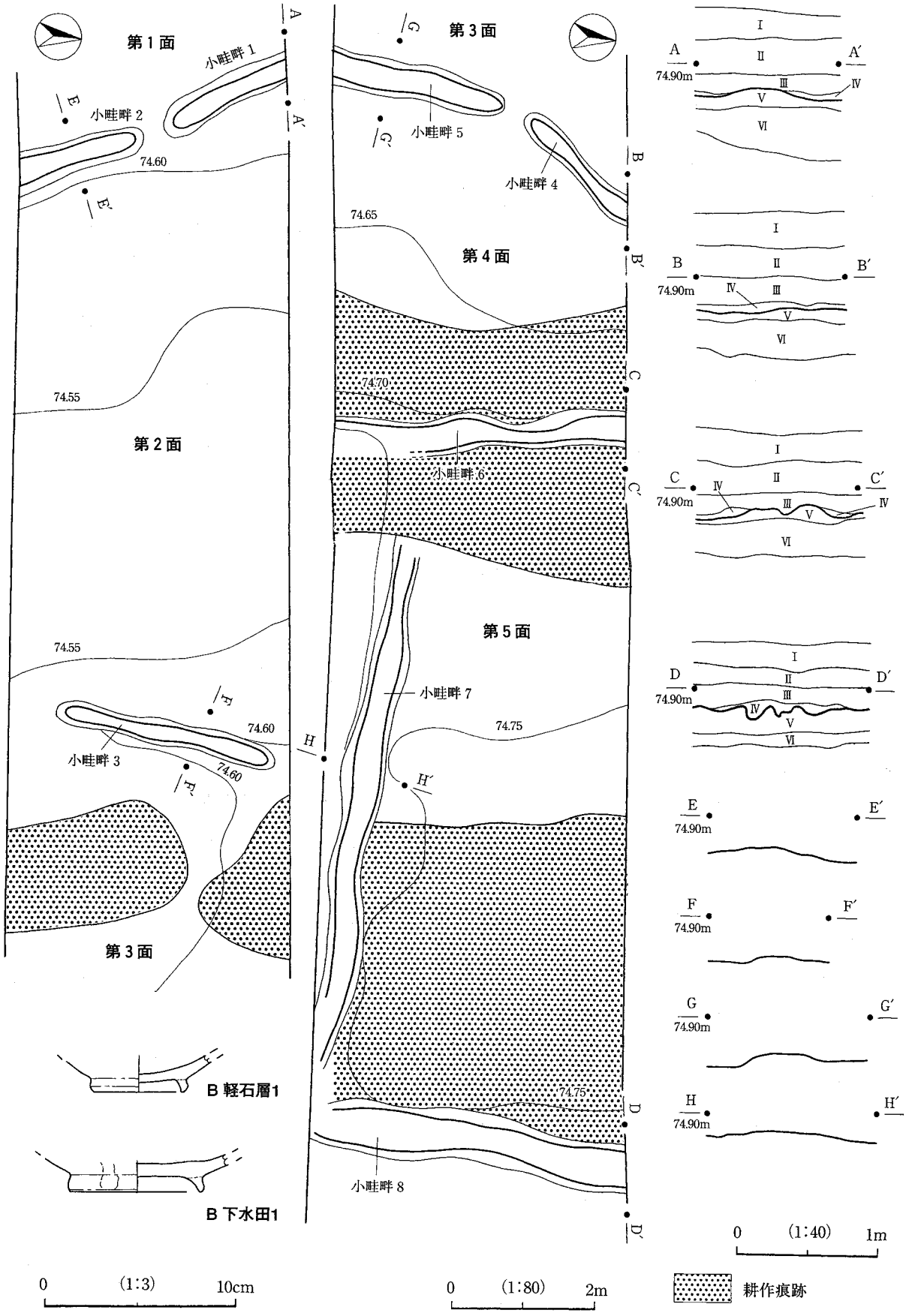
本遺跡近辺は８世紀頃の集落が確認されておらず、律令制施行に伴う当初の開発が及ばなかった可能性がある。律令体制の衰退が顕著になり始める９世紀後半になると、公的性格を欠いた集団による土地利用が開始される。古墳時代において明瞭であった谷地形及び中島状微高地は、FA あるいは FP 降下後の二次的な泥流層によりほぼ完全に埋没し、わずかな凹地だけが旧地形を示す状態であった。谷に接する微高地に占地した新たな集落は、この泥流層上に水田を開いており、水田耕作土である黒灰色粘性土と泥流層の平面分布はほぼ一致する。水田は浅間Ｂ軽石の降下により廃絶している。Ｂ軽石は７cm 前後の厚さで水田面の大半を被覆していた。

東西幅約100m に及ぶ水田面の下方には、３箇所の谷地形が確認されており、ここでは仮に東から東谷・中谷・西谷と呼ぶ。東谷は南東方向へ、中谷・西谷は合流して南方向へ流下している。Ｂ水田は、この谷に位置する部分がやや低位になっており、埋没谷に残存した微細な起伏の影響を受けながら水田面を区画している。すなわち水田面上の等高線はおおむね南北を基調に走行しており、小畦畔はその等高線に平行または直交して配されている。小畦畔に区画される各水田面は完全な区画は無く、いずれも部分的であるが、第１～第６面と仮称を付した。水田面の標高は第５面の74.78m が最高点、第２・３面の74.52m が最低点で、26cm の高低差を有する。第３面から第５面にかけての東西の勾配は１度、第２・３面の南北の勾配も１度である。検出された小畦畔は、南北走行のもの９条、東西走行のもの１条を数える。いずれも水田耕作土と同質の黒灰色粘性土を盛り土したのみの構造で、補強材等を使用した痕跡は認められない。各畦畔の計測値は表10のとおりである。

第２・３・４・５面の東西幅は、それぞれ平均で９m、10m、４m、10m を測り、統一性は無い（南北幅はいずれも不明）。また条里制水田に見られる１町四方の方格の土地割や長地・半折型等の坪割を想起させる区画性は看取されない。それは河川状に蛇行する旧谷地を水田化したことに起因するであろう。可耕地が狭小で起伏があるため、大規模な平坦面を確保できず地形に則した区画にならざるを得なかったのである。たとえこのＢ水田の初現形態が区画性の強いものであっても、陥没傾向のある本水田は絶えず小畦畔のつけ替えの必要が生じ、開田当初の区画を保持するのは困難であったと推測される。南北より東西方向が傾斜が強いので、南北に長い長方形の区画割を想定することも可能であるが、本調査のみで結論づけることはできなかった。ただ第１～８小畦畔の配列からすると、東西方向の小畦畔に対して、南北方向のものがより区画性が強く優先していることだけは言えそうである。

全体的な潅漑方法については、引水のための溝・水路が検出されておらず自然勾配を利用して各面に配水したものと思われる。水口は２箇所で検出されており、小畦畔１と２の間、４と５の間が相当する。いずれも幅30cm 前後、東西方向の水の流れである。水口の検出されない第５・６面は満水時の田越しによる配水を行なっていたとも考えられるが、水田面の標高差からは、南北よりも東西方向のかけ流しの可能性が強い。

水田面上には、鋤の使用痕と思われる定型化した鋭い打ち込みが集中的に遺留している部分が見られた。鋤の痕跡は幅15cm・奥行き10cm・深さ10cm 前後で一定しており、鋤先端部の丸い形状を明瞭に示している。痕跡が見られたのは小畦畔３の東側、小畦畔６・８の東西の３箇所で、畦畔上にも遺存していた。痕跡の重複は無く同一方向を示すことから、南向きのなんらかの作業が１回行なわれたことがうかがえる。



第59図　A区浅間B軽石下水田跡及び出土遺物

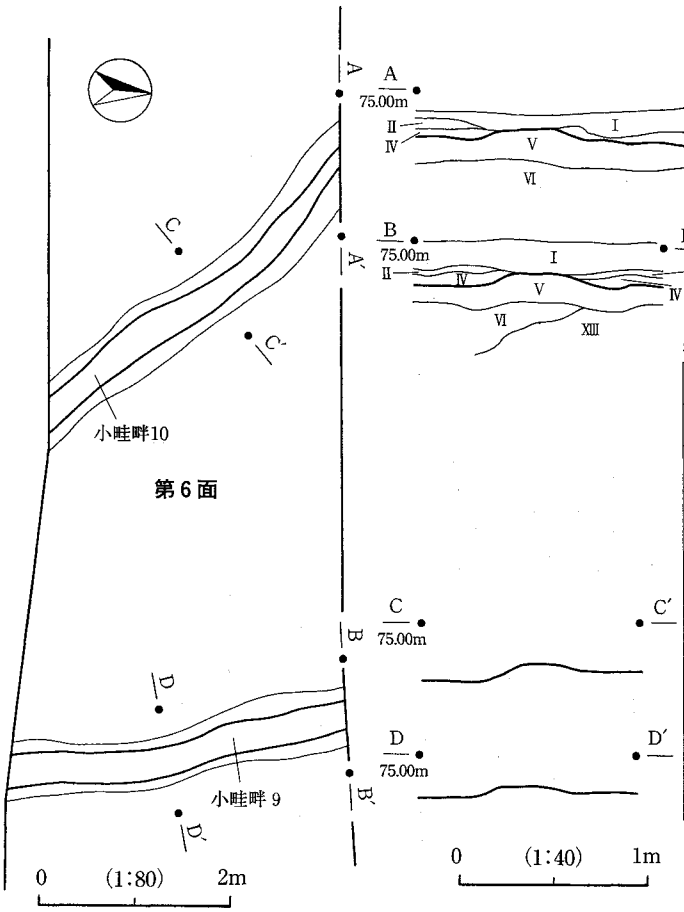


表10　B区浅間B軽石下水田跡畦畔計測表

番号	方　位	長　さ	上幅	下幅	高さ
1	N－35°－W	1.9m＋α	29	50	8
2	N－25°－W	1.8m＋α	35	68	10
3	N－8°－E	3.14m	24	38	8
4	N－40°－E	1.9m＋α	24	40	5
5	N－10°－E	2.5m＋α	36	54	10
6	N－10°－W	4.1m＋α	36	52	12
7	N－86°－W	7.2m＋α	38	62	7
8	N－5°－E	4.5m＋α	56	74	7
9	N－18°－W	3.6m＋α	34	70	8
10	N－47°－W	4.1m＋α	35	66	9

単位：cm

第60図　B区浅間B軽石下水田跡

第5節　中・近世

第1項　土坑墓（第52図、図版13－3～8、14－1～4）

調査区最東部のD区トレンチ調査で土坑3基が確認され、調査区拡張の結果6基を数えた。土坑はいずれも形態・内部施設・出土遺物から中・近世の墓と認められた。周辺はB水田耕作土の黒灰色粘性土が東方に堆積し始める地点、後背湿地へ傾斜する微高地縁辺部に立地する。

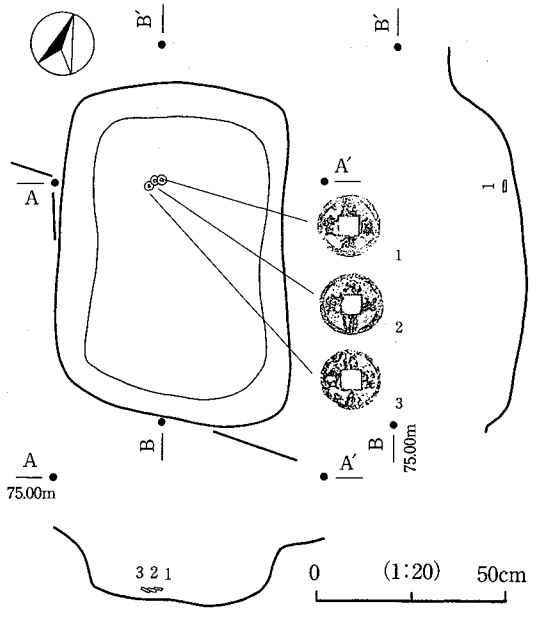
1号墓

a．遺構（第61図、図版13－3～4）

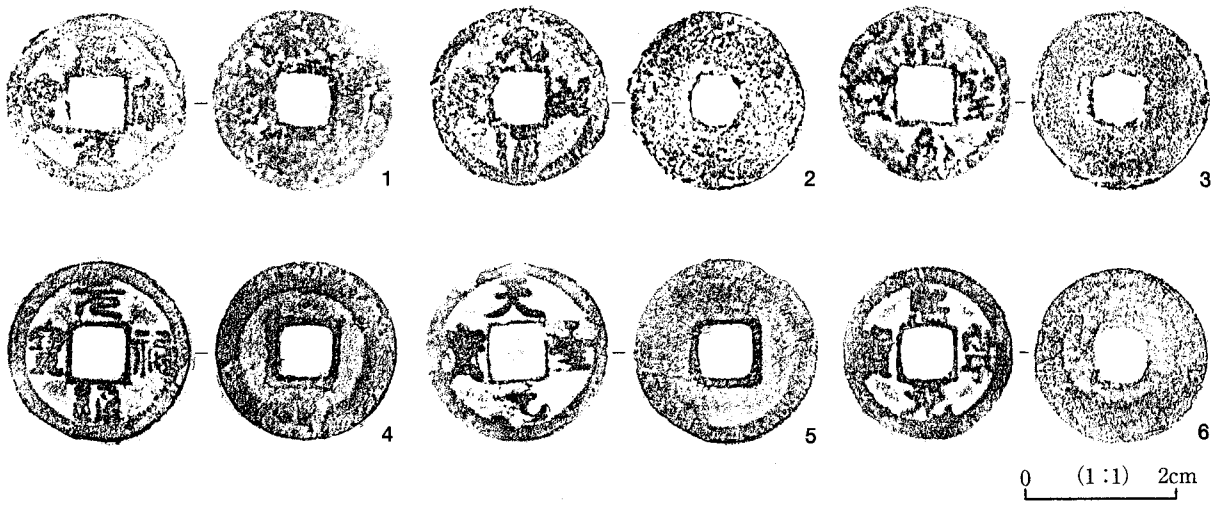
確認面での平面形は南北軸89cm×東西軸62cmの隅丸長方形を呈するが、上部は削平され消失している。残存する深さは20cm、底面も南北軸74cm×東西軸48cmの隅丸長方形であるが、東西辺はやや内側への矩形をなす。断面形は凹凸のあるやや浅い舟底形を示し、壁は外反気味に立ち上がる。木棺等の内部施設は伴わず、直葬とも考えられる。

b．遺物（第62図、表12、図版13－15・16）

人骨は未検出。北側で古銭6枚が出土し、5枚の貨銭名が判明している。天聖元寶（1023年：初鋳年代、以下同じ）1枚、熙寧元寶（1068年）2枚、元祐通寶（1086年）



第61図　1号墓



第62図　1号墓出土遺物

1枚、紹聖元寶（1094年）1枚で、いずれも北宋銭である。

2号墓

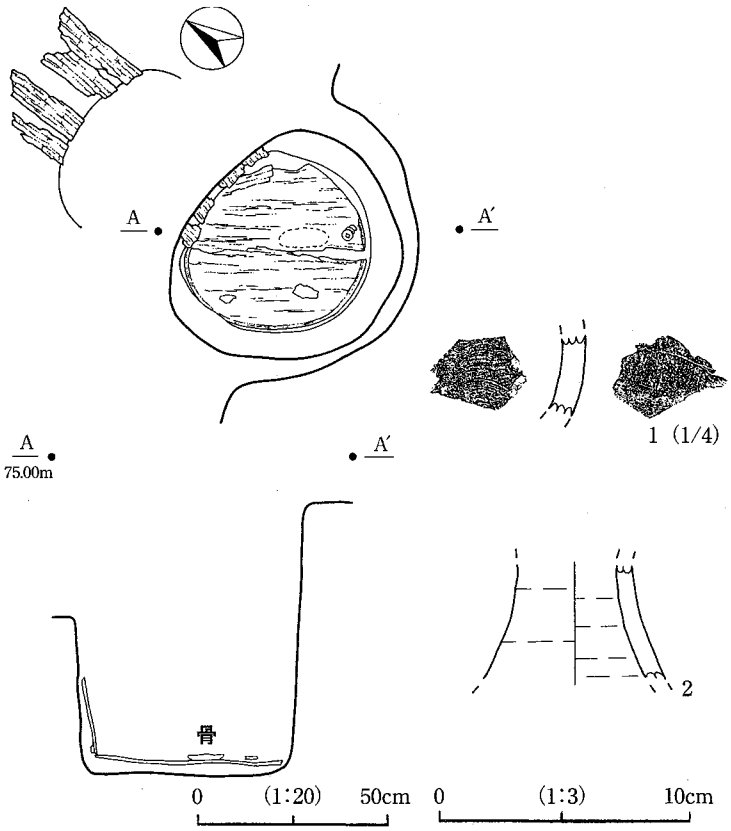
a．遺構（第63図、図版13－3・5～6）

直径60cmの円形の平面形を呈するが、北側上半部は消失している。残存する深さは72cmを測り、底面の標高は74.28mで6基のうち最も低位である。底面は直径52cmの円形で平坦、壁はほぼ垂直に立ち上がる。内部には円形木棺を埋設する。木棺は底板の外周に縦板を立ち並べ箍で固定する早桶と呼ばれる簡素な作りである。底板はほぼ原形を留めており、厚さ5mmほどの板4枚を集成している。底板相互の接合面には木釘等の使用痕は認められなかったものの、隙間のない精巧な面を作り出している。側板を組み合わせるための外周沿いの溝・木釘あるいはテーパーは認められなかった。底板表面には割裂痕が残る。

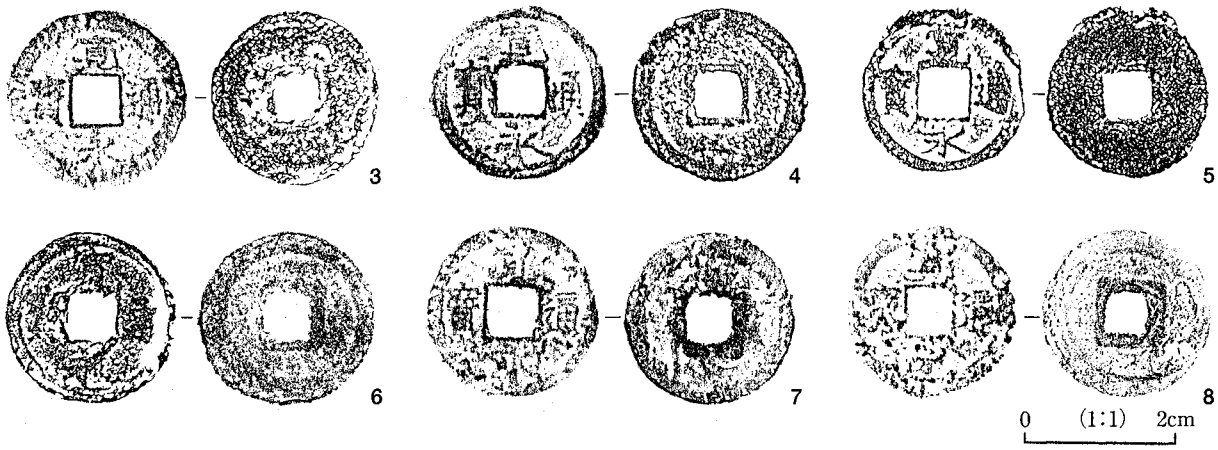
側板は北側に4枚が遺存する。横幅はいずれも約8cmを測る。残存部の最大長27cm、厚さはいずれも5mmを測る。側板相互の接合面におけるテーパー・連結痕は、腐食が激しく観察は困難であった。底板を組み合わせるための溝・木釘等も確認されていない。側板は表面には割裂痕が残る。底面上2cm付近の側板外側には、黒色に腐食した竹と思われる箍がほぼ全周した痕跡が確認された。

b．遺物（第63・64図、表12、図版16）

底板上の中央やや南寄りで骨片が少量出土した。覆土上部に磁器片（2）1点が混入していた他、古銭6枚が副葬されていた。いずれも寛永通寶であった。



第63図　2号墓及び出土遺物(1)



第64図　2号墓出土遺物(2)

3号墓

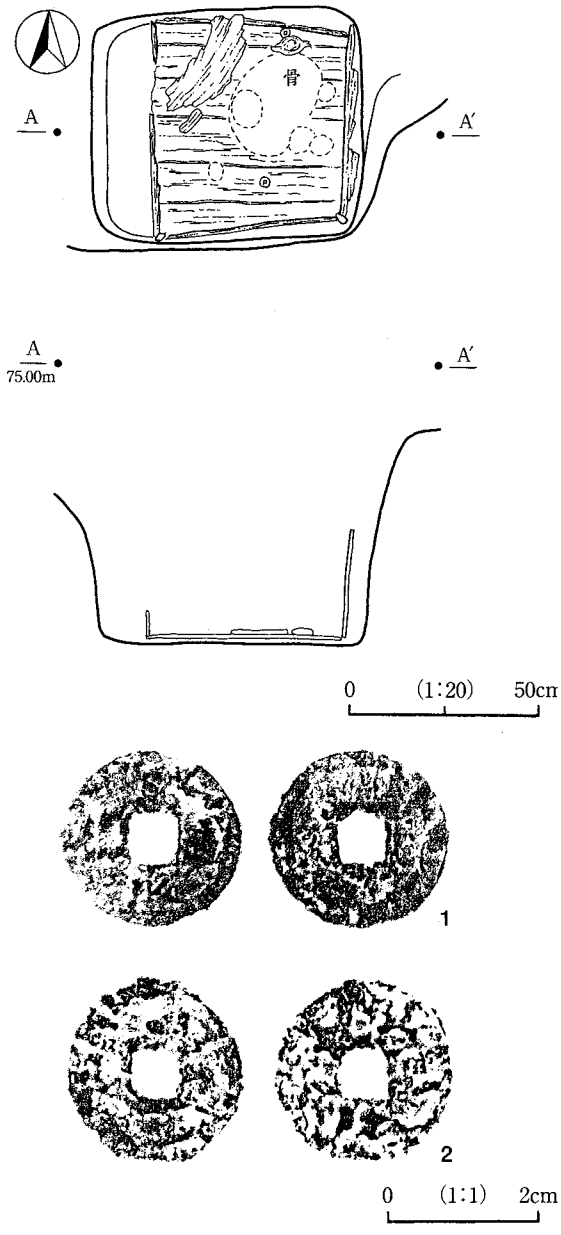
a．遺構（第65図、図版13－3·7·8、14-1·2）

南北軸60cm×東西軸71cmで方形に近い平面形を呈する。残存する深さは57cmを測り、底面の標高は2号墓より15cmほど高い。底面は南北軸58cm×東西軸63cmで平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、部分的に段掘りの痕跡が認められた。内部には方形木棺を埋設する。木棺は、方形の底板と長方形の側板を重ね合わせ四隅を角材で固定する構造で、6基中最大規模のものである。底板は57cm×51cmの一枚板で、厚さ5mmほどである。板目に取られ表面に割裂痕が残る。底板の四辺は東西南北方向に沿っている。

側板には、板目に取られた厚さ5mmの材を用い、残存部の最大縦幅28cmを測る。底板との接合方法は腐食が著しく不明であった。側板相互の接合には一辺1cmの角材をあてがっている。角材には上下2か所に直径2mmの穿孔が見られるが、木釘・鉄釘等の留め具は出土していない。北寄りの底板上8cm付近には、蓋と思われる板材2点が水平に検出された。厚さ8mmほどで柾目に取られる。

b．遺物（第65図、表12、図版16）

底板上面は黒色の油脂分で覆われており、北西隅を除く全面から人骨が出土した。いずれの人骨も軟質で、東寄りでは歯が出土した。古銭2枚が副葬され、1枚は寛永通寶（1）であった。



第65図　3号墓及び出土遺物

4号墓

a．遺構(第66図、図版13-3、14-3･4)

3号墓と同じ構造の方形木棺墓である。確認面での平面形は南北軸88cm×東西軸76cmの不整楕円形を呈する。残存する深さは61cmを測る。掘り方は二段掘りされており、底面は62cm×58cmの方形を呈し、平坦である。底板は39cm×37cmの一枚板で厚さ5mm、板目に取られている。底板の南北辺は3号墓に比べやや西に振れる。

側板は厚さ5mm、板目に取られ、残存部の最大縦幅16cmを測る。北側及び南側の側板は土圧を受け南に傾いている。底板との接合方法は不明であるが、側板相互の接合は3号墓と同様である。北西及び南西隅に遺存した角材には穿孔は見られない。

b．遺物(第66図、表13、図版17)

鉄銭が副葬されるが、酸化が著しく正確な枚数は不明である。

5号墓

a．遺構（第52図）

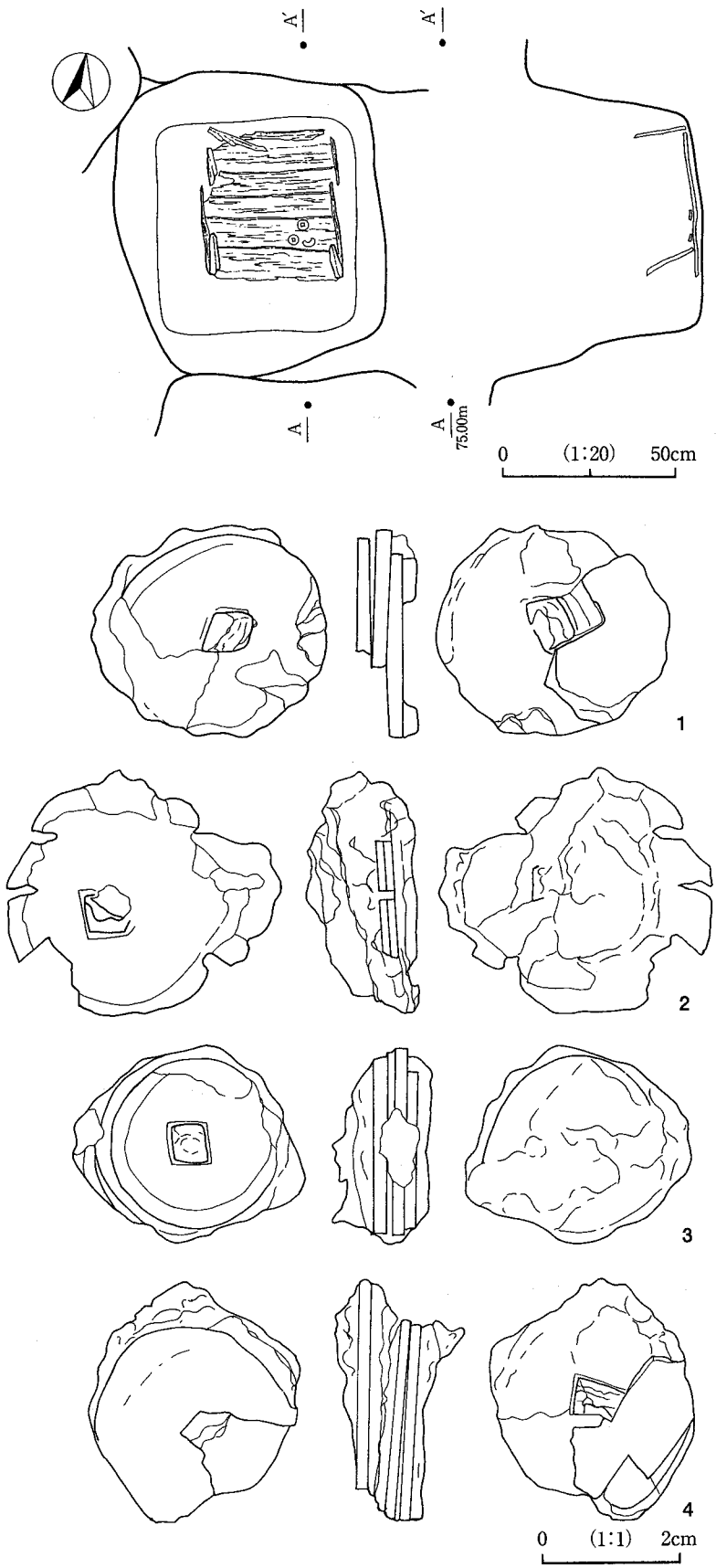
確認面での平面形は70cm×57cmの長方形を呈するが、底部を除き大半を消失している。底部に45cm×44cmの方形で深さ5cmの掘り方が見られ、その側面に腐食した板材が遺存することから方形木棺を埋設したものであろう。

b．遺物

底面上で幅3cmの薄い板状の鉄製品が出土した。

6号墓

a．遺構（第52図）



第66図　4号墓及び出土遺物

57cm×45cmの楕円形、深さ55cmの掘り方を有し、底面・側面に腐食した板材が遺存することから円形木棺を埋設したものと考えられる。遺物は検出されなかった。

第６節　時期不明の遺構

第１項　掘立柱建物跡

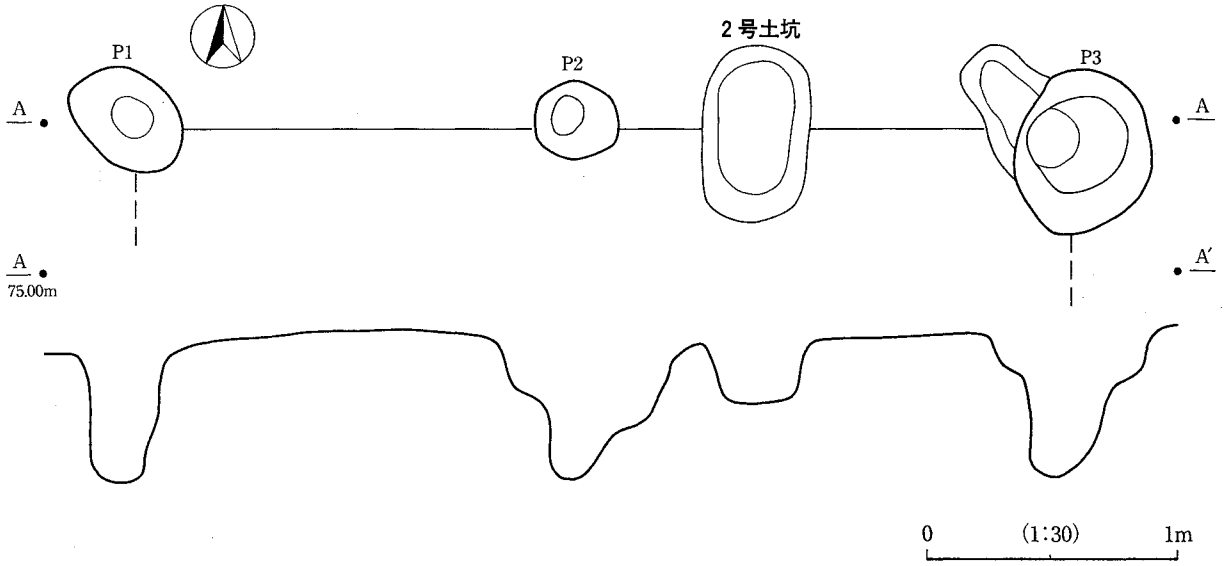
１号掘立柱建物跡（A 区）

ａ．遺構（第67図、図版14－５～８）

A 区西半、旧藤川左岸の微高地に位置する。南接地での調査結果と合わせ、桁行３間・梁行２間の側柱建物であることが判明している。北東・南西方向に長く、主軸方向はＮ２°E を示す。本調査では北東側梁行の柱穴３基を検出し、柱間寸法は西から3.5m、3.9m を測る。桁行・梁行の方向は１号住居跡の方向性に近似し、同時期の可能性を残すが断定はできない。２号溝に切られる。

ｂ．遺物

Ｐ２から９世紀代の土師器坏片２点、Ｐ３から９世紀後半の土師器甕片３点が出土している。



第67図　１号堀立柱建物跡、２号土坑

第２項　土坑（第68・69図　表11）

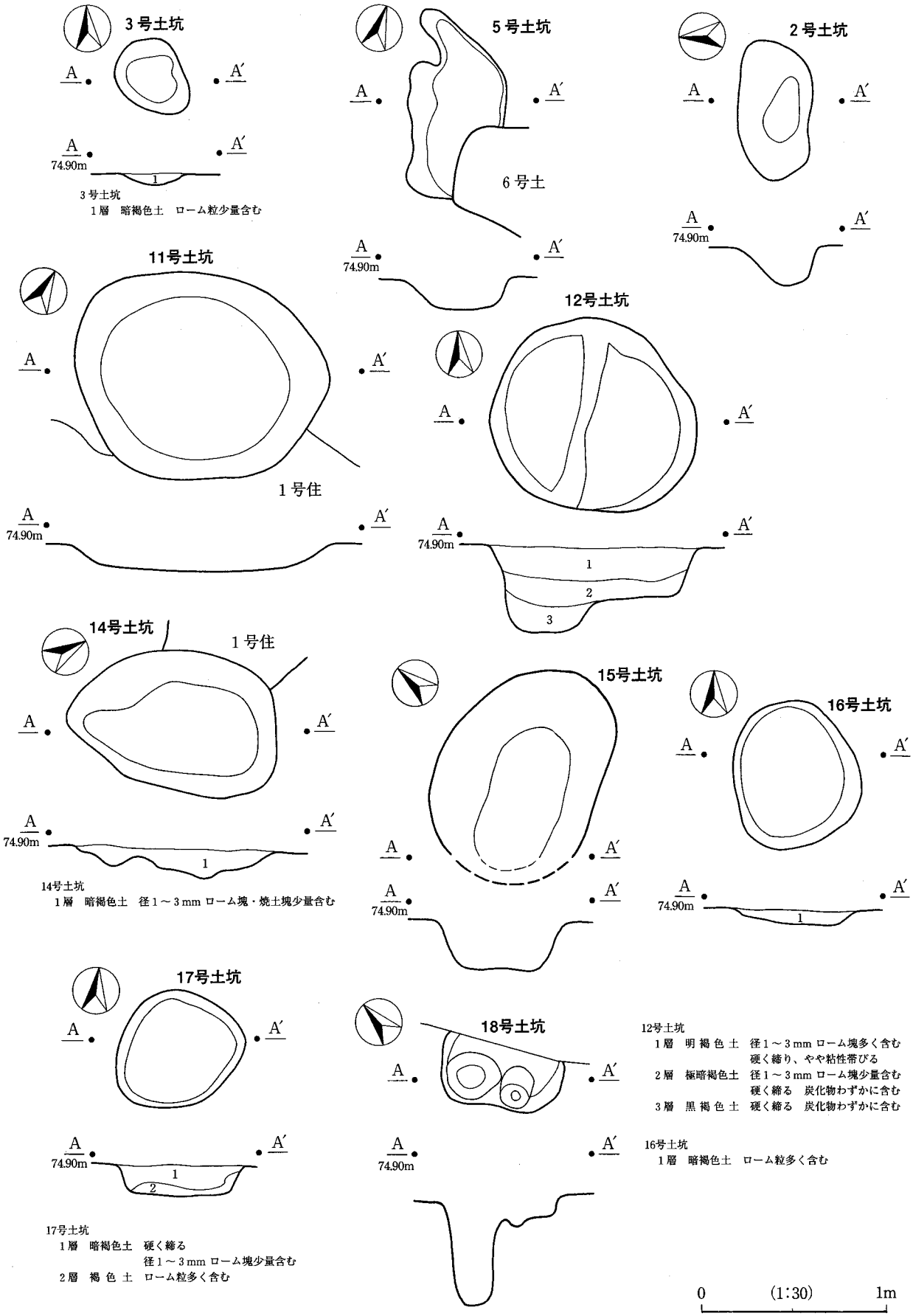
計18基の土坑を時期不明とした。ほぼA区西半に集中する。

表11　時期不明土坑一覧表

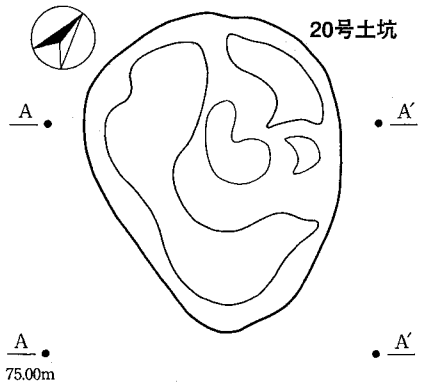
遺構名	平面形	長軸･短軸･深さ	断面形	備考
D－2	隅丸長方形	7・ 42・22	U字状	
D－3	不整楕円形	45・ 35・ 6	弧状	
D－5	不整形	100・ 52・17	U字状	6土に切られる
D－7	不整楕円形	74・ 40・22	U字状	
D－11	楕円形	150・133・15	皿状	
D－12	円形	112・102・45		
D－14	不整楕円形	113・ 75・15	弧状	底面凹凸する
D－15	楕円形	119・ 89・27	U字状	
D－16	不整楕円形	69・ 79・ 7	弧状	

遺構名	平面形	長軸･短軸･深さ	断面形	備考
D－17	不整円形	61・ 69・17	U字状	
D－18	不整形	66・ ・59		柱穴か
D－20	不整楕円形	124・101・28	弧状	底面凹凸する
D－21	楕円形	57・ 31・11	擂鉢状	
D－22	不整楕円形	97・ 76・17	弧状	
D－23		106・ ・	皿状	底面凹凸する
D－24	楕円形	113・ 70・ 5	皿状	
D－25	楕円形	63・ 38・11	擂鉢状	
D－26	楕円形	80・ 57・11	皿状	

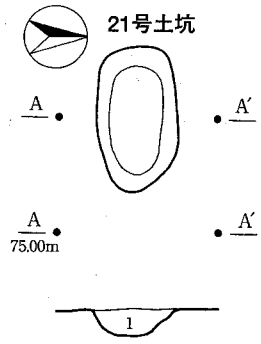
長軸×短軸×深さの単位：cm



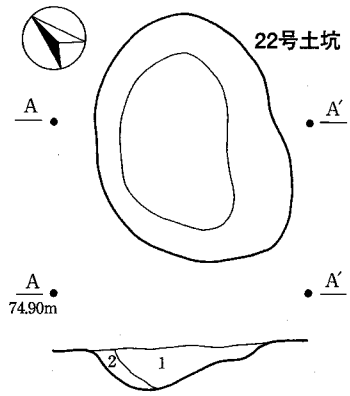
第68図　時期不明土坑(1)



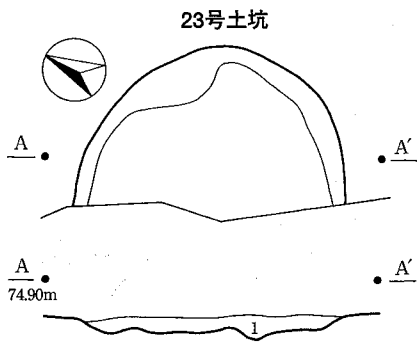
20号土坑
1層　暗灰褐色土　硬く締り、粘性ない
2層　黒灰色土　やや硬く締り、粘性ない
径1～3mm白色軽石少量含む
3層　暗灰褐色土　やや締りに欠け、粘性帯びる
酸化鉄多く含む



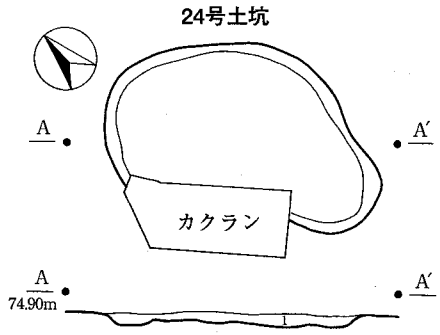
21号土坑
1層　暗灰褐色土　やや硬く締り、粘性帯びる
径1～3mm白色軽石わずかに含む



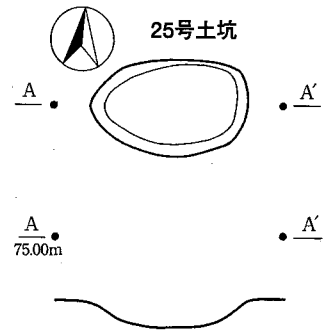
22号土坑
1層　暗黒褐色土　硬く締り、粘性ない
径1～3mm白色軽石少量含む
2層　灰褐色土　硬く締り、粘性ない

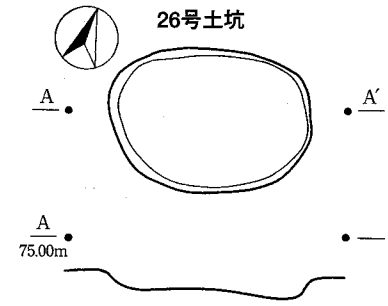


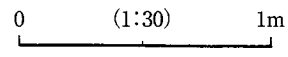
23号土坑
1層　暗黒灰色土　硬く締り、粘性ない
炭化物少量含む



24号土坑
1層　灰褐色土　硬く締り、粘性ない
径1～3mm白色軽石多く含む







第69図　時期不明土坑(2)

第3項　溝

2号溝　（A区）

a．遺構（第70図）

A区西半の微高地上に位置し、1号掘立柱建物跡・20号土坑を切る。撹乱のため部分的に途切れるが、わずかに蛇行しながら南北に走向する。上幅52cm、下幅32cm、深さ18cmを測り、断面形は起伏の少ないW字状である。埋土の暗灰褐色土にはロームが塊状に含まれ、質感は中世以降の新しい印象を受ける。

b．遺物

9世紀代の土師器坏・甕の小片が数点ずつ出土したが、流れ込みの可能性が大きい。

3号溝　（A区）

a．遺構（第70図）

2号溝の東を併走するが、2号溝より直線的で主軸方向はN8°Wを示す。規模は上幅46cm、下幅25cm、深さ24cmで2号溝とほぼ同じ、断面形は浅い弧状である。2号土坑を切る。埋土の2号溝と同じ質感の暗灰褐色土である。

b．遺物

9世紀の土師器坏片1点、須恵器坏片3点が出土した。いずれも小片で、流れ込みの可能性が大きい。

6号溝　（A区）

a．遺構（第70図）

A区1号方形周溝墓を切って南北に走向する。遺構内に現代の廃棄物が多量に含まれ、時期は新しい。

7号溝　（B区）

a．遺構（第70図）

B区中央東寄りに位置し、北西から南東へ走向する。出土遺物は無い。

8号溝　（B区）

a．遺構（第70図）

B区中央西寄りを南北に走向する。上幅56cm、下幅26cm、深さ32cmを測り、断面は扁平なロート状である。埋土下層は短期埋没で流水の痕跡は認められない。上層では水性堆積したシルト質細砂が溝を完全に埋めている。周辺は浅間B軽石に埋没した水田跡の東限に位置するが、水田遺構との関係は不明である。出土遺物は無い。

9号溝　（C区）

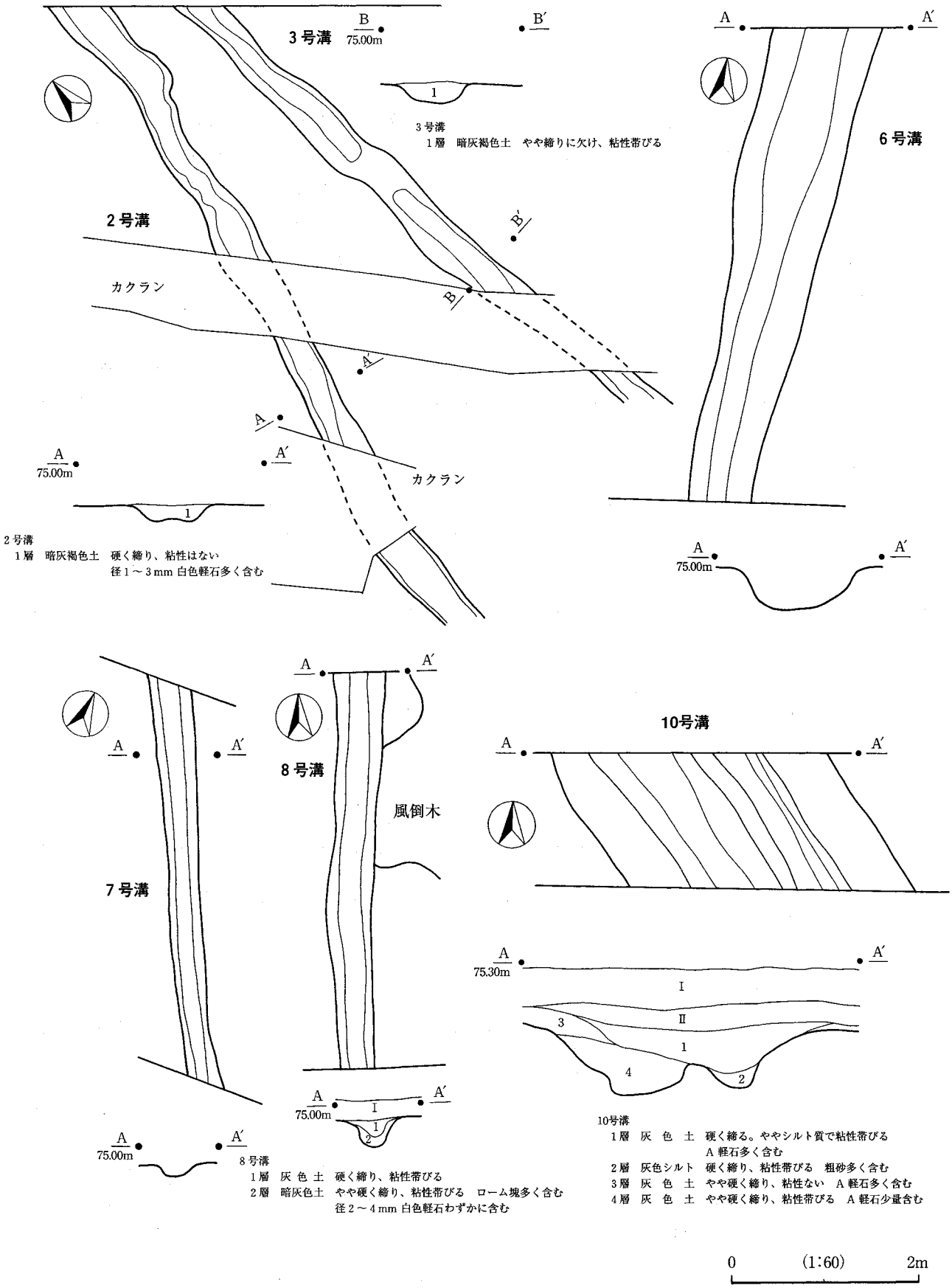
a．遺構（第71図）

C区西端を北西から南東へ緩やかに蛇行する。上幅66cm、下幅50cm、深さ24cmを測る。流水の痕跡は無く、出土遺物も無い。

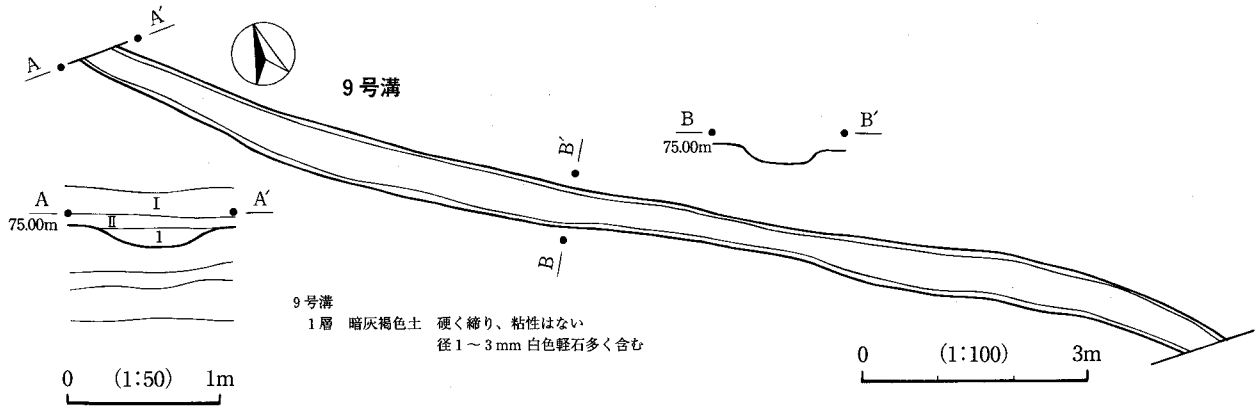
10号溝　（D区）

a．遺構（第70図）

D区土坑墓群の西10mを南北流する。上幅2.8m、深さ78cmを測り、南へ傾斜する。流路を一度変えており、旧時は1m西を同方向へ流下していた。溝には灰色のシルト・細砂が厚く堆積し、浅間A軽石が微量に混入する。土坑墓群と同時期であれば、墓域の西を限る性格を帯びていたであろう。出土遺物は無い。


3号溝
B
75.00m
B′
1
3号溝
1層　暗灰褐色土　やや締りに欠け、粘性帯びる
2号溝
カクラン
B
B′
A
A′
カクラン
A
75.00m
A′
1
2号溝
1層　暗灰褐色土　硬く締り、粘性はない
径1～3mm 白色軽石多く含む
A
A′
6号溝
A
75.00m
A′
A
A′
8号溝
風倒木
A
A′
7号溝
A
75.00m
A′
1
1
2
8号溝
1層　灰色土　硬く締り、粘性帯びる
2層　暗灰色土　やや硬く締り、粘性帯びる　ローム塊多く含む
径2～4mm 白色軽石わずかに含む
10号溝
A
A′
A
75.30m
A′
I
II
3
1
4
2
10号溝
1層　灰　色　土　硬く締る。ややシルト質で粘性帯びる
A 軽石多く含む
2層　灰色シルト　硬く締り、粘性帯びる　粗砂多く含む
3層　灰　色　土　やや硬く締り、粘性ない　A 軽石多く含む
4層　灰　色　土　やや硬く締り、粘性帯びる　A 軽石少量含む
0　(1:60)　2m

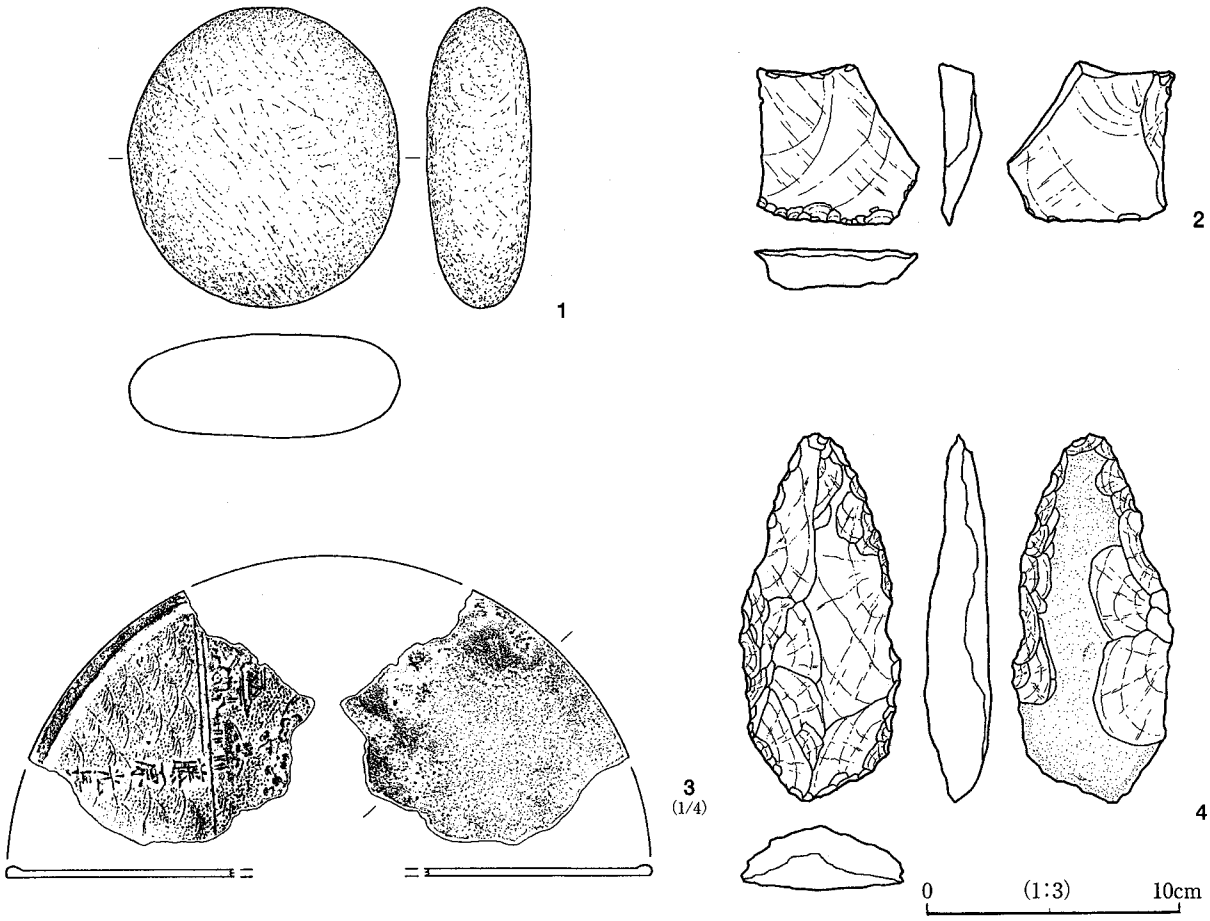
第70図　時期不明溝(1)



第71図　時期不明溝(2)

第７節　遺構外出土遺物（第72図、表13、図版17）

遺構外出土遺物には、縄文時代の石器、和鏡などが見られる。



第72図　遺構外出土遺物

第6章　まとめ

今回の調査では、古墳時代前期・古墳時代後期・平安時代２時期・中近世の５時期の遺構群が存在していることが判明している。これら５時期の遺構群は各時期により生活の場とか生産場というような遺構の性格が異なり、時期により土地利用の変遷が認められる。そこで各期における土地利用の様相を述べ、本調査のまとめとしたい。

古墳時代前期では、木道遺構１基・方形周溝墓１基が検出されており、周溝墓が集落跡と共存することが多いこと木道の存在などから考えると近接して同期の集落跡が存在したことが推定され、地形においては微高地と谷地形が存在することから谷地田に囲まれた小規模な村落を想像させる。

古墳時代後期では、遺構の遺存状況が悪いため溝１条・畦１条が検出されているにすぎないが、水田を中心とした生産の場であったと予想され、住居跡や遺物が皆無であることから生活の場である村落は同期において離れた場所に営まれていたと思われる。

平安時代は、９世紀代と12世紀代の２時期の遺構が存在している。９世紀代においては竪穴住居跡２軒・土坑８基・溝２条が検出されており、生活の場であったことが窺えるが、12世紀代では水田跡が検出されていることから生産の場に変わったと考えられ、しかも調査区全面に渡り広がり、本遺跡周辺には広大な水田が広がっていたと推定される。

中近世では、土坑墓が６基検出されている。土坑墓の存在から少なくとも今回の調査区の一部は生活の場や生産の場として当時においてやや不向きであったことが想像される。

以上のように本遺跡では、生活の場と生産の場が交互の現れることが確認される。これは降雨量などの気候変動などによって微地形や水量の変化により湿地の一部が乾燥し生活の場として適地となったり、逆に地下水位が高くなり水田化するといったような現象と考えられるが、12世紀代の水田化はむしろ水田面積の拡大を伴う社会的な要請や技術革新といったような要素が重要になると思われる。いずれにしろ土地利用の変遷とその要因は今後の課題となるが、本遺跡においてその一部を明らかにすることができたのは重要な成果と言える。

表12　西善尺司Ⅱ遺跡遺物観察表（1）

遺物番号 地区名	図No 図版No	土器種 器形	口径／底径／器高 残存状態（cm）	①胎　土 ②色　調　③焼　成	成形・整形の特徴 ①外　面　②内　面	備考
H－1－1 A区	第55図 図版15	須恵器 甕	/　/ 胴部破片	①長石を少量含む ②灰黄　③還元	①胴部平行叩き	
H－1－2 A区	第55図 図版15	須恵器 坏	12.6/ 6.0 /3.8 口縁～体部1/3欠	①長石・石英を少量、1mm以下の赤色粒、小石を僅かに含む　②灰白　③還元	左回転轆轤成形 ①底部回転糸切り後無調整	
H－1－3 A区	第55図 図版15	須恵器 椀	/(8.1)/ 体部下半～底1/3	①長石を少量含む ②黄灰　③還元	①底部回転糸切り後、高台貼付け	
H－1－4 A区	第55図 図版15	須恵器 皿	(14.8)/ 7.3 /2.5 口縁～体部2/3欠	①長石・石英を多く含む ②浅黄　③還元	右回転轆轤成形 ①底部回転糸切り後、高台貼付け	
H－1－5 A区	第55図 図版15	須恵器 蓋	/(16.4)/ 端部破片	①長石・石英を少量含む ②灰　③還元	端部短く屈曲	
H－2－1 A区	第56図 図版15	土師器 坏	(12.0)/ 8.0 /3.4 口縁～底1/2	①長石・石英・角閃石を少量含む ②にぶい橙　③酸化	型作り成形①口縁横撫で体部下端から底部篦削り調整②口縁横撫で	
H－2－2 A区	第56図 図版15	須恵器 坏	(13.1)/ 5.6 /3.5 口縁～底1/35	①長石・角閃石・雲母を僅かに含む ②にぶい橙　③還元	右回転轆轤成形 ①底部回転糸切り後無調整	
H－2－3 A区	第56図 図版15	須恵器 坏	(12.6)/ 6.0 /3.3 口縁～底1/3	①長石を僅かに含む ②暗青灰　③還元	①底部回転糸切り後無調整	
D－13－1 A区	第57図 図版15	土師器 坏	12.0/ 4.6 /3.3 口縁～体部1/3欠	①長石・石英・角閃石を少量含む ②にぶい橙　③酸化	型作り成形①口縁横撫で体部下端から底部篦削り調整②口縁横撫で	
D－13－2 A区	第57図 図版15	須恵器 坏	(14.0)/　/ 口縁～体部1/3	①長石・石英を僅かに含む ②黄灰　③還元		
D－19－1 A区	第57図 図版15	須恵器 甕	/(13.8)/	①長石・石英をやや多く、角閃石を僅かに含む　②暗青灰　③還元	①刷毛状工具による器面調整	
W－4－1 A区	第58図 図版15	須恵器 甕	/(11.5)/ 底部1/2	①長石・石英やや多く、1mm以下の赤色粒僅かに含む　②灰白　③還元		
W－4－2 A区	第58図 図版15	須恵器 高坏	/　/ 裾を欠く脚部	①長石・石英・結晶片岩を少量含む ②灰　③還元	①粘土紐巻き上げ痕	
M－1－1 D区	第62図 図版15	銅銭 熙寧元寶	外径24mm　穿径6mm　厚さ1mm　量目2.62g 北宋銭・1068年初鋳			
M－1－2 D区	第62図 図版15	銅銭 元○○寶	外径24mm　穿径6mm　厚さ1mm　量目3.03g			
M－1－3 D区	第62図 図版15	銅銭 紹聖元寶	外径24mm　穿径7mm　厚さ1mm　量目3.23g 北宋銭・1094年初鋳			
M－1－4 D区	第62図 図版15	銅銭 元祐通寶	外径24mm　穿径7mm　厚さ1mm　量目3.08g 北宋銭・1086年初鋳			
M－1－5 D区	第62図 図版16	銅銭 天聖元寶	外径24mm　穿径6mm　厚さ1mm　量目3.04g 北宋銭・1023年初鋳			
M－1－6 D区	第62図 図版16	銅銭 熙寧元寶	外径23mm　穿径7mm　厚さ1mm　量目3.18g 北宋銭・1068年初鋳			
M－2－1 D区	第63図 図版16	須恵器 甕	/　/ 胴部破片	①長石を僅かに含む ②灰白　③還元	①当て具痕	
M－2－2 D区	第63図 図版16	青磁 瓶	/　/ 頚部～肩1/2	① ②灰　③還元	①釉の厚さ1mm細かい小貫入	
M－2－3 D区	第64図 図版16	銅銭 寛永通寶	外径23mm　穿径6mm　厚さ1mm　量目2.46g 1636年初鋳			
M－2－4 D区	第64図 図版16	銅銭 寛永通寶	外径23mm　穿径6mm　厚さ1mm　量目2.62g 1636年初鋳			
M－2－5 D区	第64図 図版16	銅銭 寛永通寶	外径23mm　穿径6mm　厚さ1mm　量目2.43g 1636年初鋳			
M－2－6 D区	第64図 図版16	銅銭 寛永通寶	外径23mm　穿径7mm　厚さ1mm　量目2.88g 1636年初鋳			
M－2－7 D区	第64図 図版16	銅銭 寛永通寶	外径23mm　穿径6mm　厚さ1mm　量目2.68g 1636年初鋳			
M－2－8 D区	第64図 図版16	銅銭 寛永通寶	外径23mm　穿径6mm　厚さ1mm　量目2.57g 1636年初鋳			
M－3－1 D区	第65図 図版16	銅銭 寛永通寶	外径24mm　穿径6mm　厚さ1mm　量目2.51g 1636年初鋳			
M－3－2 D区	第65図 図版16	銅銭	外径24mm　穿径6mm　厚さ1mm　量目1.63g			

表13　西善尺司Ⅱ遺跡遺物観察表（２）

遺物番号 地区名	図No 図版No	土器種 器形	口径／底径／器高 残存状態（cm）	①胎　土 ②色　調　③焼　成	成形・整形の特徴 ①外　面　②内　面	備考
M－４－１ D区	第66図 図版17	鉄銭	外径27mm　内径23mm　穿径6mm　厚さ1mm　量目9.79g			
M－４－２ D区	第66図 図版17	鉄銭	外径30mm　内径26mm　穿径7mm　厚さ1mm　量目12.75g			
M－４－３ D区	第66図 図版17	鉄銭	外径24mm　内径20mm　穿径6mm　厚さ1mm　量目11.30g			
M－４－４ D区	第66図 図版17	鉄銭	外径27mm　内径mm　穿径7mm　厚さ1mm　量目10.56g			
C軽石層下 A区　1	第53図 図版15	木製品 杭	長さ42.2cm　直径4.4cm			
FA層下 A区　1	第54図 図版15	土師器 台付甕	14.7/　/ 口頸部1/2	①長石・石英・角閃石・３mm以下の赤色粒をやや多く含む②黒褐③酸化	①肩部に斜刷毛目・指押さえ痕	
FA層下 A区　2	第54図 図版15	土師器 台付甕	/　/ 脚天井部	①長石・石英・角閃石を多く、１mm以下の赤色粒を僅かに含む②橙③酸化	①脚上位に斜刷毛目 ②天井部に粘土貼付け痕	
B下水田 A区　1	第59図 図版15	灰釉陶器 坏	/(4.8)/ 底部1/3破片	①長石を僅かに含む ②灰白　③還元	左回転轆轤成形①底部回転糸切り後付高台（三日月高台）	
B軽石層 A区　1	第59図 図版15	灰釉陶器 坏	/(7.2)/ 底部1/3破片	① ②灰白　③還元	①底部回転糸切り後付高台（三日月高台）②釉の刷毛塗	
遺構外１ A区	第72図 図版17	磨石	安山岩製。			
遺構外２	第72図 図版17	スクレイパー	横長剥片の端部に調整を施す。頁岩製。			
遺構外３ B区	第72図 図版17	銅 鏡	直径(17)cm　厚さ0.3～0.15cm　重さ21.78g 「藤原光長」の銘			
遺構外４	第72図 図版17	石斧	黒色頁岩製。			

Ⅴ　下増田越渡Ⅲ遺跡

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の立地

下増田越渡Ⅲ遺跡は、前橋市二ノ宮町に所在し、JR 前橋駅の南東約10km、JR 駒形駅の東約２km に位置し、遺跡の北方約２km には国道50号線が走っている。周辺の地目は大きく広がる水田で、遺跡の東方及び西方は微高地上に宅地と畑が存在する。調査区は荒砥川と八坂用水に挟まれた地区にあり、中央部に宮川が流れている。

本遺跡は、大間々扇状地と前橋台地とに挟まれた河成段丘上に立地し、南側に近接して広瀬川低地帯が存在している。大間々扇状地には多数の中小河川が北から南へと走流しており、調査区の西端に接する荒砥川もまたこれら中小河川のひとつとなる。荒砥川は赤城山に源を発する中河川で、大間々扇状地の西端を流れた後本遺跡北西約2.5km で河成段丘上に入り、南東方向に流路を変え走流し、本遺跡南東約0.2km で調査区中央部を流れる宮川と、南東約0.7km で神沢川とそれぞれ合流した後、南東約２km で広瀬川低地帯の広瀬川に流れ込んでいる。遺跡はこうした河川の合流が数多く認められる完新世の後背湿地の湿潤な地形に位置しており、調査区の西方約50m より大間々扇状地となり、調査区西端に接する荒砥川の西岸は完新世の旧中洲である微高地となっている。

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺は、旧石器時代から遺跡が出現するが、大胡火砕流堆積面・大間々扇状地・河成段丘・広瀬川低地帯・前橋伊勢崎台地といった複雑な地質構造を有す地域で、場所により生活環境が大きく異なるため遺跡の分布も時代別に変遷が認められる。

旧石器時代では、大間々扇状地上に位置する荒砥北三木堂遺跡(14)・今井道上道下遺跡(15)・飯土井中央遺跡(21)などに存在し、河成段丘・広瀬川低地帯といった低湿地には皆無である。

縄文時代では、草創期より後期までの遺跡が知られるが、遺跡数も比較的少なく、小規模な遺跡に限定され、その多くが大胡火砕流堆積面や大間々扇状地が含まれる赤城山南麓上に位置している。草創期では近年になって前橋台地上に位置する徳丸仲田遺跡(5)で微隆起線文土器が出土し、赤城山南麓地域以外にも遺跡が存在することが明らかとなり注目される。前期においては大間々扇状地上に存在する荒砥二之堰遺跡(22)などで竪穴住居跡が検出されているがいずれも数軒ほどの小規模な諸磯式期の遺跡である。中・後期では荒砥二之堰遺跡・今井白山遺跡(12)などで住居跡が検出されているが、いずれも小規模な集落である。

弥生時代では、大間々扇状地上に位置する荒砥島原遺跡(20)で住居跡が検出されているが本地域全体を見渡しても極少数の遺跡が知られるにすぎない。

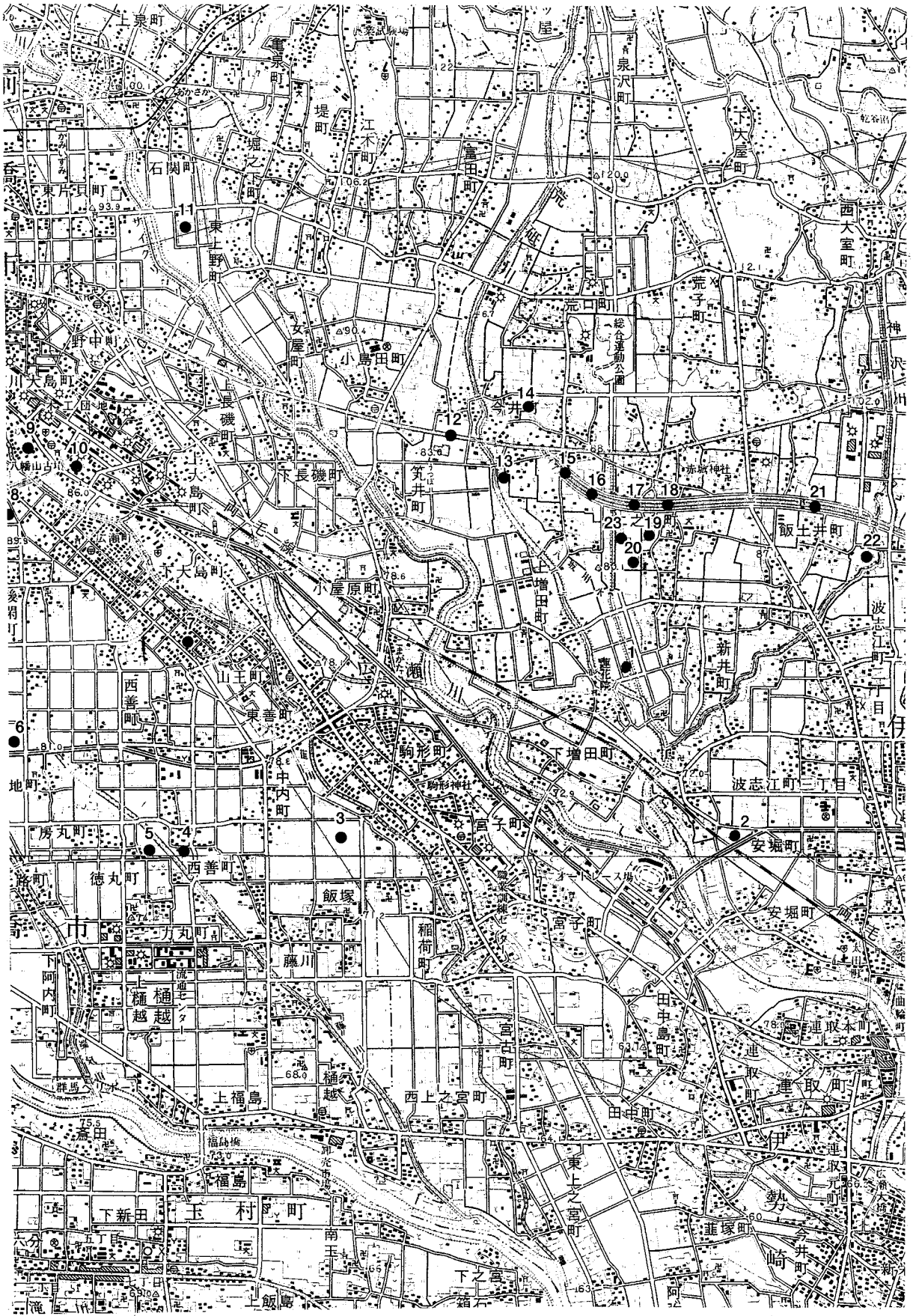
古墳時代に入ると遺跡数が急激に増加し、赤城山南麓地域以外の前橋台地上などにも数多く遺跡が存在するようになり、集落跡・古墳・水田跡などあらゆる性格の遺跡が検出されており、広範囲に土地利用がなされている。前期の集落は赤城山南麓地域において荒砥二之堰遺跡・荒砥島原遺跡のように方形周溝墓を伴う集落跡が検出されているほか、前橋・伊勢崎台地上に進出が認められ、後閑団地遺跡(8)・東田遺跡(6)などで住居跡が、徳丸仲田遺跡では掘立柱建物跡が検出されている。古墳では広瀬川低地帯を望む前橋・伊勢崎台地上の朝倉町に三角縁神獣鏡が出土した大型前方後円墳である前橋天神山古墳(10)や大型前方後方墳である八幡山古墳(9)が出現し、当地が関東でも有数の地域であったことを想像させるが、荒砥川流域を中心と

した地域においては前期古墳が認められず対照的な分布をしている。このような対照性は土器の上にも認められ、赤城山南麓地域に4世紀の樽・赤井戸系が多いのに対して前橋台地上では石田川式が多いという傾向が存在し、前橋天神山古墳の出現も含めて問題となる。水田跡では浅間C軽石に埋没した水田跡が二之宮千足遺跡(17)・徳丸仲田遺跡などで検出されており、河成段丘・広瀬川低地帯・前橋伊勢崎台地の広範囲に存在することが明らかになりつつある。中期では本遺跡の南東約1.5Kmに位置する御富士山古墳(2)と北西約0.8km に位置する今井神社古墳(13)が著名である。御富士山古墳は広瀬川低地帯東岸の前橋伊勢崎台地の微高地上に立地し、畿内様式の長持形石棺を持つ大型前方後円墳である。今井神社古墳は荒砥川東岸の大間々扇状地上に立地し、長持形系の特殊な石棺を有す大型前方後円墳である。後期に入ると前橋台地東端と赤城山南麓地域において古墳・集落跡の増加が見られる。古墳では赤城山南麓地域に荒砥二之堰遺跡・今井神社古墳群のような群集墳が多数出現しており、広瀬川低地帯を望む前橋台地東端では金銅冠が出土した大型前方後円墳である金冠塚古墳(7)など多くの古墳が存在している。本遺跡近隣の集落跡は荒砥二之堰遺跡・荒砥天之宮遺跡(19)・荒砥島原遺跡など多数の遺跡が調査されている。

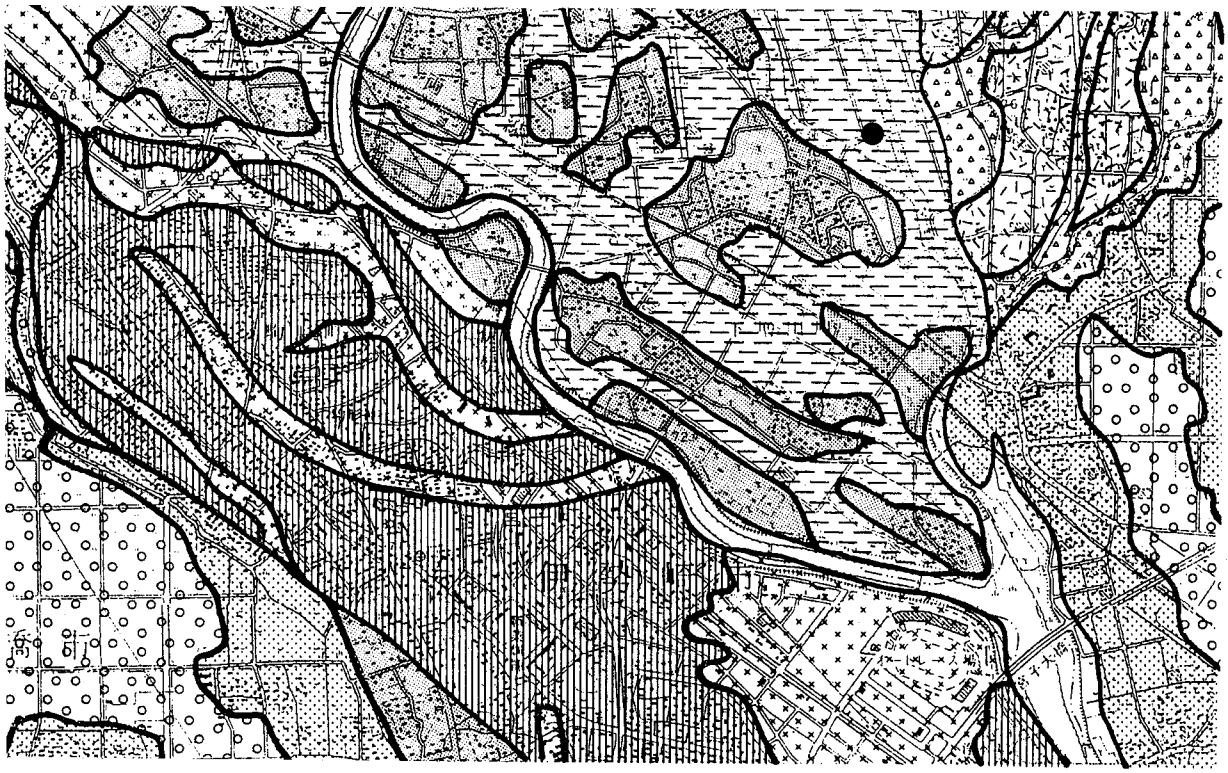
奈良・平安時代に入ると、遺跡数はさらに増加する。本遺跡近隣の集落跡としては大間々扇状地上に立地する荒砥天之宮遺跡・荒砥島原遺跡・二之宮千足遺跡・二之宮宮下西遺跡(18)・宮川遺跡(23)・二之宮洗橋遺跡(16)、広瀬川低地帯の東側に接する河成段丘上に立地する石関西梁瀬遺跡(11)・下増田越渡Ⅲ遺跡(1)、前橋台地上に立地する徳丸仲田遺跡・前田遺跡(3)・西善尺司遺跡(4)などが知られ、集落があらゆる地域に進出するようになる。水田跡は下増田越渡Ⅲ遺跡・徳丸仲田遺跡・前田遺跡・西善尺司遺跡などで知られている。

表14　周辺の遺跡地名表

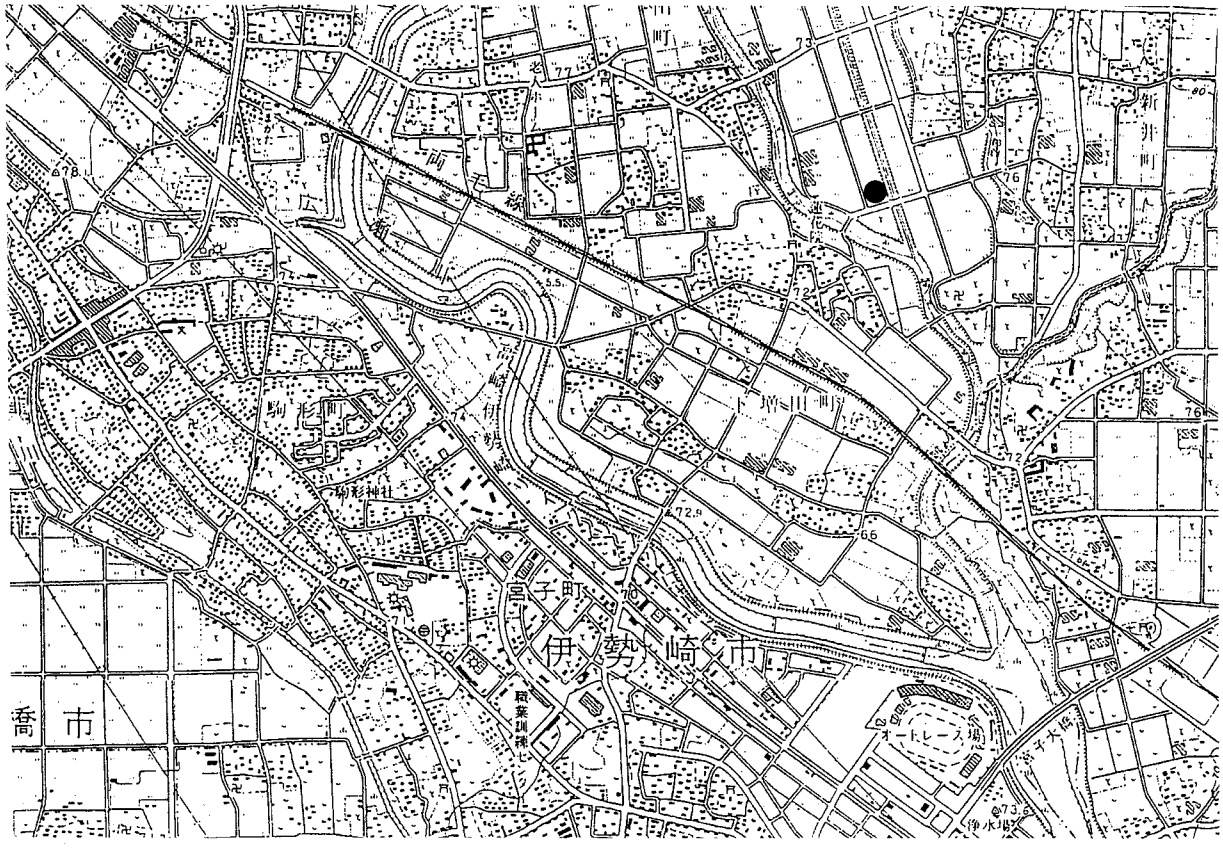
No	遺跡名・所在地	時代	遺　構
1	下増田越渡Ⅲ遺跡 前橋市二之宮町2673-2他	古墳・平安 中世	水田跡・住居跡・掘立柱建物跡・土坑跡
2	御富士山古墳 伊勢崎市安堀町799	古墳	前方後円墳
3	前田遺跡 前橋市東善町	平安	集落・水田跡
4	西善尺司遺跡 前橋市西善町	古墳・平安 近世	木道・周溝墓・溝・水田跡・集落跡・水田跡・土坑墓跡
5	徳丸仲田遺跡 前橋市徳丸町	古墳 平安 中近世	溝・掘立柱建物・集落跡・館跡
6	東田遺跡 前橋市	古墳	住居跡
7	金冠塚古墳 前橋市山王	古墳	前方後円墳　7世紀前半
8	後閑団地遺跡 前橋市	古墳・奈良・平安	集落跡 住居・掘立柱建物跡
9	八幡山古墳 前橋市朝倉町419-3	古墳	前方後円墳　全長180m、幅125m、4世紀後半
10	前橋天神山古墳 前橋市広瀬町1-27-7	古墳	前方後円墳　全長129m、4世紀後半
11	石関西簗瀬遺跡 前橋市石関町123-1他	古墳・奈良	住居跡・畝状遺構・掘立柱建物跡・土坑・溝
12	今井白山遺跡 前橋市今井町	縄文・古墳 奈良・平安	住居跡・地震跡
13	今井神社古墳 前橋市今井白山東	古墳・平安	前方後円墳 住居跡・墓跡
14	荒砥北三木堂遺跡 前橋市今井町字北三木堂	先土器・縄文・古墳・奈良・平安	住居跡・墓跡
15	今井道上道下遺跡 前橋市今井町	先土器～近世	住居跡
16	二之宮洗橋遺跡 前橋市二之宮町字洗橋	古墳・奈良・平安	住居跡
17	二之宮千足遺跡 前橋市二之宮町千足	縄文・古墳 奈良・平安 中世	住居跡・水田跡
18	二之宮宮下西遺跡 前橋市二之宮町	古墳・奈良・平安	住居跡
19	荒砥天之宮遺跡 前橋市二之宮町字五分一	縄文・弥生 古墳・奈良・平安	住居跡・水田跡
20	荒砥島原遺跡 前橋市二之宮町字島原	弥生・古墳 奈良・平安	住居・墓・水田跡
21	飯土井中央遺跡 前橋市飯土井町	先土器・縄文・古墳・中・近世	住居跡・土坑
22	荒砥二之堰遺跡 前橋市飯土井町二之堰	縄文・古墳	集落・墓跡
23	宮川遺跡 前橋市二之宮町	弥生・古墳 奈良・平安	住居・墓・水田跡



第73図　遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院発行1/50,000「前橋」「高崎」）



第74図　遺跡の位置と地形（国土地理院２万５千分の１「前橋」「伊勢崎」）



第75図　遺跡の位置（国土地理院２万５千分の１「前橋」「伊勢崎」）

第2章　調査の方法

調査地域は南北幅平均10m・東西幅約600mに及び、6本の南北道路と宮川により8地区に分割される。8地区をそのまま調査区として設定し、呼称は西側からA，B，C，D，E，F，G，H区とした。H9年度はC区，D区北西部，E区東側に位置する橋梁部，F区，G区北側部，H区のみの調査となり、他地区は次年度の調査となる。

グリットは、国家座標第Ⅳ系(X＝37300m，Y＝－63650m)と平行に設定した。

第3章　調査の経過

12月　上旬　F区とE区橋梁部分の表土除去作業を行う。両区のAs-B軽石層下の水田跡調査を行う。

中旬　F区As-C混下の水田跡及び溜井の調査、並行してE区橋梁部分の洪水層下の水田跡調査を行う。

下旬　H区の表土除去、As-B軽石層下遺構調査を行う。E区橋梁部分のAs-C混土層下の遺構調査を行う。

1月　上旬　H区As-B軽石層下の遺構調査及びE区橋梁部分As-C混土層下の水田跡調査を行う。

中旬　E区橋梁部分の調査終了、埋め戻しを行う。H区Hr-FA層下の水田跡調査及びG区の表土除去を行う。

下旬　H区As-C混土層上面及び、G区Hr-FA層下の遺構調査を行う。C区，D区の表土除去作業を行う。

2月　上旬　G区As-C混土層上面の遺構調査及び、H区As-C混土層下の遺構調査を行う。D区As-B軽石層下の水田跡、溝の調査を行う。

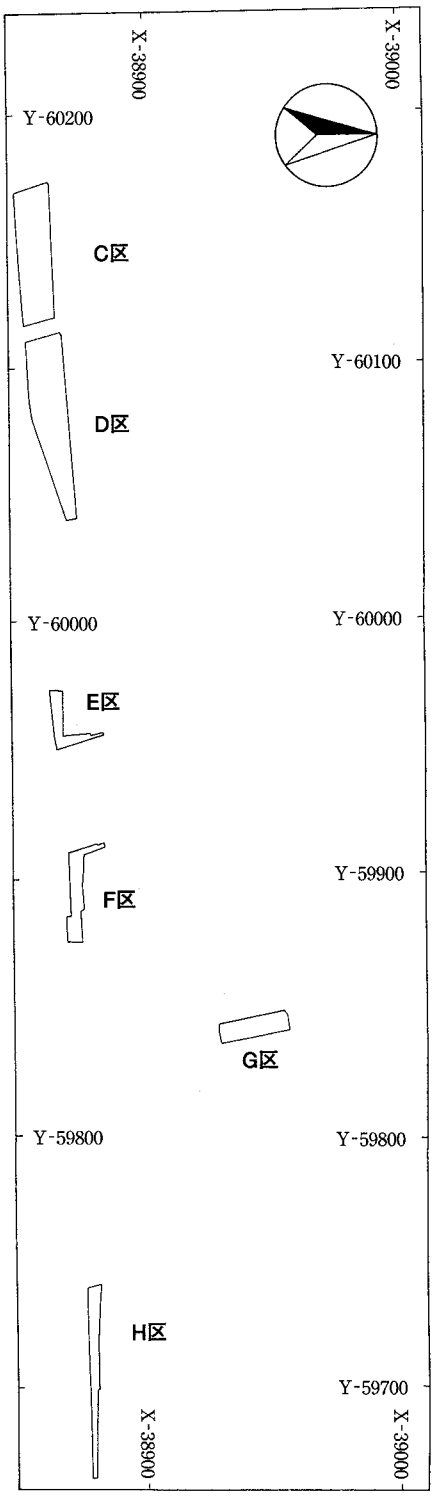
中旬　C区As-B軽石層下の水田跡の調査を行う。H区の調査を終了し埋め戻しを行う。C，D区の空撮を実施する。

下旬　D区洪水層下の遺構確認及び精査作業を行う。

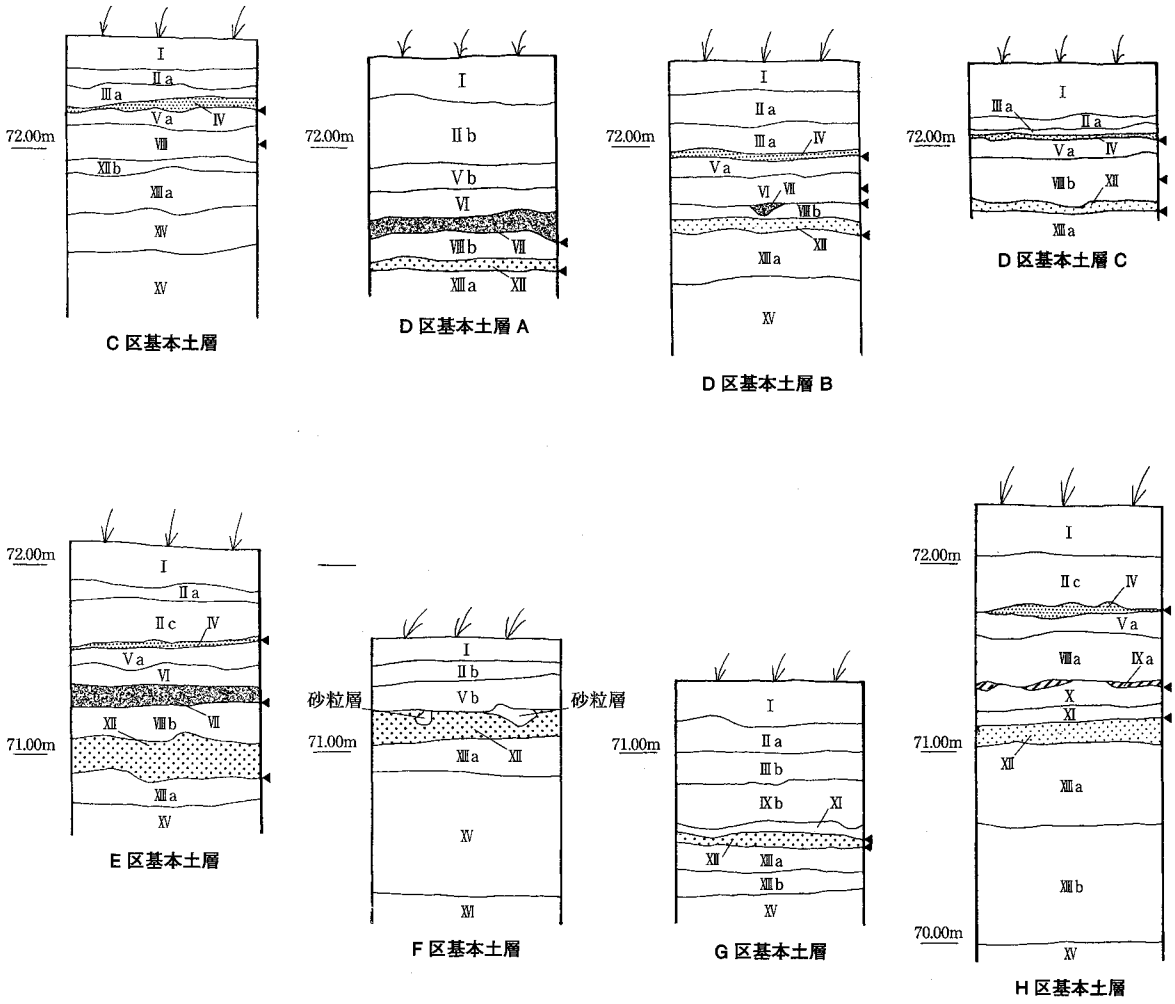
3月　上旬　C区洪水層下の遺構確認及び精査作業を行う。

中旬　C，D区の空撮を実施し、As-C混土層上面の遺構調査を行い、As-C混土層下水田跡調査を行う。

下旬　C区西側の灰褐色シルト上面の遺構調査を行う。C，D区の埋め戻し作業を行い、調査の全工程を終了する。

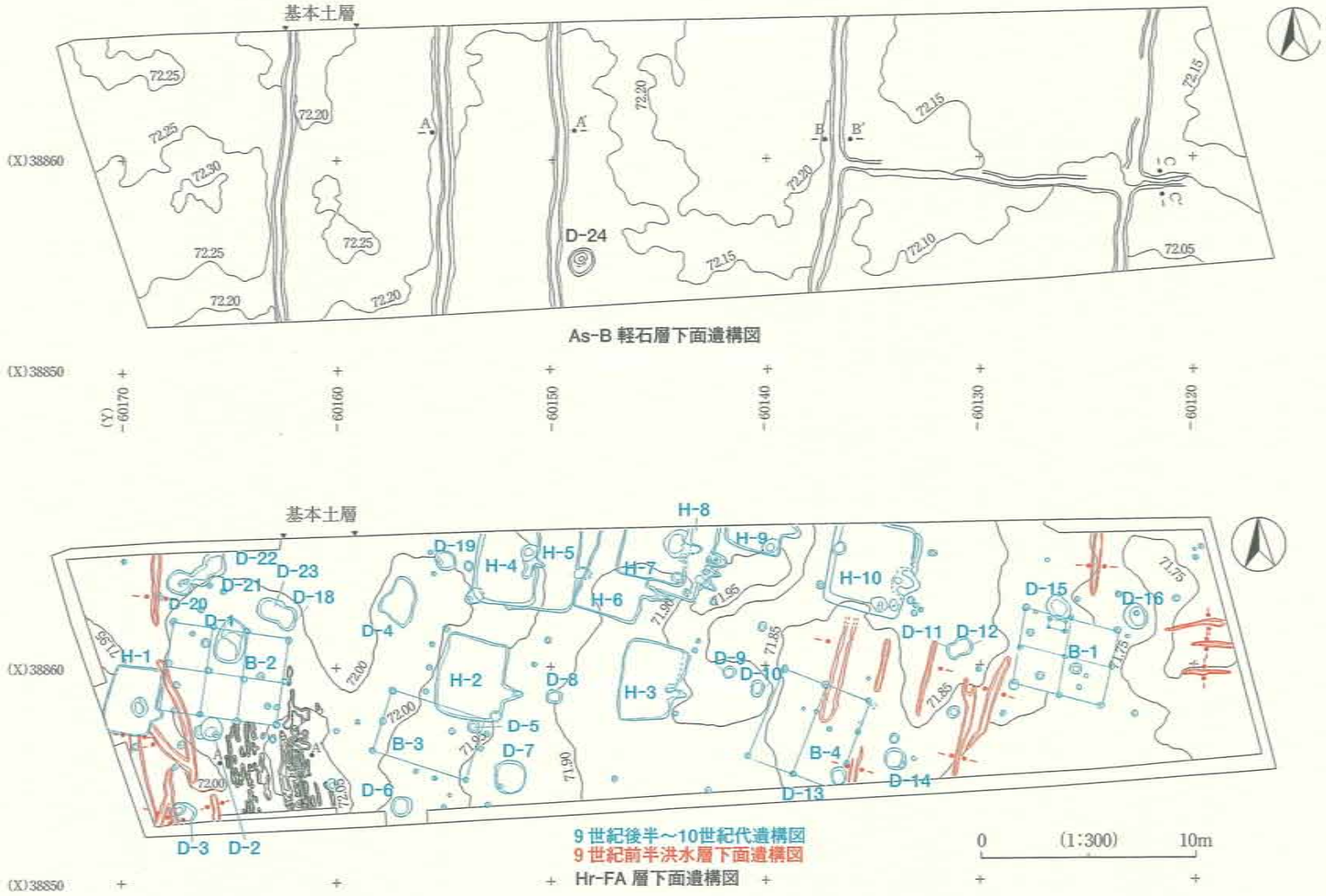


第76図　調査区設定図（1：3,000）

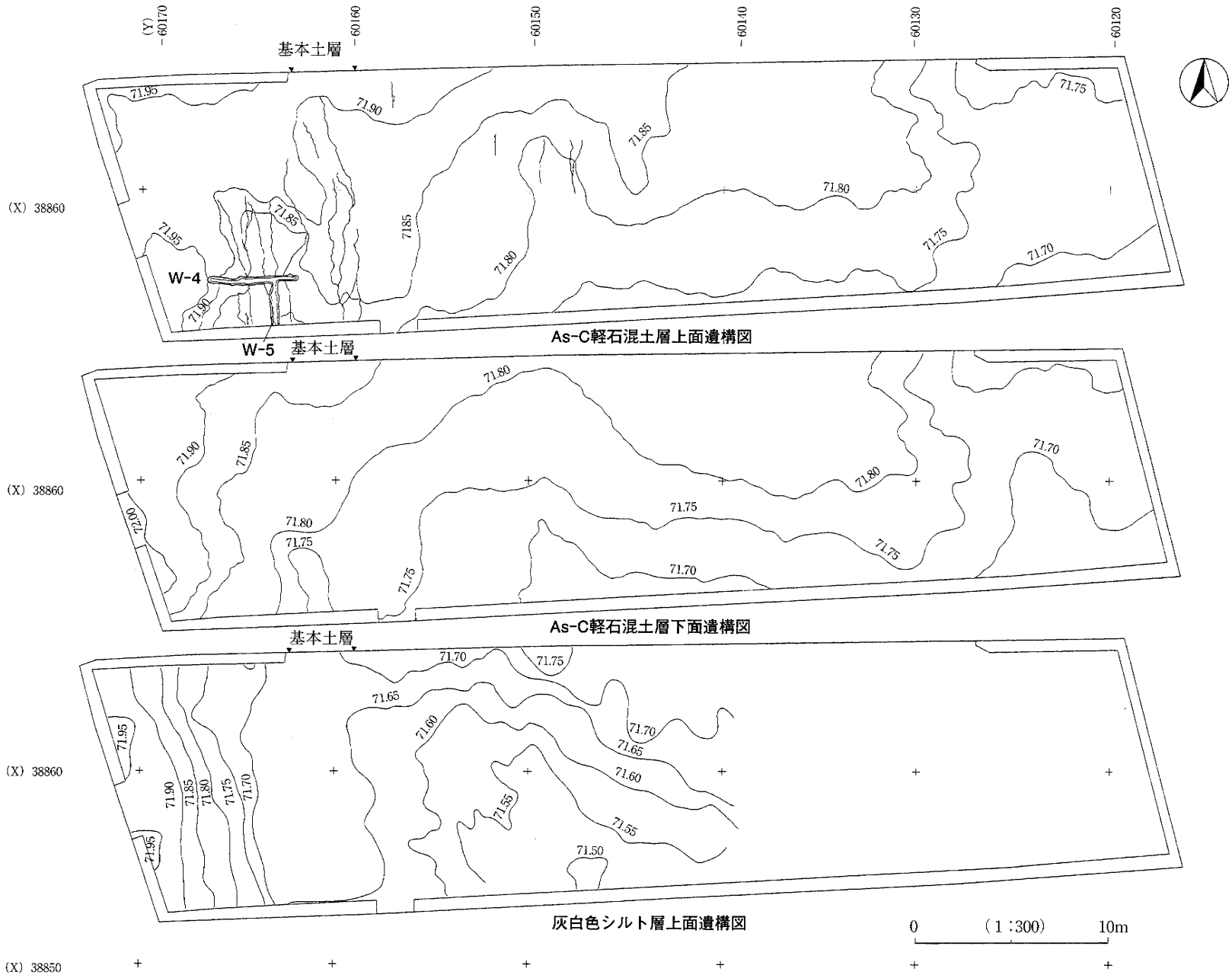


Ⅰ　層	黒褐色土	昭和50年代の圃場整備土。
Ⅱa層	暗黄灰色土	近代の耕作土。As-A含む。
Ⅱb層	暗黄灰色土	近代の耕作土。As-A含む。
Ⅱc層	褐色土	As-A,As-Bを含む。
Ⅲa層	褐色土	As-Bを含む。
Ⅲb層	褐色土	As-B,Hr-FAを含む。
Ⅳ　層	淡灰褐色軽石	1108年の浅間山噴火による軽石（As-B）層。
Va層	黒褐色土	粘性強い。
Vb層	茶褐色土	白色軽石粒を含む。
Ⅵ　層	灰褐色シルト	河川氾濫による堆積層。
Ⅶ　層	明灰褐色細砂	9世紀前半の洪水層。
Ⅷa層	暗灰色土	酸化鉄の沈着著しい。
Ⅷb層	茶灰褐色土	Hr-FAを含む。
Ⅸa層	淡黄橙色軽石	6世紀初頭の榛名山噴火による軽石(Hr-FA)層。
Ⅸb層	黒灰褐色土	Hr-FAを含む。
Ⅹ　層	黒灰褐色土	粘性強い。
Ⅺ　層	黒褐色土	粘性強い。中層より植物遺体を確認。
Ⅻ　層	黒色土	4世紀代の浅間山噴火による軽石(As-C)の混土層。
ⅩⅢa層	黒褐色土	粘性強い。
ⅩⅢb層	茶褐色土	粘性強い。
ⅩⅣ　層	灰褐色シルト	酸化鉄の沈着著しい。
ⅩⅥ　層	灰褐色粘質土	粘性強い。

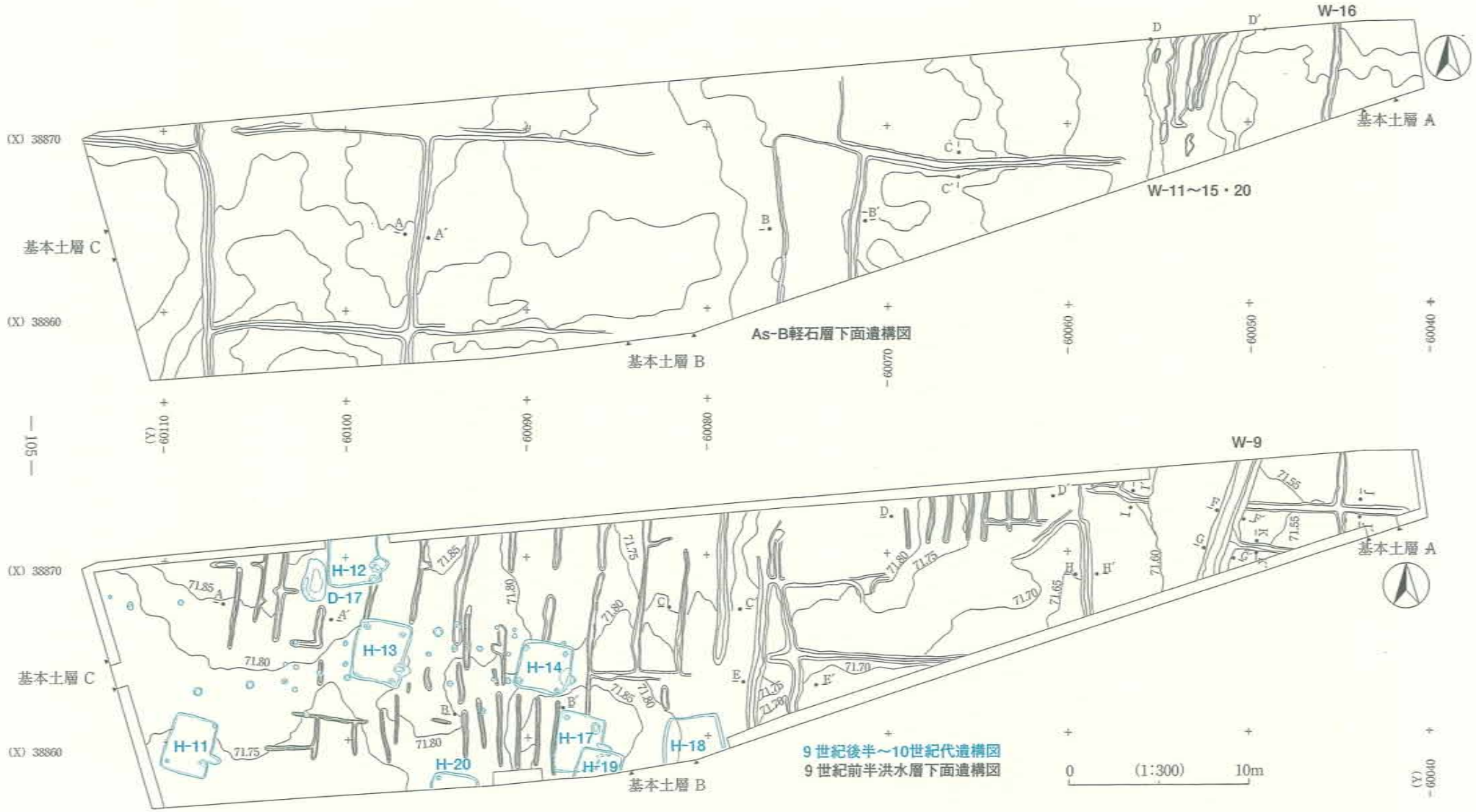
第77図　基本土層図



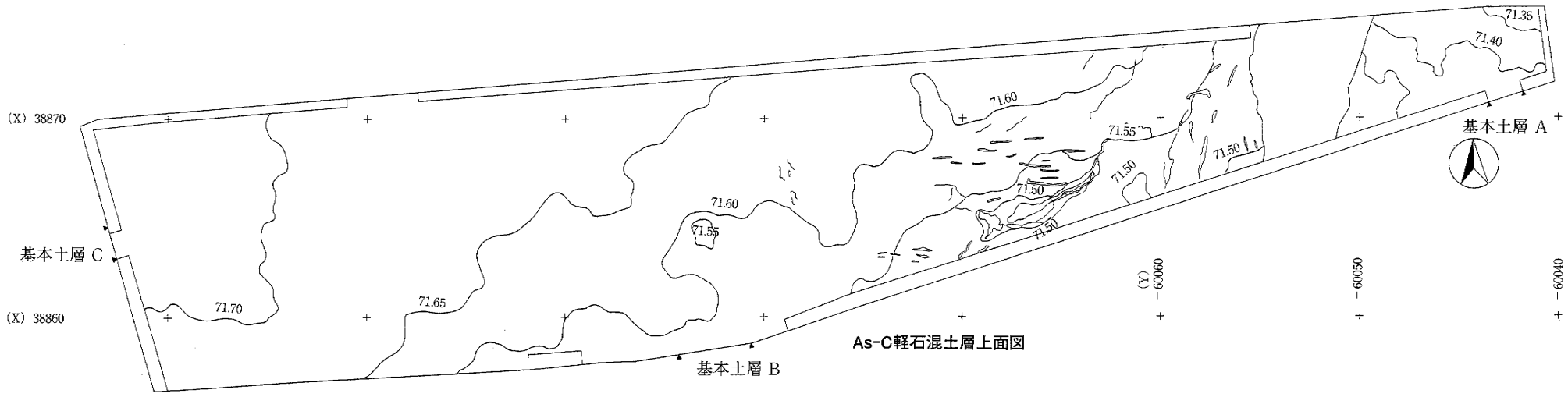
第78図　C 区遺構全体図(1)



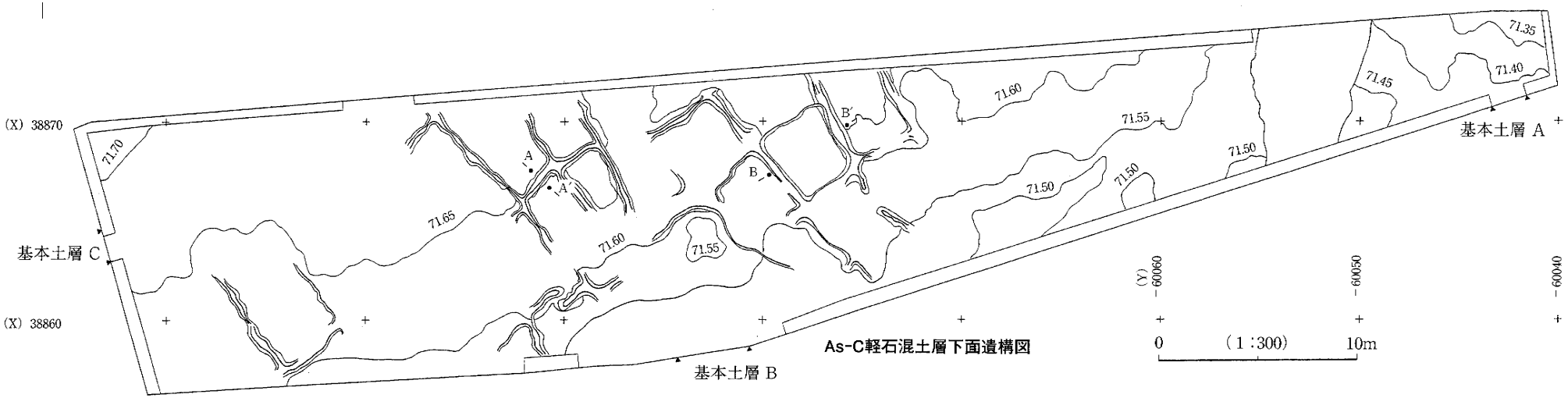
第79図　C区遺構全体図(2)



第80図　D区遺構全体図(1)

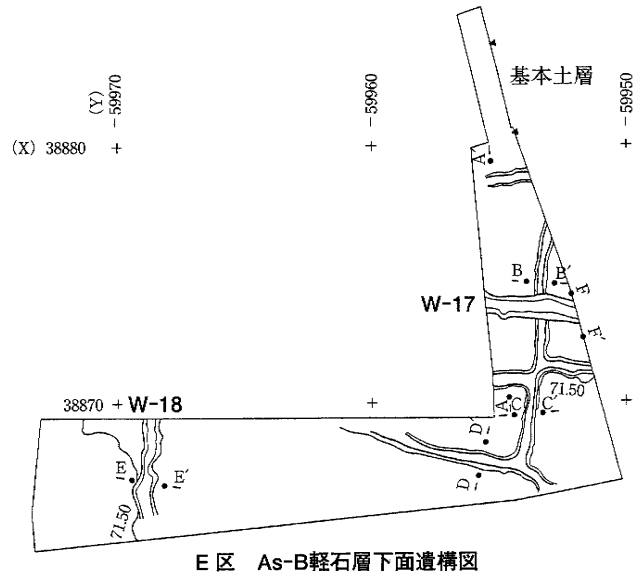


As-C軽石混土層上面図

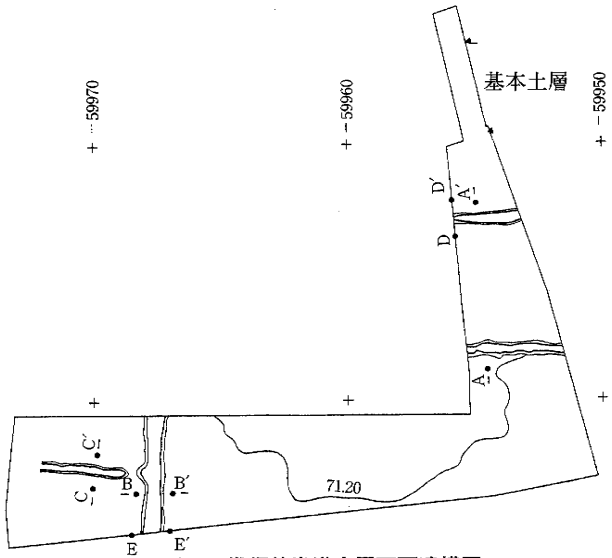


As-C軽石混土層下面遺構図

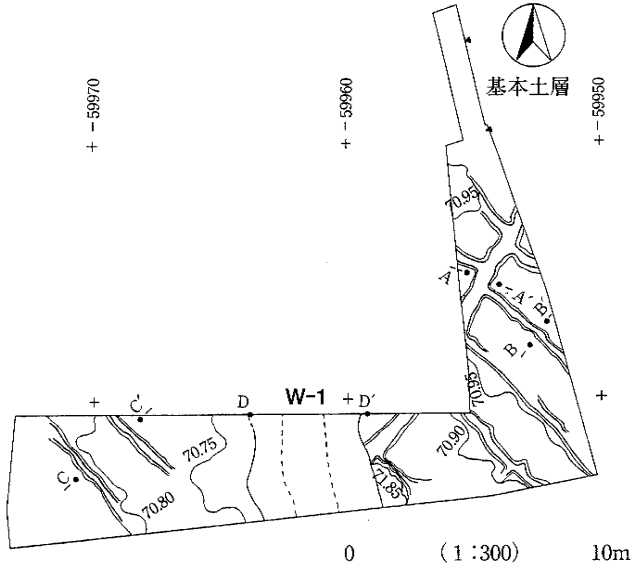
第81図　D区遺構全体図(2)



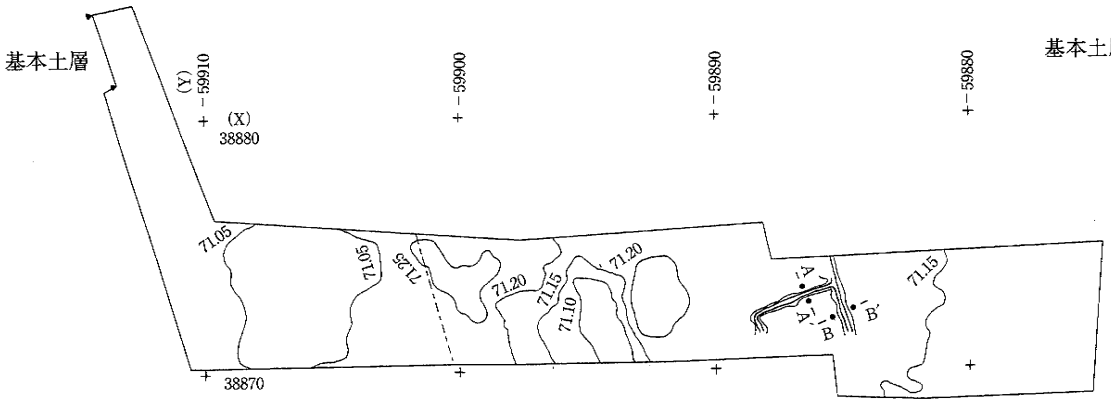
E 区　As-B軽石層下面遺構図



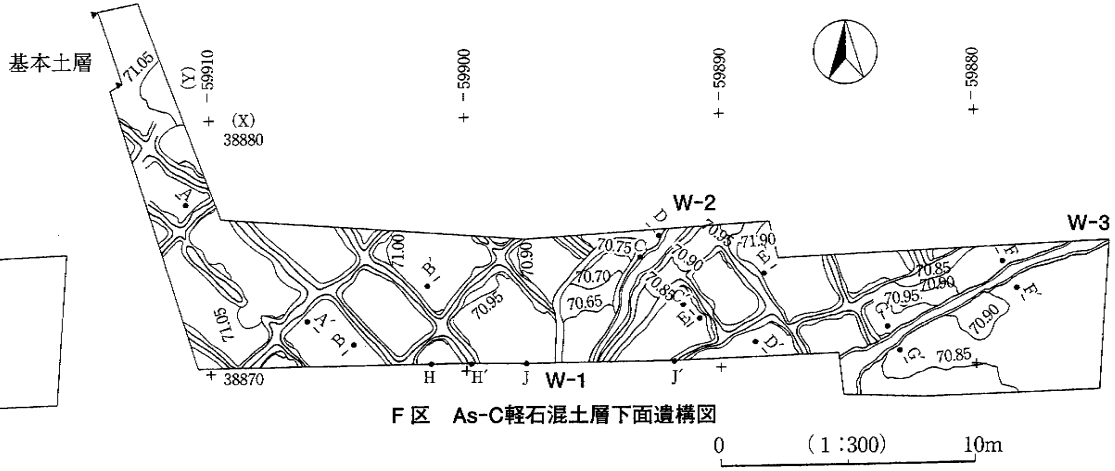
E 区　9 世紀前半洪水層下面遺構図



E 区　As-C軽石混土層下面遺構図

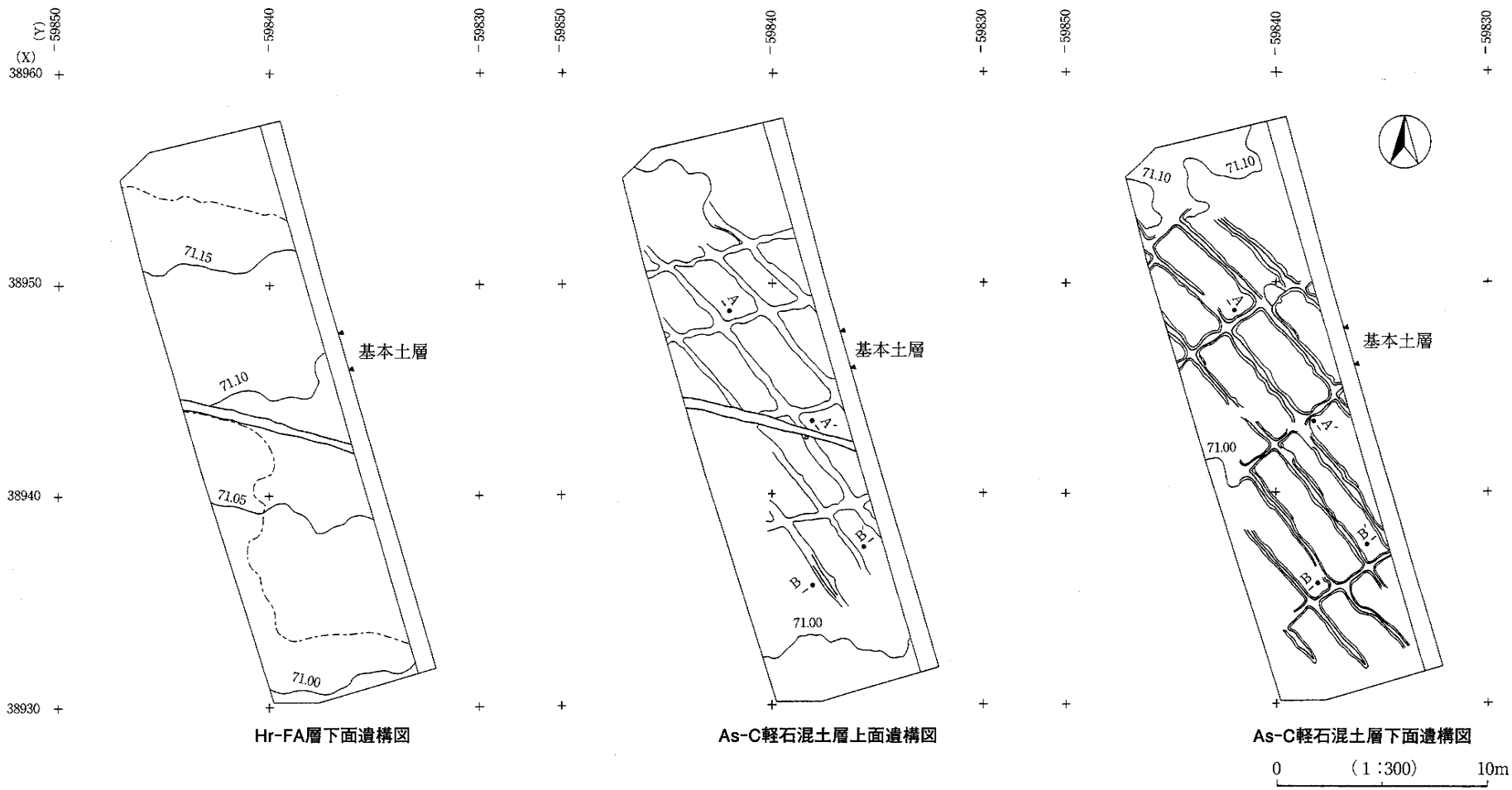


F 区　As-B軽石層下面遺構図

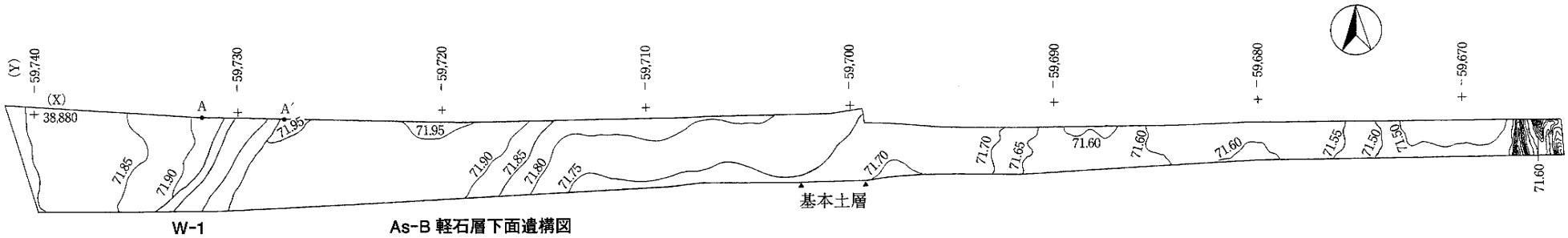


F 区　As-C軽石混土層下面遺構図

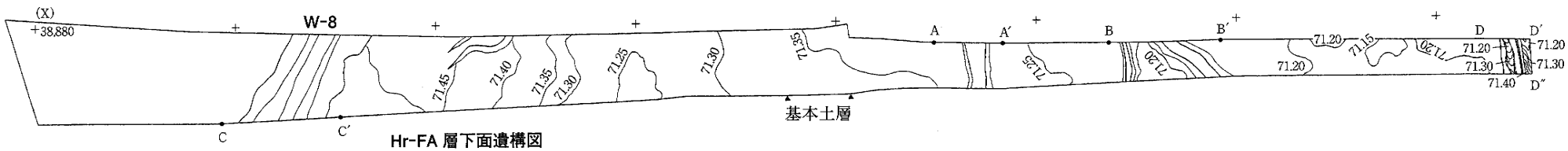
第82図　E・F 区遺構全体図



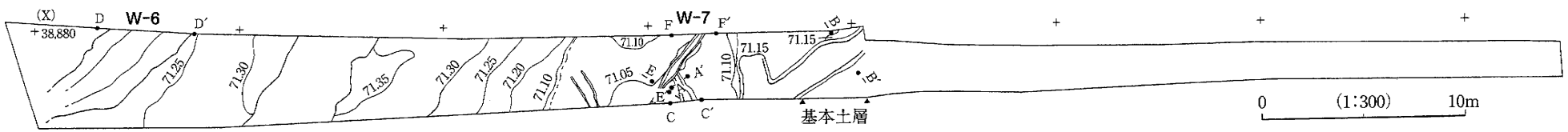
第83図　G 区遺構全体図



W-1　　As-B 軽石層下面遺構図



Hr-FA 層下面遺構図



As-C 軽石混土層上面遺構図

第84図　H 区遺構全体図

第５章　遺構と遺物

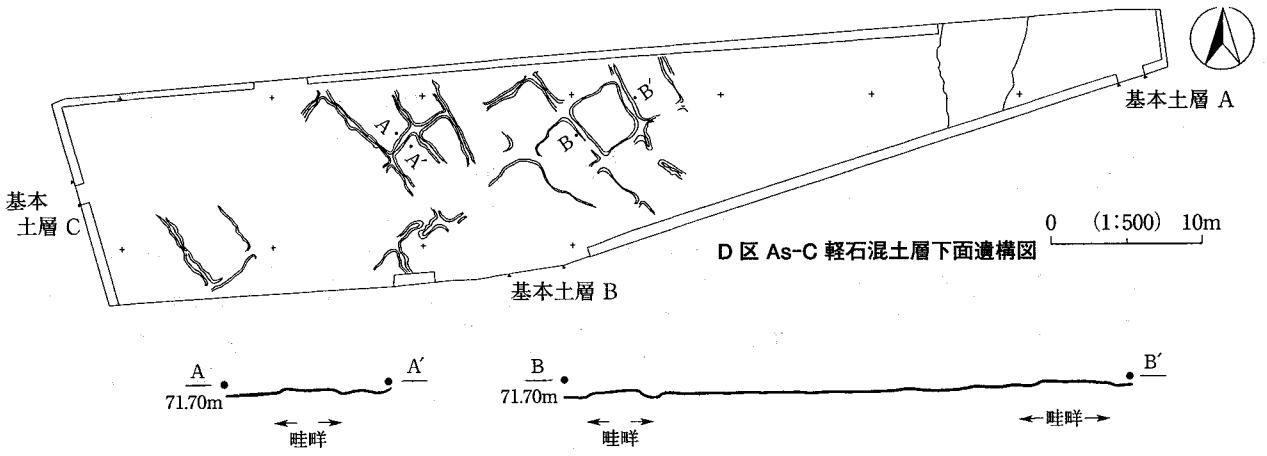
第１節　古墳時代前期・中期

古墳時代前・中期の遺構群は浅間Ｃ軽石（As－C）混土層の下面と上面で、水田跡がそれぞれ確認された。

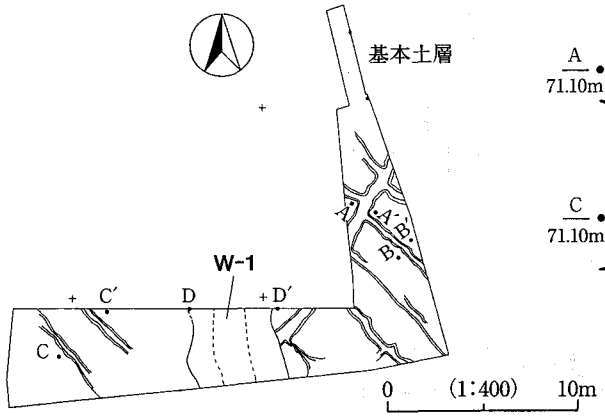
浅間Ｃ軽石（As－C）混土層の堆積時期は明確ではないが、畦畔の形状や出土遺物などから凡そ古墳時代中期頃に形成された層ではないかとみられる。

第１項　As－C 軽石混土層下面遺構（第85・86図、図版20－１～３・５）

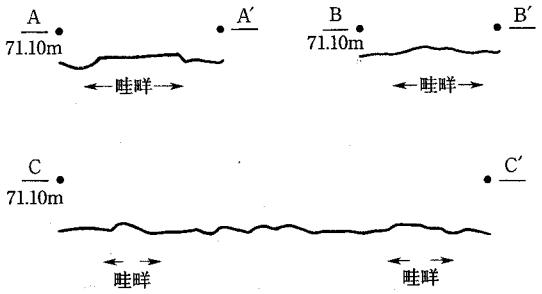
本遺構群は、As－C 軽石混土層下の標準堆積土層第XIIIa 層（黒褐色土）上面に存在し、Ｄ区・Ｅ区・Ｆ区・Ｇ区より検出されている。Ｄ区では調査区西半分より畦畔が検出されている。畦畔は下端幅で20～60cm、高さが５～10cmを測り、走行方向は N30°W 及び N55°E となる。一枚の水田の規模は遺存の良いところで3.6×3.0m である。調査区中央部より西側南部では畦畔にずれが認められ水口の可能性がある。Ｅ区では調査区全体より畦畔が、やや中央部より１号溝が検出されている。畦畔は下端幅で15～80cm、高さが５～10cm を測り、走行方向は N40°W 及び N30°E となる。一枚の水田の規模は明らかではなく、北西から南東に走る畦畔は1.5m 前後の間隔であるが北東から南西に走る畦畔については不明である。１号溝は As－C 混土層上層面から掘り込まれ、As－C 混土層下水田跡を切って構築されている。断面形状は幅3.0～5.0m×深さ0.93m の浅いＵ字形を呈し、北から南へと走向する。覆土中には砂の水成堆積が存在する。Ｆ区は調査区全体より畦畔が、やや中央部より１号溜井、２号溝、東部より３号溝がそれぞれ検出されている。畦畔は調査区中央部に幅0.55～1.3m 高さが３～５cm を測り、走行方向は N45°E となる幅の広い畦畔と、その西側と東側部分に幅0.3～0.9m、高さが３～５cm を測る幅の狭い畦畔が存在する。西側では走行方向が N45°W 及び N45°E となり中央部の幅の広い畦畔と軸方向が同一であるが、東側では走行方向が N35°W～N20°W 及び N65°E となり地形に添う形で畦畔の軸線にずれが生じている。一枚の水田の規模は西側で2.5m×1.2～3.4m×2.9m であり東側では2.8m×1.5～4.0m×2.4m である。２号溝は幅0.5～0.7m×深さ0.3～0.5m の皿状を呈し、走行方向は N45°E となる。畦畔及び１号溜井との重複関係は不明である。３号溝は幅0.3～0.7m×深さ0.5～0.7m の皿状を呈し、走行方向は N60°E となる。重複関係は畦畔を切って構築されている。１号溜井は南側が調査区外となるため規模形状は不明であるが、短軸は2.5m×残存長軸は5.3m であり深さは26cm の皿状を呈する。重複関係は畦畔を切って構築されている。Ｇ区はほぼ調査区全体より畦畔が検出されている。畦畔は幅0.25～0.6m、高さが２～４cm を測り、走行方向は N37°W 及び N55°E となる。一枚の水田の規模は7.0m×1.4～5.2m×1.4m である。

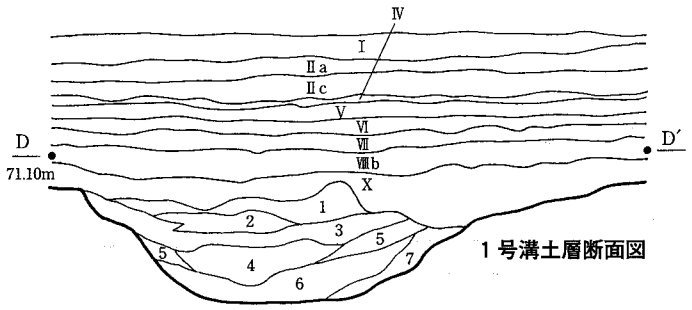


D 区 As-C 軽石混土層下面遺構図



E 区 As-C 軽石混土層下面遺構図

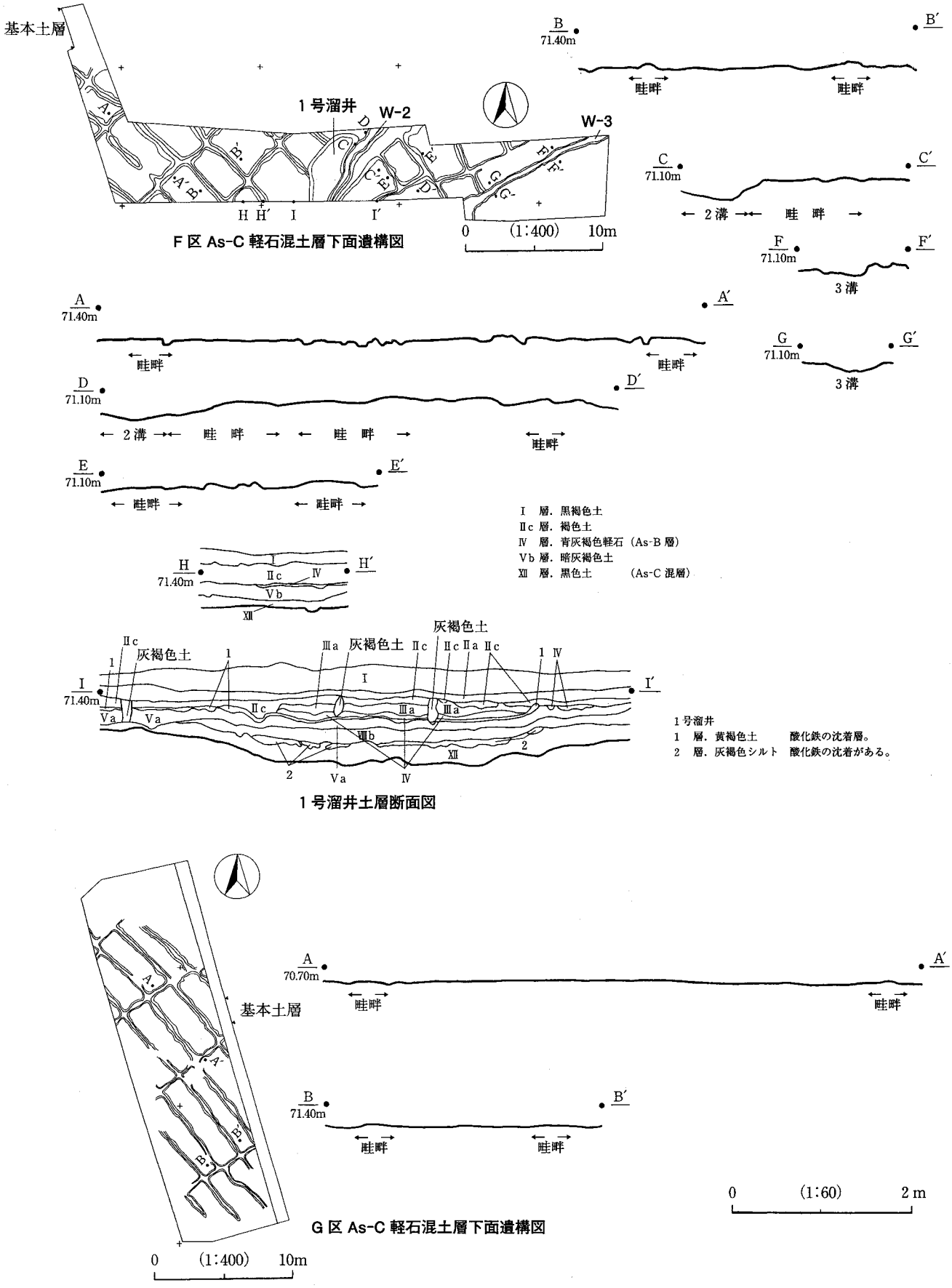




1 号溝土層断面図

1 号溝
1 層　茶灰褐色細砂　明灰褐色シルトをラミナ状に含む。
2 層　黒灰色砂　黒灰色礫を多く含む。
3 層　黒色粘質土　明灰褐色シルトをラミナ状に含む。
4 層　茶灰褐色細砂　明灰褐色シルト、黒色粘質土をラミナ状に含む。
5 層　黒色粘質土　明灰褐色シルトをラミナ状に含む。
6 層　黒色粘質土　明灰褐色シルトをラミナ状に含む。底部に礫が堆積する。
7 層　黒色粘質土　明灰褐色シルトをラミナ状に含む。

第85図　D・E 区 As-C 軽石混土層下面遺構図、1 号溝土層断面



F 区 As-C 軽石混土層下面遺構図

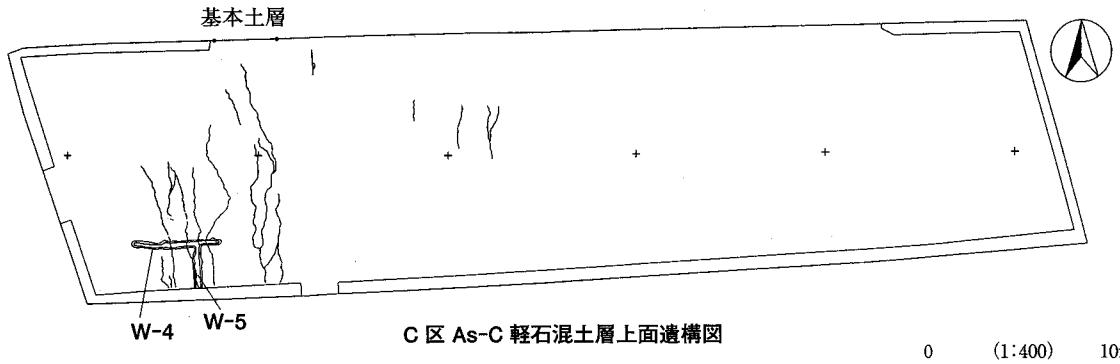
1号溜井土層断面図

G 区 As-C 軽石混土層下面遺構図

第86図　F・G 区 As-C 軽石混土層下面遺構図、1号溜井土層断面図

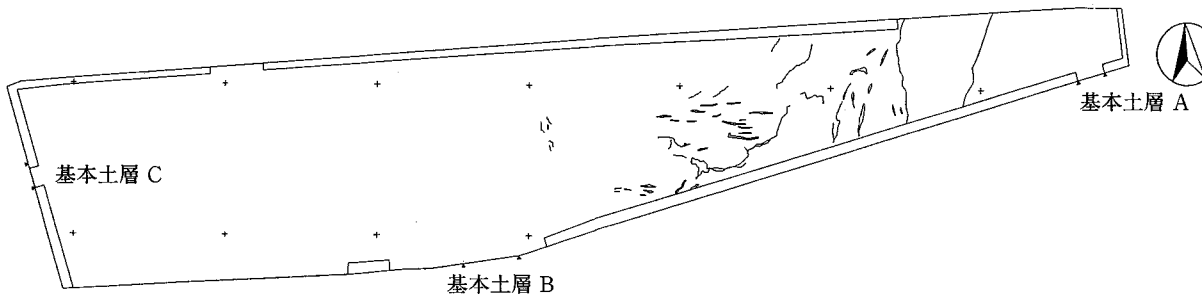
第２項　As－C 軽石混土層上面遺構（第87・88図、図版20－４）

本遺構群は、As－C 軽石混土層上面に存在し、水田跡・溝・液状化跡（弘仁９年《818年》の赤城山南麓の地震に伴うと思われる）が検出されている。C 区では調査区西端部南側より４号・５号溝が、調査区西側半分に液状化跡が検出されている。４号・５号溝は覆土が同一であり、規模・形状は幅30～50cm×深さ19～24cm、箱形状断面を呈することから同一遺構と思われる。４号溝は長さ4.7m を測り、ほぼ東西方向に伸びる溝の東端部より１m のところに５号溝が南に2.3m 直交し調査区外となる。液状化跡は調査区西側半分に幅２～３cm でほぼ南北に走向する黄褐色の砂脈が十数条検出されるが噴砂面は不明である。D 区は調査区東側部分で液状化跡が検出されている。液状化跡は調査区中央部より東側で黄褐色砂が激しく噴出した痕跡が認められ幅60cm の砂脈を中心にして幅２～10cm の砂脈が数条放射状に広がる。その砂脈周辺部地表面はその影響を受けた痕跡が認められるとともに As－C 混土層直上面に噴砂が厚さ約２～５cm 堆積している。G 区は調査区ほぼ全体より畦畔が検出されている。畦畔は幅20～55cm、高さは一部で５cm を測り、走行方向は N37°W 及び N73°E となる。一枚の水田の規模は3.4m×1.1m～5.3m×1.7m である。畦畔の高まりはほとんど確認されず、軽石が密集する帯として検出され、これは耕作の撹拌を受けなかった畦畔の基部だけが残存していると推定される。H 区は調査区ほぼ中央部に畦畔状の遺構が、西端部とほぼ中央部に溝が検出されている。畦畔状の遺構は調査区中央部に幅1.1～1.8m 高さが８～15cm を測り、走行方向は N55°E 及び N９°W となる幅の広いＬ字形平面遺構と、その2.4m 西側に幅40～70cm、高さが４～６cm を測り、走行方向は N28°W となる幅の狭い遺構が3.9m の間隔で平行に存在する。６号溝は As－C 混土層上層面から掘り込まれている。規模は幅1.9m～2.7m×深さ1.3m を呈し、走行方向は N50°E となる。覆土は下部に砂の水成堆積があり、上部は人為的に埋め戻された痕跡がある。７号溝は幅18～50cm×深さ４～６cm の逆台形状断面を呈し、走行方向は N35°E となる。重複関係は畦畔状遺構を切って構築されている。



C 区 As-C 軽石混土層上面遺構図

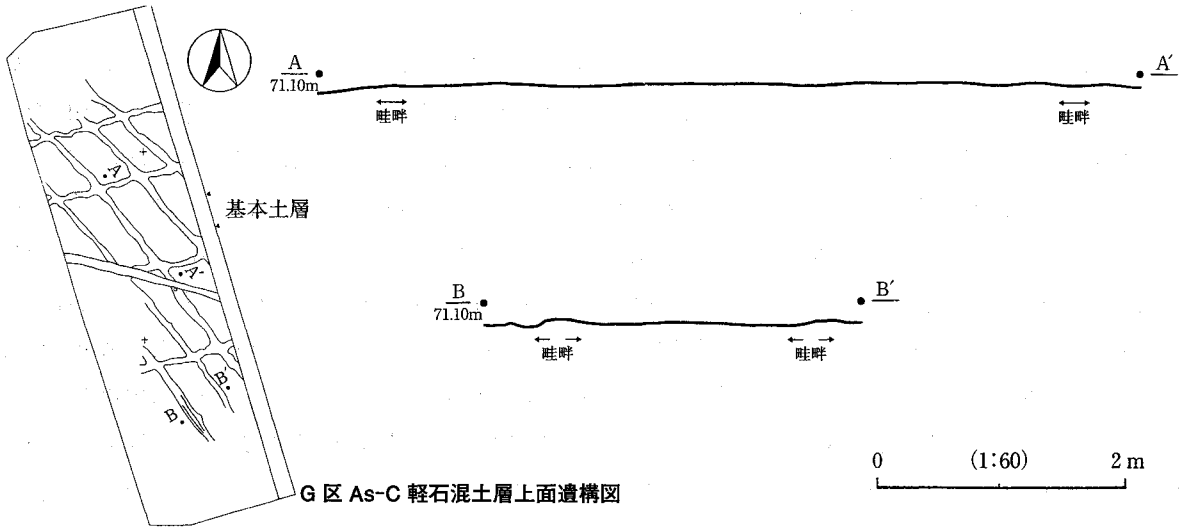
0　(1:400)　10m



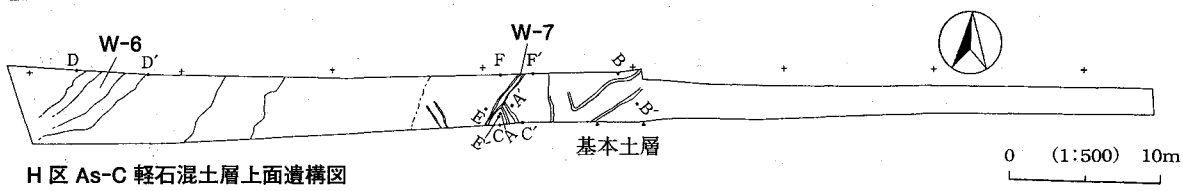
D 区 As-C 軽石混土層上面遺構図

0　(1:500)　10m

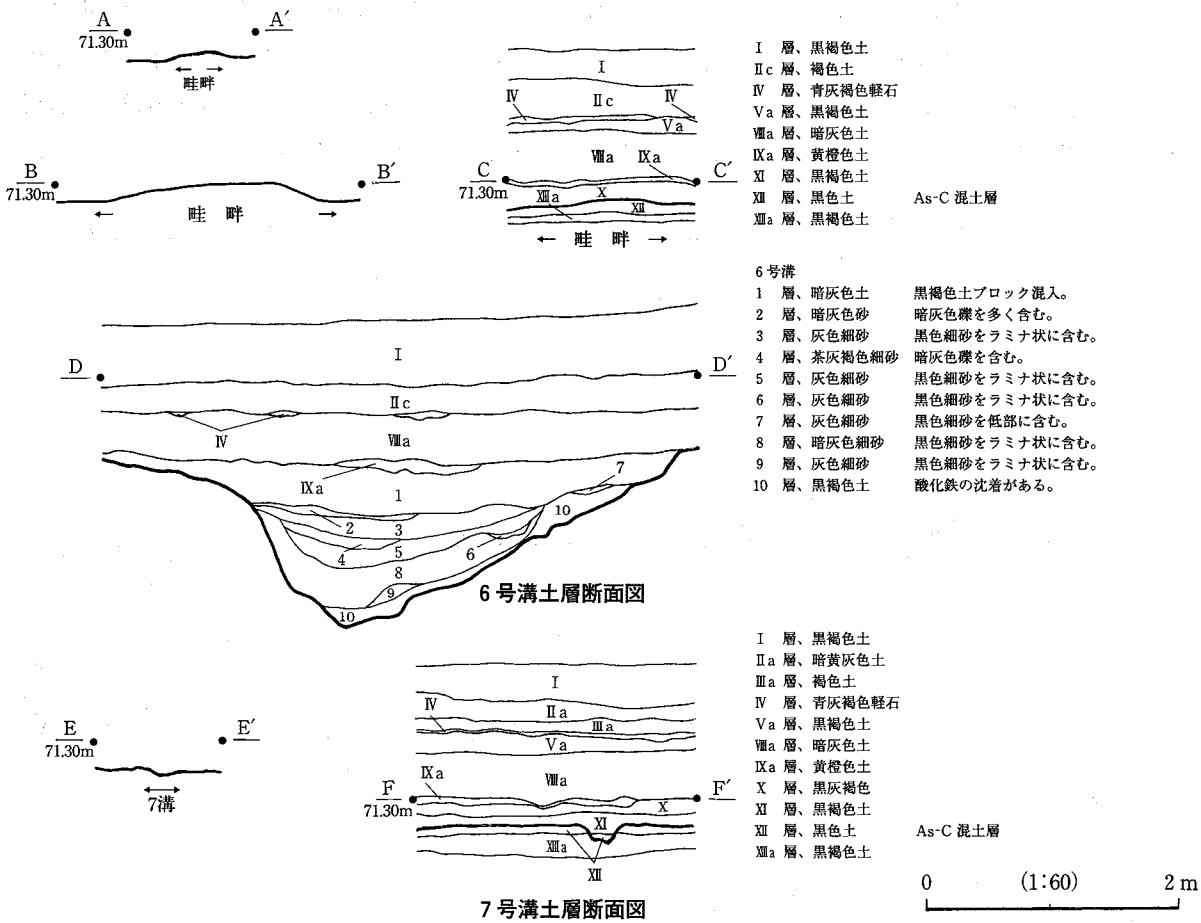
第87図 C・D 区 As-C 軽石混土層上面遺構図、噴砂脈



G 区 As-C 軽石混土層上面遺構図



H 区 As-C 軽石混土層上面遺構図



6 号溝土層断面図

7 号溝土層断面図

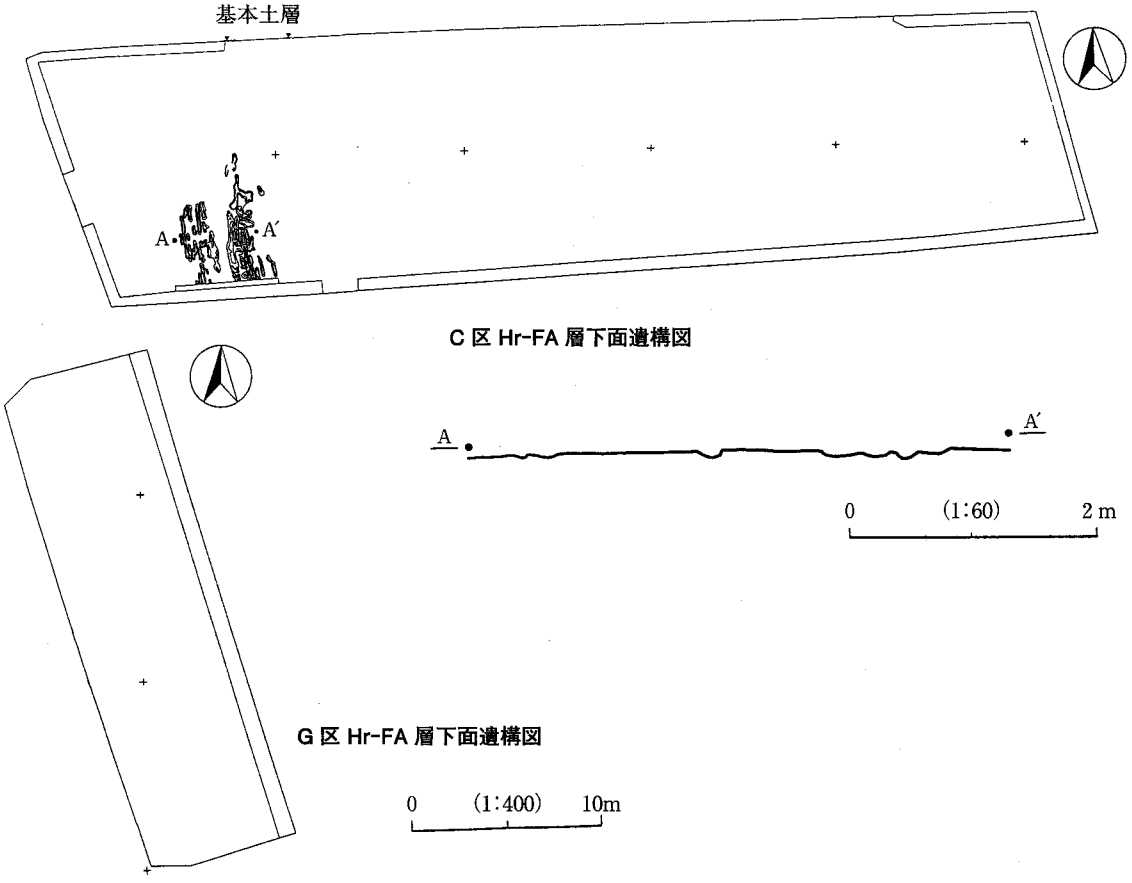
第88図　G・H 区 As-C 軽石混土層上面遺構図、6・7号溝土層断面図

第2節　古墳時代後期

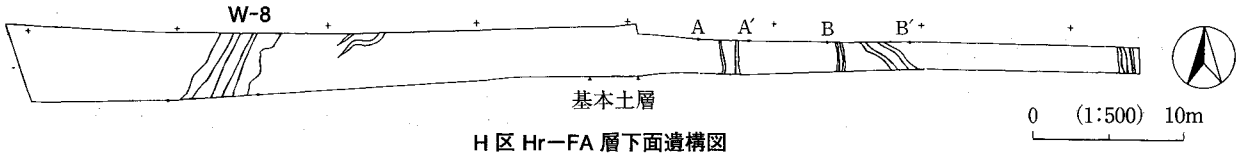
古墳時代後期の遺構群は6世紀初頭に降下したとされるHr－FA層下の水田跡や畠跡にかかわるものである。

第1項　Hr－FA層下面遺構（第89・90図、表20、図版20－6、21－1、23－7、26）

本遺構群は、Hr－FA層下面に存在し、C・H地区より畦畔状遺構・畠跡・溝が検出されている。C区では調査区南西部より畠跡が検出されている。畠跡は畝に伴うさくと思われる溝が十数条平行して検出されたことより推定される。さく状の溝は幅12～40cm×深さ3～7cm×長さ0.30～3.32mを測り、南北方向に伸びている。覆土は洪水による二次堆積と思われるHr－FAテフラが堆積している。H区は調査区西側で8号溝が、8号溝の東側と調査区東半分で畦畔状遺構が検出されている。8号溝はHr－FA層上層面から掘り込まれており、幅2.9～3.7m×深さ88cmの開いたU字形断面を呈し、走行方向はN26°Eとなる。覆土は暗灰色シルトと砂がラミナ状の水成堆積を形成し、出土遺物は須恵器（坏，甕）が覆土中から検出された。畦畔状遺構は4条存在しており、走行方向及び規模が一定していない。走行方向はほぼ南北方向が2条、N50°Wが1条、N53°Eが1条となる。規模は幅1.0～1.34m×高さ8～14cmを測る幅の広いものが3条と、幅0.44～0.60m×高さ8～0.10cmを測る幅の狭いものが調査区ほぼ中央部を南北に走る広い遺構の1.4m東側に1条検出されている。

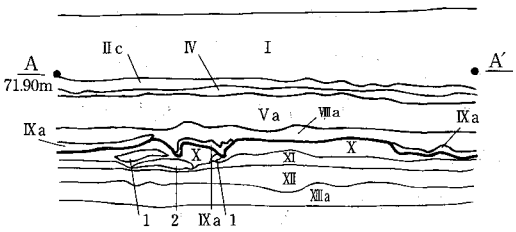


第89図　C・G区Hr-FA層下面遺構図、畠跡

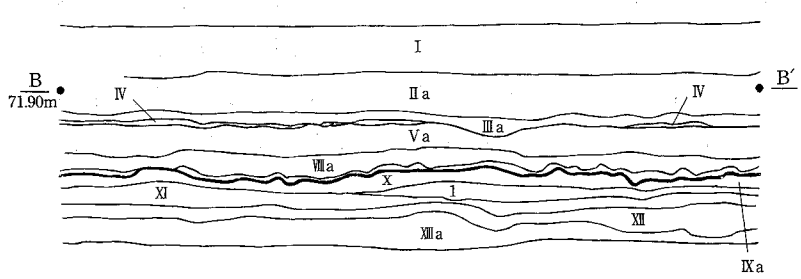


H 区 Hr—FA 層下面遺構図

A－A′ 畦畔
1 層．黄灰褐色砂層 酸化鉄の沈着が著しい。
2 層．灰褐色砂層 酸化鉄の沈着が著しい。

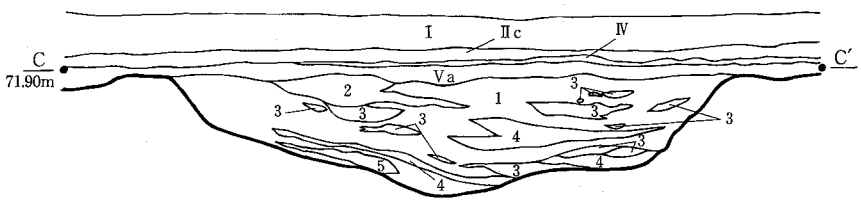


B－B′ 畦畔
1 層．灰褐色砂 黒色土の帯が堆積する。酸化鉄の沈着が著しい。



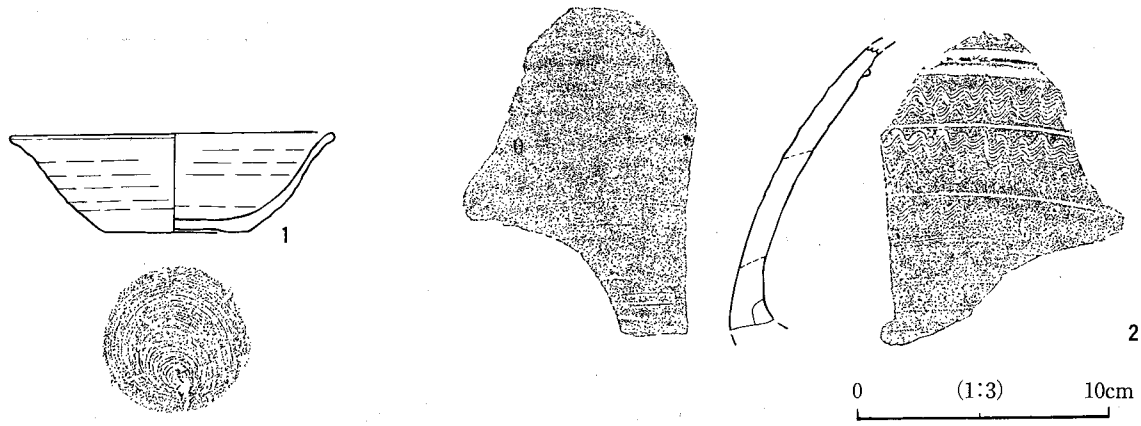
8 号溝

1 層．灰褐色細砂 黒色細砂をラミナ状に含む。
2 層．暗灰褐色細砂 黒色細砂をラミナ状に含む。
3 層．灰褐色細砂 褐色礫を多く含む。
4 層．灰褐色細砂 褐色礫をまばらに含む。
5 層．黒褐色細砂 褐色礫を多く含む。



8 号溝土層断面図

0 (1:60) 2 m



第90図 H 区 Hr—FA 層下面遺構図、畦畔、8 号溝土層断面図及び出土遺物

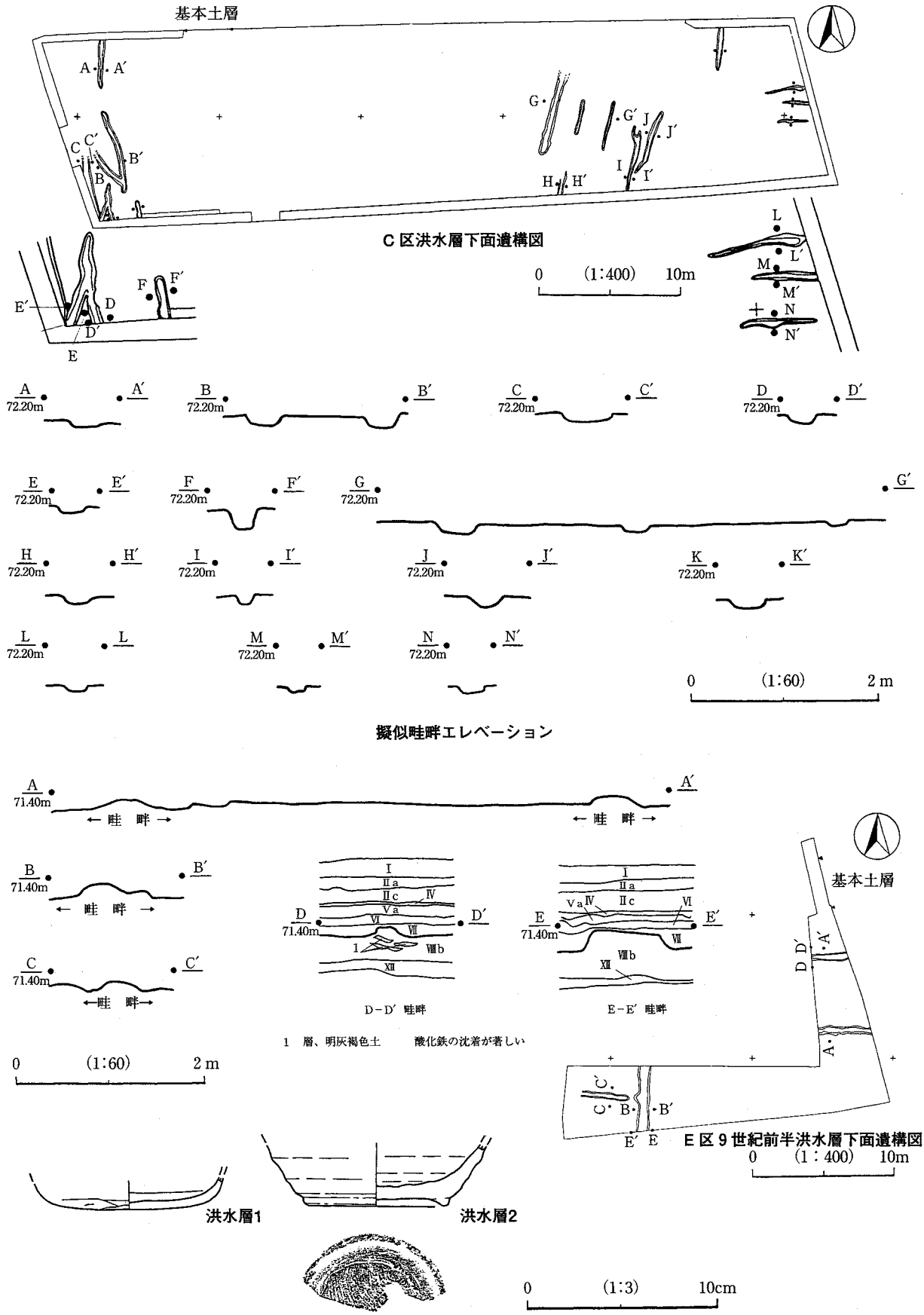
第3節　平安時代

平安時代の遺構群は9世紀前半といわれる洪水層の下面と微高地上に展開する9世紀後半から10世紀代にかけての集落跡である。9世紀前半の洪水層下の遺構群は水田跡にかかわる畦畔や水路である。まだ、条里による区割りを明確に残しており、畦畔の断面も台形に残り、遺存状況も良好である。また、C区の西端部と東側半分で擬似畦畔も確認された。

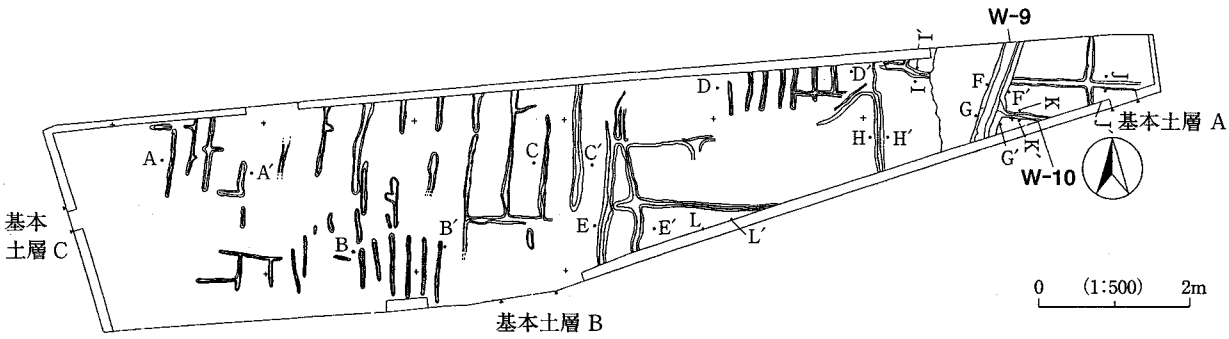
9世紀後半から10世紀代にかけての集落跡は南側に隣接する群馬県埋蔵文化財調査事業団による本道部分でも微高地上に多数の竪穴住居跡が確認された。なお、この集落は微高地がのびる西側へ更に広がるものと考えられる。

第1項　9世紀前半洪水層下面遺構　(第91・92図、表20、図版20－7・8、21－2～5、26)

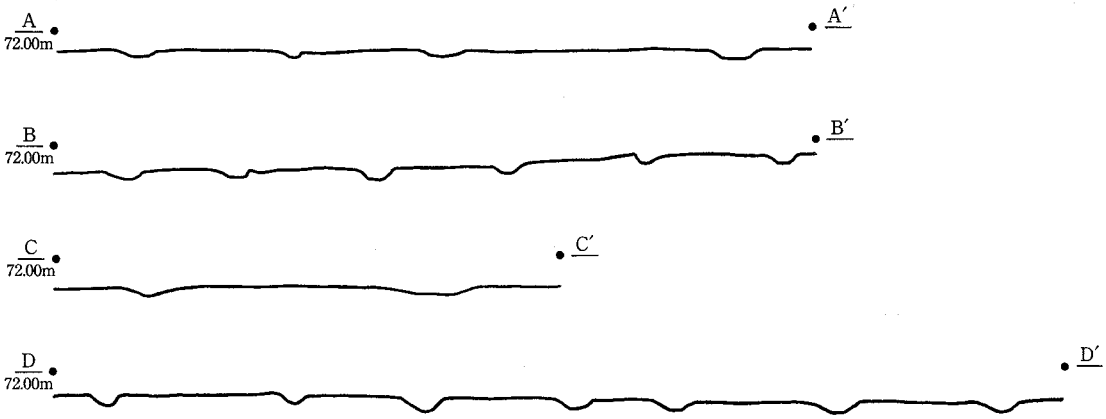
本遺構群は9世紀前半の洪水層下面に存在し、C・D・E区より水田跡・畦畔状遺構・溝が検出されている。C区では調査区西端部と東半部に擬似畦畔が検出されている。本擬似畦畔は溝状を呈し、畦畔を構築時に畦に平行して形成されたと推定される。擬似畦畔の溝は幅20～60cm×深さ6～20cmを測り、走行方向はN5°E～N15°Eを示すものが調査区西端部に2条、ほぼ中央部から東側にかけて7条、N15°W～N45°Wを示すものが調査区西端部に5条、N80°E～N90°Eを示すものが調査区東端部に3条確認される。D区は調査区中央部から東側にかけて畦畔が、東部に溝が、調査区中央部から西側一帯と東側北部に擬似畦畔が検出されている。畦畔は幅60～70cm×高さ5～8cmを測り、走行方向はN5°Eとなる幅の広い畦畔が1条存在し、その東側一帯に幅35～60cm×高さ3～8cmを測り、走行方向はN1°E～N2°W及びN87°Wとなる幅の狭い畦畔が存在する。中央部の広い畦畔の南端から3.7m北方向に伸びた部分に幅10cmの水口と思われる痕跡が存在する。一枚の水田の規模は明らかではないが幅の広い畦畔の東側を東西に伸びる畦畔は3.6m前後の間隔であった。9号溝は幅1.25～1.40m×深さ50～52cmの逆台形状断面を呈し、走行方向はN29°Eとなる。10号溝は幅35～45cm×深さ40cmの箱形状断面を呈し、走行方向はN81°Wとなる。洪水層を切って構築される10号溝は9号溝との連結部分で土手状に盛り上がっている。擬似畦畔は幅17～66cm×深さ4～11cmの皿状断面を呈し、走行方向はN8°W～N9°E及びN89°E～N99°Eとなる。擬似畦畔の規模は幅2.6m～6.9mの間隔をもち南北に走るものが調査区西側一帯に、幅0.40m～1.20mの間隔をもち南北に走るものが調査区西側南部と東側北部に存在する。E区は調査区北東部と西部に畦畔が検出されている。畦畔は調査区西側部分に幅75～90cm×高さ12～21cmを測り、走行方向がN2°Eとなる幅の広い畦畔とその西側と北東部分に幅38～60cm×高さ9～12cmを測り、走行方向がN10°W及びN87°E～N97°Eとなる幅の狭い畦畔が存在する。幅の広い畦畔はD区に検出された規模・直行方向が類似する畦畔より109.5mを測る。一枚の水田の規模は不明であるが北東部に検出された畦畔の間隔は4.7mである。幅の広い畦畔の南端から2.3m西側に幅32cmの水口と思われる痕跡が認められる。



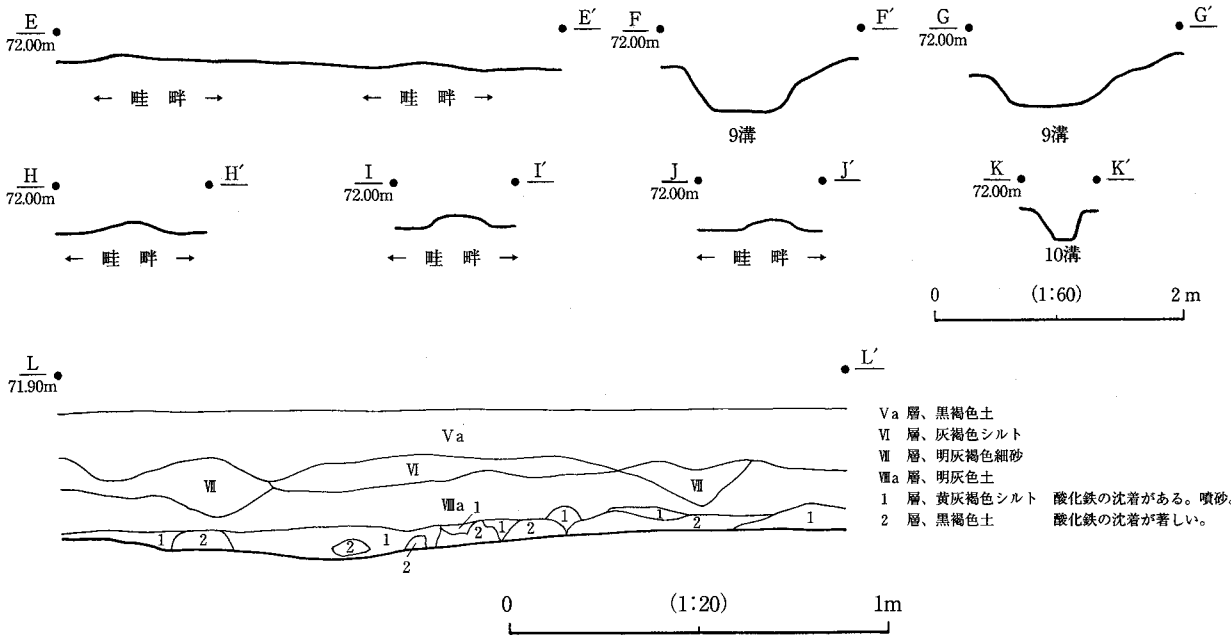
第91図　C・E区洪水層下面遺構図及び出土遺物



D 区 9 世紀前半洪水層下面遺構図



擬似畦畔エレベーション



第92図　D 図洪水層下面遺構図

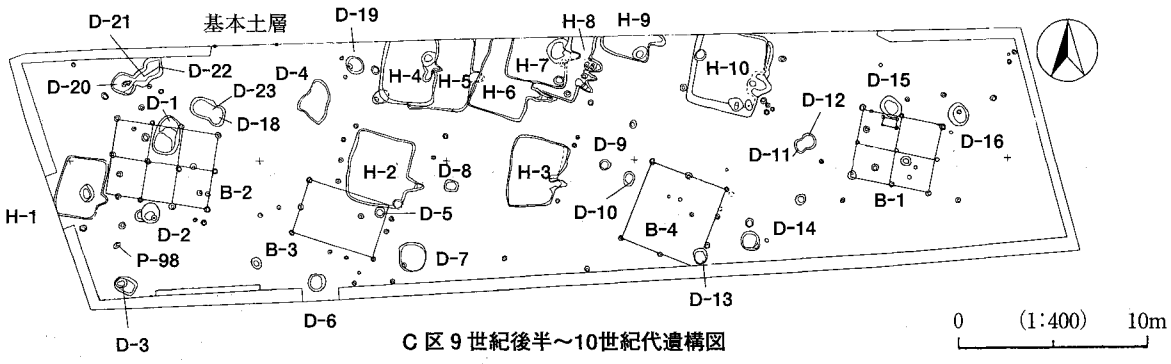
第２項　９世紀後半～10世紀代遺構

１．竪穴住居跡　（第93図、表20、図版18－１～２、26）

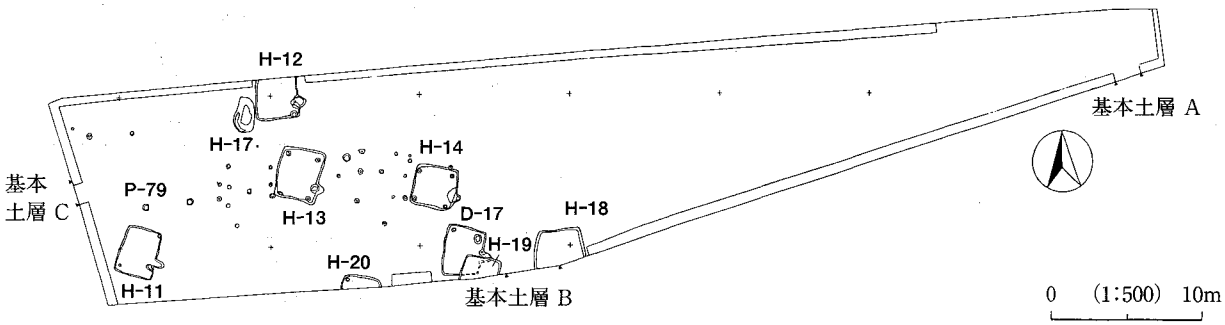
微高地であるＣ区とＤ区西側半分で合計18軒の竪穴住居跡が確認された。いずれも床面積が10～18m^{2}の小規模な住居跡である。いずれの住居跡もカマドは東壁の中央やや南寄りに付設されている。８号住居跡では３基並列したカマドが検出された。また、１号住居跡中央部の穴は焼土と灰が多く含まれ、住居内覆土上層から粘土塊や焼土塊がみられ、ただのカマド灰掻き出し穴ではなく、工房の存在が窺える炉跡も想起される。

住居内に明確な柱穴とみられるものは少なかったが、13・14・17号住居跡のように各コーナー部に深さ20cm弱の浅い穴が確認され、上屋を支えていた四隅柱穴の存在が窺える。また、住居跡中央部に穴が確認できたのが、６・８・13・14・17号住居跡の５軒、出入り口の施設を想起させる穴が10号住居跡西壁中央で検出された。

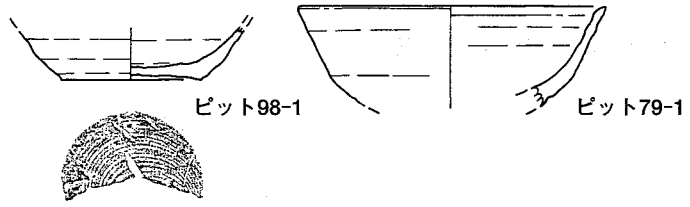
床面の硬化した踏み固め部分が３・４・６・12・17～19号住居跡の７軒で、大半がカマド前から住居中央部に認められた。



C区９世紀後半～10世紀代遺構図



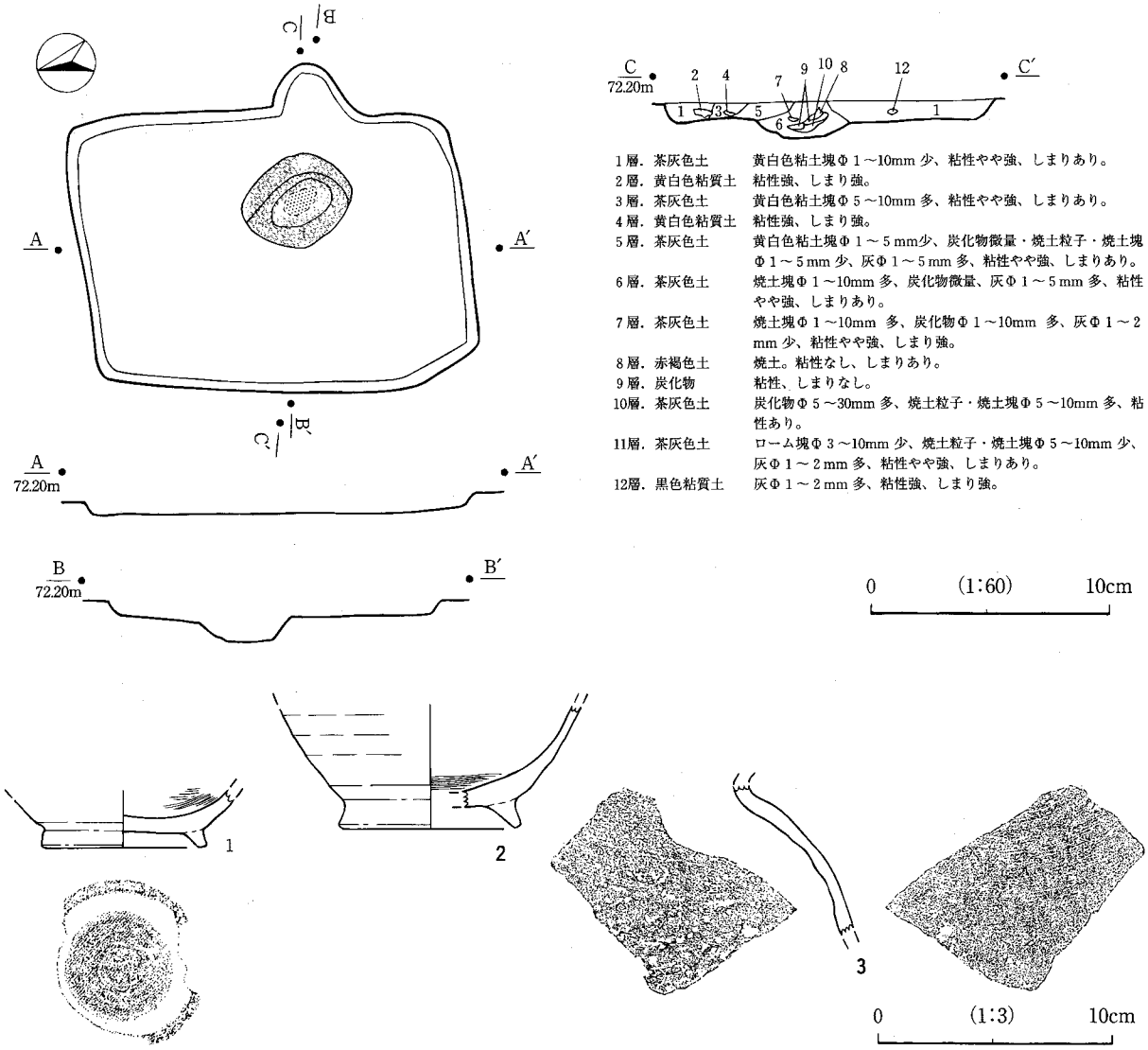
D区９世紀後半～10世紀代遺構図



第93図　C・D区９世紀後半～10世紀代遺構図及び出土遺物

1号住居跡（第94図、表16、図版21-7、24）

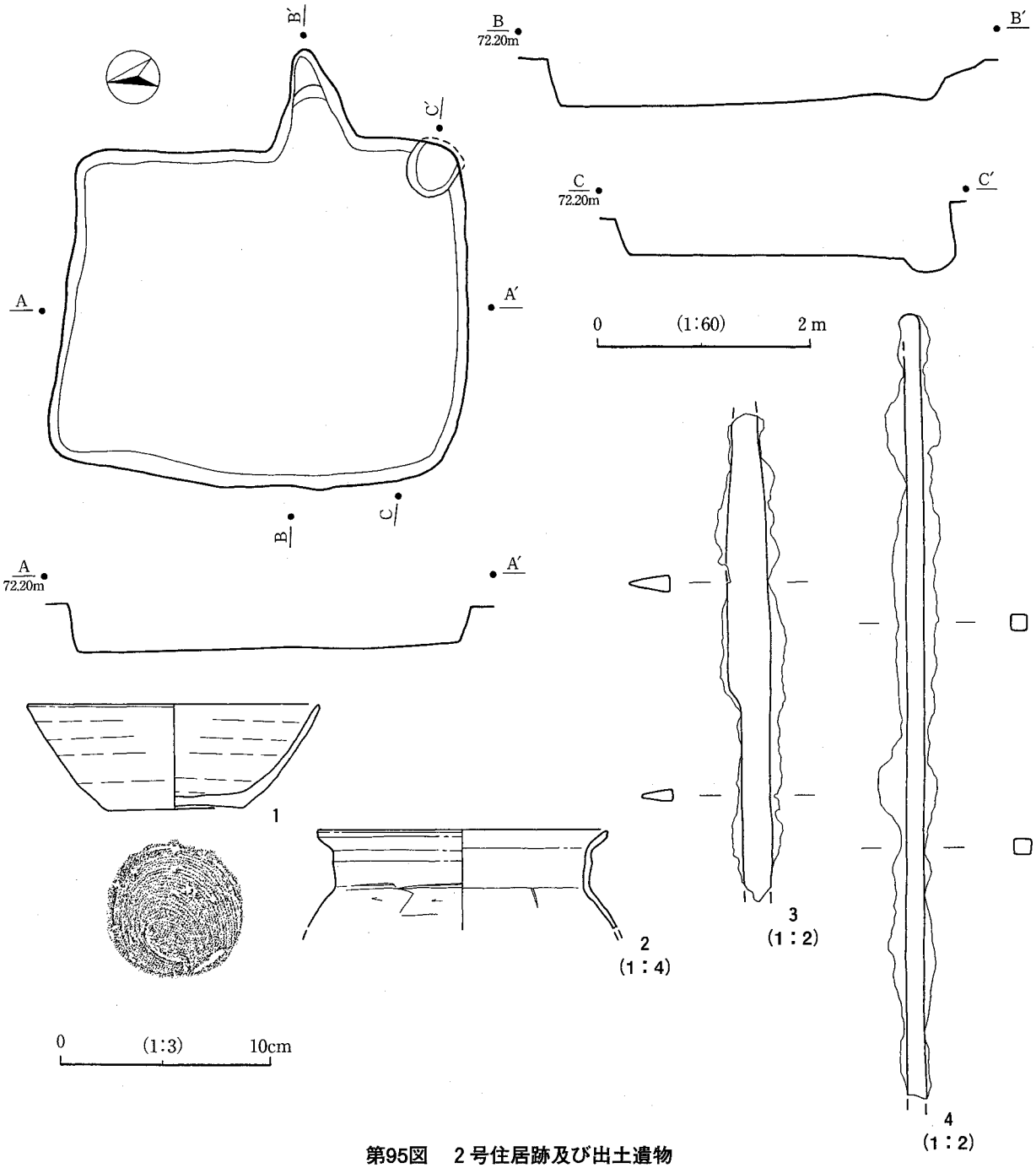
浅間B軽石に埋没した水田耕作土層の下、榛名FA混じりの茶灰褐色土中に確認面を持つ。1号住居跡以外の住居跡（18・19号住居跡を除いて）も同じ面で確認されている。1号住居跡はC区調査区公共座標X＝38,858・Y＝－60,169に位置し、9世紀前半の洪水層下より検出された擬似畦畔を切って構築されている。平面形は南北にやや長い長方形で、カマドを東壁やや南寄りに持ち、主軸方向はN104°Eを示す。規模は南北方向3.05m、東西方向2.2m、残存する壁高は12cmを測る。床は、ほぼ全面が硬化しているが、中央部に径80cm深さ20cmの浅い皿状のくぼみを持っている。くぼみ穴の覆土は炭化物を含んだ黒褐色の灰層で中央部に焼土ブロックの堆積がみられた。床面積は6.7m^{2}を測り、床上に主柱の掘り込みは確認されなかった。カマドは、遺存状態が悪く焼土や炭化物は確認されなかった。住居跡の埋没土は、白色軽石混じりの茶灰褐色土で人為堆積状に観察された。竪穴外に柱穴状の落ち込みが4箇所程確認されたが、住居跡との明確な関係を捉えることができなかった。



第94図　1号住居跡及び出土遺物

2号住居跡（第95図、表16、図版21-8、24）

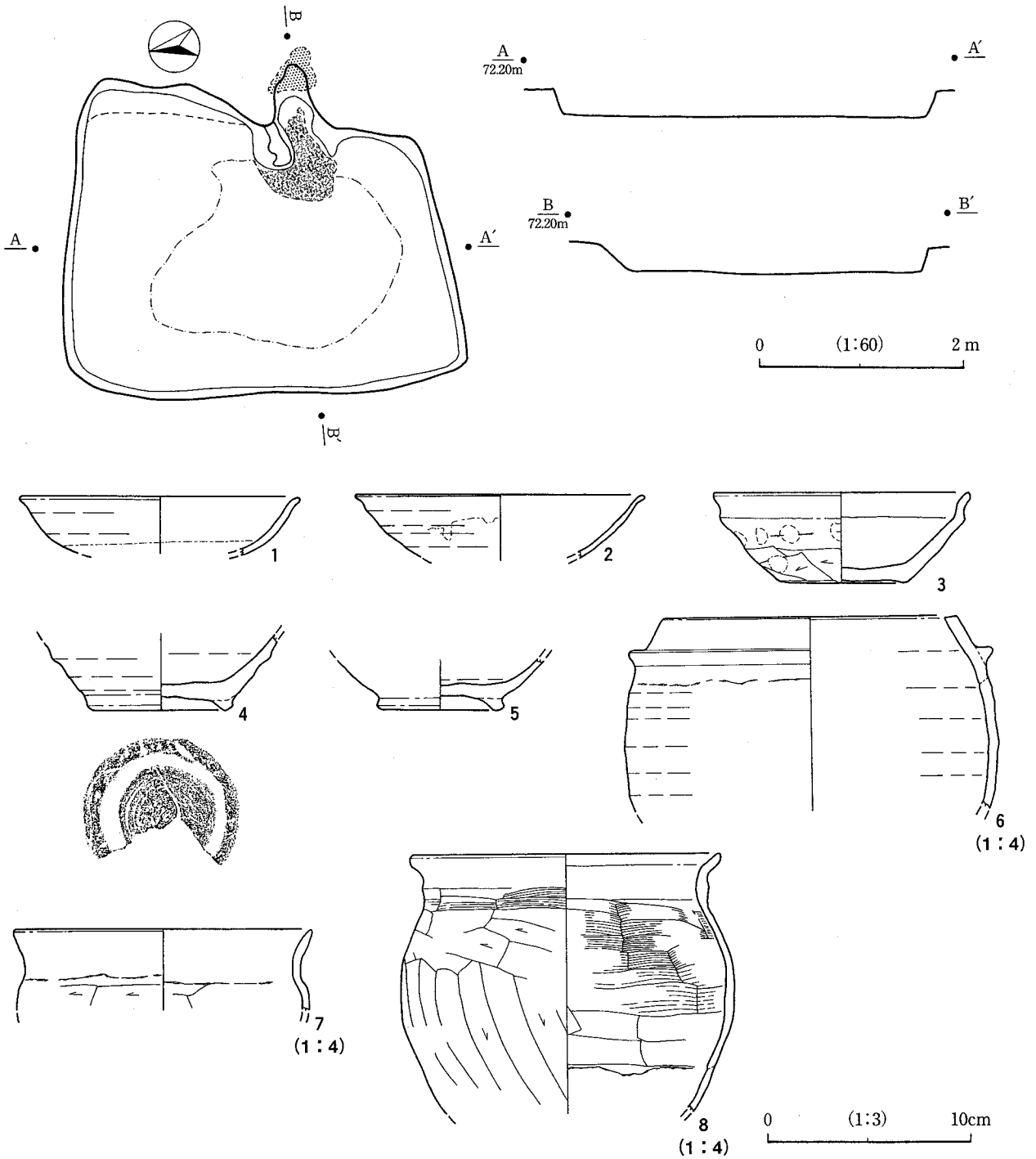
本遺構はC区調査区公共座標X＝38,859・Y＝－60,153に位置する。平面形は南北にやや長い長方形で、カマドを東壁やや南寄りに持ち、主軸方向はN107°Eを示す。規模は南北方向3.58m、東西方向2.9m、残存する壁高は57cmを測る。床は、ほぼ全面が硬化しているが、南東コーナー部に径48cm深さ12cmの浅い皿状のくぼみを持っている。床面積は、10.4m^{2}を測り、床上に主柱の掘り込みは確認されなかった。カマドは、袖部の遺存状態が悪いが火床面上に炭化物粒子混じりの灰の薄い堆積が確認された。住居跡の埋没土は、白色軽石混じりの茶灰褐色土で自然堆積状に観察された。竪穴外に柱穴状の落ち込みが7箇所程確認され、一部竪穴壁と平行に直線的に並ぶものもあったが、住居跡との明確な関係を捉えることができなかった。



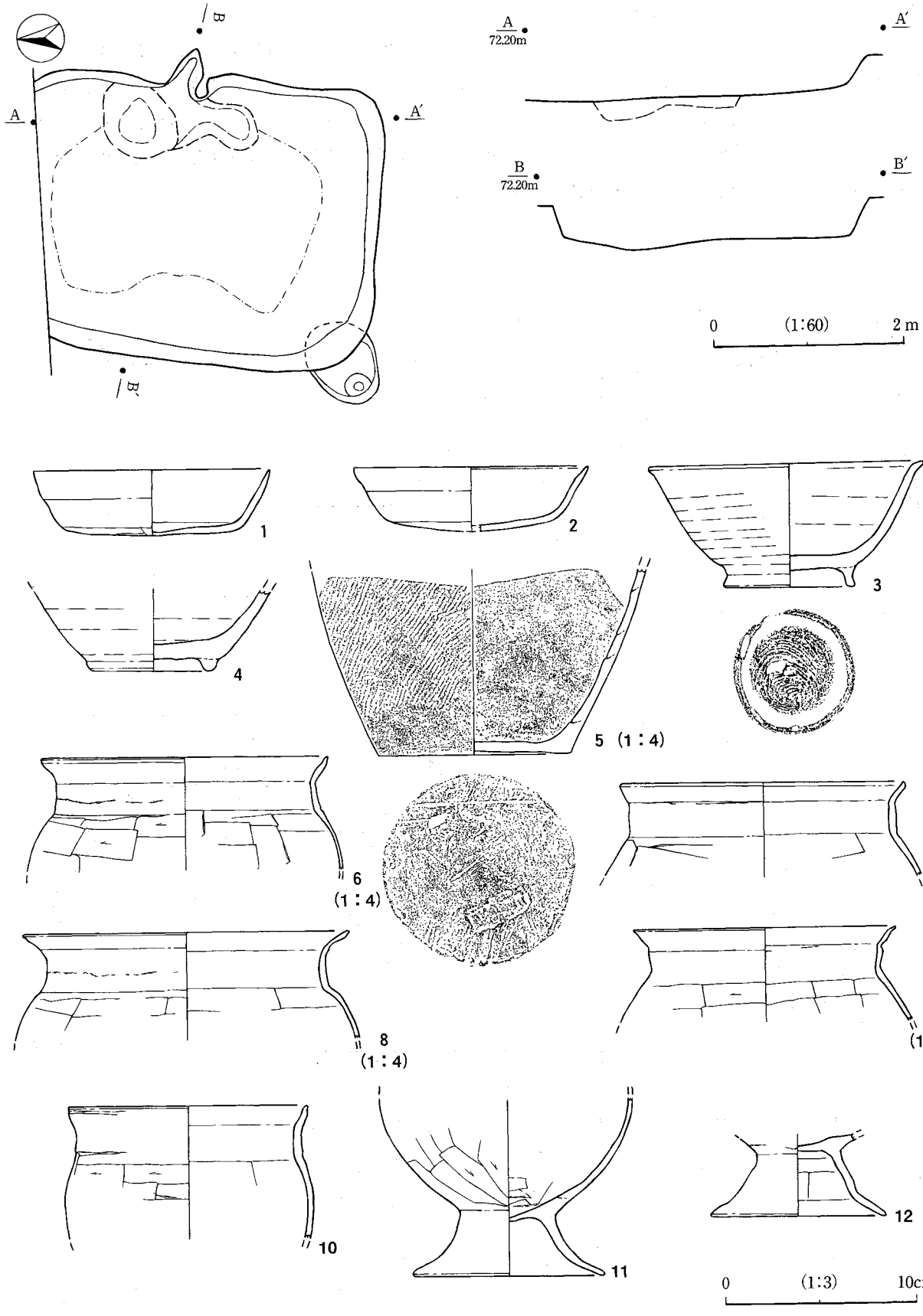
第95図　2号住居跡及び出土遺物

3号住居跡（第96図、表16、図版22-1、24）

3号住居は、C区調査区公共座標X＝38,859・Y＝－60,145に位置する。平面形は東壁が西壁に比べてやや短い台形で、カマドを東壁やや南寄りに持ち、主軸方向はN104°Eを示す。規模は南北方向3.72m、東西方向2.28m、残存する壁高は26cmを測る。床は、ほぼ全面が硬化しており、床面積は8.5m^{2}を測る。カマドは、袖部の遺存状態が悪いが火床面上に炭化物粒子混じりの灰の薄い堆積が確認された。住居跡の埋没土は、白色軽石混じりの茶灰褐色土で自然堆積状に観察された。



第96図　3号住居跡及び出土遺物



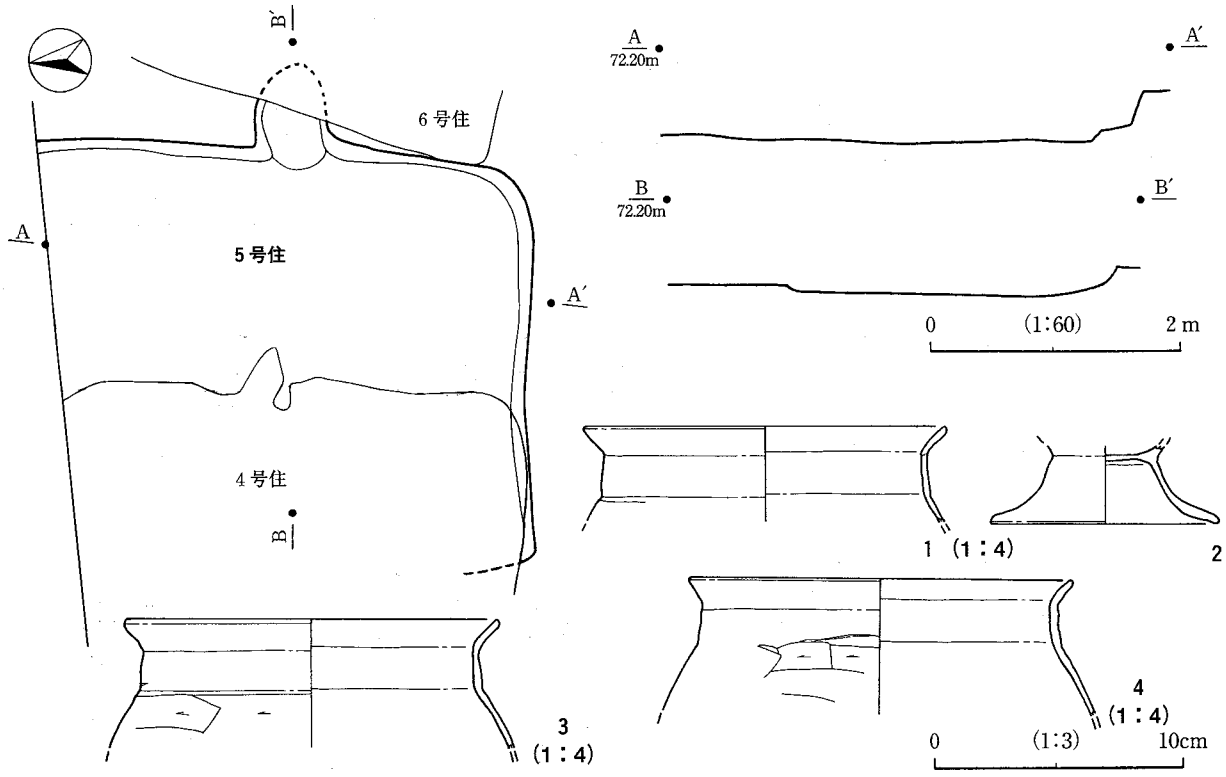
第97図　4号住居跡及び出土遺物

4号住居跡（第97図、表16・17、図版22-2、24、25）

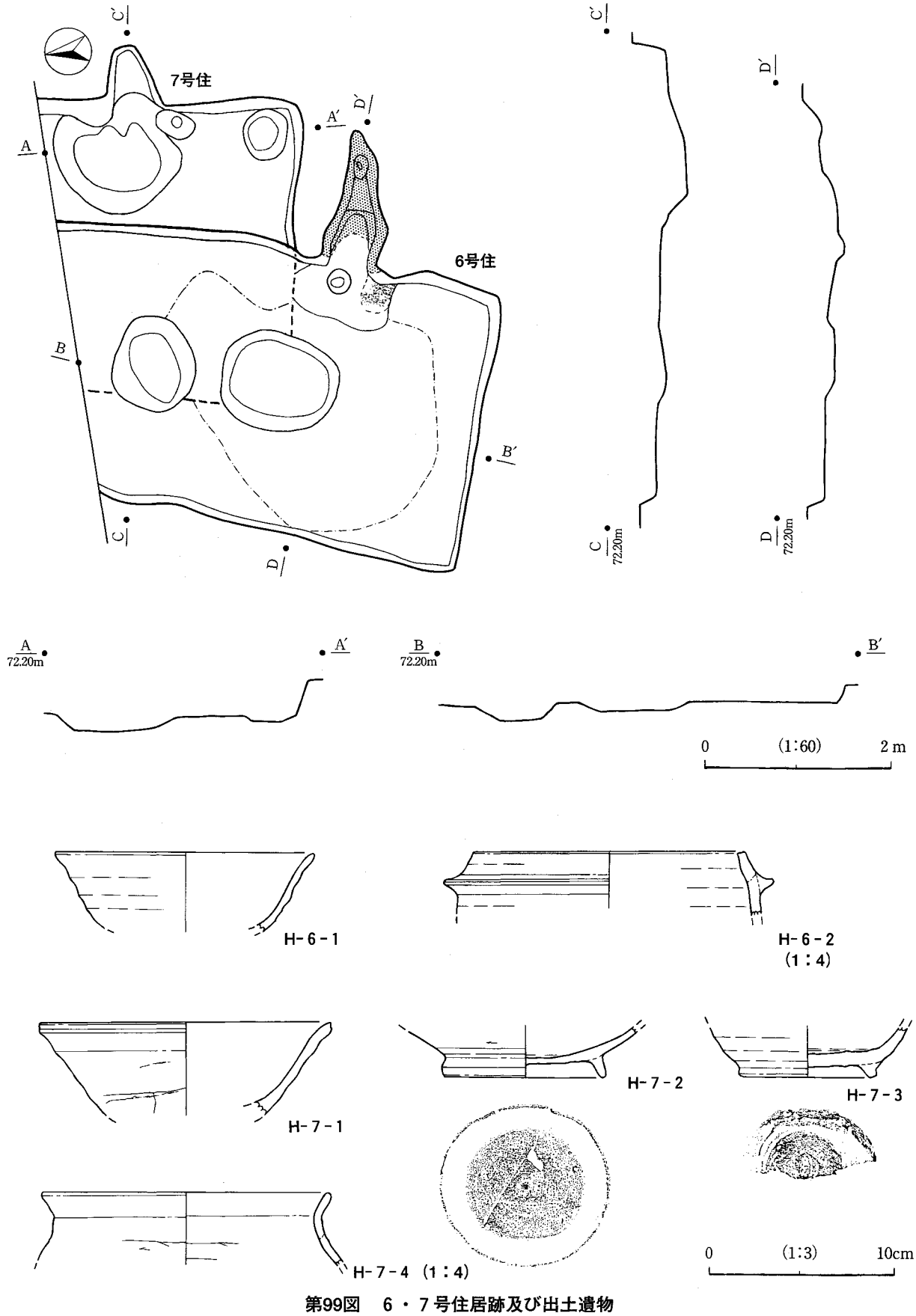
4号住居跡はC調査区公共座標X＝38,865・Y＝－60,152に位置する。5号住居跡の覆土を掘り込んで構築している。平面形は北壁が調査区外にあるためはっきりしないが、南北方向に長い長方形になるものと思われる。東壁にカマドが設けられている。主軸方向はN105°Eを示す。規模は南北方向3.5m以上、東西方向2.8m、残存する壁高は39cmを測る。床は、ほぼ全面が硬化している。カマドは、向かって右側の袖部が良く残っており、東壁北側が南側と比べて掘り込みが浅い分向かって左側の袖部の室内への突出が見られなかった。住居跡は、下層に白色軽石小・中ブロック混じりの茶灰褐色土、上層に茶灰褐色土が自然堆積状に観察された。

5号住居跡（第98図、表17、図版25）

5号住居跡は、C調査区公共座標X＝38,865・Y＝－60,150に位置する。6号住居跡に東壁上半部を掘り込まれている。平面形は北壁が調査区外にあるためはっきりしないが、南北方向に長い長方形になるものと思われる。主軸方向はN108°Eを示す。規模は南北方向3.8m以上、東西方向3.25m、残存する壁高は27cmを測る。床は、西側半分が4号住居跡に掘り込まれており現存しないが、残りの部分はほぼ全面が硬化している。カマドは袖部の遺存状態が悪いが、火床面上に炭化物粒子混じりの灰の薄い堆積が確認された。住居跡の埋没土は茶灰褐色土層をベースとし、下層に黒褐色土の大きな塊を多量に含む人為的な埋め戻しが観察された。



第98図　5号住居跡及び出土遺物



第99図　6・7号住居跡及び出土遺物

6号住居跡（第99図、表17、図版22-3、25）

6号住居跡は、C調査区公共座標X＝38,865・Y＝－60,147に位置する。5号住居跡の東部、7号住居跡の西部を掘り込んでおり、いずれの住居跡よりも新しい。平面形は北壁が調査区外にあるためはっきりしないが、南北方向に長い長方形になるものと思われる。主軸方向はN108°Eを示す。規模は、東西方向2.8m、南北方向4m以上になるものと思われる。残存する壁高は20cmを測る。床はカマドの前面付近が特に硬化している。中央部と北側に床下土坑を持っている。カマドは、煙道部の掘り込みが深く確認面で1.4mほど壁外に掘り込んでおり、燃焼室奥から煙道部にかけての内壁は焼土化が著しい。向かって右袖部の存在したと思われる位置の下に炭化物の広がりが確認された。住居跡の埋没土は、茶灰褐色土層をベースとして自然堆積状に観察された。

7号住居跡（第99図、表17、図版25）

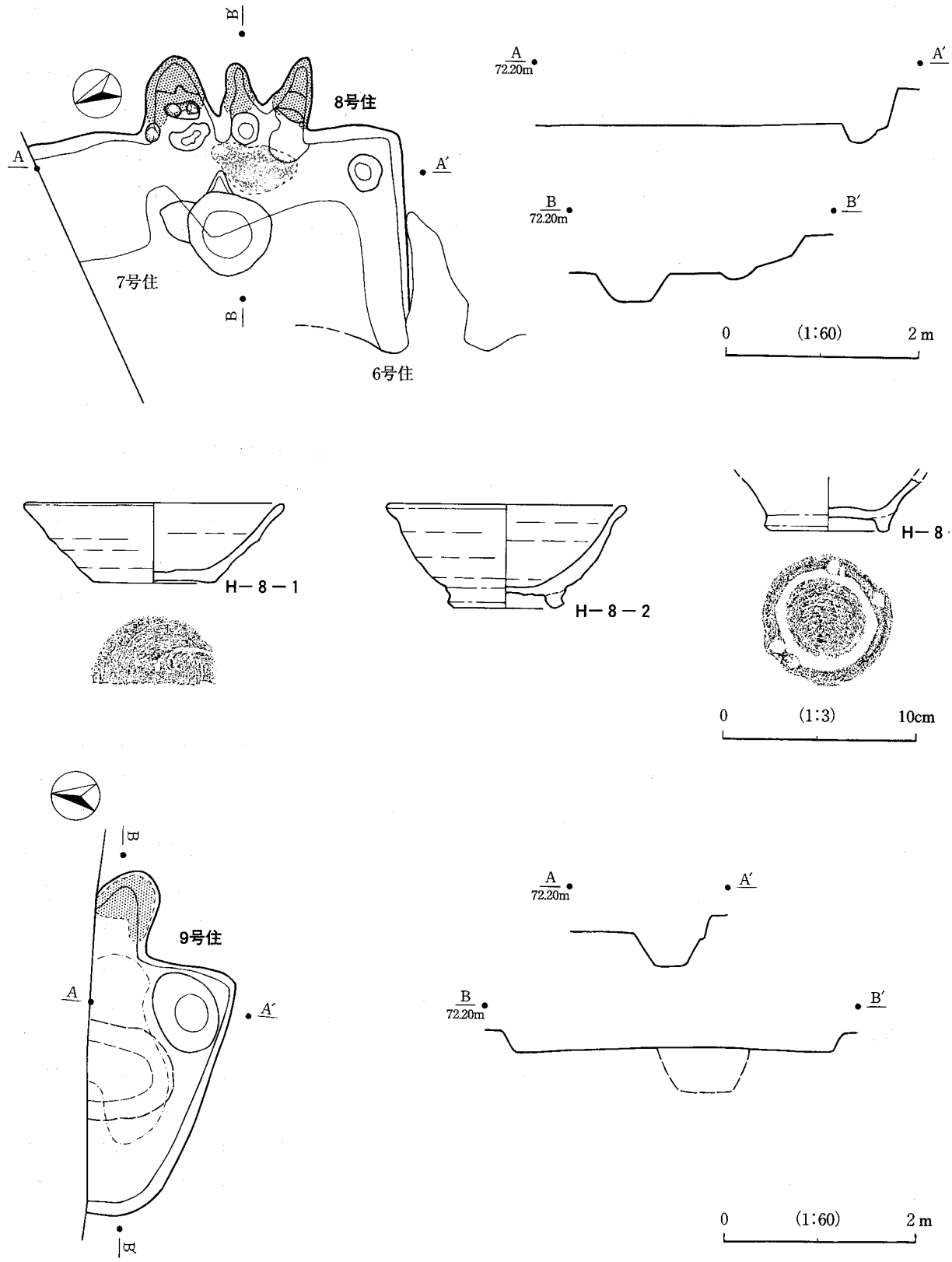
7号住居跡は、C調査区公共座標X＝38,865・Y＝－60,145に位置する。6号住居跡に西部を掘り込まれており、さらに8号住居跡を掘り込んでいる。平面形は北壁が調査区外にあるためはっきりしないが、南北方向に長い長方形になるものと思われる。主軸方向はN102°Eを示す。規模は東西方向3.0m、南北方向2.4m以上、になるものと思われる。残存する壁高は30cmを測る。床は、ほぼ全面が硬化している。南東コーナー部に径約50cm、深さ約10cmの浅い皿状のくぼみが確認された。カマドは遺存状態が悪く、東壁側にカマド掘り方に近い状態で確認された。住居跡の埋没土は、茶灰褐色土層をベースとした自然堆積土層である。

8号住居跡（第100図、表18、図版22-4、25）

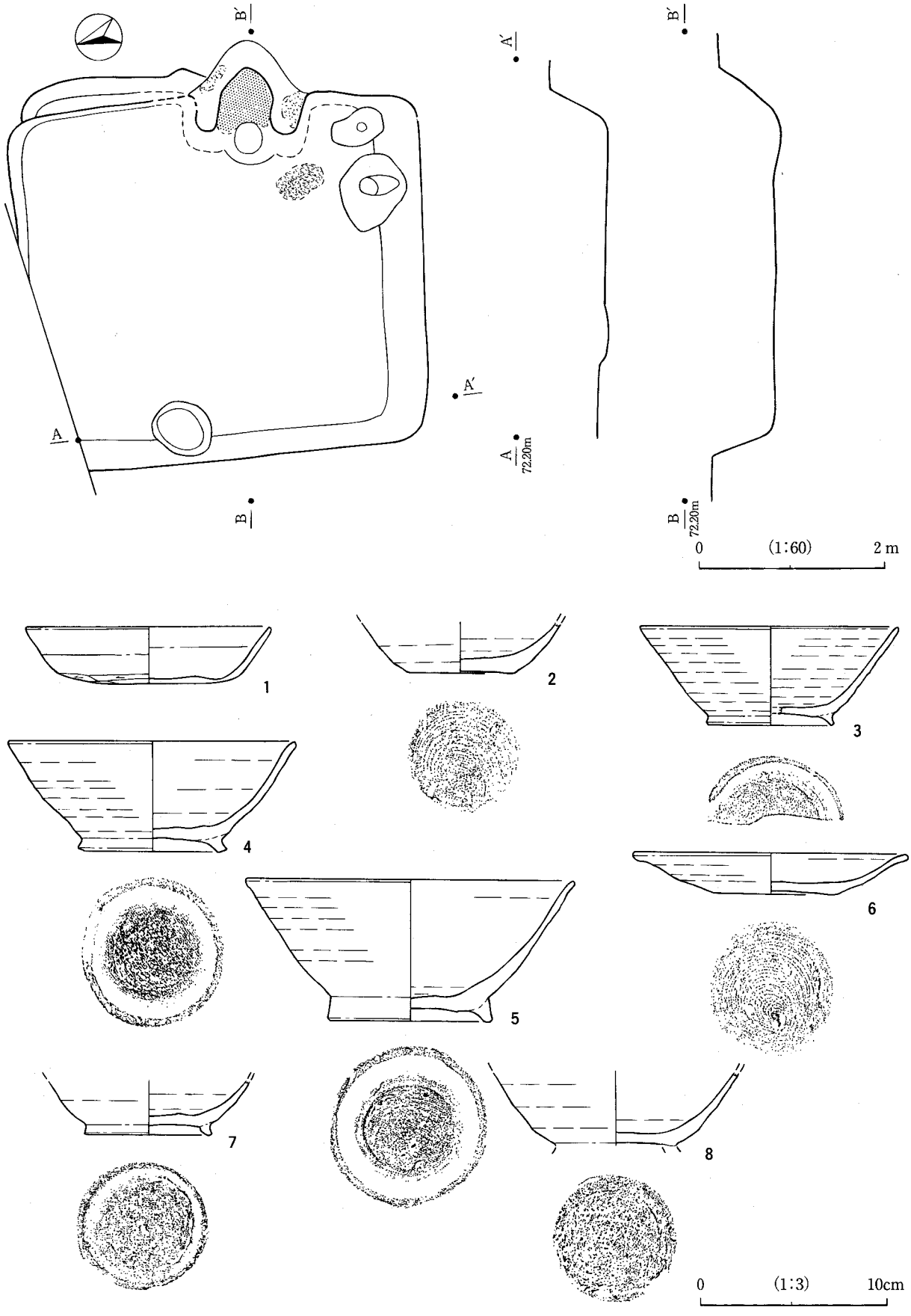
8号住居跡は、C調査区公共座標X＝38,865・Y＝－60,153に位置する。7号住居跡に西側大半を掘り込まれている。平面形は重複と北壁が調査区外にあるためはっきりしない。主軸方向はN112°Eを示す。残存する壁高は40cmを測る。床は、ほぼ全面が硬化しており、住居跡南東のコーナー部に径34cm、深さ16cmの浅い皿状のくぼみが確認された。カマドは、東壁やや南寄りに3基並んで確認された。向かって左側のカマドには角の丸い細長い自然石が半ば埋め込まれた状態で、奥の内壁際に2本、左側袖部に1本立てられていた。右側の2基のカマドの前面の床上には、径80cm、深さ30cmの浅い皿状のくぼみが確認され、覆土には炭化物が充填されていた。住居跡の埋没土は、茶灰褐色土層をベースとした自然堆積状に観察された。

9号住居跡（第100図）

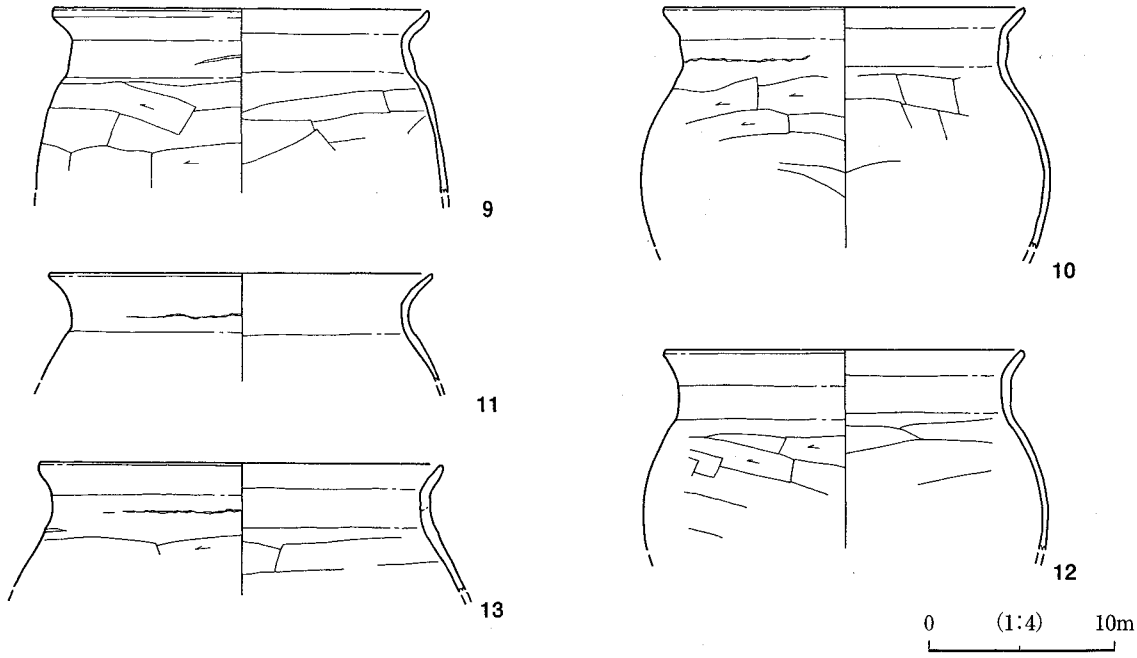
9号住居跡は、C調査区公共座標X＝38,866・Y＝－60,140に位置する。平面形は北壁が調査区外にあるためはっきりしないが、規模は東西方向2.64m、残存する壁高は23cmを測る。主軸方向はN106°Eを示す。床は、ほぼ全面が硬化しており、住居跡南東のコーナー部及び中央部に深さ40cm程の床下土坑を持っていた。カマドは、遺存状態が悪く、掘り方として確認された。住居跡の埋没土は、茶灰褐色土層をベースとした自然堆積状に観察された。



第100図　8・9号住居跡及び出土遺物



第101図　10号住居跡及び出土遺物(1)



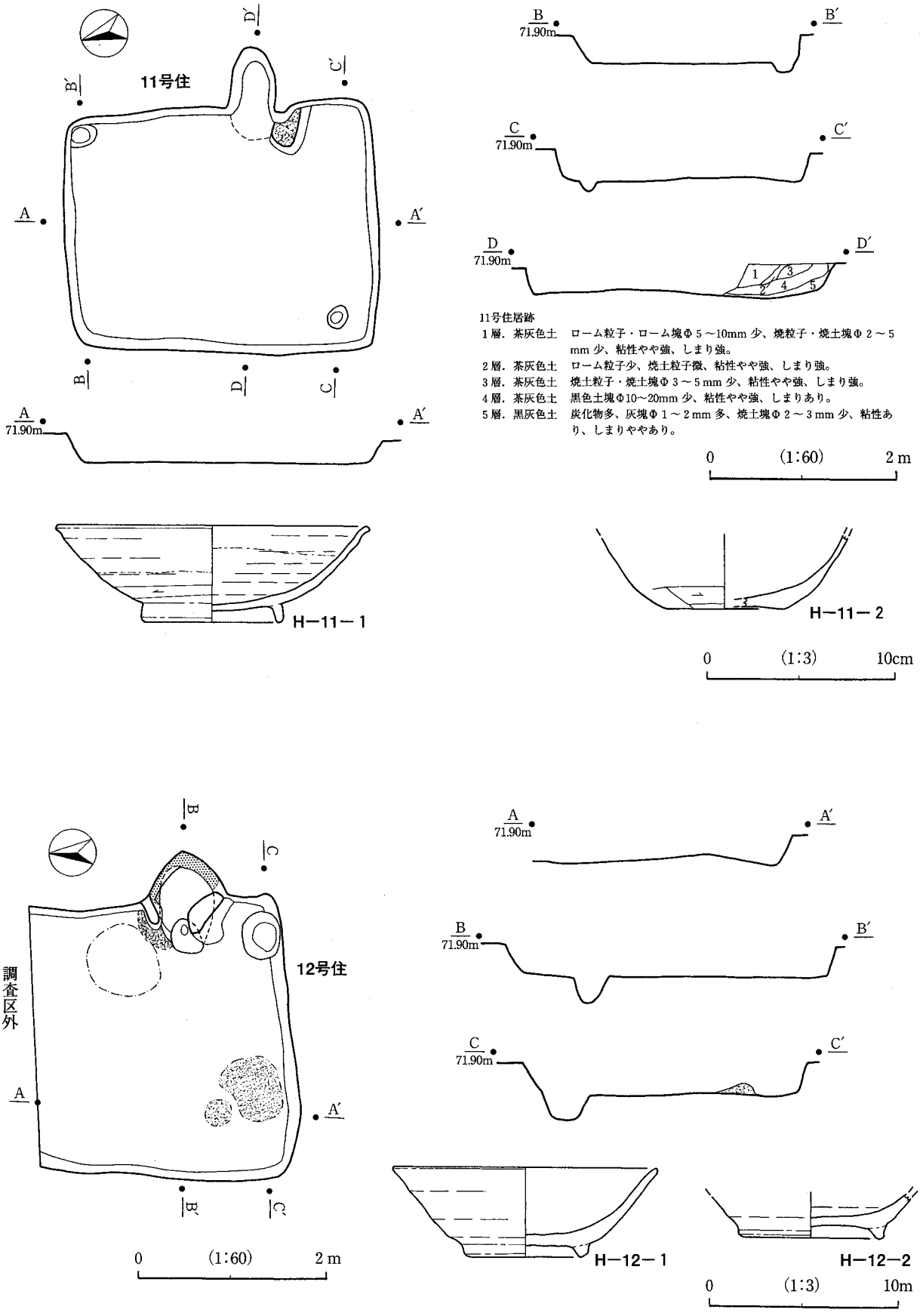
第102図　10号住居跡出土遺物(2)

10号住居跡（第101・102図、表18、図版22-5、25）

10号住居跡は、C調査区公共座標X＝38,865・Y＝－60,135に位置する。本住居跡は9世紀前半洪水層下の擬似畦畔を切っている。平面形は方形で、カマドを東壁やや南寄りに持ち、主軸方向はN106°Eを示す。規模は南北方向4.27m、東西方向4.13m、残存する壁高は63cmを測る。東壁のカマドの北側部分は奥行き30cm程掘り込まれ、床面と約10cmの段差がついた状態で確認された。床はほぼ全面が硬化しており、床面積は17.7m^{2}を測る。床上に主柱の掘り込みは確認されなかったが、南東コーナー部に2カ所、西壁下に1カ所浅い皿状のくぼみ穴が確認された。カマドは袖部がよく残存し、焼土化した内壁や底面に炭化物混じりの燃焼灰の薄い堆積が観察された。住居跡の埋没土は、茶灰褐色土層をベースとし、黒褐色土小・中ブロックを土層中に均質に分散したように混じっており人為的堆積状に観察された。竪穴外に柱穴状の落ち込みが数箇所程確認されたが、住居跡との明確な関係を捉えることができなかった。

11号住居跡（第103図、表18、図版22-6、26）

11号住居跡は、D調査区公共座標X＝38,859・Y＝－60,109に位置する。平面形は南北にやや長い長方形で、カマドを東壁やや南寄りに持ち、主軸方向はN111°Eを示す。規模は南北方向3.05m、東西方向2.4m、残存する壁高は31cmを測る。床は、ほぼ全面が硬化しているが、北東コーナー部と南西コーナー部に径20～25cm深さ10cm程の浅いくぼみ穴が確認された。床面積は、7.3m^{2}を測り、床上に主柱の掘り込みは確認されなかった。カマドは、袖部の遺存状態が悪いが火床面上に炭化物粒子混じりの灰の薄い堆積が確認され、向かって左側袖の基部に粘土の張り付き痕跡が見られた。住居跡の埋没土は、白色軽石混じりの茶灰褐色土で自然堆積状に観察された。



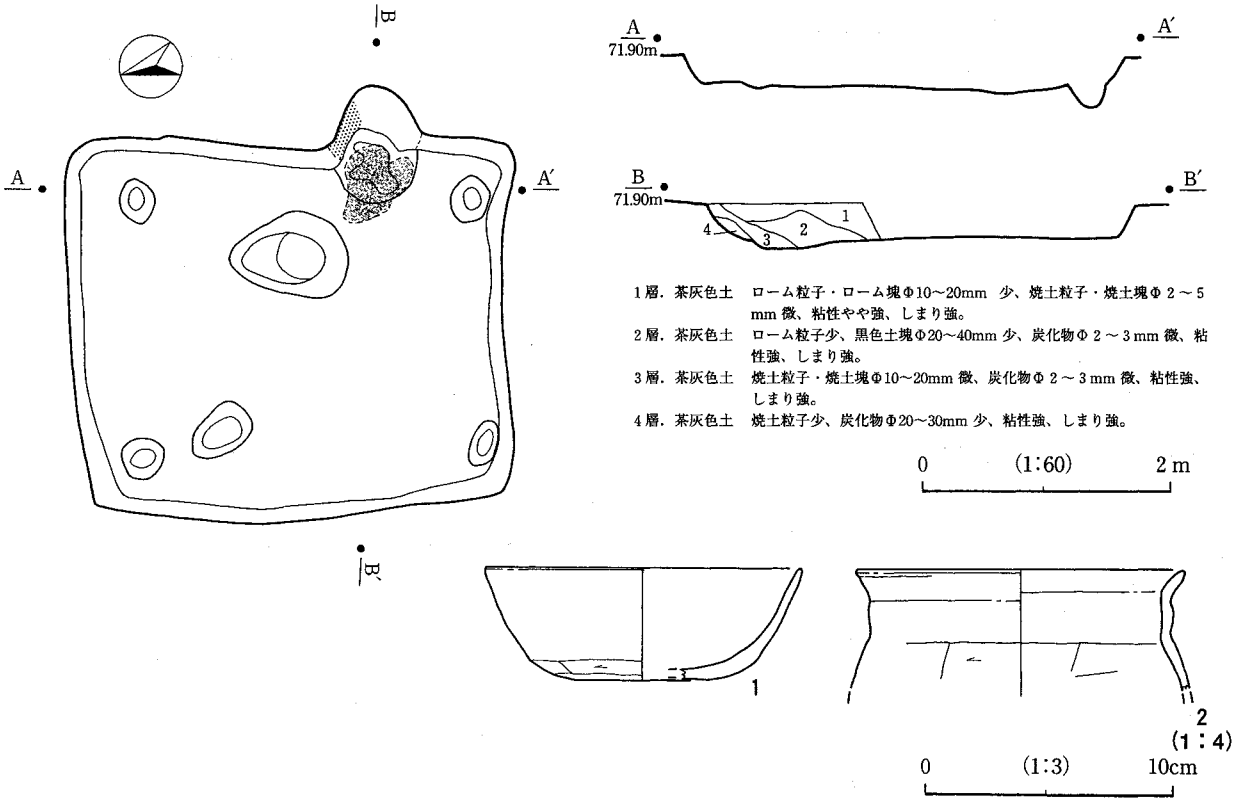
第103図　11・12号住居跡及び出土遺物

12号住居跡（第103図、表19、図版22-7・8、26）

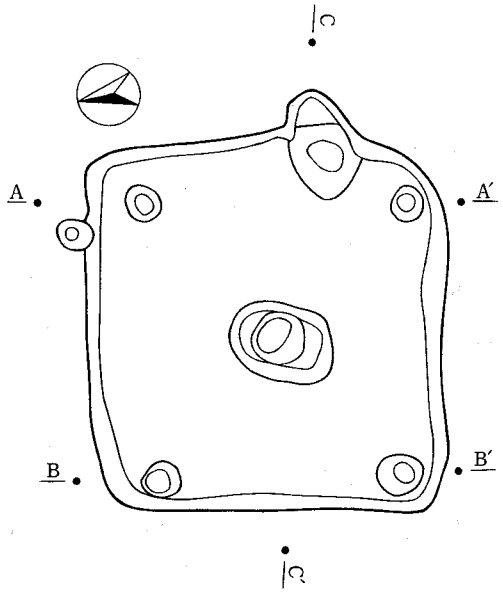
12号住居跡は、D調査区公共座標X＝38,870・Y＝－60,099に位置する。平面形は北壁が調査区外にあるためはっきりしないが、規模は東西方向2.8m、残存する壁高は33cmを測る。カマドを東壁やや南寄りに持ち、主軸方向はN90°Eを示す。床は、中央部やや東寄りの床面が特に硬化している。南東コーナー部に径40～50cm深さ26cm程のくぼみ穴が確認された。南西部床面には70～80cm四方の範囲に粘土の堆積が見られた。カマド袖部の遺存は悪く、焼土や粘土がブロック化してカマド内に流れ込んでいた。住居跡の埋没土は、茶灰褐色土層をベースとし、黒褐色土小・中ブロックを土層中に含み人為的堆積状に観察された。

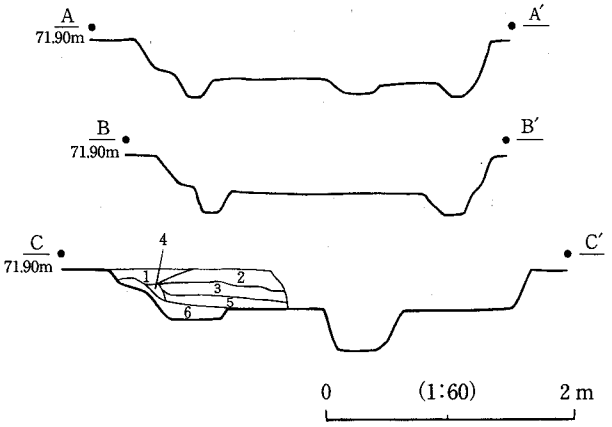
13号住居跡（第104図、表19、図版23-1、26）

13号住居跡は、D調査区公共座標X＝38,865・Y＝－60,098に位置する。平面形は南北にやや長い長方形で、カマドを東壁やや南寄りに持ち、主軸方向はN104°Eを示す。規模は南北方向3.2m、東西方向2.7m、残存する壁高は25cmを測る。床は粘土が貼られ、ほぼ全面が硬化しており、床面中央部寄りには床下土坑が検出された。住居跡各コーナー部に径30～40cm、深さ17cm程の浅いくぼみ穴が確認された。カマド袖部の確認は難しかったが、火床面上には炭化物粒子の混じった薄い黒灰色土層やその上に焼土化したブロックが落下した状態で堆積していた。住居跡の埋没土は、茶灰褐色土層をベースとし、黒褐色土小・中ブロックを土層中に含み人為的堆積状に観察された。

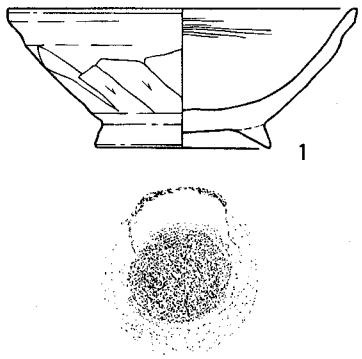


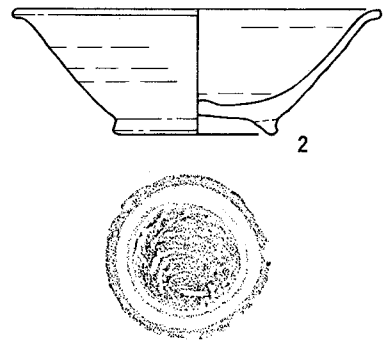
第104図　13号住居跡及び出土遺物

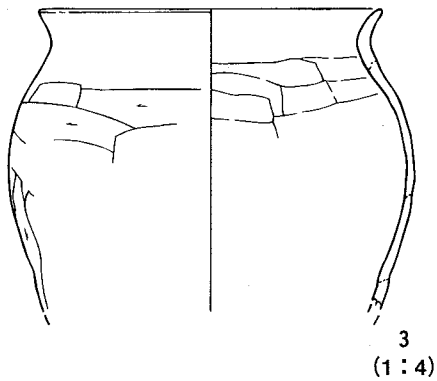


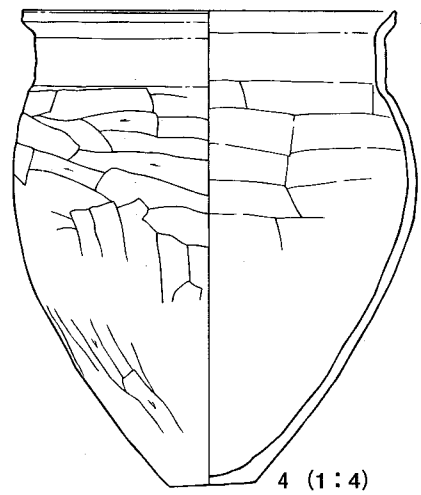


1層．茶灰色土　ローム粒子・ローム塊Φ5～10mm多、焼土粒子・焼土塊Φ5～10mm少、炭化物Φ20～30mm少、粘性やや強、しまり強。
2層．茶灰色土　ローム粒子・ローム塊Φ5～10mm少、焼土粒子・焼土塊Φ10～20mm微、灰塊Φ1～2mm多、粘性やや強、しまり強。
3層．茶灰色土　ローム粒子・ローム塊Φ5～20mm少、焼土粒子・焼土塊Φ5～10mm微、黒色土塊Φ20～40mm微、灰塊Φ1～2mm微、粘性やや強、しまり強。
4層．茶灰色土　ローム粒子・ローム塊Φ5～10mm多、焼土塊Φ5～10mm多、粘性やや強、しまりあり。
5層．茶灰色土　焼土粒子・焼土塊Φ5～10mm微、黒色土塊Φ20～40mm多、灰塊Φ1～2mm微、粘性やや強、しまり強。
6層．茶灰色土　ローム粒子・灰塊Φ1～2mm微、粘性強、しまり強。









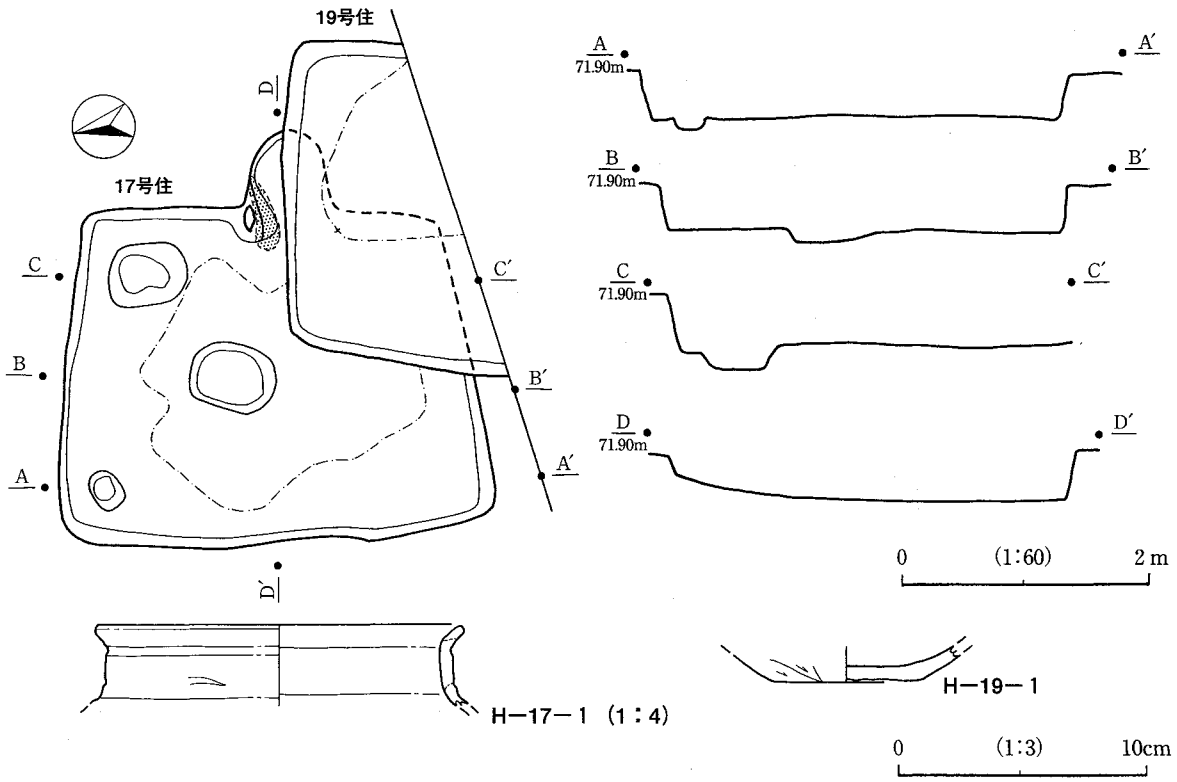
第105図　14号住居跡及び出土遺物

14号住居跡（第105図、表19、図版23-2、26）

14号住居跡は、D調査区公共座標X＝38,864・Y＝－60,089に位置する。平面形はほぼ方形で、カマドを東壁やや南寄りに持ち、主軸方向はN105°Eを示す。規模は南北方向2.55m、東西方向2.7m、残存する壁高は32cmを測る。床は、ほぼ全面が硬化しており、床面中央部寄りには床下土坑が検出された。床面積は、7.2m^{2}を測り、住居跡各コーナー部に径25～40cm、深さ18cm程の浅いくぼみ穴が確認された。カマド袖部の遺存状況は悪く、カマド覆土中に通常見られる粘土ブロックや焼土・炭化物・灰等の堆積がほとんど観察されなかった。住居跡の埋没土は、茶灰褐色土層をベースとし、黒褐色土小・中ブロックを土層中に含み人為的堆積状に観察された。竪穴外に柱穴状の落ち込みが箇所程確認されたが、住居跡との明確な関係を捉えることができなかった。

17号住居跡（第106図、表19、図版26）

17号住居跡は、D調査区公共座標X＝38,860・Y＝－60,087に位置する。南東部を19号住居跡に掘り込まれている。平面形は東壁が西壁に比べてやや短い台形で、主軸方向はN107°Eを示す。規模は南北方向3.2m、東西方向2.5m、残存する壁高は39cmを測る。床面積は、8.0m^{2}を測り、床面中央部と北東コーナー寄りには床下土坑が検出された。北西コーナー部に径25cm、深さ10cm程の浅いくぼみ穴が確認された。カマドは19号住居跡によって向かって右側半分か削平されている。カマド火床面上には炭化物を含んだ灰の堆積が見られ、向かって左側の袖部は残存していた。住居跡の埋没土は、茶灰褐色土層をベースとした自然堆積状に観察された。



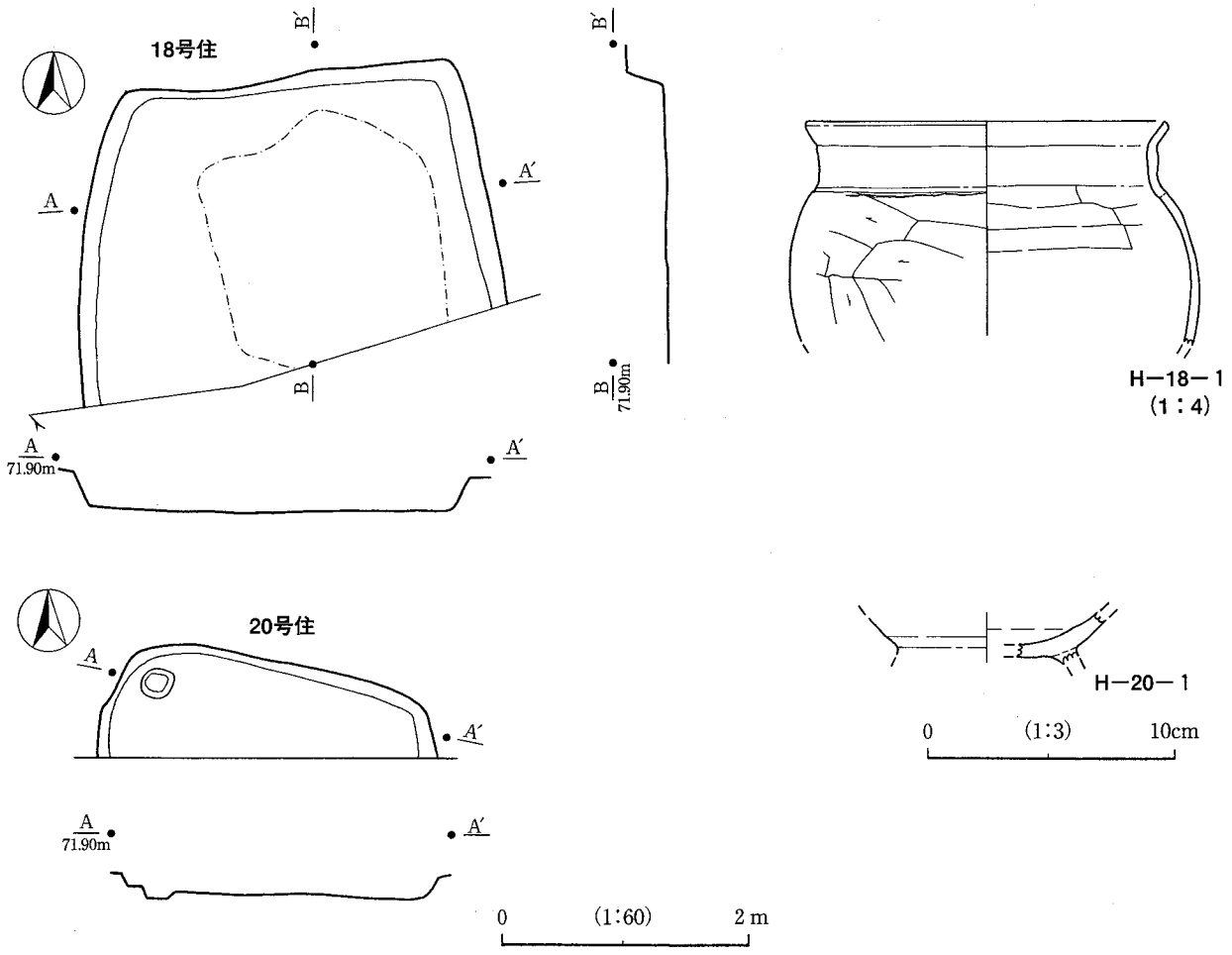
第106図　17・19号住居跡及び出土遺物

18号住居跡（第107図、表19、図版26）

18号住居跡は、D 調査区公共座標 X＝38,859・Y＝－60,081に位置し、基本堆積土層第 VI 層上位から掘り込まれている。平面形は南壁が調査区の外にあるため、明確でないが、方形基調である。主軸方向もカマドの位置がはっきりしないため明確でないが、カマドが他の住居跡と同じ向きにあるとすればN92°E となる。規模は東西方向3.15m、南北方向2.3m 以上、残存する壁高は26cm を測る。床は西側３分の１をのぞいて硬化していた。住居跡の埋没土は、茶灰褐色土層をベースとした自然堆積状に観察された。

19号住居跡（第106図、表19、図版26）

19号住居跡は、D 調査区公共座標 X＝38,858・Y＝－60,086に位置し、基本堆積土層第 VI 層上位から掘り込まれている。17号住居跡の南東部を掘り込んでいる。平面形は住居跡の南部が調査区外にあるため明確でない。主軸方向は N110°E を示す。規模は東西方向2.3m、南北方向1.5m 以上、残存する壁高は35cm を測る。床は東側が硬化していた。住居跡の埋没土は、茶灰褐色土層をベースとした自然堆積状に観察された。



第107図　18・20号住居跡及び出土遺物

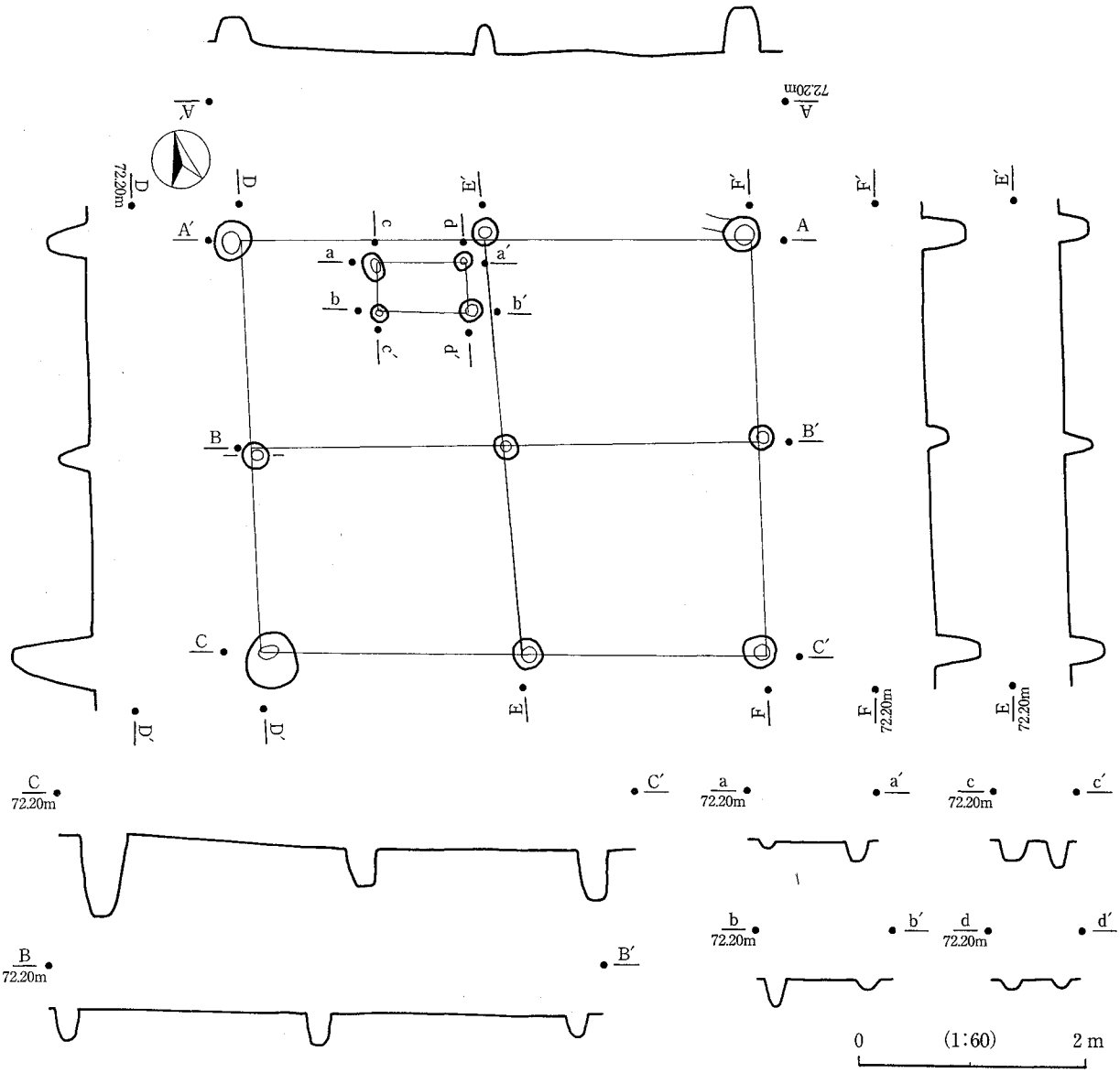
20号住居跡（第107図、表19、図版26）

20号住居跡は、D 調査区公共座標 X＝38,858・Y＝－60,094に位置する。平面形は住居跡の南部が調査区外にあるため明確でない。主軸方向は N106°E を示す。規模は東西方向2.45m、残存する壁高は11cm を測る。住居跡北西コーナー部に径25cm、深さ 8 cm 程の浅いくぼみ穴が確認された。住居跡の埋没土は、茶灰褐色土層をベースとした自然堆積状に観察された。

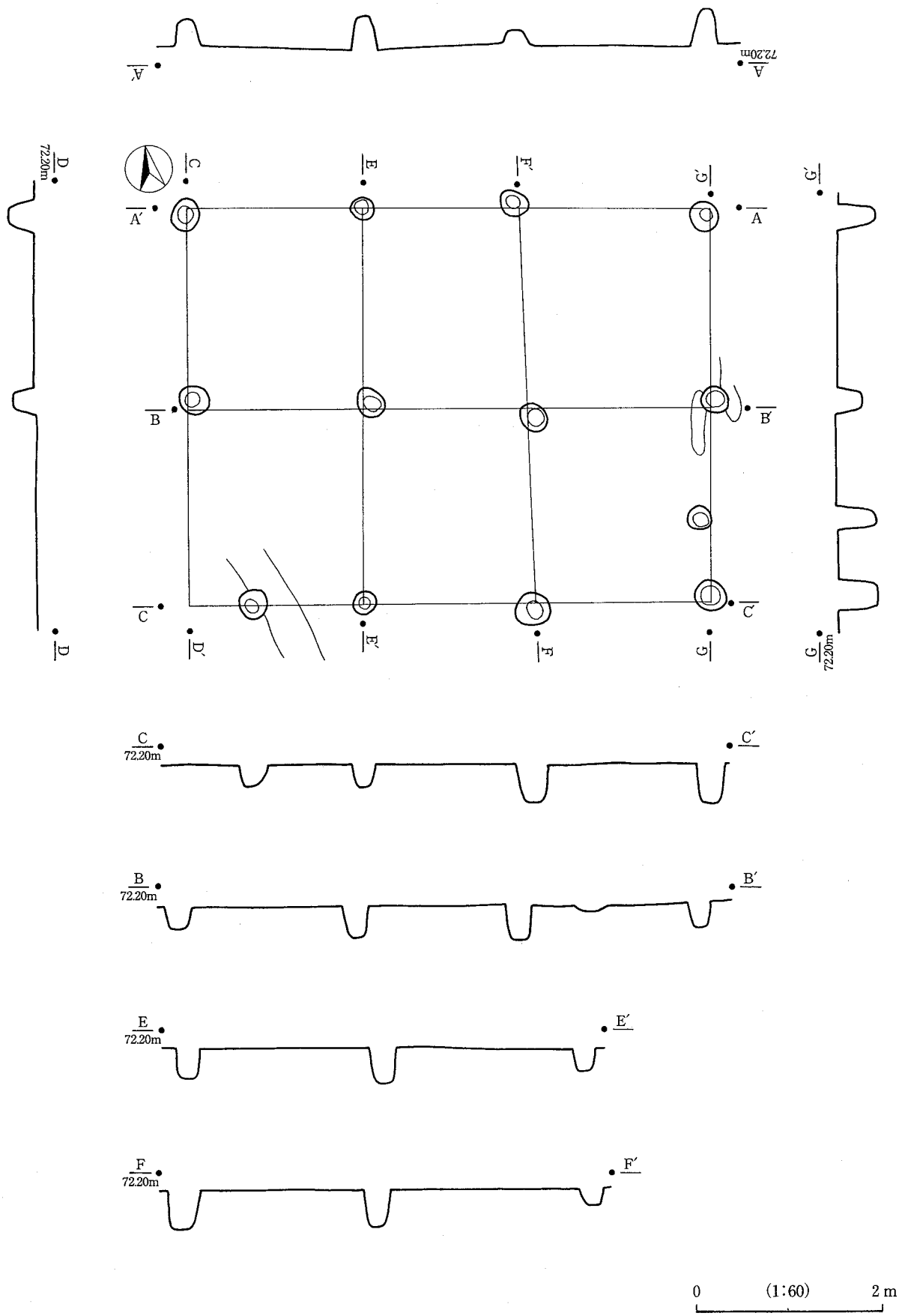
2．掘立柱建物跡

1 号掘立柱建物跡（第108図）

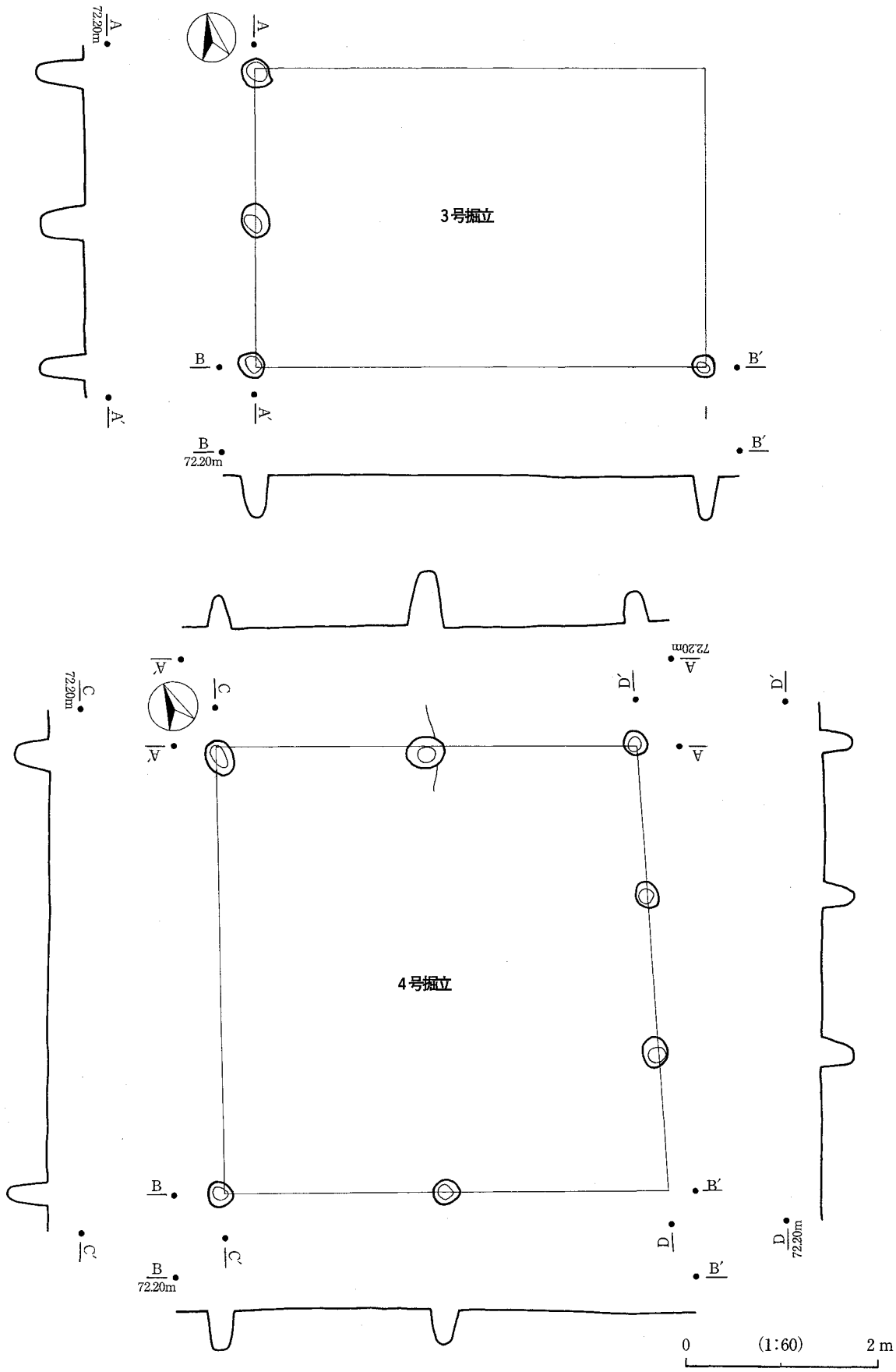
本遺構は、C 調査区公共座標 X＝38,860・Y＝－60,126に位置し、As－B 軽石層より1.5面下、標準堆積土層第Ⅵ層（灰褐色シルト）より掘り込まれている。本遺構は桁行 2 間×梁行 2 間の総柱式建物である。規模は桁行4.38m×梁行3.58m を測り、平面形はほぼ長方形である。柱間寸法は桁行で2.1m～2.3m、梁行で1.7m～1.9m であり、主軸方向は N76°W を示す。柱穴の平面形はほぼ円形または楕円形であり、規模は長軸23cm×短軸20cm～長軸48cm×短軸44cm、深さ18～70cm を測る。柱痕は確認できていない。北西部に



第108図　1 号掘立柱建物跡



第109図　2号掘立柱建物跡



第110図　3・4号掘立柱建物跡

桁行１間×梁行１間の長方形を呈する柱の配列が存在する。規模は桁行79cm×梁行42cm を測り、主軸方向は N77°W を示す。柱穴の平面形はほぼ円形または楕円形であり、規模は長軸16cm×短軸14cm～長軸24cm×短軸17cm、深さ８～24cm を測る。柱痕は確認できていない。

２号掘立柱建物跡（第109図）

本遺構は、C 調査区公共座標 X＝38,860・Y＝－60,165に位置し、As－B 軽石層より1.5面下、標準堆積土層第Ⅵ層（灰褐色シルト）より掘り込まれている。本遺構は桁行３間×梁行２間の総柱式建物として復元する。規模は桁行5.5m×梁行4.2m を測り、平面形は長方形である。柱間寸法は桁行で1.6m～2.0m、梁行で2.0m～2.1m であり、主軸方向は N82°W を示す。柱穴の平面形はほぼ円形または楕円形であり、規模は長軸25cm×短軸24cm～長軸34cm×短軸30cm、深さ19～42cm を測る。柱痕は確認できていない。

３号掘立柱建物跡（第110図）

本遺構は、C 調査区公共座標 X＝38,857・Y＝－60,156に位置し、As－B 軽石層より1.5面下、標準堆積土層第Ⅵ層（灰褐色シルト）より掘り込まれている。本遺構は桁行１間×梁行２間の側柱式建物として復元する。規模は桁行4.5m×梁行3.0m を測り、平面形は長方形と思われる。柱間寸法は桁行で4.5m、梁行で1.4～1.6m であり、主軸方向は N72°W を示す。柱穴の平面形はほぼ円形または楕円形であり、規模は長軸24cm×短軸22cm～長軸33cm×短軸28cm、深さ44～48cm を測る。柱痕は確認できていない。本遺構の北東部に検出される２号住居跡と重複する形で検出されている。

４号掘立柱建物跡（第110図）

本遺構は、C 調査区公共座標 X＝38,857・Y＝－60,138に位置し、As－B 軽石層より1.5面下、標準堆積土層第Ⅵ層（灰褐色シルト）より掘り込まれている。本遺構は桁行３間×梁行２間の側柱式建物として復元する。規模は桁行4.5m×梁行4.3m を測り、平面形は長方形と思われる。柱間寸法は桁行で1.5～1.6m、梁行で2.1～2.3m であり、主軸方向は N22°E を示す。柱穴の平面形はほぼ円形または楕円形であり、規模は長軸26cm×短軸22cm～長軸40cm×短軸31cm、深さ32～57cm を測る。柱痕は確認できていない。

３．土坑

１号土坑（第111図、表15・20）

本遺構は、C 調査区公共座標 X＝38,861・Y＝－60,165に位置し、２号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。平面形は長軸2.10m×短軸1.40m を測り、ほぼ楕円形を呈す。断面形は深さ0.45m を測り、ほぼ鍋底状を呈し、北部に階段状の段差が検出されている。出土遺物は覆土中より灰釉陶器（埦１）が出土している。

２号土坑（第111図、表15）

本遺構は、C 調査区公共座標 X＝38,857・Y＝－60,166に位置し、２号掘立柱建物跡と隣接する。平面形は長軸1.36m×短軸1.08m を測る瓢形を呈し、断面形は深さ0.88m を測るほぼ鍋底状を呈す。西部に深さ0.25m を測る半円状の突起をもつ形で検出されているが２基の土坑の重複も推定される。南東部に内径0.30m×深さ0.13m の小ピットをもつ。本土坑から遺物は出土していない。

３号土坑（第111図、表15）

本遺構は、C 調査区公共座標 X＝38,853・Y＝－60,167に位置し、平面形は長軸1.18m×短軸0.90m を測るほぼ隅丸長方形を呈す。断面形は深さ0.55m を測るほぼ鍋底状を呈し、北西部に長軸0.58m×短軸0.52×深さ0.37m のほぼすり鉢状断面を呈す掘り込みが検出される。本土坑から遺物は出土していない。

4号土坑（第111図、表15）

本遺構は、C調査区公共座標X＝38,863・Y＝－60,157に位置し、東方向2.7mに4号住居跡が、南東方向1.9mに2号住居跡がある。平面形は長軸2.02m×短軸1.70mを測る不整形である。断面形は深さ0.25mを測る鍋底状を呈す。本土坑から遺物は出土していない。

5号土坑（第111図、表15）

本遺構は、C調査区公共座標X＝38,857・Y＝－60,153に位置し、2号住居跡と隣接し3号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。平面形は長軸0.64m×短軸0.50mを測る楕円形を呈す。断面形は深さ0.22mを測るすり鉢状を呈す。本土坑から遺物は出土していない。

6号土坑（第111図、表15）

本遺構は、C調査区公共座標X＝38,854・Y＝－60,157に位置し、北方向1.8mに3号掘立柱建物跡がある。平面形は長軸1.00m×短軸0.92mを測り、ほぼ円形を呈す。断面形は深さ0.66mを測る鍋底状を呈す。本土坑から遺物は出土していない。

7号土坑（第111図、表15）

本遺構は、C調査区公共座標X＝38,855・Y＝－60,152に位置し、北西方向1.1mに3号掘立柱建物跡がある。平面形は長軸1.56m×短軸1.50mを測る隅丸方形を呈す。断面形は深さ0.16mを測る鍋底状を呈す。南西部に内径0.26m×0.24m、深さ0.30mの鍋底状断面を呈する小ピットをもつ。本土坑から遺物は出土していない。

8号土坑（第111図、表15）

本遺構は、C調査区公共座標X＝38,859・Y＝－60,150に位置し、西方向1.1mに2号住居跡が、東方向2.1mに3号住居跡がある。平面形は長軸0.74m×短軸0.60mを測り、ほぼ長方形を呈す。断面形は深さ0.13mを測る鍋底状を呈す。本土坑から遺物は出土していない。

9号土坑（第112図、表15）

本遺構は、C調査区公共座標X＝38,860・Y＝－60,141に位置し、西方向1.7mに3号住居跡が、南東方向0.9mに10号土坑がある。平面形は長軸0.58m×短軸0.50mを測るほぼ円形を呈す。断面形は深さ0.26mを測る鍋底状を呈す。本土坑から遺物は出土していない。

10号土坑（第112図、表15）

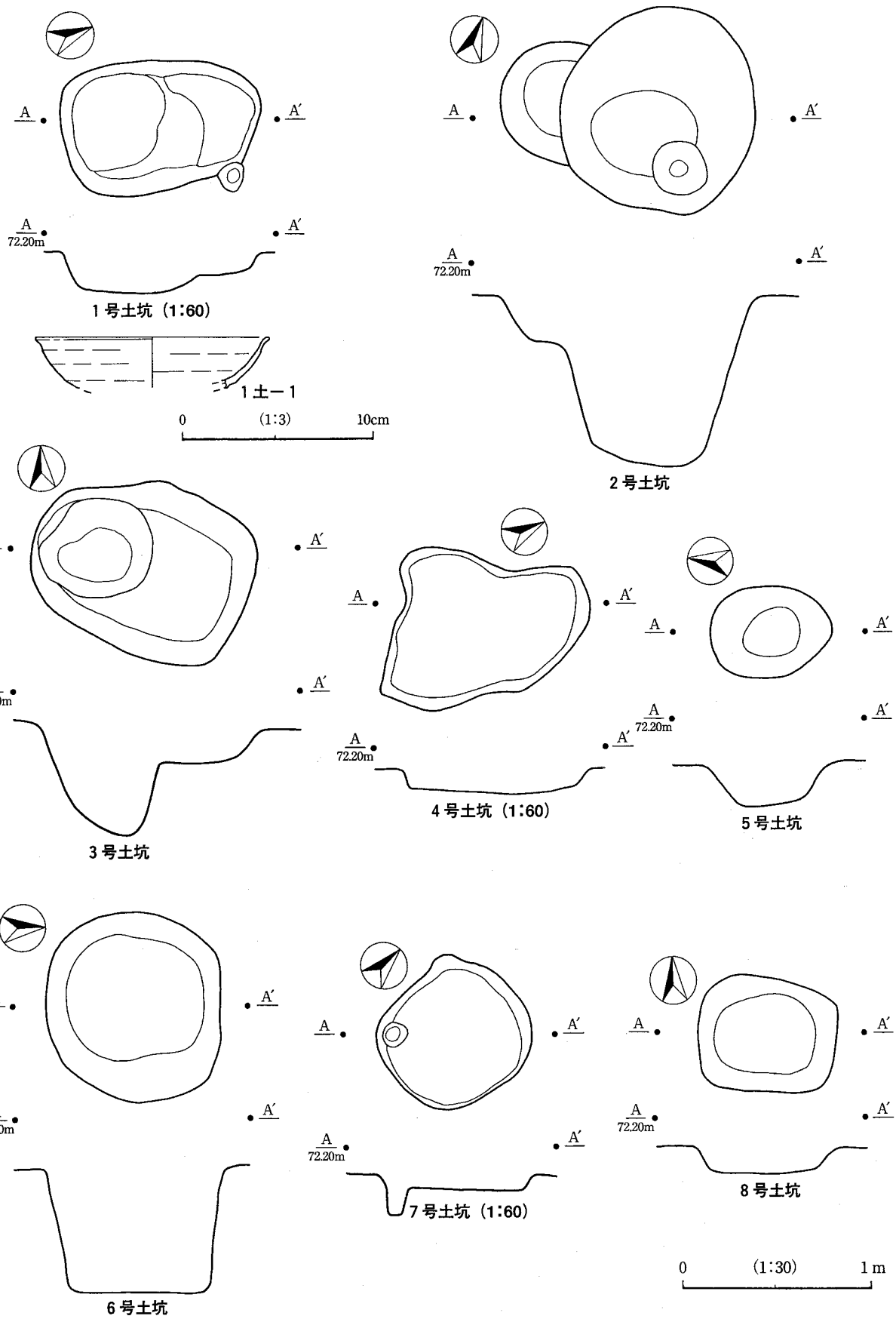
本遺構は、C調査区公共座標X＝38,859・Y＝－60,140に位置し、南東方向に4号掘立柱建物跡が隣接し、北西方向0.9mに9号土坑がある。平面形は長軸0.78m×短軸0.60mを測るほぼ楕円形を呈す。断面形は深さ0.30mを測る鍋底状を呈す。本土坑から遺物は出土していない。

11・12号土坑（第112図、表15）

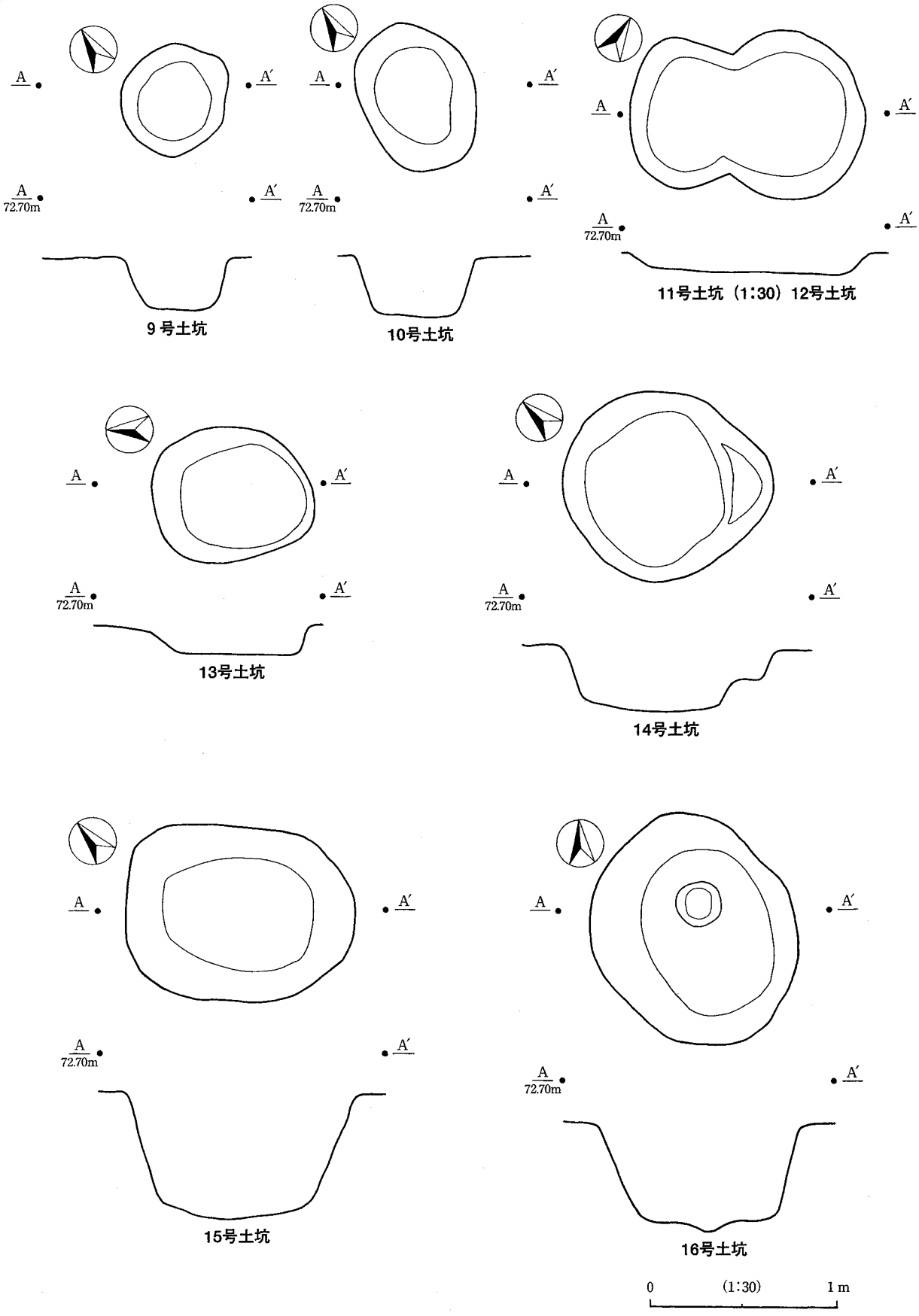
本遺構は、C調査区公共座標X＝38,861・Y＝－60,131に位置し、平面形は長軸1.25m×短軸は0.83mを測る瓢形を呈す。断面形は深さ0.10mを測る鍋底状を呈す。新旧関係は不明であるが2基の土坑の重複が推定される。本土坑から遺物は出土していない。

13号土坑（第112図、表15）

本遺構は、C調査区公共座標X＝38,855・Y＝－60,136に位置し、4号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。平面形は長軸0.84m×短軸0.72mを測るほぼ楕円形を呈す。断面形は深さ0.16mを測る鍋底状を呈す。本土坑から遺物は出土していない。



第111図　1～8号土坑(1)



第112図　9～16号土坑(2)

14号土坑（第112図、表15）

本遺構は、C調査区公共座標X＝38,856・Y＝－60,134に位置し、北西方向1.6mに4号掘立柱建物跡がある。平面形は長軸1.10m×短軸1.02mを測る不整円形を呈す。断面形は深さ0.36mを測る鍋底状を呈す。南東部に深さ0.16mの鍋底状断面を呈する小ピットをもつ。本土坑から遺物は出土していない。

15号土坑（第112図、表15）

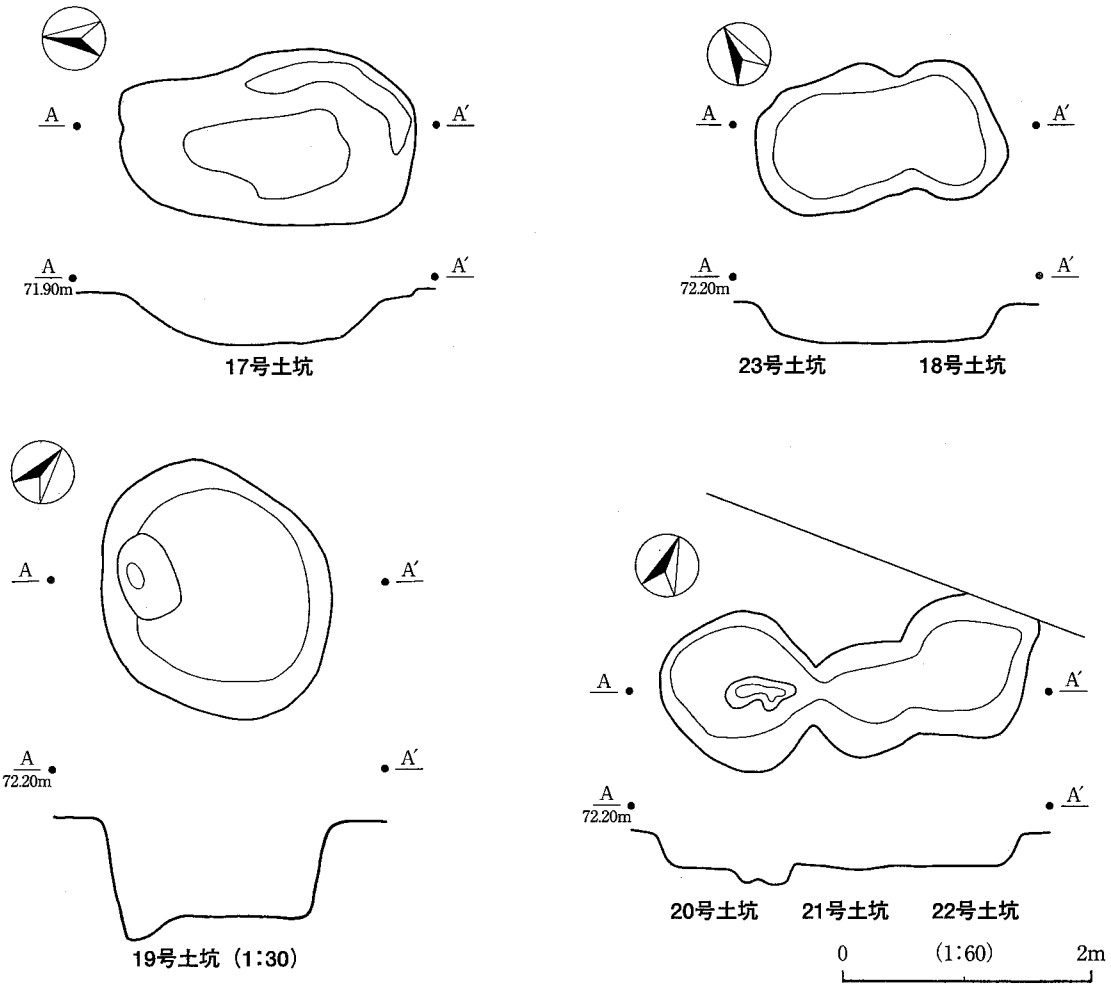
本遺構は、C調査区公共座標X＝38,863・Y＝－60,126に位置し、南側を1号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。平面形は長軸1.22m×短軸0.92mを測るほぼ隅丸方形を呈す。断面形は深さ0.68mを測る鍋底状を呈す。本土坑から遺物は出土していない。

16号土坑（第112図、表15）

本遺構は、C調査区公共座標X＝38,862・Y＝－60,123に位置し、南西方向に1号掘立柱建物跡と隣接する。平面形は長軸1.24m×短軸1.08mを測り、ほぼ楕円形を呈す。断面形は深さ0.56mを測る鍋底状を呈す。ほぼ中央部に内径0.24m、深さ0.06mのすり鉢状断面を呈する掘り込みをもつ。本土坑から遺物は出土していない。

17号土坑（第113図、表15）

本遺構は、D調査区公共座標X＝38,869・Y＝－60,102に位置し、東方向に12号住居跡と隣接する。平面形は長軸2.32m×短軸1.38mを測り、不整円形を呈す。断面形は深さ0.44mを測るすり鉢状を呈す。本土坑から遺物は出土していない。



第113図　17～23号土坑(3)

18号・23号土坑（第113図、表15）

本遺構は、C調査区公共座標X＝38,862・Y＝－60,162に位置し、南方向に2号掘立柱建物跡と隣接する。平面形は長軸1.94m×短軸1.06mを測り、不整円形を呈す。断面形は深さ0.32mを測る鍋底状を呈す。新旧関係は不明であるが2基の土坑の重複が推定される。本土坑から遺物は出土していない。

19号土坑（第113図、表15）

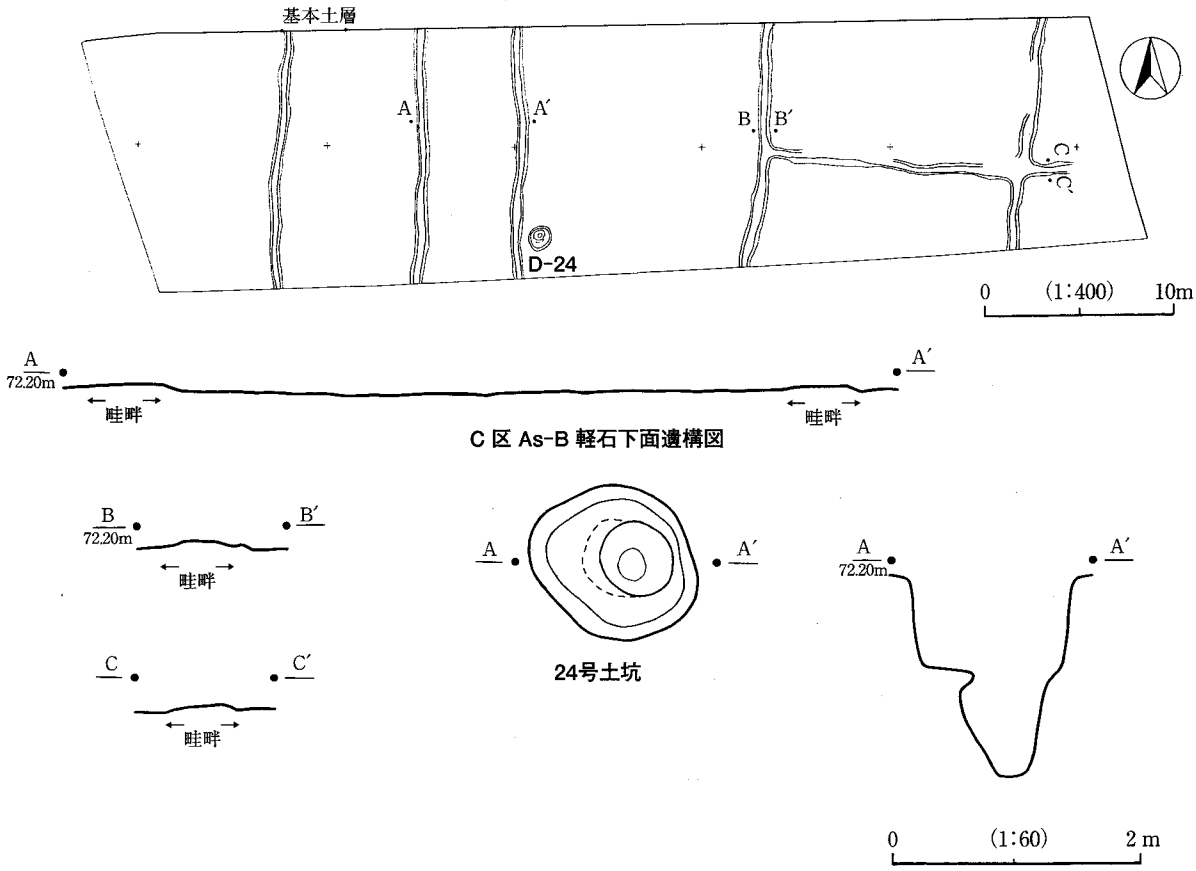
本遺構は、C調査区公共座標X＝38,865・Y＝－60,155に位置し、南西方向1.4mに4号土坑があり、東方向に4号住居跡と隣接する。平面形は長軸0.92m×短軸0.90mを測り、ほぼ楕円形を呈す。断面形は深さ0.50mを測る鍋底状を呈す。南西部に内径0.34m×0.22m、深さ0.10mのすり鉢状断面を呈する掘り込みをもつ。本土坑から遺物は出土していない。

20号・21号・22号土坑（第113図、表15）

本遺構は、C調査区公共座標X＝38,864・Y＝－60,166に位置し、南方向1.3mに2号掘立柱建物跡が、ほぼ南西方向1.9mに1号土坑、2.1mに18号・23号土坑がある。平面形は長軸2.89m×短軸1.26mを測り、不整形を呈す。断面形は深さ0.25mを測る鍋底状を呈す。20号土坑に内径0.56m×0.25m、深さ0.15mの掘り込みをもつ。新旧関係は不明であるが3基の土坑の重複が推定される。本土坑から遺物は出土していない。

第3項　As－B軽石層下面遺構

本遺構群（第114図）は、As－B軽石層下の標準体積土層第Va層（黒褐色土）上面に存在し、畦畔・溝・土坑が検出されている。C区では調査区全面より畦畔が、ほぼ中央部より土坑が検出されている。畦畔は幅0.4m×高さ0.04m～0.05mを測り、走行方向はN0°E～N8°E及びN86°Wとなる。一枚の水田の規模は不明であるが南北方向に伸びる畦畔の間隔は4.4～14.1mを測る。出土遺物は土師器（坏、1）が水田面から検出された。24号土坑は長軸1.40m×短軸1.20m×深さ1.50mを測り、平面形は楕円形を呈す。確認面より0.7mのところで平坦面をもち、中心より北側部分に内径が0.55mを測るほぼ円形の掘り込みをもつ。覆土中にはAs－B軽石層が堆積している。D区で検出されたAs-B軽石直下の溝は、調査区東側の20号溝である。D区は調査区全面より畦畔が検出されている。畦畔は幅0.35～0.60m×高さ0.03～0.04mを測り、走行方向はN1°W～N8°E及びN89°E～N99°Eとなる。遺存状態が悪く水田の全容は明らかではないが調査区西側で11.1m×10.6mの規模をもつ一枚の水田が検出された。出土遺物は須恵器（埦、1）・土師器（甕、2）が水田面から検出された。E区は調査区東半部より畦畔が、北東部と西部より溝が検出されている。畦畔は幅0.34m～0.71m×高さ0.05m～0.12mを測り、走行方向はN83°E～N106°E及びN7°Eとなる。一枚の水田の規模は明らかではないが、西から東へ走る畦畔の間隔は調査区ほぼ中央部で8.4mを測るものと12.4mを測るものが存在する。18号溝は幅0.4～0.8m×深さ8～14cmの不整形断面を呈し、走行方向はN3°Eとなる。覆土中に水性堆積の存在はなく、As－B軽石が堆積している。F区は調査区ほぼ中央部より畦畔が検出されている。畦畔は幅0.22～0.50m×高さ3～5cmを測り、走行方向はN17°W及びN69°Eとなる。一枚の水田の規模は不明である。

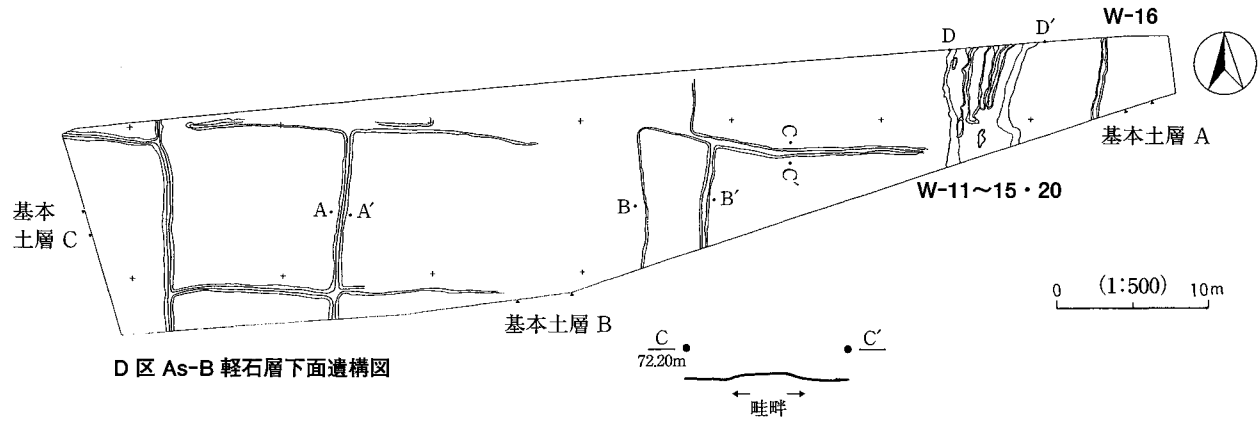


第114図　C 区 As-B 軽石層下面遺構図、24号土坑

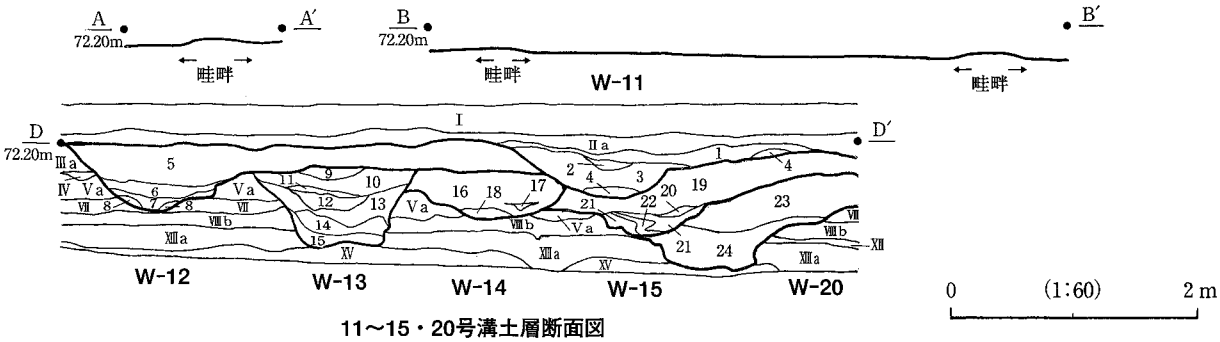
第 4 節　中世以降

1．溝状遺構（第115・116図、表20、図版23－5・6）

本遺構は、As－B 軽石層上層の標準堆積土層第Ⅱa 層(暗黄灰色土）上面及び直下、第Ⅲa 層（褐色土）上面に存在し D 区・E 区・H 区より検出されている。D 区では、調査区東側より11号～15号・20号溝が切り合った形で 6 条検出され、その東側で16号溝が検出されている。11号溝は幅1.93m～2.62m×深さ0.43m～0.51m の皿状断面を呈し、走行方向は N13°E となる。12号溝は標準堆積土層第 IIIa 層から切り込まれており、11号溝に東側を切られる形で検出し、幅3.5m 以上×深さ0.52m～0.64m の皿状断面を呈し、走行方向は N 1 °E となる。13号溝は12号溝に切られる形で検出し、幅1.32m 以上×深さ0.63m 以上の逆台形状断面を呈し、走行方向は N 7 °E となる。14号溝は13号溝と11号溝に切られる形で検出し、幅1.25m 以上×深さ0.41m 以上の皿状断面を呈し、走行方向は N12°E となる。15号溝は As－B 軽石層上層面から切り込まれており、11号溝と14号溝に切られる形で検出し、幅2.16m 以上×深さ0.51m～0.62mの皿状断面を呈し、走行方向は N18°E となる。11号溝～15号溝それぞれの覆土中には砂の水性堆積が存在する。16号溝は As－B 軽石層上層から切り込まれた溝で幅0.35m～0.50m×深さ0.07m～0.10m の皿状断面を呈し、走行方向は N 7 °E となる。覆土中に水性堆積は存在しない。E 区では、調査区北東部より17号溝が検出されている。17号溝は標準堆積土層第 IIa 層より切り込まれており、幅0.67m～1.0m×深さ0.48m～0.56m の U 字状断面を呈し、走行方向は N83°W となる。覆土中に水性堆積は存在しない。H 区は調査区ほぼ西端部より19号溝が検出されている。19号溝は標準堆積土層第 IIa 層直下から切り込まれている溝で、幅 2 m～2.4m×深さ0.52m～0.6mの皿状断面を呈し、走行方向は N32°E となる。覆土は灰褐色シルト質細砂と灰色粗砂をラミナ状に水性堆積を形成し、出土遺物は近世陶磁器類が覆土中から検出された。



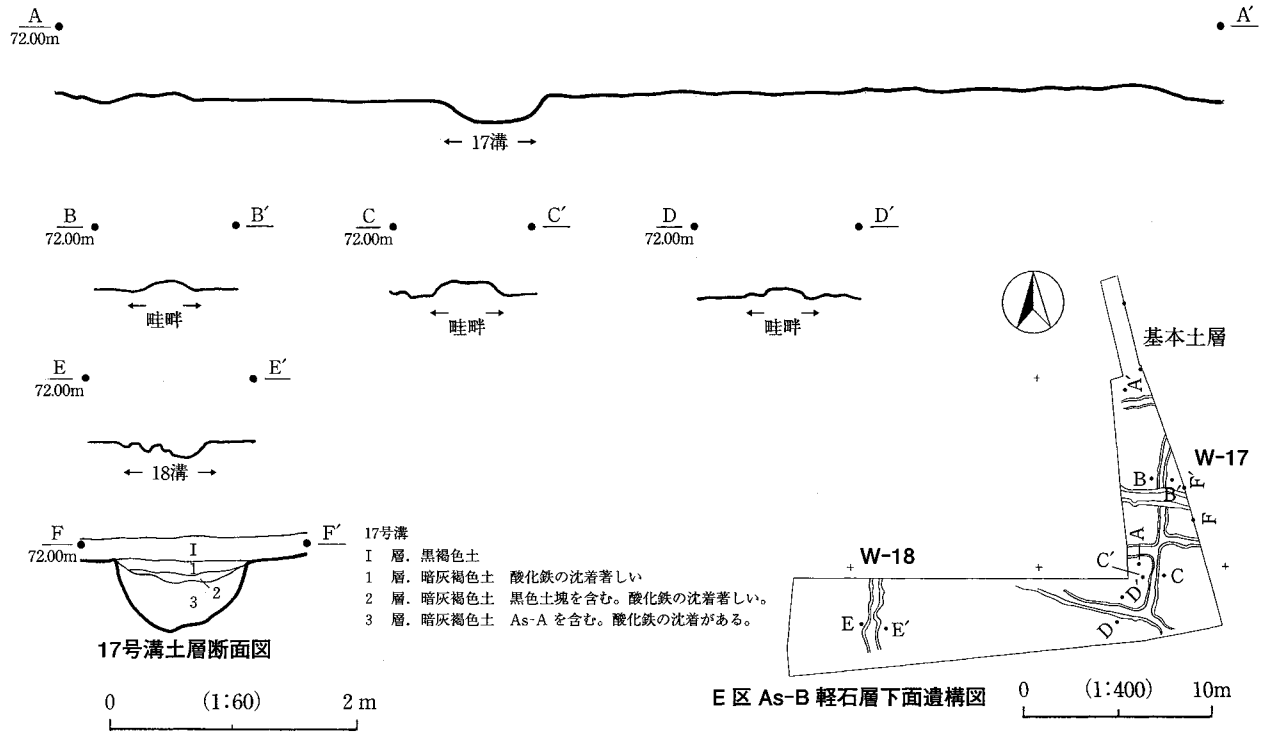
D 区 As-B 軽石層下面遺構図



11～15・20号溝土層断面図

11～15・20号溝

1	層．暗灰黄色土	As－A を含む。	9 層．暗灰褐色砂	暗灰色土をラミナ状に含む。	17 層．青灰色砂	底部に礫を含む。
2	層．褐色土	暗灰黄色軽石を含む。	10 層．茶灰褐色土	明灰褐色シルト塊を含む。	18 層．暗灰色砂	底部に礫を含む。
3	層．暗灰褐色土	砂粒を含む。	11 層．暗灰褐色砂	暗灰色土をラミナ状に含む。	19 層．茶灰褐色土	暗灰色砂を含む。
4	層．暗灰褐色砂	暗灰色土をラミナ状に含む。	12 層．暗灰黄色砂	黒灰色砂をラミナ状に含む。	20 層．黄褐色細砂	暗灰色細砂をラミナ状に含む。
5	層．茶灰褐色土	明灰褐色シルト塊を含む。	13 層．灰褐色細砂	暗灰色細砂をラミナ状に含む。	21 層．暗灰色砂	底部に礫を含む。
6	層．暗灰黄色砂	黒灰色砂をラミナ状に含む。	14 層．暗灰褐色砂	暗灰色土をラミナ状に含む。	22 層．黄褐色細砂	底部に礫を含む。
7	層．黒褐色土	砂粒を含む。	15 層．茶灰褐色土	暗灰色砂を含む。	23 層．暗灰褐色土	暗灰色砂を含む。
8	層．青灰色砂	底部に礫を含む。	16 層．茶灰褐細砂	暗灰色細砂をラミナ状に含む。	24 層．黄褐色細砂	底部に礫を含む。



17号溝

I 層．黒褐色土

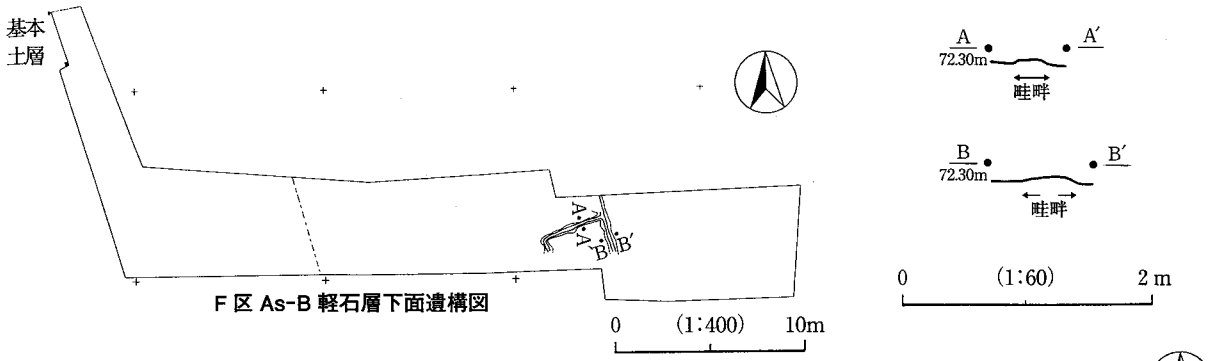
1 層．暗灰褐色土 酸化鉄の沈着著しい

2 層．暗灰褐色土 黒色土塊を含む。酸化鉄の沈着著しい。

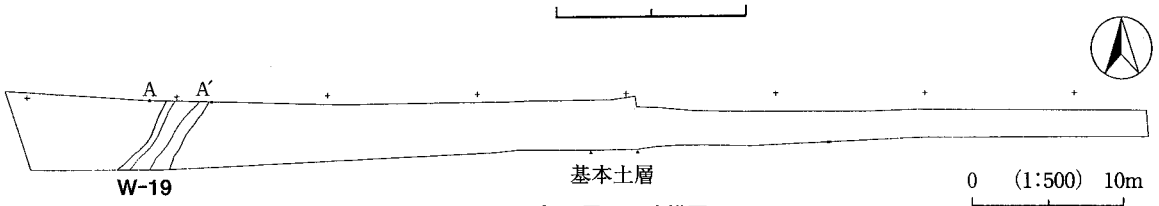
3 層．暗灰褐色土 As-A を含む。酸化鉄の沈着がある。

E 区 As-B 軽石層下面遺構図

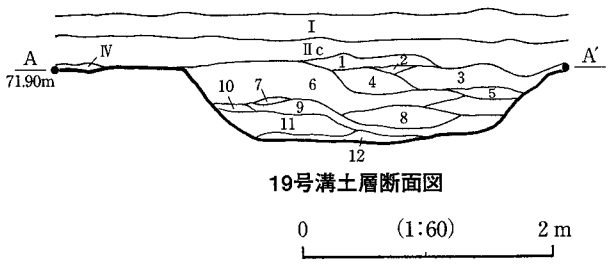
第115図 D・E 区 As－B 軽石層下面遺構図、中世以降の遺構図



F区 As-B 軽石層下面遺構図

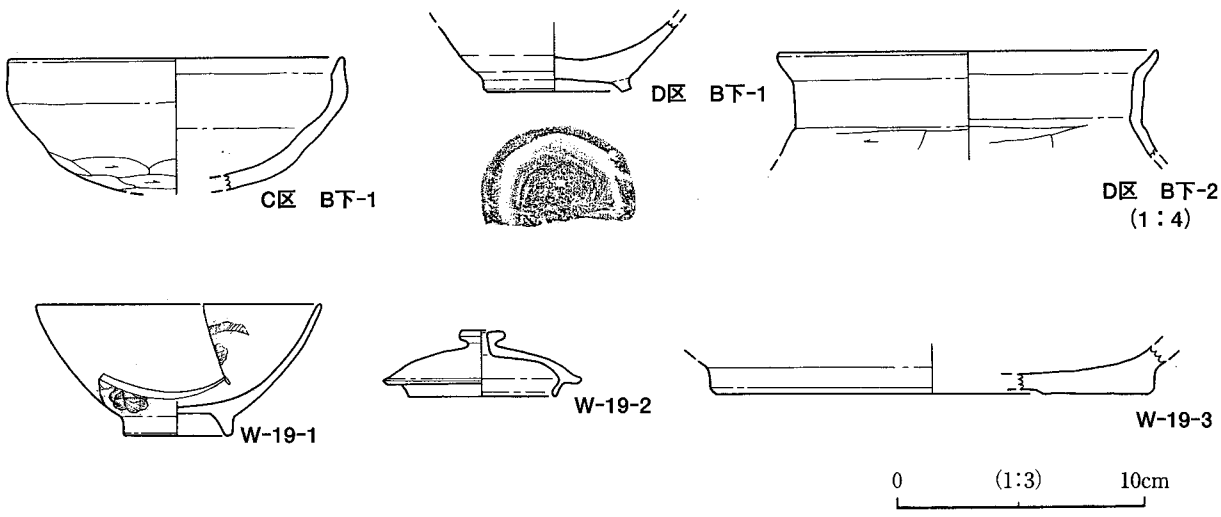


H区 As-B 軽石層下面遺構図



19号溝土層断面図

19号溝
1　層．明灰褐色細砂　酸化鉄の沈着著しい。
2　層．暗灰褐色細砂　暗灰色礫を含む。
3　層．明灰褐色細砂　黒灰色細砂をラミナ状に含む。酸化鉄の沈着著しい。
4　層．明灰褐色細砂　黒灰色細砂をラミナ状に含む。酸化鉄の沈着著しい。
5　層．暗灰褐色砂　暗灰色礫を含む。
6　層．明灰褐色細砂　黒灰色細砂をラミナ状に含む。酸化鉄の沈着著しい。
7　層．明灰色砂　暗灰色礫を含む。
8　層．暗灰褐色砂　黒灰色細砂をラミナ状に含む。礫を含む。
9　層．明灰褐色細砂　黒灰色細砂をラミナ状に含む。酸化鉄の沈着著しい。
10　層．暗灰色砂　暗灰色礫を含む。
11　層．暗灰色細砂　黒灰色細砂をラミナ状に含む。酸化鉄の沈着著しい。
12　層．黒灰色粗砂　底部に礫を含む。



第116図　F・H区 As−B 軽石層下面遺構図、中世以降の遺構図及び出土遺物

第6章　まとめ

今回の調査では、古墳時代前期・古墳時代後期・平安時代2時期・中近世の5時期の遺構群が存在していることが判明している。これら5時期の遺構群は各時期により生活の場や生産の場というような遺構の性格が異なり、時期により土地利用の変遷が認められる。そこで各期における土地利用の様相を述べ本調査のまとめとしたい。

古墳時代前期では、水田跡・溜井1基・溝が7条検出されており水田を中心とした生産の場であったと予想される。

古墳時代後期では、遺構の遺存状態が悪いため畦、溝1条が検出しているにすぎないが、前期同様水田を中心とした生産の場であったと予想される。前期、後期とも住居跡や遺物がほとんど皆無であることから生活の場である村落は同期において離れた場所に営まれていたと思われる。

平安時代では、9世紀前半から10世紀前半代の遺構と12世紀代の2時期の遺構が存在している。9世紀前半から10世紀前半代においては住居跡18件・掘立柱建物跡4棟・土坑24基・小ピット数十基・溝4条のほか水田跡を検出している。9世紀前半代に生産の場として水田を営むが2度以上の水害に見舞われた様相が窺える。後半代になり生産の場の一部を生活の場とし、集落の規模を拡大していった様であるが、12世紀代では水田跡が検出されていることからまた生産の場と変わっていったと考えられる。

中近世では、溝が8条検出されおり水田耕作と係りのある遺構と思われるが近現代の耕作により裂弊されており、遺構を検出するに至らなかった。

以上のように本遺跡では、生活の場と生産の場が交互に現れることが確認される。これは気候の変化に伴い水位の変動によるものと思われるが、12世紀代の水田化はむしろ社会的な要請や技術革新といった要素が多分に含まれるものと思われる。この地に定住した先人たちの幾度もの自然災害に見舞われその度に文化を創造し育んでいった様相をかいま見ることができた。今回の調査は本遺跡の一部分に過ぎず、隣接する本道部分の調査成果や今後の周辺の調査が進行することで本遺跡の全容が明らかになると思われる。

表15　土坑一覧表

遺構名	位置（公共座標）	平　面　形	長軸×短軸×深さ	断面形	出土遺物	他遺構との重複
D－1	X=38,861·Y=－60,165	ほぼ楕円形	2.10×1.40×0.45	鍋底状	灰釉陶器(埦)	
D－2	X=38,857·Y=－60,166	瓢　形	1.36×1.08×0.88	鍋底状	なし	ピット有
D－3	X=38,853·Y=－60,167	隅丸長方形	1.18×0.90×0.55	鍋底状	なし	掘り込み有り
D－4	X=38,863·Y=－60,157	不　整　形	2.02×1.70×0.25	鍋底状	なし	
D－5	X=38,857·Y=－60,153	楕　円　形	0.64×0.50×0.22	すり鉢状	なし	B－3
D－6	X=38,854·Y=－60,157	ほぼ円形	1.00×0.92×0.66	鍋底状	なし	
D－7	X=38,855·Y=－60,152	隅丸方形	1.56×1.50×0.16	鍋底状	なし	ピット有
D－8	X=38,859·Y=－60,150	ほぼ長方形	0.74×0.60×0.13	鍋底状	なし	
D－9	X=38,860·Y=－60,141	ほぼ円形	0.58×0.50×0.26	鍋底状	なし	
D－10	X=38,859·Y=－60,140	ほぼ楕円形	0.78×0.60×0.30	鍋底状	なし	
D－11	X=38,861·Y=－60,131	不整円形	0.78×(0.54)×0.08	鍋底状	なし	D－12
D－12	X=38,861·Y=－60,131	円　形	0.90×(0.68)×0.10	鍋底状	なし	D－11
D－13	X=38,855·Y=－60,136	ほぼ楕円形	0.84×0.72×0.16	鍋底状	なし	B－4
D－14	X=38,856·Y=－60,134	不整円形	1.10×1.02×0.16	鍋底状	なし	ピット有
D－15	X=38,863·Y=－60,126	隅丸方形	1.22×0.92×0.68	鍋底状	なし	B－1
D－16	X=38,862·Y=－60,123	ほぼ楕円形	1.24×1.08×0.56	鍋底状	なし	ピット有
D－17	X=38,869·Y=－60,102	不整円形	2.32×1.38×0.44	すり鉢状	なし	
D－18	X=38,862·Y=－60,162	不整円形	1.10×(0.76)×0.32	鍋底状	なし	D－23
D－19	X=38,865·Y=－60,155	ほぼ楕円形	0.92×0.90×0.50	鍋底状	なし	掘り込み
D－20	X=38,864·Y=－60,167	隅丸方形	1.28×(1.22)×0.40	鍋底状	なし	D－21·22、ピット有
D－21	X=38,864·Y=－60,166	隅丸方形	0.88×(0.74)×0.26	鍋底状	なし	D－20・22
D－22	X=38,865·Y=－60,166	不　整　形	1.10×(1.12)×0.25	鍋底状	なし	D－20・21
D－23	X=38,863·Y=－60,163	隅丸方形	1.04×(1.24)×0.32	鍋底状	なし	D－18
D－24	X=38,855·Y=－60,149	楕　円　形	1.40×1.20×1.50	凸のあるV字状	なし	ピット有

表16　下増田越渡Ⅲ遺跡遺物観察表（1）

1号住居跡

番号	器種	法量（cm）	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	出土位置
1	黒色土器 埦	口径　— 底径　6.2 器高　—	①酸化　②にぶい橙～黒色 ③細砂粒、白色粒、角閃石 ④体部下位～底部残存	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部斜横位篦研磨。黒色処理。	
2	黒色土器 埦	口径　— 底径　（7.0） 器高　—	①酸化　②にぶい橙色 ③細砂粒、白色粒、角閃石、礫 ④体部中位～底部1/4残存	外面　体部轆轤整形。 内面　体部横位篦研磨。黒色処理。	
3	須恵器 壺	口径　— 底径　— 器高　—	①還元　②灰色 ③細砂粒、白色粒、礫 ④頸部～胴部上位1/8残存	外面　轆轤整形。 内面　篦撫で。	

2号住居跡

1	須恵器 坏	口径　13.5 底径　6.3 器高　4.9	①還元　②灰色 ③細砂粒、白色粒、礫 ④2/3	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
2	土師器 甕	口径　（18.0） 底径　— 器高　—	①普通　②にぶい赤褐色 ③細砂粒、白色粒、角閃石 ④口縁部～胴部上位1/4残存	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	
3	鉄製品	刀子	残存長14.7　幅　柄部1.0　刃部1.3　厚さ　柄部0.3　刃部0.5		
4	鉄製品	棒状鉄製品	残存長24.5　幅0.5　厚さ0.5　紡錘車の軸の可能性有り。		

3号住居跡

1	灰釉陶器 埦	口径　（13.2） 底径　— 器高　—	①還元　②灰白色 ③白色粒 ④口縁部～体部下位1/8残存	外面　体部轆轤整形。 内面　体部轆轤整形。 内外面漬掛け施釉。	
2	灰釉陶器 埦	口径　（13.8） 底径　— 器高　—	①還元　②灰白～灰オリーブ色 ③白色粒、黒色鉱物粒 ④口縁部～体部下位1/8残存	外面　体部轆轤整形。 内面　体部轆轤整形。 内外面刷毛塗り施釉。	
3	土師器 坏	口径　12.2 底径　6.2 器高　4.4	①普通　②浅黄橙色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ④口縁部1/4欠損	外面　口縁部横撫で、体部上半撫で、下半篦削り。 内面　口縁部横撫で、体部撫で。	
4	須恵器 埦	口径　— 底径　6.2 器高　—	①還元　②にぶい黄橙色 ③細砂粒、白色粒、角閃石 ④体部下位～底部3/4残存	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
5	須恵器 埦	口径　— 底径　5.4 器高　—	①還元　②灰黄色 ③細砂粒、白色粒、礫、片岩 ④体部下位～底部残存	外面　体部轆轤整形、底部磨滅のため調整不明瞭。 内面　体部轆轤整形。	
6	須恵器 羽釜	口径　18.8 底径　— 器高　—	①酸化気味　②にぶい褐色 ③細砂粒、白色粒、礫、雲母、褐色鉱物粒　④口縁部～胴部上位1/4	外面　轆轤整形。 内面　轆轤整形。	
7	土師器 甕	口径　19.0 底径　— 器高　—	①普通　②にぶい赤褐色 ③細砂粒、白色粒、角閃石 ④口縁部～胴部上位1/8残存	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	
8	土師器 甕	口径　（19.6） 底径　— 器高　—	①普通　②にぶい褐色 ③細砂粒、白色粒、礫、雲母 ④口縁部～胴部中位2/5残存	外面　口縁部上半横撫で、下半横位篦撫で、胴部上位斜横位篦削り、中位斜縦位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	

4号住居跡

1	土師器 坏	口径　（12.0） 底径　（8.6） 器高　3.4	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒、角閃石 ④1/2	外面　口縁部横撫で、体部撫で、底部篦削り。 内面　口縁部横撫で、底部撫で。	
2	土師器 坏	口径　（12.0） 底径　— 器高　（3.4）	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒、角閃石 ④1/3	外面　口縁部横撫で、体部撫で、底部篦削り。 内面　口縁部横撫で、底部撫で。	
3	須恵器 埦	口径　14.0 底径　6.2 器高　6.4	①還元　②灰色 ③細砂粒、白色粒、礫 ④7/8	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	

表17　下増田越渡Ⅲ遺跡遺物観察表(2)

番号	器種	法量（cm）	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	出土位置
4	須恵器 埦	口径　— 底径　5.8 器高　—	①酸化気味　②にぶい黄橙～灰色　③細砂粒、白色粒、角閃石 ④体部中位～底部2/3残存	外面　体部轆轤整形、底部磨滅のため調整不明瞭。 内面　体部轆轤整形。	
5	須恵器 甕	口径　— 底径　13.2 器高　—	①還元　②灰色 ③細砂粒、白色粒、礫 ④胴部中位～底部残存	外面　平行叩き。 内面　篦撫で。青海波文が薄く残る。	
6	土師器 甕	口径　19.4 底径　— 器高　—	①普通　②明赤褐色 ③細砂粒、白色粒、角閃石、褐色鉱物粒　④口縁～胴部上位残存	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	
7	土師器 甕	口径　19.4 底径　— 器高　—	①普通　②にぶい赤褐色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ④口縁部～胴部上位2/3残存	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	
8	土師器 甕	口径　(22.0) 底径　— 器高　—	①普通　②明赤褐色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ④口縁部～胴部上位1/5残存	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	
9	土師器 甕	口径　18.0 底径　— 器高　—	①普通　②明赤褐色 ③細砂粒、白色粒、角閃石、褐色鉱物粒　④口縁部～胴部上位1/4	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	
10	土師器 台付甕	口径　(12.0) 底径　— 器高　—	①普通　②にぶい赤褐色 ③細砂粒、白色粒、角閃石 ④口縁部～胴部中位1/3残存	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	
11	土師器 台付甕	口径　— 底径　9.6 器高　—	①普通　②にぶい赤褐～橙色 ③細砂粒、白色粒、角閃石、褐色鉱物粒　④胴部中位～台部残存	外面　胴部斜縦位篦削り、台部横撫で。 内面　胴部横位篦撫で、台部横撫で。	
12	土師器 台付甕	口径　— 底径　8.9 器高　—	①普通　②赤褐色 ③細砂粒、白色粒、角閃石 ④台部3/4残存	外面　台部横撫で。 内面　台部上・中位横位篦撫で、下位横撫で。	

5号住居跡

1	土師器 甕	口径　19.0 底径　— 器高　—	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒、角閃石、褐色鉱物粒　④口縁部～胴部上位1/4	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部篦撫で。	
2	土師器 台付甕	口径　— 底径　8.9 器高　—	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒、角閃石、褐色鉱物粒　④台部3/4残存	外面　台部上・中位撫で、下位横撫で。 内面　台部上・中位撫で、下位横撫で。	
3	土師器 甕	口径　19.4 底径　— 器高　—	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ④口縁部～胴部上位1/4残存	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部撫で。	
4	土師器 甕	口径　(20.0) 底径　— 器高　—	①普通　②暗赤褐色 ③細砂粒、白色粒 ④口縁部～胴部上位1/8残存	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部撫で。	

6号住居跡

1	須恵器 埦	口径　(13.4) 底径　— 器高　—	①還元　②灰白色 ③細砂粒、白色粒 ④口縁部～体部下位1/8残存	外面　体部轆轤整形。 内面　体部轆轤整形。	
2	須恵器 羽釜	口径　(19.0) 底径　— 器高　—	①酸化　②にぶい黄橙～黒色 ③細砂粒、白色粒 ④口縁部～胴部上位1/8残存	外面　轆轤整形。 内面　轆轤整形。	

7号住居跡

1	土師器 坏	口径　15.0 底径　— 器高　—	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ④口縁部～体部下位1/5残存	外面　口縁部横撫で、体部上位撫で、下位横位篦削り。 内面　口縁部～体部横撫で。	
2	灰釉陶器 埦	口径　— 底径　8.2 器高　—	①還元　②灰白色 ③白色粒 ④体部下位～底部残存	外面　体部轆轤整形後下位右回転篦削り、底部右回転篦削り。 内面　体部轆轤整形。	
3	須恵器 埦	口径　— 底径　6.6 器高　—	①還元　②灰黄褐色 ③細砂粒、白色粒、礫 ④体部下位～底部1/2残存	外面　体部轆轤整形、底部回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
4	土師器 甕	口径　(20.0) 底径　— 器高　—	①普通　②にぶい赤褐色 ③細砂粒、白色粒、角閃石、褐色鉱物粒　④口縁部～胴部上位1/8	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	

表18　下増田越渡Ⅲ遺跡遺物観察表(3)

8号住居跡

番号	器種	法量 (cm)	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	出土位置
1	須恵器 坏	口径　(12.8) 底径　6.0 器高　4.0	①酸化　②橙色　③細砂粒、白色粒、角閃石、褐色鉱物粒、礫 ④1/3	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
2	須恵器 埦	口径　(12.0) 底径　5.2 器高　5.2	①酸化　②橙～にぶい橙色 ③細砂粒、白色粒、礫、褐色鉱物粒 ④1/3	外面　体部轆轤整形、底部回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
3	須恵器 埦	口径　— 底径　5.7 器高　—	①酸化　②にぶい褐～黒色 ③細砂粒、白色粒、礫、雲母、褐色鉱物粒　④体部下位～底部	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	

10号住居跡

1	土師器 坏	口径　12.8 底径　— 器高　3.0	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒、角閃石 ④3/4	外面　口縁部横撫で、体部撫で、底部篦削り。 内面　口縁部横撫で、底部撫で。	
2	須恵器 坏	口径　— 底径　5.8 器高　—	①還元　②灰色 ③細砂粒、白色粒 ④体部中位～底部残存	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
3	須恵器 埦	口径　(13.6) 底径　6.4 器高　5.2	①還元　②灰色 ③細砂粒、白色粒、礫 ④2/5	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
4	須恵器 埦	口径　(15.0) 底径　7.0 器高　5.8	①酸化　②橙色 ③細砂粒、白色粒、石英、礫 ④2/3	外面　体部轆轤整形、底部回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
5	須恵器 埦	口径　(17.2) 底径　8.2 器高　7.5	①還元　②灰～黒色 ③細砂粒、白色粒、礫、石英 ④1/2	外面　体部轆轤整形、底部回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
6	須恵器 皿	口径　(14.4) 底径　6.4 器高　2.1	①酸化　②明赤褐色 ③細砂粒、白色粒、片岩、褐色鉱物粒 ④2/3	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
7	須恵器 埦	口径　— 底径　6.4 器高　—	①還元　②灰色 ③白色粒、礫 ④体部中位～底部3/4残存	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
8	須恵器 埦	口径　— 底径　— 器高　—	①還元　②灰色 ③細砂粒、白色粒、礫 ④体部上位～底部1/2残存	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
9	土師器 甕	口径　19.6 底径　— 器高　—	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒、角閃石、褐色鉱物粒　④口縁部～胴部上位3/4	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	
10	土師器 甕	口径　(19.0) 底径　— 器高　—	①普通　②明赤褐色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ④口縁部～胴部中位1/4残存	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	
11	土師器 甕	口径　(20.0) 底径　— 器高　—	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒 ④口縁部～胴部上位1/3残存	外面　口縁部横撫で、胴部篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部篦撫で。	
12	土師器 甕	口径　19.0 底径　— 器高　—	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒 ④口縁部～胴部中位1/4残存	外面　口縁部横撫で、胴部斜横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	
13	土師器 甕	口径　(21.0) 底径　— 器高　—	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ④口縁部～胴部上位1/4残存	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	

11号住居跡

1	灰釉陶器 埦	口径　16.0 底径　6.4 器高　5.0	①還元　②灰白色 ③白色粒 ④1/2	外面　体部轆轤整形後下位右回転篦削り、底部回転撫で。 内面　体部轆轤整形。内外面刷毛塗り施釉。	
2	土師器 坏	口径　— 底径　(6.0) 器高　—	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒、角閃石 ④体部上位～底部1/8残存	外面　体部上・中位横撫で、下位横位篦削り。底部砂底。 内面　体部横撫で。	

表19　下増田越渡Ⅲ遺跡遺物観察表(4)

12号住居跡

番号	器種	法量（cm）	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	出土位置
1	須恵器 埦	口径　(13.8) 底径　5.6 器高　4.7	①酸化　②浅黄橙色 ③細砂粒、白色粒 ④2/3	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
2	須恵器 埦	口径　— 底径　(7.0) 器高　—	①還元　②灰黄色 ③細砂粒、白色粒、石英 ④体部下位～底部1/4残存	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	

13号住居跡

1	黒色土器 坏	口径　12.4 底径　— 器高　4.4	①普通　②にぶい黄橙～黒色 ③細砂粒、白色粒 ④1/5	外面　体部横撫で後下位横位篦削り、底部不明瞭。 内面　体部篦研磨。黒色処理。	
2	土師器 甕	口径　(17.2) 底径　— 器高　—	①普通　②にぶい赤褐色 ③細砂粒、白色粒、角閃石 ④口縁部～胴部上位1/8残存	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	

14号住居跡

1	黒色土器 埦	口径　13.6 底径　(6.8) 器高　5.5	①酸化　②にぶい橙色 ③細砂粒、白色粒、角閃石、褐色鉱物粒、礫　④2/3	外面　口縁部横撫で、体部斜縦位篦削り。 内面　口縁部～体部横位篦研磨。黒色処理。器面風化のため単位不明瞭、黒色も落ちている。	
2	須恵器 埦	口径　(14.3) 底径　6.0 器高　4.9	①還元　②灰色 ③細砂粒、白色粒、礫 ④1/2	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
3	土師器 甕	口径　17.8 底径　— 器高　—	①普通　②明赤褐色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ④口縁部～胴部中位1/4残存	外面　口縁部横撫で、胴部上位横位篦削り、中位縦位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	
4	土師器 甕	口径　19.6 底径　4.6 器高　25.1	①普通　②にぶい赤褐色 ③細砂粒、白色粒 ④1/2	外面　口縁部横撫で、胴部上位横位篦削り、中・下位斜縦位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	

17号住居跡

1	土師器 甕	口径　(19.0) 底径　— 器高　—	①普通　②赤褐色 ③細砂粒、白色粒、角閃石、褐色鉱物粒　④口縁部1/8残存	外面　口縁部横撫で。 内面　口縁部横撫で。	

18号住居跡

1	土師器 甕	口径　(19.0) 底径　— 器高　—	①普通　②にぶい赤褐色 ③細砂粒、白色粒、角閃石、褐色鉱物粒　④口縁部～胴部中位1/4	外面　口縁部横撫で、胴部上位横位篦削り、中位斜縦位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	

19号住居跡

1	土師器 坏	口径　— 底径　(6.0) 器高　—	①普通　②にぶい赤褐色 ③細砂粒、白色粒、角閃石、礫 ④底部1/4残存	外面　体部斜縦位篦削り。 内面　体部撫で。	

20号住居跡

1	須恵器 埦	口径　— 底径　— 器高　—	①酸化　②にぶい黄橙色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ④底部1/4残存	外面　体部轆轤整形。 内面　体部轆轤整形。	

表20　下増田越渡Ⅲ遺跡遺物観察表(5)

1号土坑

番号	器種	法量（cm）	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	出土位置
1	灰釉陶器 埦	口径　(12.0) 底径　— 器高　—	①還元　②灰～灰オリーブ色 ③白色粒、黒色鉱物粒 ④口縁部～体部下位1/5残存	外面　体部轆轤整形。 内面　体部轆轤整形。 内外面刷毛塗り施釉。	

79号ピット

1	須恵器 坏	口径　(12.0) 底径　— 器高　—	①酸化　②褐色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ④口縁部～体部下位1/8残存	外面　体部轆轤整形。 内面　体部轆轤整形。	

98号ピット

1	須恵器 坏	口径　— 底径　5.4 器高　—	①還元　②灰色 ③細砂粒、白色粒 ④体部下位～底部1/2残存	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	

8号溝

1	須恵器 坏	口径　12.5 底径　5.6 器高　3.9	①還元　②灰色 ③粗砂粒、白色粒、礫、褐色鉱物粒 ④口縁部1/8欠損	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
2	須恵器 甕	口径　— 底径　— 器高　—	①還元　②灰色 ③細砂粒、白色粒、黒色鉱物粒 ④口縁部破片	外面　口縁部轆轤整形。波状文。 内面　口縁部轆轤整形。	

19号溝

1	磁器 碗	口径　(11.2) 底径　4.0 器高　5.3	①普通　②灰白色 ③夾雑物なし ④1/3	外面　染め付け。	
2	陶器蓋 (急須)	口径　(5.8) 摘み　(1.8) 器高　2.6	①還元　②灰赤色 ③細砂粒 ④1/3	万古焼。	
3	陶器 鉢	口径　— 底径　(17.0) 器高　—	①普通　②浅黄色 ③細砂粒 ④底部1/8残存	内外面灰釉。目痕有り。	

E区洪水層

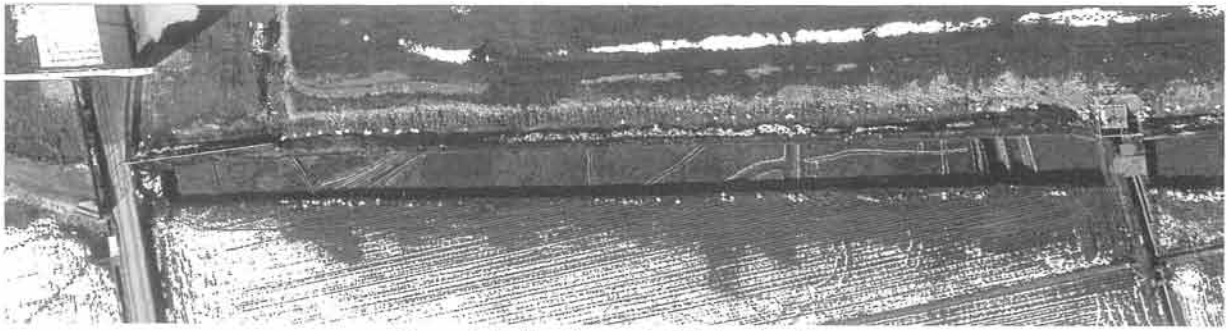
1	土師器 坏	口径　— 底径　— 器高　—	①普通　②橙色 ③細砂粒、白色粒、角閃石 ④底部1/3残存	外面　体部撫で、底部篦削り。 内面　底部撫で。	
2	須恵器 埦	口径　— 底径　(7.0) 器高　—	①還元　②黒褐～暗褐色 ③粗砂粒、白色粒、礫 ④体部下位～底部1/3残存	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	

C区 As-B 下

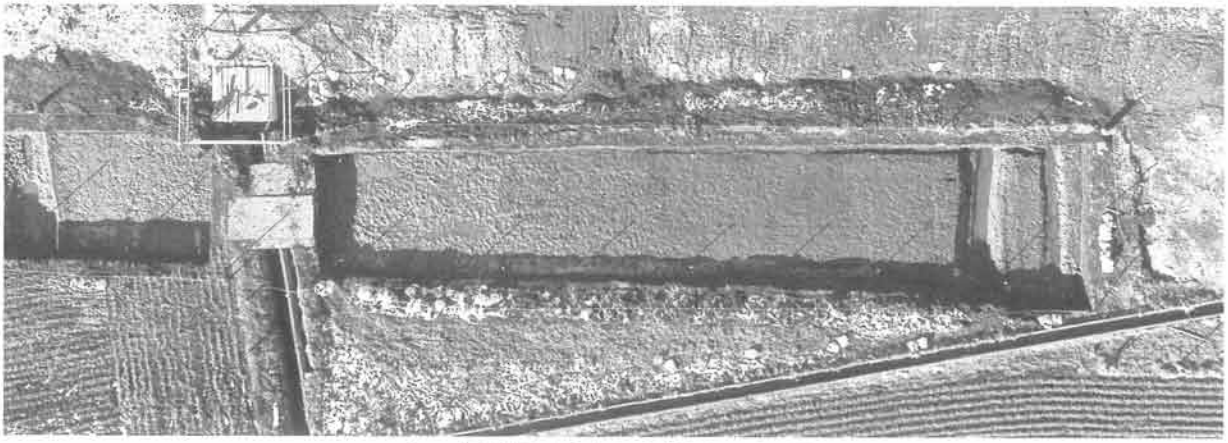
1	土師器 坏	口径　(13.0) 底径　— 器高　—	①普通　②赤褐色 ③粗砂粒、白色粒、角閃石、褐色鉱物粒　④1/4	外面　口縁部横撫で、体部撫で、底部篦削り。 内面　口縁部横撫で、体部撫で。	

D区 As-B 下

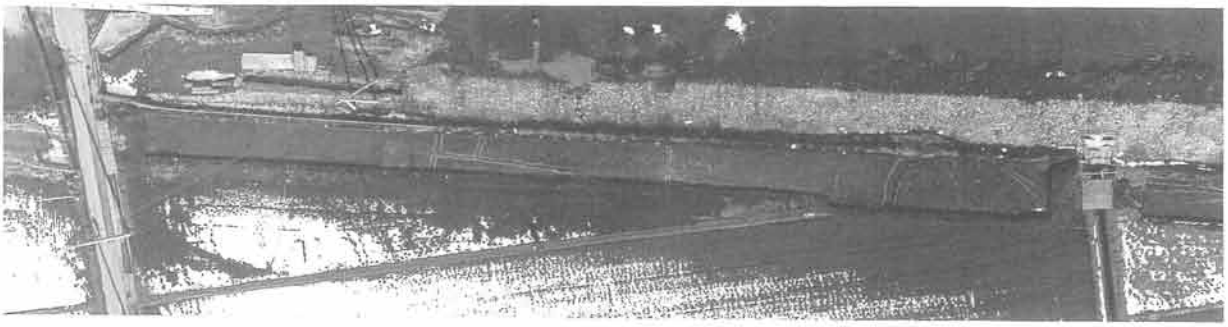
1	須恵器 埦	口径　— 底径　5.2 器高　—	①還元　②灰白色 ③細砂粒、白色粒 ④体部下位～底部1/3残存	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面　体部轆轤整形。	
2	土師器 甕	口径　(20.0) 底径　— 器高　—	①普通　②にぶい褐色 ③細砂粒、白色粒 ④口縁部～胴部上位1/5残存	外面　口縁部上位横撫で、中・下位篦撫で、胴部横位篦削り。 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で。	



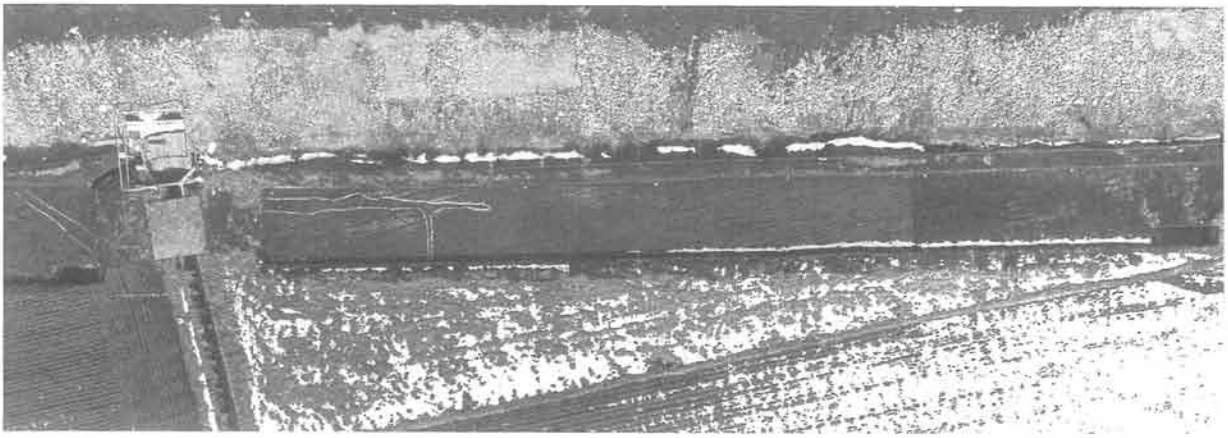
1　H区全景（上空から望む）〈左が西〉



2　I区全景（上空から望む）〈左が西〉

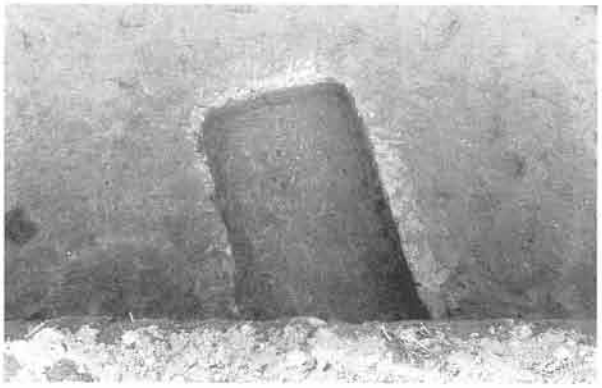


3　J区全景（上空から望む）〈左が西〉



4　K区全景（上空から望む）〈左が西〉

図版2



1　2号土坑

2　1・2号溝

3　2号溝土層断面

4　1号溝土層断面

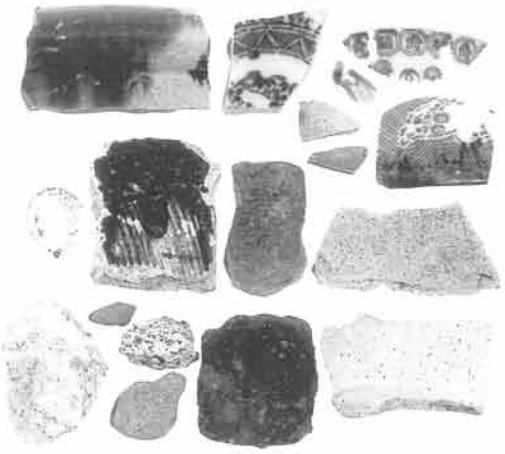
5　3～5号溝

6　3～5号溝土層断面

7　5号溝土層断面

8　3号溝土層断面

1．出土遺物(1)



2．出土遺物(2)

3．出土遺物(3)

図版4

1　G区1号掘立柱建物跡（東から）

2　G区1号掘立柱建物跡（北東から）

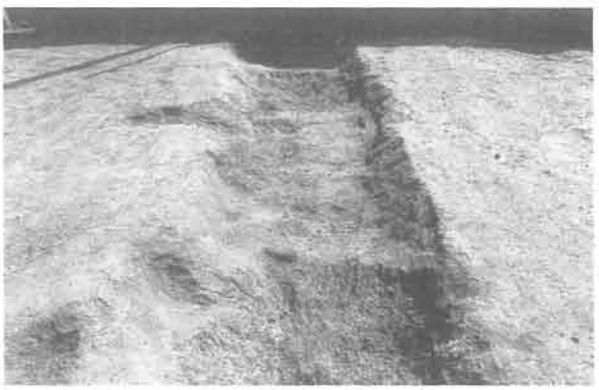
3　G区19号溝（北西から）

4　G区19号溝土層断面（南から）

5　J区8号土坑遺物出土状況（西から）

6　I区11号溝遺物出土状況（北から）

7　I区11号溝遺物出土状況近景（北西から）



8　I区11号溝（北から）

1　J区1号住居跡遺物出土状況（西から）

2　J区1号住居跡カマド（西から）

3　J区1号住居跡カマド土層断面（北から）

4　J区1号住居跡掘り方（西から）

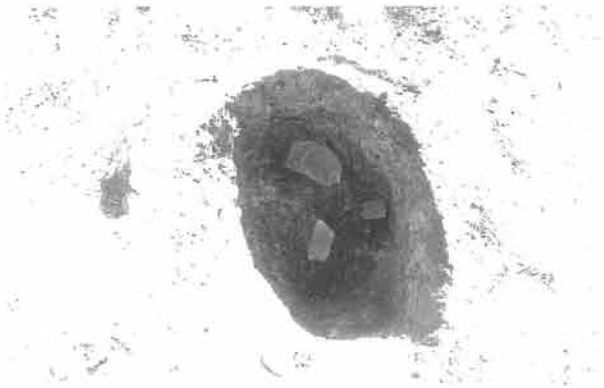
5　J区2号住居跡遺物出土状況（南から）

6　J区2号住居跡カマド周辺（南から）

7　J区3号住居跡（南から）

8　J区2号土坑土層断面（西南から）

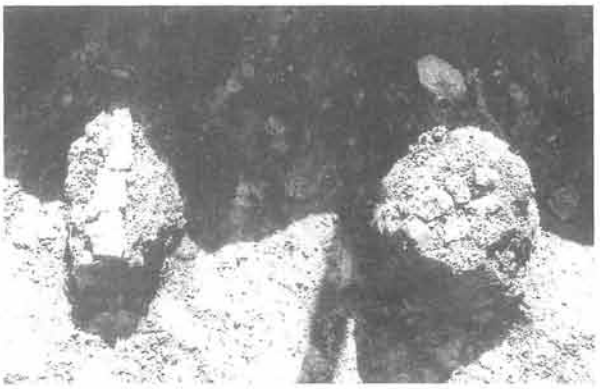
図版6



1　J区2号土坑遺物出土状況（西から）

2　J区6号土坑（西から）

3　I区12号土坑（北から）



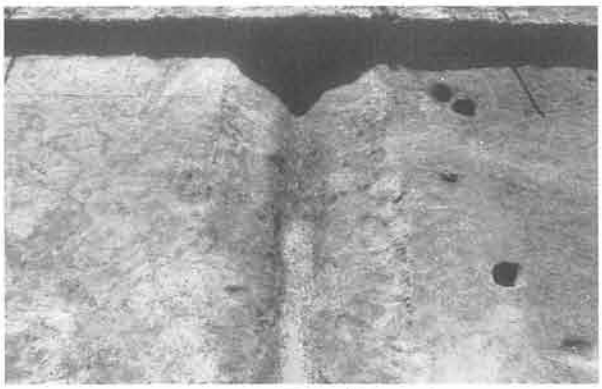
4　I区13号土坑、鎌出土状況（北から）

5　G区15号土坑（北から）

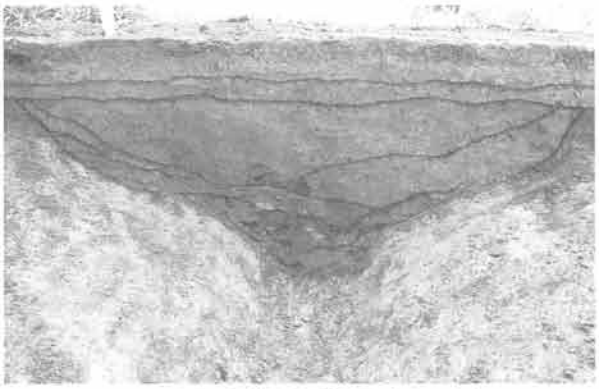
6　G区12号溝（北から）

7　G区13号溝遺物出土状況（北から）

8　G区12・13号溝（北から）



1　Ⅰ区1号堀（南から）



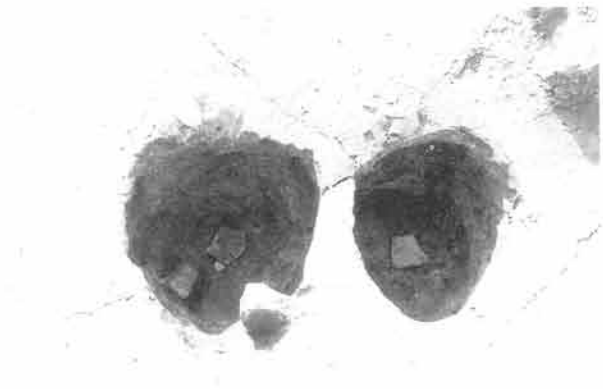
2　Ⅰ区1号堀土層断面（南から）

3　Ⅰ区5号溝遺物出土状況（北西から）

4　Ⅰ区5号溝土層断面（北西から）

5　Ⅰ区1号堀及び柱穴群（東から）

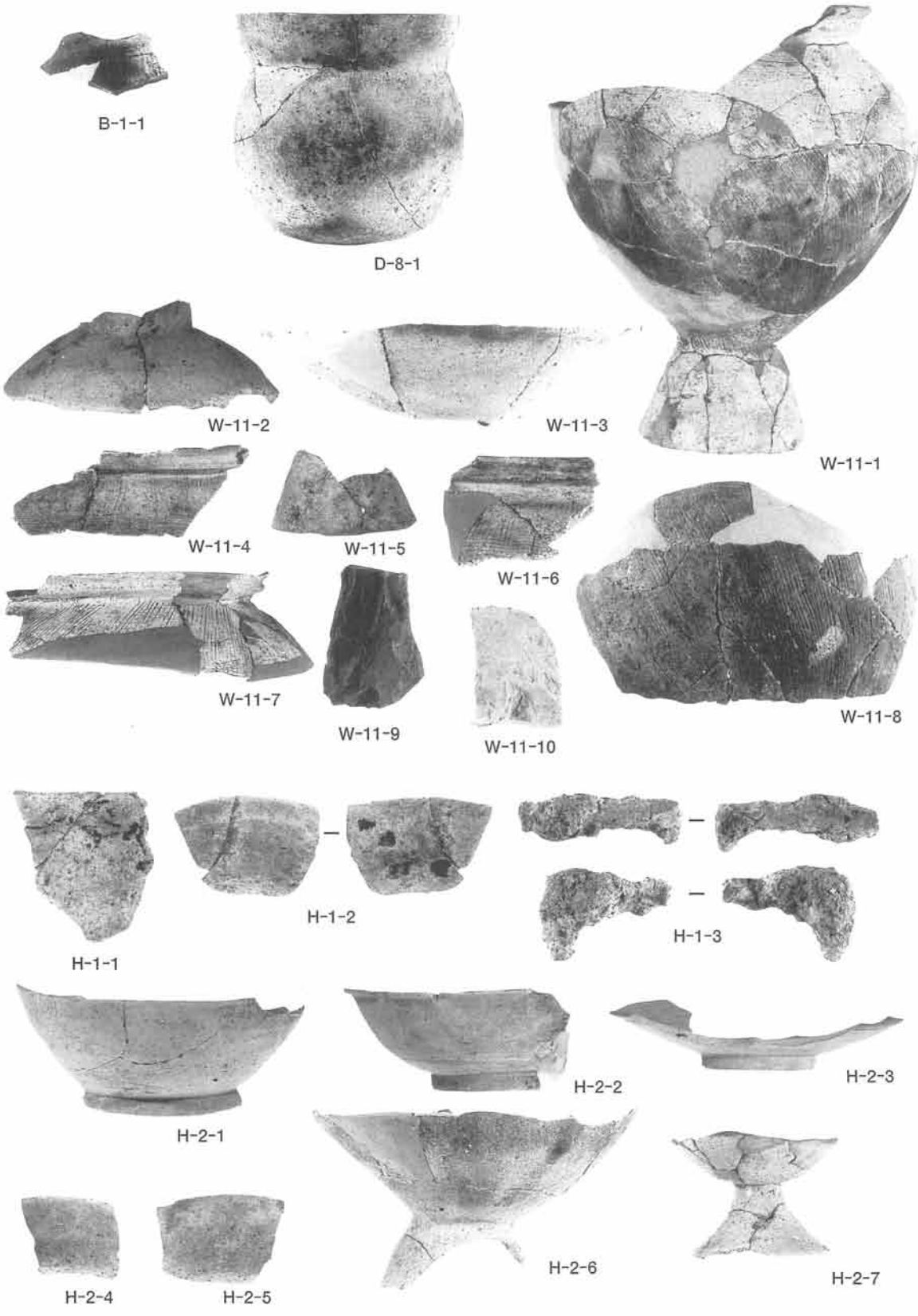
6　J区4号住居跡遺物出土状況（西から）



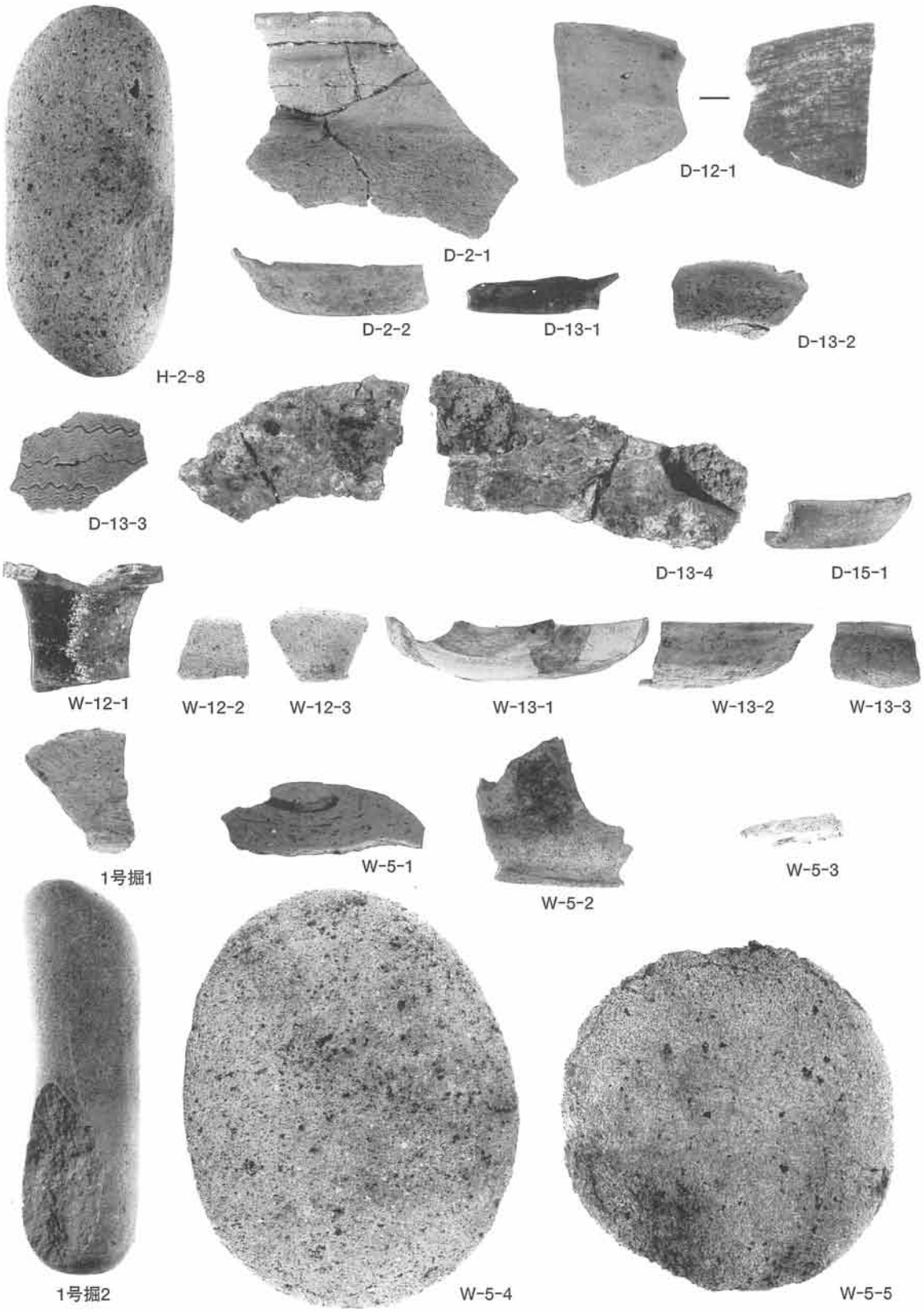
7　J区4号住居跡・P2・P3（北から）

8　J区2・3号溝（南から）

図版8

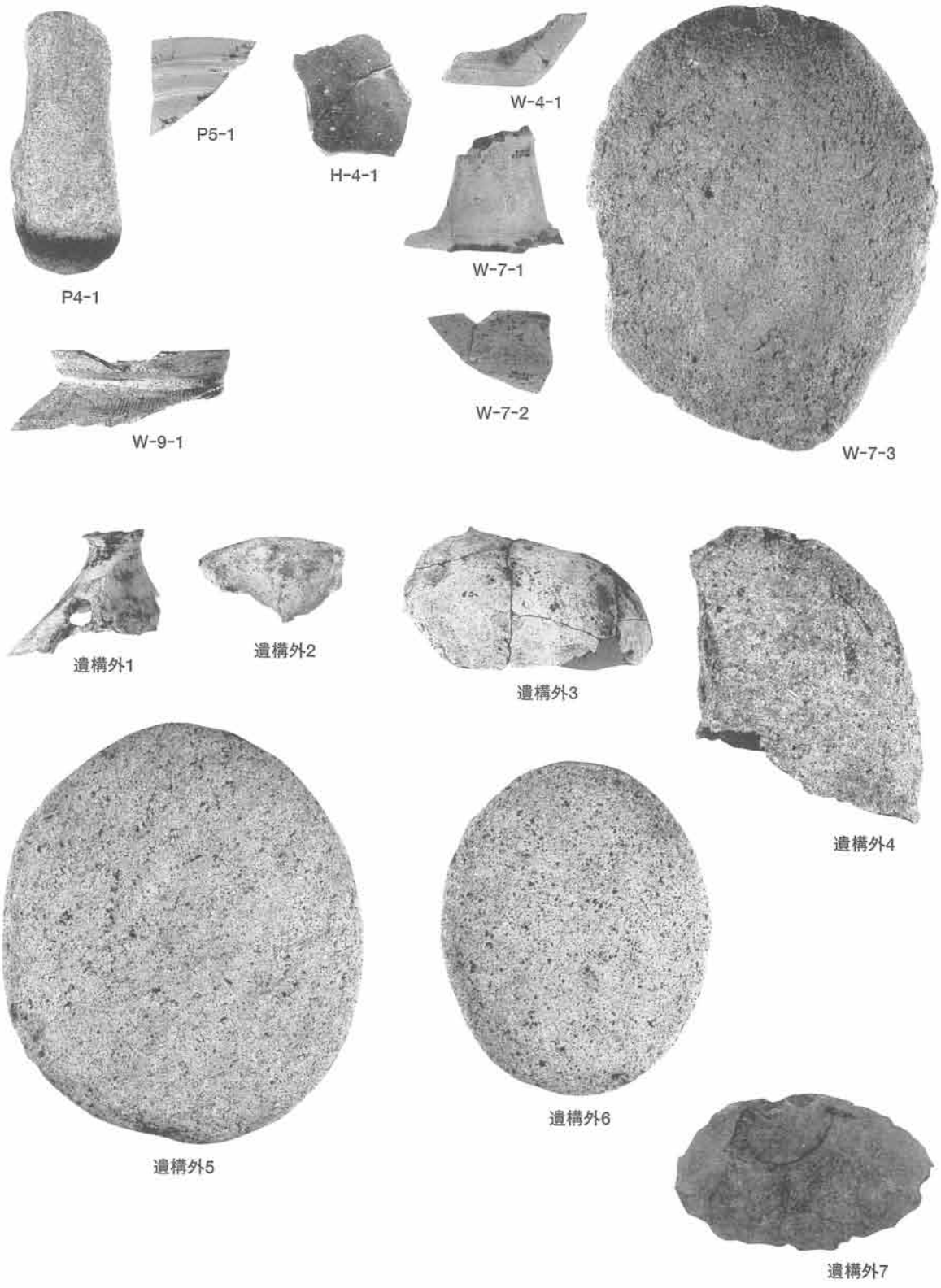


出土遺物(1)　1号掘立、8号土坑、11号溝、1～2号住居跡出土遺物



出土遺物(2)　2号住居跡、2・12・15号土坑、5・12・13号溝、1号掘立出土遺物

図版10



出土遺物(3)　ピット、4号住居跡、4・7・9号溝、遺構外出土遺物

1　A区西谷地形内、木道遺構全景（南から）

2　A区西谷地形内、木道遺構近景（南から）

3　A区1号方形周構墓（東から）

4　A区1号方形周構墓土層断面（西から）

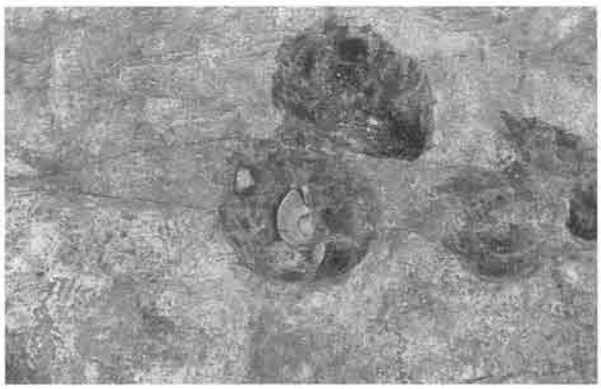
5　A区Hr-FA下谷地形（東から）

6　A区Hr-FA下畦畔（南西から）

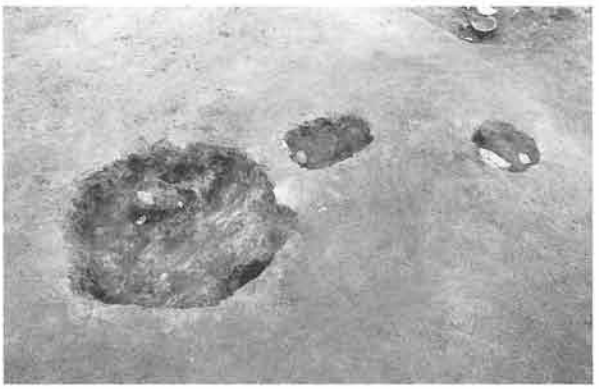
7　A区5号溝（南西から）

8　A区1号住居跡遺物出土状況（西から）

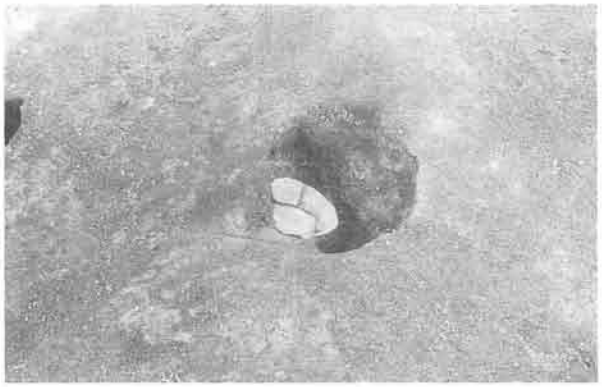
図版12



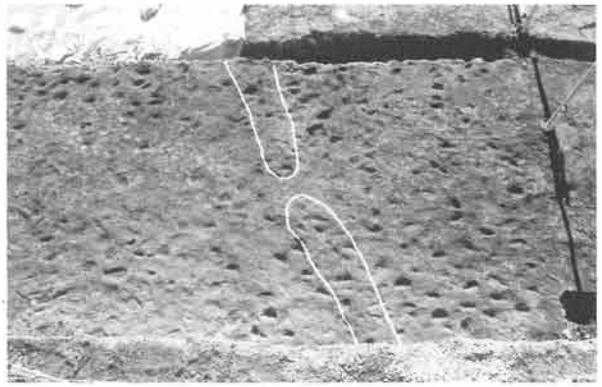
1　A区2号住居跡遺物出土状況（南から）



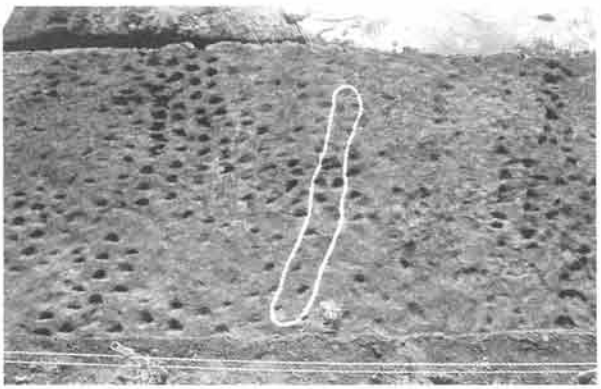
2　A区8・10・13号土坑（西南から）



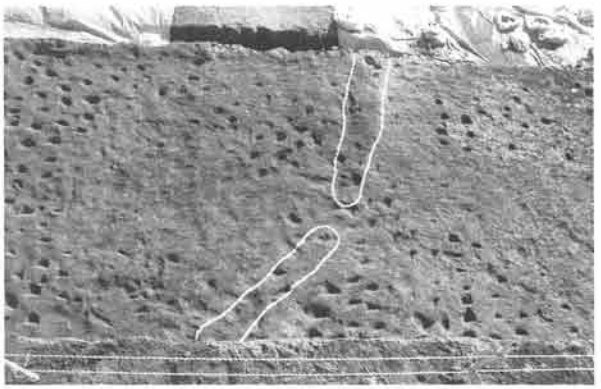
3　A区13号土坑遺物出土状況（南から）



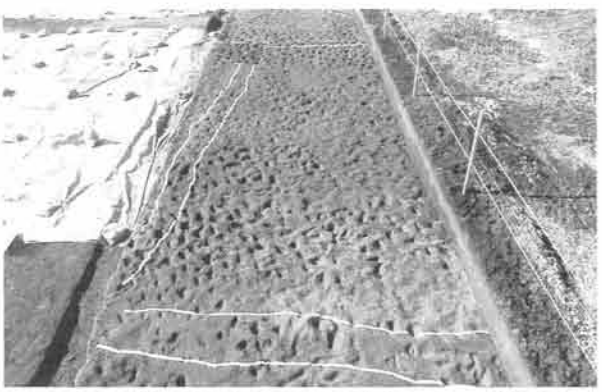
4　A区浅間B軽石下水田小畦畔1・2（北から）



5　A区浅間B軽石下水田小畦畔3（北から）

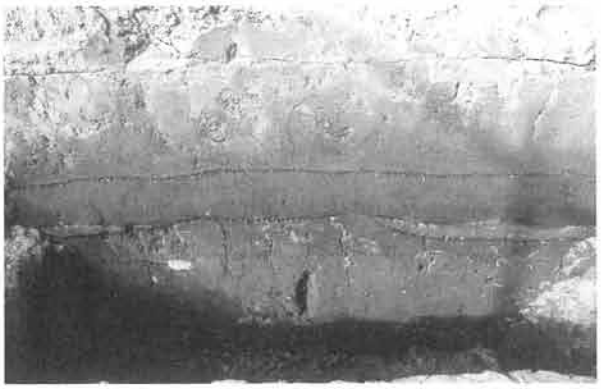


6　A区浅間B軽石下水田小畦畔4・5（北から）

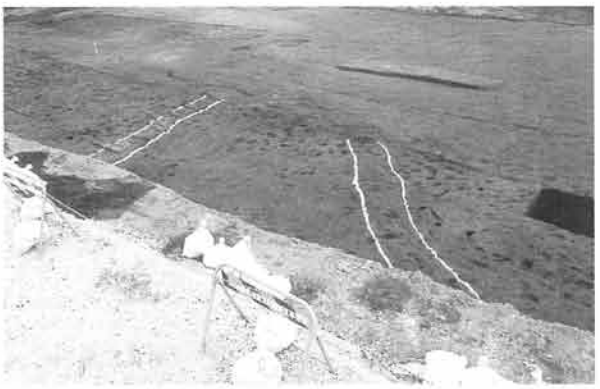


7　A区浅間B軽石下水田小畦畔6・7・8（東から）

8　A区浅間B軽石下水田小畦畔4・5（南から）



1　A区浅間B軽石下水田小畦畔1土層断面（南から）



2　B区浅間B軽石下水田小畦畔9・10（北から）

3　D区土坑墓群（東から）

4　D区1号墓（北から）

5　D区2号墓（南から）

6　D区2号墓側板出土状況（南から）

7　D区3号墓蓋板出土状況（北から）

8　D区3号墓（南から）

図版14

1　D区3号墓方形木棺南東隅（西から）

2　D区3号墓掘り方（東北から）

3　D区4号墓（北から）

4　D区4号墓掘り方（北から）

5　A区1号掘立柱建物跡（北から）

6　A区1号掘立柱建物跡柱穴1（南から）

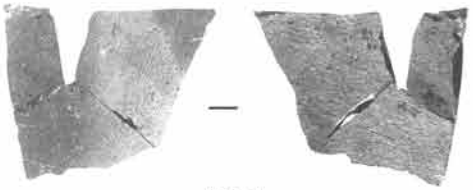
7　A区1号掘立柱建物跡柱穴2（南から）

8　A区1号掘立柱建物跡柱穴3（南東から）

木道遺構1

Hr-FA層下1

Hr-FA層下2

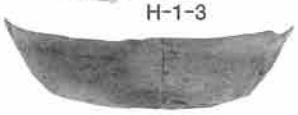

H-1-1

H-1-2

H-1-3

H-1-4

H-1-5


H-2-1

H-2-2

H-2-3

D-13-1

D-13-2

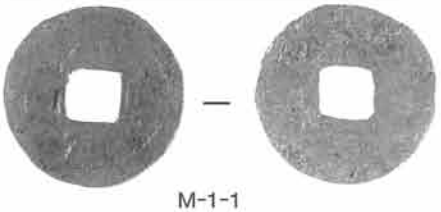
D-19-1

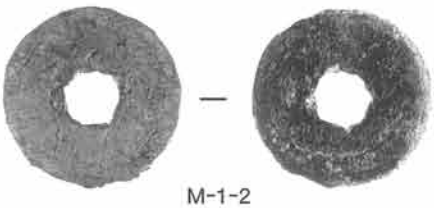
W-4-1

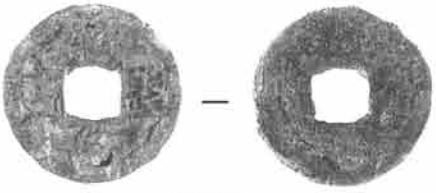
W-4-2

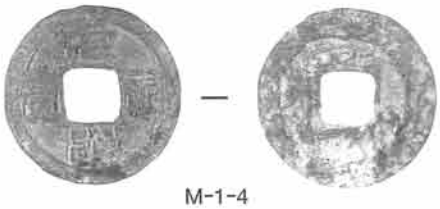
B軽下水田1

B軽石層1


M-1-1

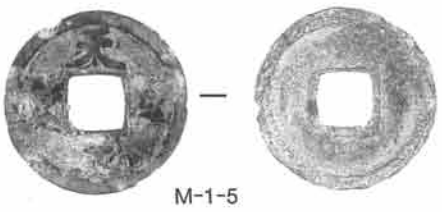

M-1-2

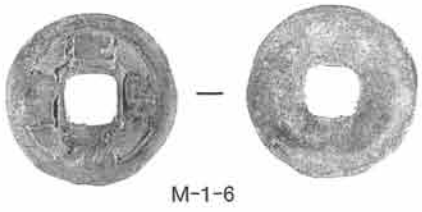

M-1-3

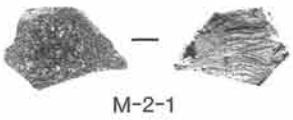

M-1-4

出土遺物(1)
木道遺構、Hr-FA層下、1、2号住居跡、13・19号土坑、4号溝、B軽下水田跡、1号墓出土遺物

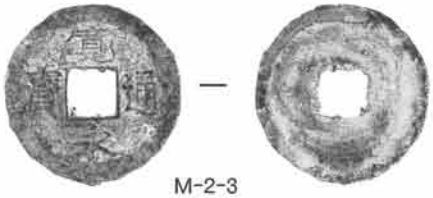
図版16

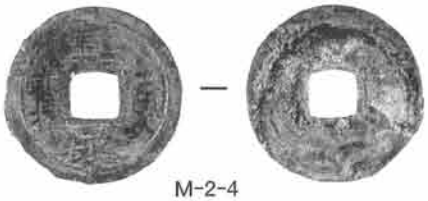

M-1-5

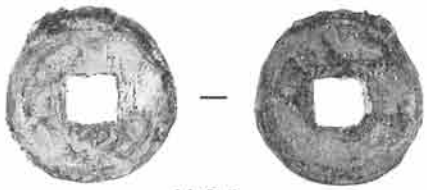

M-1-6

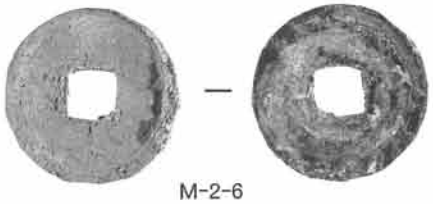

M-2-1

M-2-2


M-2-3

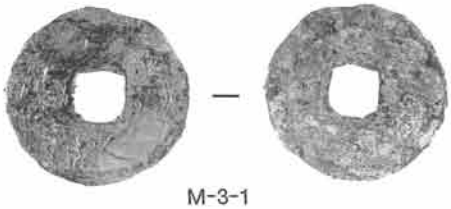

M-2-4

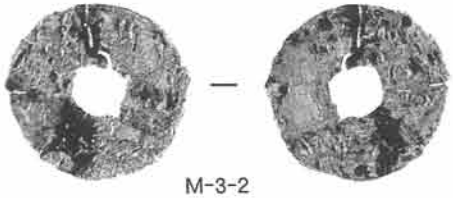

M-2-5


M-2-6

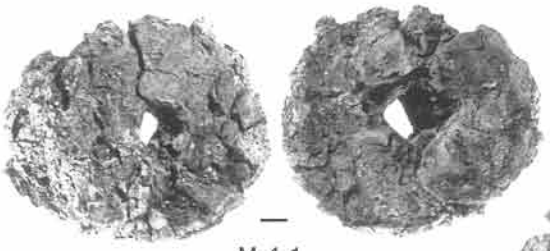
M-2-7

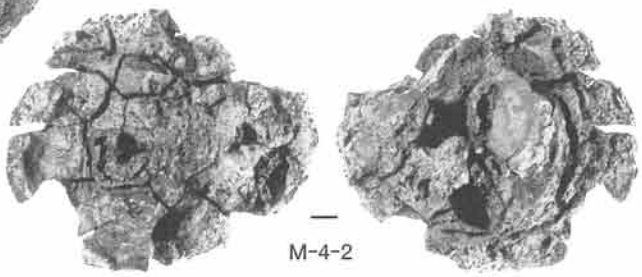
M-2-8

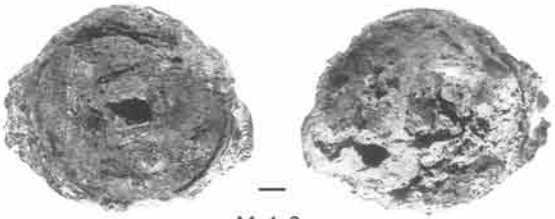

M-3-1

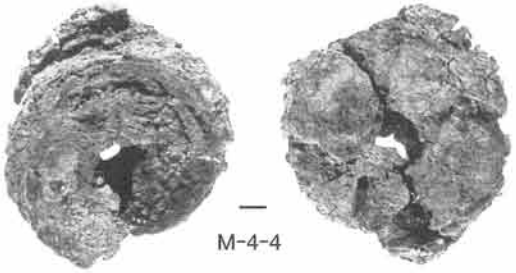

M-3-2

出土遺物(2)　1～3号墓出土遺物

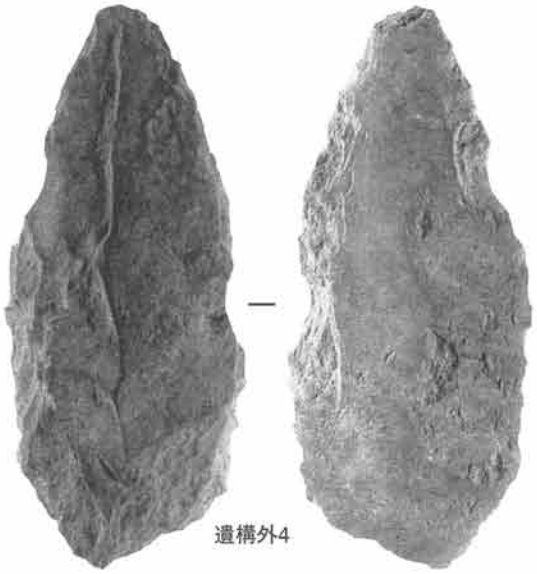

M-4-1

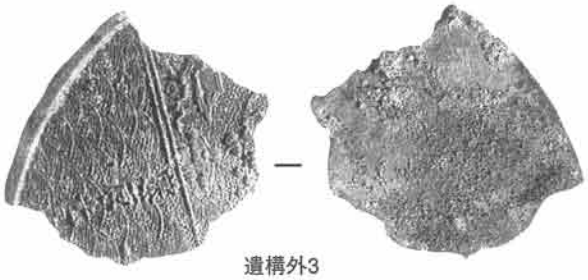

M-4-2


M-4-3


M-4-4

遺構外2


遺構外4


遺構外3

遺構外1

出土遺物(3)　4号墓・遺構外出土遺物

図版18

1　C・D区9世紀～10世紀代遺構（C・D区を上空から望む）

2　D区9世紀～10世紀代遺構（D区を上空から望む）

1　C・D区 As-B 軽石層下面水田跡（上空から望む）

2　C・D区遠景（北に赤城山を望む）

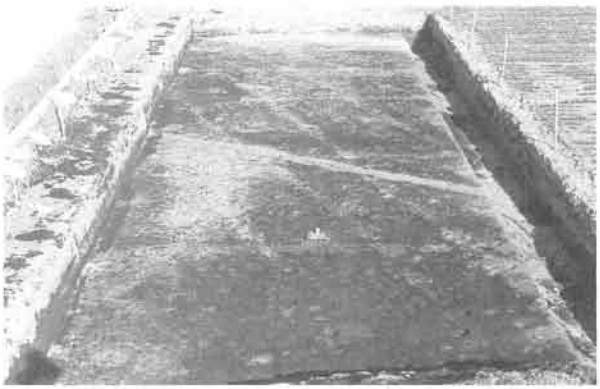
図版20

1　F区 As-C 混土層下面水田跡

2　F区 As-C 混土層下面水田跡大畦畔

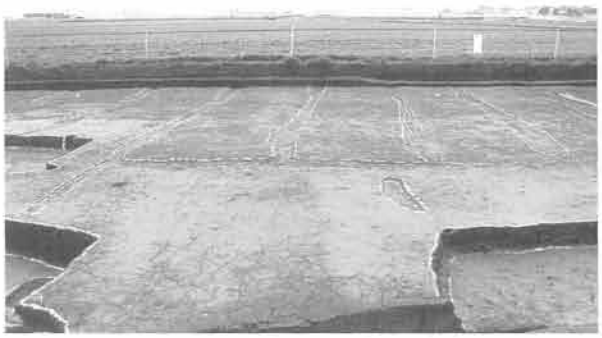
3　G区 As-C 混土層下面水田跡

4　G区 As-C 混土層上面水田跡



5　G区 As-C 混土層下面

6　C区 Hr-FA 層下面畠跡

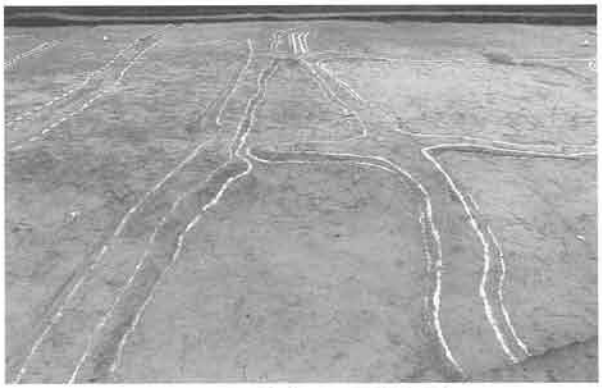


7　D区洪水層下面擬似畦畔

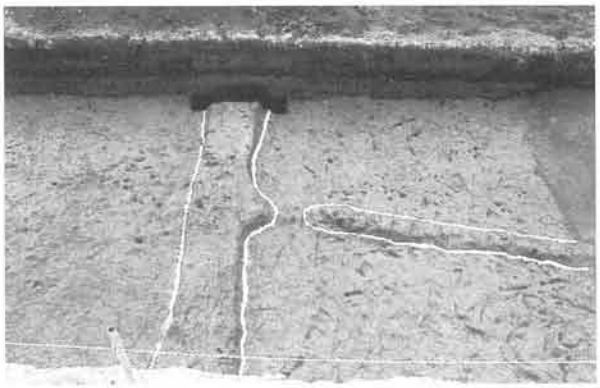
8　D区洪水層下面擬似畦畔

1　H区 Hr-FA 層下面 8 号溝土層断面

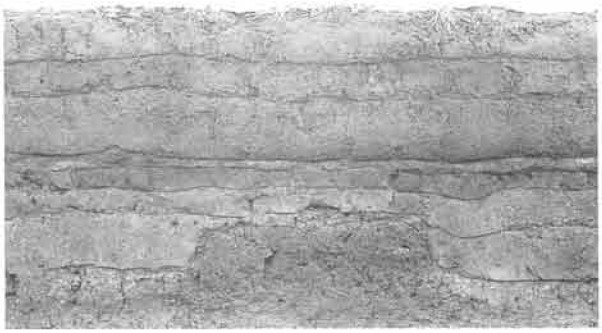
2　D区洪水層下面畠跡



3　D区洪水層下面水田跡



4　E区洪水層下面水田跡



5　E区洪水層下面水田跡大畦畔土層断面

6　D区液状化現象

7　C区1号住居跡完掘

8　C区2号住居跡完掘

図版22

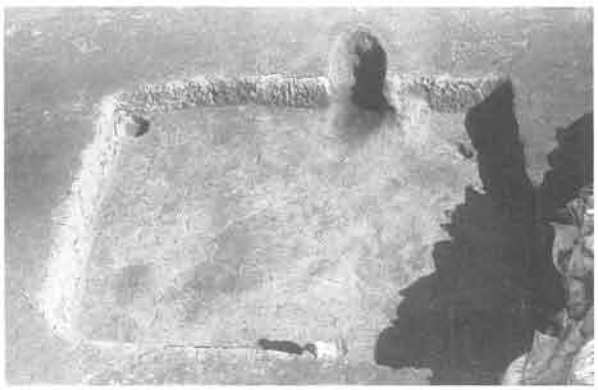
1　C区3号住居跡完掘

2　C区4号住居跡完掘

3　C区6号住居跡完掘

4　C区8号住居跡カマド

5　C区10号住居跡完掘



6　D区11号住居跡完掘

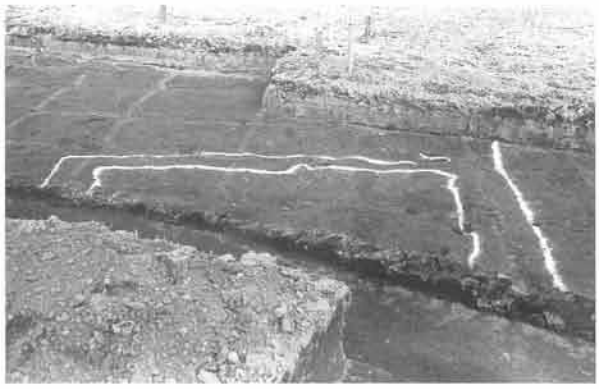
7　D区12号住居跡完掘

8　D区12号住居跡カマド土層断面

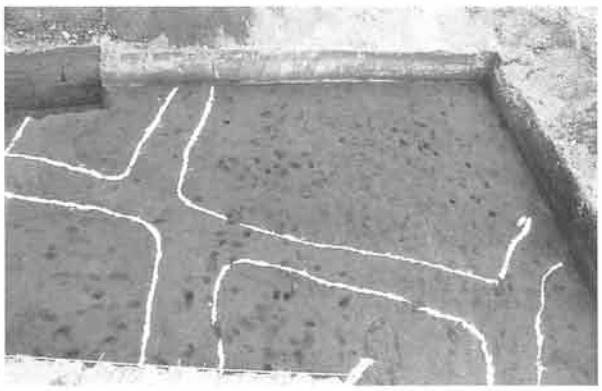
1　D区13号住居跡完掘

2　D区14号住居跡完掘

3　C区住居跡実測作業風景

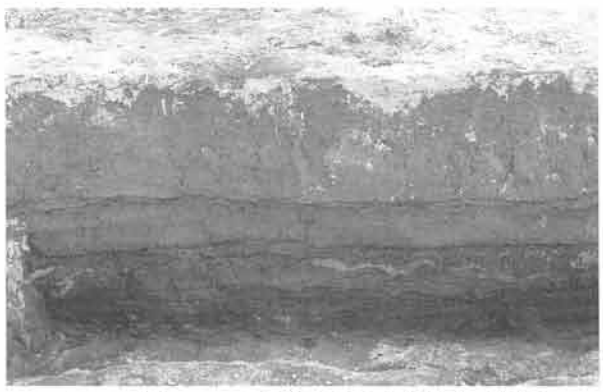


4　F区 As-B 軽石層下面水田跡

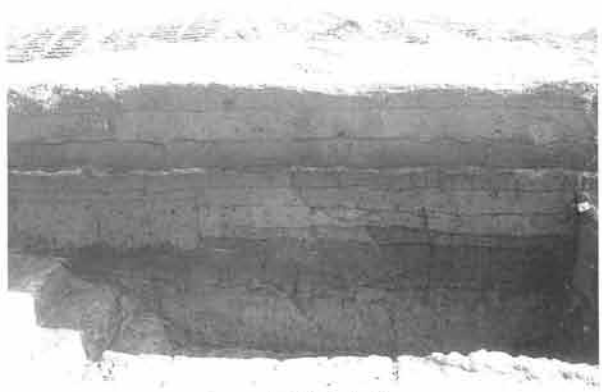


5　E区 As-B 軽石層下面水田跡

6　D区 As-B 軽石層下面11～14号溝



7　H区 Hr-FA 層下面水田跡畦畔土層断面



8　D区基本土層 B

図版24

H-1-2

H-1-2

H-1-3

H-2-1

H-2-2

H-2-3

H-2-4

H-3-1

H-3-2

H-3-3

H-3-4

H-3-5

H-3-6

H-3-7

H-3-8

H-4-1

H-4-2

H-4-3

H-4-4

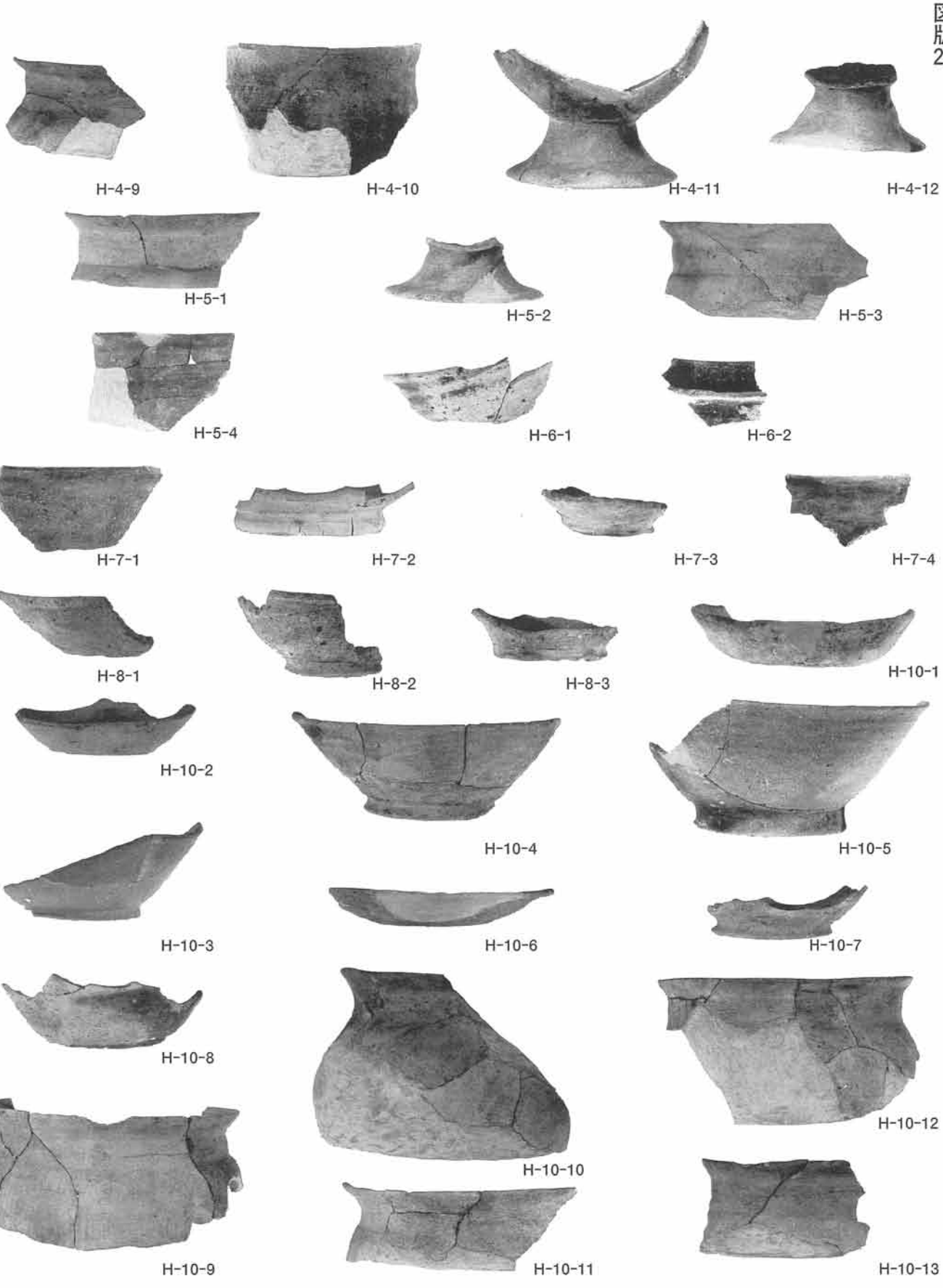
H-4-5

H-4-6

H-4-7

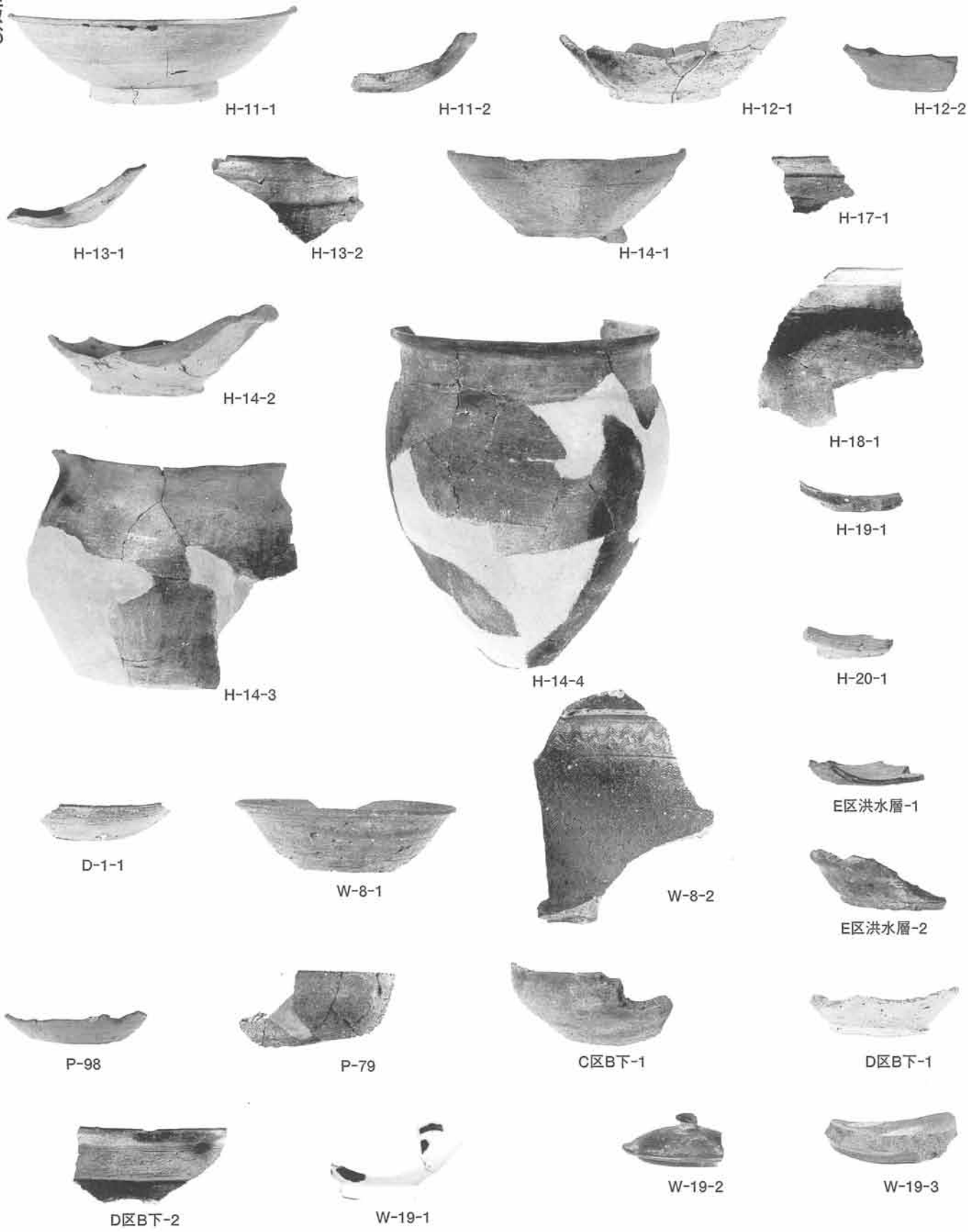
H-4-8

出土遺物(1)　1～4号住居跡出土遺物



出土遺物(2)　4～8・10号住居跡出土遺物

図版26



出土遺物(3)
11～14・18～20号住居跡、1号土坑、8・19号溝、ピット、洪水層、As-B下出土遺物

北関東自動車道側道道路改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

横手湯田Ⅲ遺跡
徳丸仲田Ⅱ遺跡
西善尺司Ⅱ遺跡
下増田越渡Ⅲ遺跡

印　刷　平成10年３月20日

発　行　平成10年３月25日

編　集　山武考古学研究所

発　行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

印　刷　(株)　文化総合企画

TEL　0476(93)0593